

桜花を護る、超野太刀を持つ開拓者

刀馬鹿

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それは十年物間、地獄の日々を味わうはずだった少女の元に現界した、一人のイレギュラーなサーヴァントの物語。

結局書きます四次聖杯。

注意

この物語は、元ネタを知らないと全く話がわからない感じに書いてます

具体的には刃夜が絡まないところは基本的に描きません

最大重要事項

設定の都合上、本当に完全なる無敵主人公です

後さらに設定の都合上（後作者の力量不足）でけっこう癪に障る人が多いと思いますので、

そう言う方は読まないことをおすすめします

今回は五次聖杯よりも早めに終わらせる & 短め投稿 & 短

めの文章を目指してます

がんばりまーす

※この作品は刀馬鹿の前作「月夜に閃く二振りの野太刀」を読んでからでなければさっぱりわかりませんので、その点もご留意ください。

目次

現界	1
開拓者	7
状況確認	15
サーヴァント ソルジャー	20
共同戦線(ひも)	24
奔走	29
拠点	36
行動開始	46
起点	57
姉妹	66
動き出す運命を狂わす化物	75
素行調査	87
素行調査2	95
二人の狂気と思い	109
狙われる運命	121
動き出す王	136
怪物出現	147
父として 兄として	156
約束された勝利の剣	168
望まぬ幸運	190
迷い	202
誓い	210
魂と器	242
宴会問答	258

44	後書き	537
40	?	533
39	死と生	513
38	意味	499
37	出会い	487
36	子供と兵士	481
35	その後	470
34	娘	456
33	聖剣	423
32	心打	398
31	壊れかけの戦闘機械と壊れたことに気づかない人形	391
30	征服王と狂気の騎士	357
29	その胸の想いは	352
28	最後の昼	340
	決戦前夜の決戦	316
	聖杯の黒い泥と陰	305
	人攫い×2	279

現界

それは早々に聖杯戦争の五騎ものサーヴァントが、一堂に会したという……波乱の夜にそれは起こった。

少女はただ、願った……

純粹に……

切実に……

助けて欲しい……

と……

妹として、この世に生を受けた

厳粛ながらも優しい父

心優しくも、時に厳しく叱ってくれる、母親

そして……優しくて頼りになる

大好きな姉

四人家族で幸せに暮らしていた

一つ上の姉と仲良く暮らしていた

こんな日々が続くと思っていた

だというのに

ある日全てが反転した

自分が知らなかった魔術という神秘があった

当時の自分が知らなかった

知りたくなかった

存在だった

魔術

世界の根源に至るためのもの
言っている意味はよくわからなかった
でも……養子先にいた老人が怖いというのだけは
よくわかった

そして……そこからが地獄だった

地下の穴蔵は、見たこともない虫の蠢く闇
そこに放り込まれて身体をいじくられ続けた
初日こそ叫んでいた
でも

叫んでも
喚いても
泣いても

何も変わらなかった

虫が怖かった

けれどそれ以上に怖い存在が階段上において
逃げる事なんてできなかった
だからただ耐えるしかなかった
おじさんが助けてくれると言っていたけど
すぐにいなくなってしまうた
どうなっていくのかはわからなかった
だけ

子供心にわかっていたことはあった
もうあの家の優しい空間にだけはもどれないこと
そしてこの地獄の様な時間がこれからも続いていくのだと

そう思っていた

本来であればそうなるはずだった

「私」の心が摩耗し疲弊し、壊れてしまうほどの艱難辛苦の日々を歩む
運命^{Fate}だった……

それを……

運命^{Fate}を……

原点^{Zero}を

一人の男性が切り裂いた……

切り裂いてくれたのだ……

一振りの超野太刀を持って……

さすがは、遠坂の血筋と言ったところかの？

暗い暗い地獄の底のような暗闇の中。

その暗闇を生み出した者であり、暗闇の支配者が地の底で蠢く己の分身であり身体である虫の中で、ただただ堪え忍ぶ少女の姿を見つめて、胸中に抱いた感想だった。

遠坂より引き取った養子。

遠坂桜。

当然遠坂の血統を受け継ぐ存在であるために、遠坂の魔術に適していた。

故に、その身体を間桐の魔術に適応するために、あらゆる改造を虫に行わせていた。

肉体的な改造と、それに伴う虫が蠢く中にいるという苦痛。

そしてその改造を行うことでわかる……間桐の血統が地に落ちたという事実。

異国よりこの地に……冬木に居を移した自らの血統。

移住したことで薄れていく自らの血統に憎しみを覚える思いだった。

だがそんなことはどうでもよかった。

薄れていき、ついに最後の子には間桐の血統すらも存在しなかった。

故に、急がねばならなかった。

自らの悲願。

不老不死のためにも。

そのために養子をもらい、次回の聖杯戦争のために、その準備を進める。

目下始まっている、今回の聖杯戦争では慰み者を使用して静観を決め込むつもりだった。

「――」

む？

一言、何か後継者という名の自らの願望のための道具が、言葉が発したかのように思えた。

その瞬間だった。

強大な力が渦巻いたのだ。

自らの道具のそばに轟々と風が吹き荒れる。

地下であるために冷え切ったはずの空気が一瞬にして灼熱の大气へと変貌する。

さらにその風が吹き荒れるそばの虫が、一瞬にして溶解した。最後に地下であるはずのこの空間に稲妻がいくつも嘶き……

現界した。

「……………ここは、どこだ？」

その存在から発せられたのは日本語だった。
見たところ日本人の青年だった。
だが少しでもわかるものがいればわかるだろう。

この存在は普通ではないと。

身に宿したいくつもの力を御し。

身に着けたいくつもの得物で、全てを切り裂く。

あらゆる世界にて得た力と経験で、その青年は……存在は全てを乗り越えてきた。

これが、鉄刃夜……この存在が経験する

初めての聖杯戦争の幕開けだった。

開拓者

遠い……遠い旅路の途中。

いつものように……そうそれこそいつものように流されていた状況で、少女の声が聞こえた。

助けてと……

それが聞こえたのは偶然だったか？

偶然だったのかも知れない。

それでもこの声を聞き、この場に召喚されたのは……この時点では召喚されたという認識は当然なかったわけだが……よかつたといつてよかつただろう。

俺にとってではない。

召喚主に対してだ。

な、なんじゃと!?

それが現界したことで、暗闇の支配者であった存在、間桐臓硯は驚愕に眼を剥いた。

見た目は普通の日本人の青年だ。

だが、明らかにそれが発する力は普通ではない。

そして濃密な魔力の渦は、その存在が人ではないことを教えてくれる。

そしてこの存在に似た存在を……間桐臓硯は知っていた。

知らないはずがなかった。

その存在を縛り付けるための絶対命令権を造り上げたのは……間桐臓硯その人なのだから。

ば、馬鹿な!?

間桐臓硯の胸中は疑問と驚愕で渦巻いていた。荒れ狂っていた。

それもそのはずだ。

この地で行われる第四次聖杯戦争のサーヴァントは、すでに規定の数である七騎全てが召喚されている。

つまり今自分の目の前に存在するのは八騎目のサーヴァントということになるが、そんなことはあり得るはずがなかった。

だが現実が起こってしまっている。

そして、そう思っているその刹那の時間……

一瞬にしてその謎の存在が目の前に剣を振りかぶって現れた。

「!？」

そのときにはすでに遅かった。

間桐臓硯は胴体を一刀の元に斬り捨てられていた。

そしてその瞬間に……間桐臓硯の瞳に色が消える。

何？

死んだが故に意志を失ったにしては、あまりにも急すぎた。

誰でも感じられる、明確な違和感があった。

だが、それはすぐに明確な形になって知らされる。

両断された身体がなんと驚くべき事に虫の大群となって崩れ、飛んでいったのだ。

……仕留め損ねたか

その様子を見て、突如として現界した存在は舌打ちをした。

そして抜刀した腰の物の、打刀を鞘に収めて……眼下の階段下を見る。

そこにいるのは数えきれることなど出来ないほどの虫の大群。

そしてその虫に嬲られていた小さな少女。

「つちー！」

それを見てその存在は盛大に舌打ちをして、階段を降りながら小さく呟く。

「紅炎……解放」

その囁きに応じるようにして、左腕に紅に輝く炎が顕れた。

そして、その炎は一瞬にして地下空間全てを覆い、虫たちを消し炭すらも残さずに完全に消滅させた。

だが不思議な事に、地下室の床に寝そべっていた少女はそのままだった。

消滅するどころか火傷もしておらず、煤すらもついていなかった。そして虫によって隠れていた身体が露わとなり……再度現界した存在は舌打ちをした。

「おにいさん……だれ？」

起き上がり、茫然としながら少女は現界した存在にそう問うた。

現界した存在は少女のそばに跪き、自らの上着の革ジャンを少女の身体に掛けた。

「いや……俺は声が聞こえた気がしたら、そのときにはこの場にいたから何とも言えないんだが、君は？」

優しく、少しでも不安を覚えさせないように、現界した存在笑みを浮かべながらそう問いかける。

「私？ 私は……桜。とお……間桐、桜」

だが、目の前に突然現れ、周囲の全ての虫を消し炭にした存在がいるにもかかわらず、間桐桜と名乗った少女は、驚きも恐怖も感じることなく、そう返していた。

色彩の籠もらない目を向けて、少女は自分の名前を口にした。

その名前を聞いて、現界した存在は小さく頷いて、その頭を優しくなでた。

「桜ちゃんか。わかった。それとすまない。ちよつと身体を調べさせてもらうよ？」

撫で終わると、現界した存在は少女の身体全体を撫で始める。

少女はその行動の意味がわからずただ茫然と首を傾げるしかなかった。

「……これ普通に通報ものだよなあ」

現界した存在は、自らの行動に盛大に溜め息を尽きながらも、その行動を止めることはしない。

やがて調べ終えたのか、手を離して桜の背中に左手を回した。

「ちよつと衝撃が来るけど痛くはない。ちよつとだけ我慢してな」

「……はい」

何をされるかはわからないため、桜はただそう答える。

現界した存在はその少女に笑みを浮かべて、左手に力を込める。

その瞬間に、紫に輝く炎が、現界した存在の左手に宿った。

「紫炎、解放」

そして一瞬だけ桜の身体が光り、見えないはずの何かの断末魔が小さく響いた。

その結果に満足そうに現界した存在は頷いた。

「大丈夫か？」

「何をしたの？」

「なーに、さっきの変な虫を完全に消し飛ばしただけだ。念のためこの薬を……」

腰のポーチから取り出した小瓶の中身を数滴、自らの手に乗せて舐める。

そしてその後、桜にその小瓶を手渡した。

「臭いが毒ではない。苦いが薬だから決して危ない物じゃない。飲んでおいてくれ」

「はい」

無感動に無表情に桜はその薬を飲み干した。

あまりにも反応がないその様子に、現界した存在は内心で盛大に舌打ちをしていた。

こんな小さな子供を、ここまで追い詰めるとは……一体何をしていたんだ？

自らの長年の経験から見た瞬間に斬り捨てた老人。

だが斬り捨てた瞬間に老人は虫の塊と化してどこかへと消えていった。

明らかに普通ではない存在だったが、しかし一つだけわかることがあった。

まあ先ほどの状況から鑑みるに、あいつが元凶なのは間違いないだろう

状況から鑑みるにその通りだろう。

現界した存在は心の中で先ほどの存在をどのようにして消し飛ばすのかを算段しつつ、階段を上がって家捜しを行った。

まず着る物着る物。結構寒いな

現界した存在自らは問題ないようだったが、しかし自らの上着を羽織らせただけの幼子連れ回すのは憚られるのだろう。

階段を上がった先の洋館の中を歩き回って家捜しして、何とか外に連れ出せるだけの服装を身に着けさせた。

そして跪いて、桜へと目線をあわせた。

「さて、とりあえず一段落したところで教えて欲しい。ここはどこなんだ？」

「ここ？　ここは、間桐のおうち。私の……新しいおうち」

「なるほど。ではもつと範囲を広げよう。ここは日本……でいいのかな？」

「日本だよ」

日本、という単語に現界した存在が安堵の吐息を漏らしていた。

だがそれもすぐに終わり、次に……もつとも聞かなければならない事を、口にした。

「教えられる範囲で……そして教えてくれるなら教えて欲しい。さっきの爺さんはなんだ？」

何者であるか？　という疑問は投げかけなかった。

それもそうだろう。

何せあの老人の形をした何かは明らかに人ではなかったのだから。現界した存在が先ほどの老人の姿をした何かの質問をすると、恐怖するかのように小さく身震いをしていた。

その様子で現界した存在も無理に聞くのは無理だと判断したのだろう。

桜を優しく抱き留めて……頭を優しく撫でた。

「すまなかつた、無理はしなくていい」

「……いいの？」

「ああ。もちろんだ」

情報収集は自らやるか……だがそうなるにあの怪物の情報がわからなくなるが……

一度桜を落ち着かせてから、現界した存在は家の中の物色を再度始めようとしたのだが、その前に何かに気付いて動きを止める。

そして、桜を自分の背後に位置するように前に出て、右手に持っていた長い長い刀を左手に持ち替えて、右手を左腰に差している刀の柄へと持つていく。

脅威は余り感じないが……念のため

警戒心を露わにしながら、腰の刀を抜いた。

そして僅かに腰を落としたのだが……すぐにその体勢を元に戻した。

その後すぐに、ドアの様な者が少しだけ乱暴にあけられる音が、二人がいる部屋まで響いてくる。

その後、二人がいる部屋に入ってきた。

その男は、明らかに普通ではなかった。

「桜ちゃん！」

飛び込んで着た男は悲惨な状態と行って良かった。

軽く見ても左目が機能しているようには見受けられず、左頬も醜く膨れあがり、肌の色も土気色と思えるほどに血の色がなかった。

また足を引きずっており、その様はまさに生きた死体のようだった。

「雁夜おじさん」

「桜ちゃん！ 無事——……なんだお前は？」

ドアから入ってくれば位置的に現界した存在が先に目に入るのだが……そんなことよりも桜の方が大事なのだろう。

その男……桜に雁夜と喚ばれた男は、警戒心を露わにしながら現界した存在を睨み付けていた。

そして睨まれた現界した存在はというと……
……こいつ、よく生きてるな？

現界した存在は実に注意深く入ってきた男、雁夜という存在を注視していた。

そこに危機感はなく、ただただ観察のために見ているだけだった。
問いかけながらも何も返さない現界した存在のことを、入ってきた男は敵意むき出しで睨み付けていた。

その視線を受けてもなお、現界した存在は微動だにせず肩をすくめた。

その行動の意味がわからずに、雁夜はいぶかしげな瞳を現界した存在へと向けた。

「何のつもりだ？」

「いや、どうやらお前がこの子に向ける感情は本物みたいだなと思っ
てな。気配というか……その身体の中がさっきの老人みたいに変な
感じがしたから警戒したんだが、どうやら違うらしい」

「老人って……臓硯の事か!？」

「ゾオルケン？　それがさっき斬り飛ばしたら虫に化けた老人の名前
か？」

「!?　斬り飛ばしたって……あのじじいを!？」

その言葉に、雁夜は心底驚愕の声を上げた。

そしてその言葉の真偽を確認するように、桜へと視線を投じて……
桜が否定をしないことで更に驚き、そして懇願した。

「今すぐここから逃げてくれ!　あいつが来る前に!」

洋館の部屋で悲痛な声が木霊する。

その声は本当に心からそう願っている声だった。

そしてその声に、何か感じる物があつたのか……現界した存在は一
つ小さく吐息をして、雁夜へと話しかける。

「事情説明をしてくれ。意味がわからないのはいつものことだが……
それでも今回ののはなかなか切実そうだ」

わざとおどけるようにして、現界した存在は肩を大げさにすくめて見せた。

そして、桜の頭に右手を置いて優しく頭を撫でた。

その行為に対して、桜は何の反応を示さなかった。

僅かにも嫌悪すらも示さなかった。

それが雁夜にとっては決定的だった。

故に、思わず漏らしてしまった。

「……信用していいのか？」

まだ出会って間もない存在。

雰囲気から言ってもとても普通ではないその存在は、はっきり言っ
てしまえば怪しい存在でしかない。

だが雁夜にはそれでも縋るしかなかった。

自分の救いたい……青年が庇っている、桜のために。

そしてその桜を今背後に庇う存在は……

「少なくとも訳もわからないまま子供を殺すほど、とち狂っちゃいな
い」

そう言っつて、確かな意志の籠もった瞳を雁夜へと向けた。

嘘偽りのない言葉。

それだけではない感情が込められていることを感じた雁夜は……
現界した存在に事情だけでも説明することにした。

「……わかった。俺の名前は間桐雁夜だ。君は？」

「俺か？　俺の名前は……刃夜。鉄刃夜だ」

状況確認

初めて自らのサーヴァントを使役したその後。

その違和感は雁夜に訪れた。

……なんだ？

自らの身体を喰らい、痛めつけていた虫が一瞬で静まりかえつただ。

虫が静まりかえつたというその事実は、雁夜に悪い想像を働かせるには十分すぎた。

故に痛む身体を歯を食いしばって耐えて……走った。

そして自らの生まれた家で、二度と近づきたくもなかった家へと入った。

普段なら間桐臓硯がいるためにそんなことは出来なかった。

だがそれ以上に救いたいと思つた存在がいたのだ。

その救いたいと願つたそばに、まるで守るように寄り添っている謎の存在がいた。

これが雁夜と刃夜の出会いだった。

「聖杯戦争？」

「何でも願いが叶うと言われる聖杯。その聖杯が満ちるために今英霊達を戦わせて最後の一人……つまり聖杯を手にする事の出来る存在を見極めるための闘いが行われている。マスターと喚ばれる魔術師は、過去に実在した英雄達を英霊……サーヴァントを使役して、最後の一人になるために戦っているんだ」

「んで……そのサーヴァントってのに俺がなつてると？」

「サーヴァントになつてるって……英霊じゃないのか？ ステータスだつて見えるし」

「皆目見当もつかんし、ついでに言うとな俺はまだ死んでない。生きてます」

桜をつれて雁夜にそして、現界した存在……鉄刃夜と名乗つた青年が来たのは夜の公園だった。

少し肌寒い気候だったが、それでも鉄刃夜……刃夜が召喚された洋館である間桐家からそう離れていないため、その場所が選ばれた。

そして雁夜よりいくつかの説明を受けていた刃夜だったのだが……説明を聞いた瞬間に頭を抱えた。

英霊って誰が？ 俺がか？ 自分勝手な理由で色んな世界跳び回されている俺がか？ 笑えない冗談だな

どこか遠い何かを見るような目で……何か想いを馳せるかのようになっている様子に、雁夜は一瞬心配になったが、しかしすぐに心の中で警戒を強めた。

サーヴァントフロンティア開拓者だって？ 一体何だこのクラスは？ あの爺から説明を受けたクラスは七騎だけのはずだ

遠い目をしている目の前の存在、鉄刃夜。

雁夜はその鉄刃夜がただの人ではなく、サーヴァントであることは一目で見抜いていた。

正当なる契約を果たしたマスターには霊格を見抜き、その力を見ることが出来る一種の透視力が付与される。

その透視力で見た刃夜のクラス名が、あまりにも異常だった。

そう雁夜が思うのも無理はなかった。

何せ開拓者フロンティアなどというクラス名は、あり得ない物なのだから。

刃夜にのみ与えられる、特殊なクラス。

それが開拓者フロンティアというクラスだった。

「まあいい。ともかく状況は把握した。もちろん……この子の状況もな」

そう小さく呟きながら、刃夜は自らが腰掛けている足を枕にして寝ている存在、桜の頭を優しく撫でた。

掛けられた上着は規則正しく呼吸によって上下しており、静かに眠っているのがよくわかった。

その桜の様子を見て、雁夜は絶句するしかなかった。

桜ちゃんが、ここまで安心しきっているなんて……

静かに眠る桜の様子は、完全に安心しきっていた。

出会ってまだ数時間と経っていない存在の膝枕で寝ているにもか

かわらず。

それを言うのなら雁夜自身も安心……というよりも油断していると言っているのかも知れない。

何せイレギュラーな存在のサーヴァントであり、マスターが桜であるとはいえ、敵であることに変わりはないのだ。

確かに雁夜の目的は桜の救済だが、それは間桐臓硯に聖杯を渡すことによって達成される願いなのだ。

間桐臓硯が聖杯を受け取ったとしても桜を解放するかのかは正直あり得ないことなのだが……それでも雁夜としては間桐臓硯との約束に縋るしかなかった。

だがもし……、もしもだ……

もしもこのイレギュラーな存在が何か意味があるとしたら？

そんな気持ちも雁夜の中に芽生えているのかも知れない。

だからこそ、雁夜はこうして刃夜に事情を話しているのだろう。

「んで、そのサーヴァントってのはマスターがないと存在し続けることが出来ない」と

「あ、ああ。マスターからの魔力供給がないと、現界するための魔力が生成できないから」

「うーん。そんな事は全くないようなんだが……まあいいか。んで……気のせいじゃなければ俺のマスターってのは……」

「ああ……。桜ちゃんの右手の甲を見れば間違いない。桜ちゃんがお前のマスターだ」

雁夜が向けたその視線の先……自ら丸まるようにして横になっているために、右手が上着からはみ出しており、その右手の甲には真っ赤な色の紋章が浮かび上がっていた。

その赤いのは令呪と呼ばれる、サーヴァントを縛るための呪文であり、サーヴァントに三度だけ絶対の命令を下すことの出来る権利。

昨日まで桜の右手にはなかったその赤い紋章は、桜のサーヴァントが刃夜であるという何よりの証だった。

「呼ばれた気がしたらそのときにはそばにいたから何とも言えないんだが……まあいいや。やることはわかったしな」

「やること?」

「こつちの話だ。気にしないでくれ」

盛大に溜め息をつきながらそう言う刃夜に疑問符を浮かべる雁夜だったが、それに取り合わずに刃夜は一度目を瞑って……公園の入り口へと視線を投じた。

「んで……公園の入り口に来たあの禍々しい気配は、お前のサーヴァントだったので良いのか?」

「え?」

刃夜が視線を向けたその先へ雁夜も目を向けると、まるでその二人の視線に呼応するかのようにして、漆黒の全身鎧に身を包んだ狂戦士が、忽然と姿を顕した。

そして顕れただけではなく、その身から相對しなくてもわかるほどの、純然たる敵意を刃夜へと向けていた。

マスターとしてその敵意がただごとでないことはすぐに理解して、雁夜が声を上げる。

だが……

「バ、バーサーカー! ま——!?!」

狂戦士が現界した瞬間に……雁夜の中の刻印虫が暴れ出して、雁夜の身体を痛めつけた。

サーヴァントを使役することによる、魔力の消費。

生成した魔力以上に力を使役する場合は、無理矢理にでも作るしかない。

その魔力を作る源が……宿主の肉体であったとしても。

? つたく

その雁夜の様子を見て、刃夜は深々と溜め息をついていた。

そしてその溜め息を吐く刃夜へと、バーサーカーと呼ばれた漆黒の狂戦士は突貫し……その拳を振るった。

刃夜は顔を向けることもせず、座ったまま……それどころか桜に膝枕をしたままに、その拳を受け止めていた。

「■■■■!?!」

「見てわからんのか? 子供がいるんだぞ? 落ち着——」

嘆息混じりにそう返そうとする刃夜だったが、その言葉を……

「G A A A A A A A!!」

「つて言ってもダメか」

もう一つの拳を握って襲いかかってきた黒い狂戦士……バーサーカーの攻撃を刃夜は今度は受け止めずに自らの身体の前に流した。

バーサーカーの身体が流れて肩を見せた瞬間には、バーサーカーは後方へと飛ばされていた。

「っ!?!」

「■■■■!?!」

雁夜とそして飛ばされたバーサーカー自身が驚きのあまりに声を上げていた。

だが驚いてばかりではない。

バーサーカーは飛ばされていながら、宙で姿勢を直して地面に足から着地し、再度突撃を行おうと顔を上げたその瞬間には……

「その狂気。はつきり言つて邪魔だな」

そんな言葉を吐いている刃夜が目の前にいた。

長い長い……まるで血を塗り固めたかのような深紅の刀身の超野太刀を抜刀して、振りかぶっていた。

バーサーカーへと向けた姿勢で。

そして一瞬だけ狩竜の刀身が暗く赤く明滅し、その柄から黒い陰が一瞬だけ……手にしている刃夜の腕を覆った。

その刹那の瞬間に……狩竜が振り抜かれて、バーサーカーを斬り捨てていた。

確かに刀身はバーサーカーの身体を通過した。

つまりは斬り捨てた。

だが斬り捨てたのはバーサーカー自身ではなかった。

バーサーカーの狂気を斬り捨てていた。

振り抜かれたその瞬間に顕れたのは……漆黒の鎧からその暗き色が消え去り……

その場に、黒紫の鎧に身を包んだ……一人の騎士が、姿を現していた。

サーヴァント ソルジャー

その光景は、見れば誰もが驚愕する事だった。

「なっ……馬鹿な……」

そしてそれは見ている者ではなく、他でもない本人がもつとも驚く事だった。

確かに斬られたはずだった。

だが斬られた騎士に傷はなく、ただ纏っていた漆黒の狂気が消え失せて、黒紫の鎧の騎士が……戦士が姿を現した。

「ば、バーサーカー？」

その言葉は雁夜より眩かれた疑問だった。

バーサーカーと呼んでいた黒紫の騎士に意識を向けて気がついた。

身体が……軽い？

そう、雁夜の身体を常時蝕んでいた痛み……魔力を生成するために蠢いていた体内の刻印虫が、活動を緩やかにしたのだ。

まだ喰われているという感覚はある。

だが自らのサーヴァントであるバーサーカーを……黒紫の騎士を現界させているにもかかわらず、身体の負担が軽いというのが驚きだった。

「……何故だ？」

そしてその驚きは……黒紫の騎士が声を上げること更に驚くことになった。

狂気をもって召喚された自らのサーヴァントであるバーサーカーは、言葉を話すどころかまともな意思疎通すらも行えていなかったのだ。

バーサーカーというそのクラス名の通り、ただ荒れ狂う狂気の騎士でしかなかったはずだった。

先ほども雁夜が桜がいるために制止を掛けたが、それでも止まることなく刃夜……新たなイレギュラーサーヴァントに攻撃を仕掛けた位なのだから。

「何故……私を狂気から解き放った？」

「そうでもしないと保護者が死ぬだろう？　俺の目的のためだ」
保護者？　目的？

刃夜が言った言葉の意味が理解できず、雁夜は疑問符を浮かべる。
保護者で思いつくのは今そばにいる自らが助けたいと願った桜
だった。

何となくそちらに眼を向けて……再度雁夜は驚いた。

……浮いている？

そう。

先ほどまで刃夜が膝枕をしていたが、バーサーカーに何かしらの事
を行うために立ち上がった刃夜。

本来であれば膝がなくなっただために、桜は頭を打っているはずなの
だが……まるで見えない膝がまだあるかのように、桜の頭が宙に浮い
ていたのだ。

そう思っているとその瞬間にはその空白の膝が元に戻り……いつ
の間にか腰掛けている刃夜の姿があった。

「ついでにいうと、こんな子供がいるのに暴力を振るってくるような
輩は好かん。だからその好かん原因を取り除いた。それだけの話だ」
「……」

「気に入らんと言うのであればそれはそれで構わない。剣を持って
襲ってくるのなら反撃するまでだ。さて……いかにする？」

いつの間にか抜いていた長い長い太刀を鞘に収めて肩に乗せてす
ごむその姿には、話している言葉の割には敵意も戦意も感じられな
かった。

だが……それでもなお、薄ら寒さを感じさせる何かだった。

「お前がどういう輩なのかは、まだこの雁夜から聞いていないからわ
からない。狂いたいという気持ちも……わかる。だがそれでも狂っ
ただけでは何も解決しない。するわけがない」

左手に持つ、長い太刀を見つめながらどこか遠い場所を見て言っ
ているかのように、刃夜がそう呟いていた。

その言葉とその言葉に乗せられた感情に、何か感じる物があつたの
か……黒紫の戦士は、ゆつくりと頭を上げて、椅子に腰掛ける刃夜へ

と眼を向ける。

「ともかく……お前にもやりたいこと、こうなりたいという願いがあるのだろう。俺にもある。互いに協力出来るなら協力をさせて欲しい。何せ……俺らは二組になっても色々問題があるからな」

問題……

雁夜は刃夜の問題という言葉に対して、顔をうつむけることしかできなかつた。

何せ自分たち……少なくとも雁夜とバーサーカーの陣営は問題しかなかつたのだから。

雁夜は間桐としては魔術師の才能はあつたが、それでも普通の魔術師……ひいては遠坂などの優秀な家系……とは比べるべくもなく、その上でバーサーカーという制御が難しいサーヴァントを使役しているのだ。

バーサーカークラスの利点は制御が難しいというデメリットを遙かに超えたその圧倒的なまでの戦闘力と突破力だ。

だが、雁夜ではその戦闘力を続けるための継続力がない。

むしろ無理をすればするほど、雁夜の命を食いつぶして……消滅してしまう。

問題がないはずがなかつたのだ。

そして問題は、刃夜にもあつたのだ。

何を隠そう、桜の存在自体そのものだった。

「さて、では反論意見もなく、それ以上に戦う気がないのなら……俺の考えを聞いてもらえないかな？」

大げさに、芝居がかつた仕草で肩をすくめる刃夜。

だがその芝居以上に……自らの膝枕で眠りにつく桜の頭を静かに撫でるその仕草は、見る者を信じさせる優しさがあつた。

あまりにもおかしな存在であるこの刃夜という存在を信じていいのか？ 雁夜はそう思った。

バーサーカーを切り裂いてどんな変化をもたらしたのかは、マス

ターである雁夜は完璧に把握していた。

そんなことがありえるのか？ そう思う疑念が頭を渦巻いていた。だが実際に変化が起こっている以上、信じるしかない。

刃夜はバーサーカーを切り裂いて……その狂気を……

クラス特性であるバーサーカーの狂化を消し飛ばしていたのだ。

それを行った理由は己の目的のためだという。

その目的が何かはわからないが……考えを自ら話すと言っているのだから、話だけでも聞いてみるのも良いのかも知れない。

雁夜はそう判断し、とりあえず話だけでも聞いてみることにしたのだった。

共同戦線（ひも）

「さて、では俺の話聞いてくれると想定して話させてもらう」

そうして刃夜は自らの目的と、自らの存在の有り様を話し始めた。その話の内容はにわかには信じられない話だった。

曰く……この世界とよく似た並行世界の、この時代よりも少し未来の日本に生まれた存在であり、強制的にあちこちの異世界に修行の旅に出ている存在であること。

次の世界に行くためには課題をクリアしなければならぬと思われること。

そして長年の経験から鑑みるに、この聖杯戦争の関連した出来事が課題であると思われる事……等々、実にうさんくさい言葉を並べ立てていた。

「……本当なのか？」

「信じられないだろうが……信じてもらうしかない」

「だが……俺よりも年下なのに英霊になれるだなんて」

「英霊なんて柄じゃない。しかも年下つてのもあくまでも肉体年齢で見ればだ。怪物モンスターとでも呼んでくれ。もしくは普通に名前いで構わない」

英霊と呼ばれるのが心底嫌なのだろう。

嫌悪感を露骨に振りまきつつ、辟易するように刃夜はそうお願いしていた。

別段、いやがることをする理由もないので、雁夜は英霊と呼ぶことはしないことにした。

ついでに言えば、確かに雁夜は刃夜よりも肉体年齢的には年上だろうが精神年齢……この場合少々意味合いが異なるが……は圧倒的に上である。

「では、刃夜と……呼ばせてもらう」

「ああ。俺も雁夜と呼ばせてもらおう。構わないかな？」

「大丈夫だ」

マスターである雁夜と、敵サーヴァントである刃夜がとりあえず互

いを敵とは認識しなくなった。

では次にという意味合いを込めて……刃夜は黒紫の騎士へと、視線を投じた。

「さて、それでお前さんはどうする？ 全てを壊すためにまた狂うか？」

「……私の狂気を壊してからそれをいうか？」

「まあそれについては謝るが……。んで？ サーヴァントとして現界したということは聖杯に託したい望みがあるんじゃないのか？ ちなみに俺にはない」

「……私は」

その先は続かず、ただ一言そう呟くだけだった。

そうこぼす表情と吐息には……常人には理解できない感情が込められていた。

苦悩と懊悩。

憎悪に嫌悪。

贖罪と罪悪。

その全てが刃夜にわかるはずもなく……マスターである雁夜にもわかるわけがなかった。

「まあいい。まだ信頼できないだろうから言わなくていい。使い方次第だが、仮に聖杯が手に入ったならお前らが使えばいい。聖杯を譲渡すると言うことで、協力し合わないか？」

「協力するのはいいが……何をだ？」

「簡単だ……。特に雁夜。ぶっちゃけお前が鍵だ」

「俺が？」

鍵だと言われても雁夜としては疑問符を浮かべることしかできなかった。

しかしそんな雁夜に……刃夜は非常に簡単な事実を口にした。

「何せ俺には……金も家もないんだからな！」

「……………ああ」

そう言われて、雁夜も思わずといったように納得していた。確かにその通りだろう。

日本生まれであるのは本人……刃夜が口にしていた通りだったが、並行世界を旅させられているという言葉を信じるのであれば、金などあるはずもない。

正しくは、刃夜には自分の世界における日本円はかなりの額を所有していたりするのだが……並行世界に刃夜の口座はない。

そして家だが……

「間桐の家にはあまりにも危険すぎる。それに桜ちゃんにあの家にいさせるのはあまりにも不憫だ」

「……確かに」

間桐臓硯が支配している間桐の家。

虫は残らず燃やすことは可能だろうが、それでも他にも何かしらの仕掛がある可能性はぬぐえなかった。

もちろん刃夜としてもマスターである桜のそばを離れる気はないのだろうが、念のためだった。

そして間桐家が使えないとなると……当然だがマスターが桜（幼子）、サーヴァントが刃夜である開拓者陣営には拠点がないうということになる。

そうなると必然的に頼れるのは桜を敵と認識しておらず、また大人であるためにある程度の金がある間桐雁夜以外に頼れる存在はいなかった。

「というわけで……非常に申し訳ないが俺はお前に金を出してもらわなければならない」

つまり直接的に言うと、刃夜は雁夜のヒモになるしかなかった。

「わかった。ある程度の貯金はあるからなんとかなる」

「その代わりといってはなんだが、お前の身体。俺が少し治療しよう」「身体を？」

まさか自分のことも言われると思っていなかった雁夜は、刃夜の言葉に疑問符を浮かべる。

その事で刃夜は先ほどから思考していた雁夜の内面が間違いない

ことを確信し……内心で溜め息を吐きながら言葉を続けた。

「もし全てがうまくいったなら、この聖杯戦争が終わった後に桜ちゃんの面倒を見る存在が必要だ。俺はおそらくそう長くはこの世界にとどまることは出来ない。わかってるんだろう？ 自分の身体のこととはある程度は。だがはつきり言わせてもらおう。今のままだとお前はあと数日で死ぬぞ？」

その言葉に、雁夜は黙るしかなかった。

うすうす感じてはいたが、それでもその事実を突きつけられたため、事実と認識せざるをなかったのだから。

更に言えば……

「それに、遠坂の家に桜ちゃんを戻すというのも難しいだろう。何せ生粋の魔術師なんだろう？ なら魔術の存在を知ってしまった以上、別の家の養子に出される可能性がある。この子には素質があるのだろうが……それでも平和な世界にいれるのであれば、それにこしたことはない。となると……聖杯戦争が終わった後、お前は生きていなければならぬ」

「……俺が？」

「当たり前だろう？ 幼子を助けるだけ助けてそれで役目が終わりだと？ ふざけるな。この子に寂しい想いをさせるつもりか？」

「!?」

この刃夜の言葉は、雁夜には衝撃となって襲いかかった。

そのことを……自らが桜を解放した後のことを何も考えていなかったことに気付いたのだ。

聖杯戦争はどんなに長くても一週間程度の内に終わる。

そして仮に臓硯を殺すことが出来たなら、魔術を継承する存在がいなくなる。

遠坂の家に戻される可能性があり、戻された場合別の家に養子に出される可能性は大いにある。

死よりも恐ろしい経験をした桜が、別の家で魔術を続けられるかは未知数だが……刃夜としてはあんな苦痛を味わった桜を、元の日の当たる日常に戻してあげたかったのだ。

ならばその後保護者が当然だが必要だ。
その役割を……全く考えてなかったのだから。
そしてこれは……刃夜の狙いでもあった。
少しこいつを元に戻さんと、こいつも危ないな
しかし刃夜はそれをおくびにも出さずに、目下もう一つ重要な事柄
を相談を始めた。

「さて……今夜の寝床をどうするか？」

奔走

「主……少々ご報告したいことが……」

「どうした綺礼？ 何か動きがあったのか？」

衛宮切嗣がケイネスエルメロイを殺害するために、ビルを丸ごと爆破した後。

自らが使役するサーヴァントの報告に言峰綺礼は動揺を隠せなかった。

故に、綺礼は秘密裏に動いてビルの爆破を見に行つた後すぐに引き返して……教会の地下にある時臣との通信が出来る装置で、自らの盟主である遠坂時臣へと、アサシンより受けた報告を告げる。

「八騎目のサーヴァントらしき存在を捕捉したと……アサシンから報告が」

「何だと？ そんな馬鹿な？」

「更にその八騎目のサーヴァントは……主が間桐家に養子に出したご息女、そして間桐家のマスターと行動を共にしているようです」

「なんだって？ それは本当なのか、綺礼」

「はい。今もアサシンに監視をさせておりますが……間違いないかと」

時間が遅かったこともあり、結局四人……といっても黒紫の騎士は現界していないので実質三人……は、近くのビジネスホテルに泊まることになった。

三人分の弁当をコンビニで買い、遅めの食事を行っていた。

「何でサーヴァントなのに食べる必要があるんだ？」

「だから俺生きてるの。死んでないの。だから霊体化もできないし、魔力だって自分で生み出せる。だから腹も減る」

もりもりと、コンビニ弁当を食べるサーヴァント。

実に滑稽とも言える状況ではあったが、それでも雁夜としても本人

が望むのだから協力関係である以上、弁当を買ったのだった。

そして食べ終えてきちんと御礼を言った後、刃夜は腰のポーチから小瓶を取り出した。

黄色の液体が詰め込まれた小瓶だった。

「それは？」

「お前の身体を治療するって言っただろ？ 怪しく見えるが間違いなく薬だ。とりあえず飲んでくれ」

小瓶の中身を少し手に取り舐めた後、刃夜は雁夜に小瓶を渡した。少々いぶかしみながらも、刃夜が口にしたことで毒じやないと判断し、雁夜はその薬を飲み干して……元気よく身体を動かしていた。

その背に……刃夜は紫の炎が発現している左腕を当てていた。

「まずその虫……全て燃やしてくれる」

「!? まっ——!!!」

その刃夜の言葉に、雁夜は慌てていたがその言葉を言い終える前に、雁夜の身体に衝撃が走った。

そしてそれと同時に、今まで身体を蝕んでいた全ての痛みが消失したのを感じた。

その痛みの消失は……魔力を生み出せなくなったという事実にはならなかった。

刻印虫を全て燃やされたのだから、それも当然といえた。

「な、なんてことを!？」

「やかましい。桜ちゃんが起きたらどうする?」

その言葉に雁夜ははっとして、ベッドで眠る桜へと眼を向けるが、特に起きた様子は見受けられなかった。

それにほっとしつつ、再度刃夜へと眼を向けて声を上げようとしたその口を……小さな小瓶を問答無用で口にくわえさせて刃夜は封じた。

「!?!?」

「魔力が生み出せなくなるって話だろ? 多少ならお前が生み出せるから、基本的に現界しなければ消えることはないだろう。だがそれだと万が一があるからな。だから……これを渡しておく」

そう言つて渡されたのは、黒いシースに入れられた双剣だった。それを手に持った瞬間に、雁夜は眼を丸くした。

何せ魔術については素人以下である雁夜にすらわかるほどに……凄まじいほどの魔力がその双剣には充ち満ちていたのだから。

「これは!？」

「魔力を切り裂き、魔力を吸収することの出来る魔剣だ。俺が今まで溜めてきた魔力が結構充填されている。当面はそれでどうにかなるだろう」

「だが……」

「そうでもしないとお前の身体の治療が出来ん。つーか治療してもその都度虫に喰われてるんじゃないや治療の意味がない。魔力については最悪俺からお前に譲渡も出来るし、回復のための薬もまだまだある。心配しなくていい」

魔力の譲渡は結構高度な技術を必要とするが、それを簡単にできると言つてのける刃夜に、雁夜は驚くしかなかった。

そして更にいくつもの小瓶を渡されて強制的に飲まされて、身体を元気よく動かして……さらにベッドに横にさせられて、パンツ一丁に剥かれた。

「……お前、今までよく生きてたな」

「……否定はしないよ」

その身体は悲惨な姿だった。

本当に何故生きているのかと不思議に思えるほどに……。

刃夜はその身体と、この雁夜という男に敬意を払いながら……身体に手を当てる。

すると刃夜の手が淡く光り輝き、その光の暖かさに……雁夜は久方ぶりに穏やかな気持ちで眠りにつけた。

眠つた後も、しばらく刃夜は治療を続けていたが……それも終わったのか、自らもソファアの横になって眠りについた。

刃夜も寝てしばらくして……何の変哲もない一匹の小さな虫が、部屋のドアの隙間を通つて、部屋の中へと侵入してきた。

ほ……まさかいきなり殺しにかかつてくるとは予想外じゃったが

「早速来たか、虫野郎」

!?!?

その言葉に、虫は……間桐臓硯は驚くしかなかった。

今は暗闇の中で、常人では絶対に視認できない小さな虫でしかない己を見つけたのだ。

驚くのも無理はなかった。

「今殺しても無駄だろうから殺さないでいてやる。だが必ずお前を見つけて出して殺して……桜ちゃんを救ってみせる」

その殺気はあまりにも鋭かった。

その場にいる他の存在にわからないように。

小さな女の子に怖い思いをさせないために、鋭く小さく……ただ一点のみを貫く鋭利な殺意だった。

その殺意は、分身ごしに見る臓硯に真に死の恐怖を覚えさせるほどの苛烈さがあった。

分身越しでさえも感じる……絶対的な殺意。

まるで死の宣告のようだった。

さしもの臓硯も、たまらずに逃亡するほどだった。

その気配を感じ取りながら……刃夜は内心で深々と溜め息を吐いていた。

やはり分身越しではわからんか……。俺も未熟だな

しなければいけないことの多様さに溜め息を吐くが……それでも暗い中でも、まるで光るように戦意に満ちた眼を見れば、刃夜の心中は考えるまでもなかった。

何か方法を考えないとな。これだけ修行しても呪術系はやはり苦手だ……

自らの無能さに刃夜は内心で深々と溜め息を吐いていたのだが……しかししようがないと割り切って方法を思案する。

端から見れば刃夜以外に起きている者がいない空間で物騒なことを独り言で呟いている……実に危ない光景だったが、そんなことは刃夜には瑣末事だった。

そんな刃夜を……霊体で見つめる存在がいた。

言うまでもないかも知れないが……黒紫の騎士だった。

霊体であるため、この意味不明な存在である刃夜が行う行動を監視するかのように見つめていた。

監視というのは雁夜からの命令でもあった。

『少なくとも桜ちゃんが心を許しているのは間違いないみたいだし……信じたい。だけど万が一もある。狂化がなくなったなら監視も出来るはずだ。頼む』

……

狂戦士として召喚された存在。

真名は円卓の騎士であるランスロット。

伝説の騎士王、アーサー王の部下として様々な武勇伝を持つ、最強クラスの騎士だった。

ランスロットである黒紫の騎士は、一つの願い……贖罪をするために、この聖杯戦争に参加していた。

ただただ狂った獣のように暴れ回れば……騎士王の悪名を少しでも注げるのではないかと？

だがその願いも刃夜が狂気を吹き飛ばしたことで、全てが霧散した。

狂気がなくなり、冷静にならざるを得なかった。

言っていることは正しいと判断せざるを得なかった。

サーヴァントとして刃夜が桜を救ったとしても、この世界にとどまるわけではないのだから、最後まで責任が持てない。

ならば元々救うつもりだった雁夜……己のマスターにそれを任せるといいうのも理解できた。

だが……それで自らの願いを邪魔された。
本来であれば怒らなければいけないはずだった。
だが……何故かそれが出来なかった。

何故だ？

黒紫の騎士は自らの思考に疑問を抱く。

自らの願い……ただただ獣のように荒れ狂う事を真つ先に否定されたのだ。

願いを否定されたのだから怒らなければいけないはずだった。

だが、それができない。

何故できないのかもわからない。

困惑して然るべきだというのに、それすらもできない。

ただただ困惑しかできないとき……ふと違和感を覚えて、黒紫の騎士は違和感を覚えた場所、窓の外へと視線を向ける。

だがそこには暗い夜の闇しか見えなかった。

「……虫以外にも監視がいるみたいだな」

!?

その言葉は独り言ではなく、明確に黒紫の騎士に向けられた言葉だった。

それに気付いて黒紫の騎士であるランスロットは、驚愕しながら刃夜へと眼を向ける。

霊体化しているため姿形が見えないはずの黒紫の騎士のランスロットの眼を……刃夜はまっすぐに見つめていた。

「怪しむのもわかるし、疑うのもわかる。だが俺としても悪いようにするつもりはない。そこは安心してくれ」

「……」

「出てこなくていい。現界すると魔力が減るだろう。しばらくは、問題が起こらない限りは、雁夜をそっとしておいてやって欲しい」

「……」

「もしもって事はないとは思うが……方が一は己のマスターを優先してくれ。こっちは大丈夫だ」

そう言っただけで今度こそ眠りについたかのように、規則正しく呼吸を出した。

意味がわからないというのが本音だった。

だが……何故か斬り捨てる事が出来ないと思った。

何故かはわからない。

その迷いこそが……自らを救うと言うことを、黒紫の騎士

ランスロットは

気付けるはずもなかった。

拠点

それはキャスターがセイバーへ赴き、そして綺礼とギルガメッシュが会話を繰り広げた、翌朝。

一夜明けて、刃夜一行が向かったのは不動産屋だった。
当座の拠点を手に入れるためだった。

だが……少々問題があった。

「……さすがに一軒家は厳しいな」

「普通に生計建てていたら、三十前で中古とはいえ一軒家を購入できる貯金はないわな」

「でも刃夜の言い分もわかるんだよ。間桐の家は論外にしても……今の俺たちに集合住宅は危険だ」

間桐の家は臍硯のホーム。

集合住宅は周囲に人が容易に侵入でき、また他の住民を巻き込む危険がある。

となると戸建て住宅が理想的なのだが……自立できているとはいえ、雁夜にそんな大金があるわけもなかった。

「建築法とかなければ半日もあれば俺が家を建てられるんだが。なんかスキル扱いになってるし」

「……本当か？ 君は……本当にどんな英霊なんだ？」

「だから英霊なんて大した存在じゃない。単に家の修行が鬼畜だっただけだ」

それだけでは到底納得できなかったが、嘘を言う理由もないため雁夜もその言葉をとりあえず疑わないことにした。

信じてもらいなかったが。

「ちなみにリフォームも出来る。境界とかも形成するから、むしろぼろいほうがいいかも」

「……だったら何とかなるかも知れない」

「それか間桐の家から金目の物かっぱらってくるか？ 隠密行動はお手の物だ」

「……それも有りだな」

と、実に危険な会話を、不動産屋の入り口に張り出された物件を物色しながらしていたりするのだが……道行く人々は誰も子連れの男二人組に気を止める者はいなかった。

また雁夜からすれば間桐家は生まれた家であるのだが、臆視という怪物がいたこと、また桜を苦しめた事で愛着など出るわけもなかった。

「またホテルつてのも一つの手だが……しかしなあ」

「桜ちゃんとしてもあまりいい事じゃないし」

「わたしなら、平気だよ」

「いいや桜ちゃん。俺が嫌なの。大人の我が侷だ」

「……見た目俺より年下の刃夜がそれをいうと違和感が」

「だから俺の精神年齢はお前の20倍以上だ。じじいと一緒だじじいと」

それがにわかには信じられないんだけど……

確かに存在自体が異常だが、こうしてそばにいる限りは雁夜としてはただの青年にしか見えないのだった。

これは雁夜の未熟さと、まだまだ未熟ながらも刃夜の修行のたまものだった。

雁夜はごくごく最近まで一般人として暮らしており、魔術の心得も当然武術の心得もない。そんな雁夜に、刃夜の異常さが見抜けるわけもなかったのだ。

「おじいちゃんなの？」

「そうだ桜ちゃん。俺はおっさんではなくもはやじじいすらも超越して仙人もどきだ。俺を呼ぶ時はじいさんと呼んでくれ」

「刃夜……おじいちゃん？」

「うむ、それでいい」

目線の高さを合わせるために桜の前に膝をついて満面の笑みを浮かべて、刃夜は桜の頭を撫でる。

それに対して桜はただされるがままで、首を僅かに横に傾げるだけだった。

ぜってー殺す

内心で凄まじい殺意を滾らせながらも、桜に対する表情には優しきしかない笑みだった。

そんな刃夜がふと脇に目を向けて……それに気がついた。

「お、ここはどうだ？」

「？　これは……」

刃夜が指差したのは、下の端の方にある物件だった。

深山町の外れの方にある、雑木林の中にある古い武家屋敷の物件。

数年前に持ち主が死に、引き取り手もない。

敷地こそだいぶ広いが、武家屋敷が建築されてからそこそこの年数が経っており、家主不在で手入れが行き届いてないために、かなり痛んでいるようだった。

しかも深山町の中でもかなり端の方であり、利便性も良くない。

しかしその不便さは……刃夜達には好都合でもあった。

「武家屋敷で敷地もそこそこ。周りは林があつて民家もない。いいんじゃないか？　先にも言ったがりフォームは出来るぞ」

「この値段なら何とか……でも少し足りないな」

「しょうがない。マジでかっぱらってくるか」

小さく溜め息を吐きながら、刃夜は指を鳴らして軽く準備運動を出した。

完全に泥棒に入るためかあまりその表情は乗り気ではなかったが……それでも背に腹は代えられないのだろう。

「しかし、臓硯に後をつけられたら……」

「むしろ好都合だよ。俺からしたらあいつがどんな手で来ようが返り討ちに出来る。意地でもする。だが手がかりもなく聖杯戦争が終わって、逃げられるのが一番困る」

臓硯の狡猾さを知っている雁夜からしたら、まだ完全に信用し切れていない刃夜のその台詞は非常に怖いものがあつたのだが……しかし言い分も十分に理解できた。

確かにあのじじいからしたら……聖杯戦争さえ終われば問題はな
いのか

イレギュラーな存在である刃夜は間桐臓硯からしても予想外であり、八騎目のサーヴァントなんて想定できるはずもなかった。そして昨夜のバーサーカーを一瞬にして狂化を消し去った謎の能力。

狂化されて理性を失う代わりに、戦闘能力が格段に強化されたバーサーカーの攻撃を受け止めて、挙げ句の果てに投げ捨てる。

更に目の前にいたはずだというのに、一瞬にして投げ飛ばしたバーサーカーの前に行き、あまりにも長い刀で斬り捨てた。

その一連の動作は、戦闘については何一つわからない雁夜からしても驚きだった。

本格的な戦闘を行っていないため、実際の戦闘能力は未知数だが……それでもバーサーカーに対応できる時点で弱くないことは雁夜にもわかった。

欠点としては生きているために霊体化できないため、普通の人間として食べて、寝る行為が必要な事だろう。

といってもそのどちらも、刃夜は全く問題なく耐えられたりする。そして当然、実際とんでもなく強かったりするのだが……雁夜がわかるはずもない。

「さて、あまり連れて行きたくないのだが……それでも桜ちゃんを俺の目の届かないところに行かせるのはちよつと怖い。虫使いつて事を考えると余り安全とは言えないだろうし」

？いでいた手を離し、刃夜は桜を抱きかかえた。

抱っこした姿のまま、なんと驚くことに二人して姿が薄れていく。

「!?」

「雁夜、お前はともかく人目の多いところにいろ。すぐに帰ってくるが、用心に越したことはない。まあ虫程度で何をされようと、紫炎の力でどうとでもなるがな」

「し、しかし」

「あ、ついでにこれ渡しておくわ」

そう言つて完全に姿が消える前に渡されたのは……上の方に穴が開いて紐が通されている、「守」と書かれた木の板だった。

「これは？」

「護符だ。地下蔵にいた虫なら百匹単位程度一斉に襲われても十分程度なら持ちこたえられる」

「!?」

「とりあえずそれ持つてどこか人目の多くて、でも最悪事が起きても何となるところにいるように。すぐに戻る」

人目が多くて事が起きても何とかなるって……どこだよ？

刃夜の台詞に当然のような疑問を抱くが、手渡された護符から顔をあげたらすでにそこに刃夜も桜もいなかった。

一体どういう原理で消えたのかわからない雁夜としては、疑問符が頭の中を渦巻くのも当然といえた。

とりあえず……移動しよう

見つけた物件について話を聞くのは止めにしておいた。

自ら閉鎖空間に行くのは愚作であると考えたからだ。

何せ相手は間桐臓硯。

老獪という文字を生命にしたかのような存在なのだ。

ただでさえ経験も知識も力もない雁夜からしたら、警戒をするに越したことはなかった。

そして、新都の公園のベンチ……目の前に小さな茶店があつて、そのドリンクをテイクアウトしている……でしばし待つこと十数分。

「ただいま」

「うおっ!？」

近寄る気配も姿もないというのに、突然隣に座りながらそう言われて、雁夜は文字通り飛び上がった。

その際に手からお茶がすっぽ抜けたのだが……次の瞬間には刃夜の手の中であつた。

「すまんすまん。驚かせるつもりはなかったのだが」

「嘘をつけ……」

「雁夜おじさん……ただいま」

「お帰り、桜ちゃん」

刃夜に抱きかかえられながら、自分に向けて挨拶をしてくる桜に少

し癒されながら……雁夜は刃夜へと目を向けて、目を見開いた。

「……その通帳は？」

「いや、ちやうど侵入したら酒瓶を持ちながら間桐家に入ろうとしている奴……鶴野って奴がいてな。ひつつかまえて脅して奪った」

「……それ、完全に犯罪じゃないか？」

完全に犯罪である。

この場合は恐喝行為に他ならない。

「桜ちゃんにした所業を考えれば「万死に値する！」が……まああの妖怪じじいがいるんじゃない程度の実力だと逆らえるはずもないからな。これを持って贖罪としてやった」

カラカラと、どこか邪悪な雰囲気醸し出しながら刃夜はそう笑っていた。

その笑みが、全く笑っていないかっただのために雁夜としても乾いた笑みを浮かべるしかなく、自らの兄を多少だけ同情した。

だがそこはそれなりの年月を生きている刃夜だけはあり、きちんといろいろな手段を用いていた。

「ちなみに桜ちゃんには聞こえないように少し力を使って会話したから、教育上問題ある発言は桜ちゃんには聞こえていない。当然この会話も聞こえていない。鶴野って奴に協力をさせて譲渡しているように見せかけている」

「……そんなこと聞いてないんだが」

盛大に溜め息を吐きながら、雁夜は頭を抱える。

そしてちらりと桜を見ると、本当に不思議そうに雁夜を見ていた。

どうやら会話が聞こえていないのは本当らしく、突然頭を抱えた雁夜が不思議でしようがないのだろう。

「しかしすごいな、この通帳。結構な額が入っているぞ？」

そんな桜と雁夜は放置で、刃夜は先へと話を進める。

本人も必要に迫られて&罰を下すという意味で行った行為だが、進んでしたかったわけではないのだろう。

露骨な話題転換に雁夜としても乗らない理由はないので、刃夜に返事をする。

「ああ……間桐家は不動産で結構儲けているから」

「……さっきの物件大丈夫か？」

「大丈夫だ……。たぶん……」

「まあいい。俺のビフォーアフターと結界で問題なくしてやろう」

通帳とカード、そして印鑑に暗証番号の書かれた紙を雁夜に渡し、刃夜はそう言って気合いを入れていた。

その様子に頼もしさと同時に少々の不安を感じながらも……否定をせずに雁夜は苦笑した。

「さて、んじやさっさと買ってこよう。んで、午後はリフォーム。そして食材を買い出しに行くぞ」

「食材？」

「俺、こう見えても職の一つが料理人なんだ」

「……本当にお前はどんなえい——化物モンスターなんだ？」

「ちなみに本職は刀鍛冶だ」

「……本当か？」

もはや疑問を投げかけるのもばかしくなる雁夜だったが、しかし思わず疑問が口からこぼれていた。

その疑問に対して、刃夜は軽い感じで頷き返す。

「まあ鍛造している暇はないだろうから、見せることは叶わないだろうが。さて桜ちゃんや、好きな料理はあるかい？ といっても調理器具が揃ってないだろうから、本気でこった料理は作れないだろうし、簡単な物しか作れないが……」

気合いを入れながらも、道具がないため大した物が作れないと、自らの台詞にがっかりする刃夜。

だが桜としては、正直余り興味がない事柄だった。

「別に……何でも大丈夫。何でも食べる……から」

「……よしわかった。絶対にうまいと言わせてやる！」

うつむきつつ返事をしてきた桜を高い高いしながら、刃夜はそう決めたのだった。

その感情は怒りと使命感故の台詞だったが、二人にそれがわかるわけもない。

「そうと決まればすぐに取りかかるぞ！ ヒモで大変申し訳ないが、それでも金を出してくれればその辺のシェフじゃ太刀打ちできない極上料理を食わしてやろう！」

「すごい事を豪語するな」

「経験値が圧倒的に違うからな！ 先にも言ったがじじいだからな」

そういつて刃夜は桜を抱っこして頭を撫でながら笑っていた。

そんな刃夜に溜め息を吐きながら、三人は……実質は四人……先ほどの不動産屋へと歩き出した。

そして速攻で不動産を買い取り、午後は刃夜がホームセンターに入り浸り、リフォームの材料等を、雁夜に購入させていた。

本来数日は引き渡しにかかるのだが……刃夜がそれを強行させた。

「マジで拠点があるからな」

「否定はしないが……無理矢理すぎだ」

そして午後数時間で驚くことに二つの部屋とトイレに風呂、更に調理場を完全復旧してしまったのだった。

屋根と風呂、トイレそれぞれの通路も同様に完璧な修復状況だ。

まだ手つかずの部屋もあるが……それでも生活するにはなんら問題がない。

「……お前マジで何者なんだ？」

「モンスター化物だ。それ以上でも以下でもない。だが人間でもある」

「矛盾しすぎ」

高速……それこそ目にも映らないほどの速度で作業をしたためか、若干息を弾ませていたが、それでもその動作に狂いはなかった。

武家屋敷は本当に完全な昔ながらの日本家屋であり、竈もあった。

そして買ってきた食材とスパイス、更に肉類を取り出して、刃夜は調理を開始した。

食材は一瞬で切断され、更に竈は何故か紫色の炎が灯り、米を炊いていた。

しかも米はそれなりに高い米を買ってきた挙げ句、何故か全ての米を選別し米粒の大きさをそろえるという事までしていたりする。

「とりあえず初日はカレーで。俺の作ったカレーはうまいぞ」

「確かに良い匂いだな」

「……うん」

桜が控えめにそう言っているのを刃夜と雁夜がほほえましい気持ちで聞いて、しばらくして料理ができあがる。

そのカレーを口にして、雁夜と桜は驚愕した。

「……なんだこのうまさ」

「……おいしい」

「ふ、当然だろう？ 俺を舐めるなよ？」

見事にドヤ顔をしている刃夜だったが、その顔を肯定せざるを得ないほどにうまく、雁夜は内心で舌を巻くしかなかった。

海の原のとあるごじんが食べれば……絶句する事請け合いの腕前なのだからそれも当然なのだが。

そして食事が終わわり、風呂に入って三人は買ってきたばかりの布団で川の字になって眠りにつく。

その前に桜と雁夜の二人には、刃夜が取り出した小瓶の中身を飲ませて、軽く運動をさせていたりする。

こうして一応陣地を手に入れた四人は、次の日もリフォームを行った。

全く聖杯戦争らしき事をしていなかったりするのだが……それはまた別の話。

ちなみに僅か一日と数時間で、匠もびつくりするほどによみがえった武家屋敷が出来ていたりする。

防犯はもちろんのこと、夏は涼しく冬は暖かい。

更に桜と雁夜と黒紫の戦士以外入るには、かなりの労力を伴う結界が張られていたりする。

雨にも強く、火にも強く、揺れにも強い。

ぶつちやけ、ちよつとした要塞と化していた。

といっても防御力だけで攻撃力はなかったりするのだが……。

そして拠点を手に入れて……桜ちゃんと雁夜を寝かしつけた深夜。

玄関から出て闇夜へと走っていく刃夜の姿があった。

行動開始

「さて、こうして拠点を手に入れた訳だが……とりあえず行動をしよう」

「……どうしたいきなり？」

「いや、一応聖杯戦争らしきことをしないとと思って」

手にしたお玉で鍋の中身をかき混ぜながら、刃夜はそう雁夜に問いかけて、雁夜はそれに対して疑問符を浮かべる。

聖杯戦争らしき事って……？

昨日購入した武家屋敷は、誰もが中古物件とは信じられないほどに見違えた姿となつて、三人に暖かさを提供していた。

時刻はすでに夕方。

そろそろ夜になろうという時間だ。

それはつまり人目につきにくい夜になるということであり、同時に聖杯戦争関係者が動き出す時間でもあるということだった。

『昼間ちよつと精神分身体でこの冬木を偵察してみたがどうやら、キャスターが結構キチガイっぽい』

『……キチガイ？ というか精神分身体って』

精神分身精神体という、文面だけで十分に理解できるが、その分身を共に行動していた雁夜に全く気取られることなく行っていた存在の刃夜に空恐ろしさを覚えつつ、雁夜は刃夜の話の続きを促す。

『どうやら子供を誘拐しまくっているらしい。子供をどうするのかは謎だが、それとなく遠目……というか精神分身体で見た感じやばめな奴だ。正直桜ちゃん以外の事は余り行動を起こしたくないのだが……それでも子供が攫われた以上、何もしないということとはしたくない』

『……なるほど』

刃夜のそばで熱心に刃夜の料理の手順を見ている桜に目をやりつつ、刃夜は顔を歪める。

その歪めた意味がわからなかったが、それでも子供を救いたいと言うことは雁夜にもわかった。

それについては雁夜としても同意見だったが……それでも優先す

べきは桜であるという気持ちの方が大きかった。

「これはなにをしてるの?」

「落としぶたと言ってるな。食材をムラなく煮含めるための物だ」

「今晚のごはんは?」

「今日はいくじやがだ。後味噌汁。みそは自家製の作りたかったが……作っても食べられるのは数ヶ月後だしな」

『この家に籠もっているのが桜ちゃんとしては安全だし、まだ幼い子供を夜半の外に連れ出すのは俺としても避けたいが……しかし』

雁夜の耳に、先ほどから直接届くかのように紡がれた言葉。

この違和感ある言葉を聞いた時は刃夜が力を行使しているため、雁夜はいったん口を閉じるようにしていた。

あまり桜に聞かせたくない事を話している時に、この特殊な会話をしているからだ。

桜と料理の話で盛り上がっている刃夜の笑顔と、動かしている口とは全く別の言葉が届くから雁夜としても不思議だったが、それでも便利な能力だった。

『安全なのは間違いないと思う。この家……本当にとんでもないことになってるし』

ちなみに雁夜の言葉も刃夜にしか届かないようにすることも出来るらしい。

だがその際は不自然にならないように口を閉じた状態で発音するため……雁夜としては少々恥ずかしかったりもしたりした。

『まーな。いつもいうが経験値のたまものです。まあそれはともかくとして今後の方針を桜ちゃんが寝たら固めよう』

『ああ』

「よし桜ちゃんできたぞ。お皿の盛りつけ手伝ってもらえるかな?」

「はい」

てきぱきと、桜に指示を出しながら調理を進めたり、雁夜と今後の作戦行動を相談する刃夜。

その存在に、便利さや頼もしさよりも雁夜は恐怖を感じてしまっていた。

だが……それ以上に

「ではいただきますしよう。いただきます」

「いただきます」

「はい召し上がれ」

満面の笑みで桜に料理を振る舞う姿や、桜と雁夜、二人の体を治療する刃夜に、一切の悪感情は感じられなかった。

本当に、桜と雁夜を助けたいと思っているのだと、雁夜が信じてしまっただけだ。

だが、信用して良いのかという疑問も当然雁夜の中にはあった。

信じたいが……何故ここまでするんだ？

それが雁夜の疑問だった。

そしてその疑問は当然だ。

何せ刃夜には、ここまで桜と雁夜に親身になる理由がない。

本人の談を信じるのであれば、死んでおらずマスターである桜からの魔力供給も必要ないという。

そして聖杯に託す望みもない。

はつきり言っただけ、聖杯戦争に参加する理由がないのだ。

これは雁夜の勘だったが、令呪もどうにか出来る気がしてならなかった。

だというのに、こうして桜だけでなく雁夜の面倒も見るのが不思議だった。

その不思議な存在が桜との話を中断し、とある方向……玄関……へと目を向けた。

「？ どうした？」

「来客だ」

「来客？」

「バーサーカー。問題ないだろうが、念のためここにいてくれ」

「……」

そう言っただけで刃夜が席を立ち、向かった玄関から外に出て門扉の前に

いたのは……一人の老人だった。

「ふうむ。驚いた。報告には聞いていたが、よもや本当にいるとは」
「夕方とはいえ来訪してきたのなら、まずは挨拶が先じゃないですか
な？ ぐ老人」

「これは失礼した。私は言峰璃正という。第四次聖杯戦争の監督役
だ」

言峰璃正。

第四次聖杯戦争の監督役であり、聖堂教会に属する司祭だった。

「一体どのようなご用件で？」

「今宵、聖杯戦争に関係する者に招集をかけている。使い魔でも構わ
ないので、冬木教会まで来て欲しい」

「その用件は今いうのはダメなので？」

「他の参加者にも同時に話す故に無理だ。必ず来るように」

「……そんな使い走りは何故監督役のあなたがする必要があるので
しょうか？」

言葉こそ丁寧だったが、口調と表情は実にうさんくさそうな物を見
る眼で見ている刃夜。

その刃夜に対して、璃正はふっと小さく笑った。

「何、報告に受けていた八騎目のサーヴァントを見てみたかったので
ね。中古の物件を購入したと聞いていたので、様子を見に来たのだ」
「なるほど。では冬木教会に後ほど伺いましょう」

「うむ」

そう言い残して璃正は去っていった。

背中を向けて去りつつ璃正は……苦笑していた。

どれほどの存在と思えば……あんな存在が英霊とは

先ほど見た刃夜を思い返して、璃正は内心で苦笑した。

その笑みの意味は……報告を受けた時に感じた嫌な予感が杞憂
だったことに安堵した気持ちと、自らの陣営の事を失念していた自身
に対する苦笑だった。

八騎目と警戒していたが、これならばギルガメッシュ相手では大し
た障害にはなるまい

それは驕りだった。

利害の一致として自らが協力している遠坂時臣。

その時臣が召喚したのは、最強と言って何ら支障のないサーヴァント、ギルガメツシュ。

古代ウルクの英雄王。

人類の知恵の原点にしてあらゆる技術の雛形を収集した宝具、ゲイト・オブ・バビロン王の財宝と、宝具の中でも最強に位置する宝具、エヌマ・メ・エリシュ天地乖離す開闢の星を所有する、事実上最強のサーヴァント。

それに対して、刃夜の姿はどう見てもただの現代日本人の青年にすぎない。

どういった理由で英霊になったのかは本人自身も理解していないが、見た目はスキルの影響もあつて、完全にただの青年にすぎない。次の策もうまくいくだろう

そのギルガメツシュの相手にならないと璃正が判断するのも当然といえた。

が……その驕りともいえる感情は、当然だが過ちだった。そんな璃正の背中を見て……刃夜は鼻で笑った。

見た目で舐めすぎだな。表情と感情で何か裏があるのがバレバレだつての

家に入り、大げさに肩をすくめながら刃夜は食事をしている居間へと戻っていく。

璃正の態度と表情と……刃夜自身を見てくる視線で、璃正に対してある程度のことは刃夜は掴んでしまった。

しかし何か裏があるとわかっていても、正直な話……刃夜にその裏が何であるのかは全く理解できなかった。

だがそれは当たり前のことでもあった。何せ刃夜が召喚されてからやったことは……

間桐臓硯を斬り捨てる（逃げられる）

間桐家の虫倉の虫を完全消滅させる

桜の体内に侵入していた虫を完全消滅させる

バーサーカーの狂化を斬り飛ばす

雁夜の体を治療する

中古物件のリフォーム（結界形成込）

桜と雁夜の体の治療を継続しつつ、料理を振る舞う

と、これだけであり、他のサーヴァント……敵対関係でないためバーサーカーは除く……の情報を集めておらず、生身で接触すらしていないのだ。

精神分身体という、自らの精神を分割し霊体になって辺りを搜索する能力は、便利だが当然限界があった。

しかもそれが、能力的な力の使用を苦手とする刃夜であればなおさらだった。

さてと……使い魔OKと言う話だったが、どうしたものか？

冬木教会に赴くことについては、刃夜自身としては何ら問題がなかった。

だが先の話にも出たが、桜を夜に活動させたくないという刃夜の我が侷があった。

子供を夜中に起こしておくのはなあ……。教育上体に良くない

かといって結界が張つてあるとはいえ家に置いていくのは、虫使いである間桐臓硯がいるために、余り得策ではない。

結界はかなり強固の物を張つたのだが、離れることが得策ではないことは誰でもわかることだ。

だが、それでも刃夜は考えを固めたのか、すぐに表情を元に戻した。刃夜の取れる選択肢はそう多くなかったが、どうやら方向性は決めたらしい。

まあいいか。能力使えば

そう判断しつつ、刃夜は桜と雁夜、そして黒紫の戦士がいる居間へと戻って……戻るなりこういった。

「まだ時間があるから寝袋買いに行くぞ〜」

「ね、寝袋？」

「……寝袋って何？」

「そしてその後は冬木教会に俺が行ってくる。むろん桜ちゃんを連れて。雁夜は家で待機してくれ。内容は報告する」

「……はあ？」

刃夜の言っている意味が全く理解できずに、雁夜は頭に疑問符を浮かべることしか出来ない。

桜は桜で、寝袋なる物の意味がわからず、首を小さく傾げていた。

「……」

そしてそんな三人を見ている、霊体化している黒紫の戦士。

実に珍妙な状況だったが、刃夜だけはぶつぶつと考え事を練り広げていた。

冬木教会。

冬木市にある教会であり、小高い丘の上に建てられた教会だ。

教会としても当然機能しているが、聖杯戦争の監督役の拠点でもあり、聖杯戦争の脱落者が保護を求めてやってくることもある。

聖堂教会が聖杯戦争に介入するための拠点であり、宗教的な意味合いよりも、神秘に関する事柄の方が舞い込んでくる場所と言っているだろう。

その教会の礼拝堂に……異様な存在達が、やってきていた。

皆マスターの招集に來た聖杯戦争の関係者だった。

使い魔が四匹。

予想よりも一つ少なかったのだが、その理由は予想外の出席者がいることとすぐにわかることだった。

「どうしました監督役殿。早く始めてくれるとありがたいのですが？ それともまだ数が揃ってないのですか？ 子供の教育上よくないので、早く進めていただきたいのですが？」

早く……といてもだな……

必死に内心の動揺を隠しているが、どうしても隠すことが出来ずに、璃正はちらりと一瞬だけ一振りの打刀……携行できる竹刀袋に入れている……を携えてやってきた訪問者が座っているその頭上へと視線を向けた。

そこには……

「すー、すー、すー」

蓑虫のように……宙に浮く蓑虫がいるわけもないが……宙で寝息を立てて寝袋で寝ている幼子である桜の姿があった。

他の使い魔も……意志こそわからないが興味津々であることは間違いないだろう。

何せ無防備にも、幼子を連れてやってきた若造がいるのだから。

また当然それだけではなく、別の理由……八騎目のサーヴァントという意味で、もつとも注目を集めているのだが、本人はどこ吹く風だった。

何故宙に浮いているのかは激しく謎だが……しかしこのまま黙っている訳にもいかなかったので、璃正は話を始めた。

「……よくぞ集まってくれた。この青年がいうように、時間も遅い。早速始めさせてもらう」

内心の動揺を周りに悟られないように注意しながら、璃正が話を始めた。

「諸君らの悲願である聖杯戦争が今、重大な危機にさらされている。諸君も知っているだろうが、マスターの一人が、神秘の秘匿という大原則を守らずに、自らの欲望を満たすために行動している」

「昨今冬木市を騒がせている連続殺人お呼びに連続誘拐事件の犯人がキャスターのマスターであることが、判明した。サーヴァントも使役して犯行を行い、痕跡を消してもいない。神秘の大原則……秘匿を守らぬ愚か者にどのような罰が下るかは、説明するまでもないだろう」
静かな夜の礼拝堂に、璃正の声は実に厳かに響き渡った。

使い魔達は反応を示すことはなく、刃夜はただ静かに璃正の言葉を聞いていた。

そして璃正は一度話すのを止めて……自らの右腕の袖をまくり上げて、その異様な腕を晒した。

その右腕には、赤い刻印の様……令呪が大量に刻まれていた。

「非常時における監督権限を使用して、聖杯戦争に暫定的なルール変更を設定し、通達する。この令呪は過去の聖杯戦争で敗れたマスター

から回収した未使用の令呪だ。キャスターを討伐した者に、この令呪を一面譲り渡すものとする」

「キャスターを討伐し、そして令呪の受け渡しが終わるまでは互いのマスターおよびサーヴァントの戦闘を一時中止とする。キャスターの討伐が確認次第、令呪を授与する。単独、協力による討伐は問わない。単独であれば一人に、協力したマスターであればその協力したマスターに一面ずつ譲渡する。さて……質問はあるかね？」

最後の質問という言葉は、当然だがこの場で璃正以外の人間である刃夜に向けて言われた言葉だった。

他の使い魔は動物のため言語を発言することが出来ないからだ。

その意図を理解しているのか、刃夜はふむ……と一つ頷いて、大きく右手を挙げた。

「……何かな？ 八騎目のサーヴァント君」

「キャスターの情報を掴んでいるのなら、その情報提供を戴くことは出来ませんか？」

「可能だが……ではこちらとしても一ついいかね？」

「？ 何でしょうか？」

「君のクラス名を教えてくださいませんか？」

他の者にも聞こえるように先ほどよりも大きく、そしてはつきりと聞こえる声で、璃正は刃夜にそう問うた。

璃正にはサーヴァントの能力を見る目は当然ながらない。

だがそういうことではなく、この意味のわからない存在の事を少しでも知りたいと思つての事だったのだろう。

使い魔達が去らないところを見ると、他のマスター達も知りたいのだろう。

そしてその思いは一匹の使い魔の主であるギルガメッシュのマスター……遠坂時臣がもつとも強かった。

本当に桜がいる……。何故だ？

養子に出したはずの自らの二番目の娘が、こうしてあり得ない存在である八騎目のサーヴァントと共に現れた……それも何故か宙に浮いた寝袋の中で眠りながら……のだから、当然といえた。

遠坂時臣ほどでないにしろ、他のマスター達も少しでもイレギュラーな存在である刃夜の情報が欲しいのだろう。

その場に存在する誰もが注目する中、刃夜はさも興味がなさそうに、自らの事を暴露した。

「クラス名開拓者^{フロンティア}。真名は鉄刃夜。並行世界の現代日本で生まれて修行し、異世界修行の旅をしている無頼者です」

「!??!?!?!」

その暴露はあまりにも衝撃的な告白だった。

真名を明かしたことも、そして刃夜が語った自らの経歴についても。

それは璃正も同じだったのだろう。

必死に冷静さを保とうとしているが、頬をひくつかせているため動揺しているのが丸わかりだった。

だが、次の台詞で今度こそ驚愕することになった。

「並行世界なので逸話なんかはありません。見た目若造ですが、まあ負けるつもりはありませんが……ぶっちゃけ聖杯には興味ありません」

「なっ?!」

璃正驚きのあまりに声を上げてしまう。

もしも他のマスター達も使い魔ではなく生身で来ていたら同じような反応をしていただろう。

十分に驚かせていることを理解しながら、刃夜は周りを睥睨し更にこう言い放った。

「俺がこの世界でしなければならぬことはマスターであるこの桜ちゃんを救うことです。故に……その邪魔をしようというのなら俺は全力で貴様らと敵対する。それを覚えておいて欲しい」

最初こそ丁寧な口調だったが……自らが行う事については語気を強めた。

しかも言葉を向けたのは、桜を除いた全ての存在に対して向けているかのようには、その言葉は敵意がむき出しだった。

そう……全ての存在に対してむき出しの敵意を向ける。

この場にはいけないはずの存在に対しても。

それを証明するかのようには……刃夜は一瞬だけ虚空を睨み付けた。

何も無い……いるはずがない枯れ木の枝の上に。

まさか、見えているというのか？

そしてその視線は……視覚を共有しているとある存在もその視線を向けられたこととなった。

全てのアサシンのマスターである……言峰綺礼その人に。

そしてその綺礼とは別に単身でこの教会に足を運んできた存在に興味を持っている存在が、他にもいた。

ほお……。存外おもしろい雑種がいるな

英雄王ギルガメッシュ。

綺礼と会話をするために、今宵も同盟関係である教会へと足を運んでいたのだ。

そしてそのあまりにも異質な存在の男を見て……興味を示した。

正しくは……その男が持つ物に。

これがこの聖杯戦争における刃夜の宣戦布告であり……

そして全ての運命が狂い始めた瞬間だった。

起点

さて、やることもやったし帰るか。雁夜も心配だしな

冬木教会で啖呵を切つて、そしてそのまま求めていた情報提供すらも受けずに、刃夜は帰路へとついていた。

しかも先ほどまで宙に浮かせていた叢虫桜を抱きかかえて。

しかし軽いなあ……。もうちよつと食べさせてあげないとダメかもなあ

寝ている桜を起さないようにしながら、しかしそれでも桜の身体
の調子を確かめるように、刃夜は桜の頬に手を当てる。

その寝顔を見て……。刃夜は何を思うのだろう。

だが少なくとも心配していることだけは間違いないらしく……。その表情は僅かに暗い陰のある笑みを浮かべて……

ふと足を止めた。

そして桜を宙に浮かせて……。左肩に下げている竹刀袋のファスナーを開けて、柄だけ外に出した。

「俺に何か用か？ サーヴァントつて奴。ずいぶんと猛々しいとか……。尊大な気配の持ち主さん」

「ほお？ 少しは私のこともわかるか。実におもしろい奴だな」

冬木教会の坂を下りきり、新都から深山町へと向かうための大橋の歩行者の通路に入る一歩手前で、虚空から突如としてそんな言葉が舞い降りてきた。

刃夜の言葉に導かれるようにして、一人の青年が姿を現した。

金髪赤眼の青年が。

その姿を見て……。刃夜は内心で溜め息を吐いていた。

こいつが精神分身体で見た、精神力が異様に強い奴か……。精神体でも見たが……。予想通りめんどくさそうな奴だなあ

雁夜に語っていた精神分身体。

これは文字通り精神を分身させて幽霊のようになどどこでも自由に行くことが出来る……。結界などが張られていた場合、刃夜の精神力を上回っていたら突破できないが……。便利な能力だが、不便なところも

あった。

文字通り精神体であるため、生物等の気力や霊力、魔力といった物を見ることしか出来ない。

つまり精神分身体で見ることが出来るのは、その存在の生命力や視覚的に見えない物を見ることになる。

また色によつてある程度どのような人物かも観測できる。

そしてもっとも重要なのが、精神で直接感じた相手の本性だったりする。

本気を出せば精神分身体を完全なる幽霊体として飛ばすことが出来て、その場合は普段通りに五感を持った状態で幽霊になれるのだが……肉体が完全に無防備になる。

間桐臓硯を殺せてない今の状況ではやるのは危険だと判断し、まだ行えていなかった。

ちなみに、今現在も間桐臓硯を探して数体の精神分身体が冬木市をさまよっていたりする。

相手が……現界したギルガメッシュに戦意がないことを見抜いたのか、いつでも抜けるようにしていた打刀の柄へと伸ばした手を戻した。

だが当然だがいつでも動けるように、刃夜は静かに相手を見つめる。

まだ夜といって差し支えのない時間であるため、往来もそれなりにあった。

新都と深山町へと通じる大橋のそばで……周囲に誰もいない公園の中。

公園にある電灯と、少し先を行き交う車のライトが二人を時折照らす。

そんな場所で二人は初めて出会った。

しばし奇妙ならみ合いをしていた二人だったが……ギルガメッシュがあざ笑うかのように鼻で笑った。

その侮蔑の笑みに……刃夜は眉をひそめた。
しかし特に口を開くようなことはしなかった。

その態度に……ギルガメッシュが不快そうに顔を歪めた。

「王たるこの我を前にして、拝謁の態度をとらないとは……まあよい。
八騎目のサーヴァントよ。貴様の態度次第でのこの無礼、許してやら
んこともない」

「……王？」

言っていることも不思議だったが、刃夜がもつとも疑問に思ったの
は王という言葉だった。

そしてその王という単語に納得していたりした。

ああ……なるほど。言われてみればそんな感じがするな

ただ目の前に立っているだけで自然と威圧される圧倒的な存在感。

そして普通の人とは違う雰囲気醸し出している。

容姿が優れていることもあいまり、実に素直にその王であるという

言葉は刃夜の中に入ってきた。

だが、次の言葉で相手に対する態度を急変させることになる。

「それをよこせ、雑種」

「……はい？」

「その下げている得物よ。見たところ、我が財に加えるだけの財宝と
見える。その剣を献上せよ。それを持って、その無礼を許そう」

……何を言ってるんだこいつは？

ギルガメッシュの言葉に、先ほどとは違う露骨に嫌悪感をあらわに
した表情を浮かべたのだが……しかし驚くべき事に、刃夜はすぐに竹
刀袋から打刀を取り出して、打刀をギルガメッシュへと放り投げた。

「むっ？」

態度こそ気に入くないようだが、しかし素直に渡したことでギルガ
メッシュは意外そうに笑みを浮かべて、投げ渡された打刀を手を取
る。

そしてその湾曲した姿を見て……一つ感心したように言葉を漏ら

した。

「素朴ながらも確かな技術を感じさせる佇まい。絢爛さこそないもののなかなかどうして、いい得物ではないか」

「お褒めにあずかり光栄です」

皮肉のつもりなのか、何故かいきなり敬語を話し出した。

そんな刃夜に気付かず、ギルガメツシュは刃夜の刀を興味深そうに見ている。

「さて中は……」

そうして柄に手をかけ、抜刀しようとして……ギルガメツシュの笑みが歪んだ。

抜こうと力を加えるのだが……いっこうに抜ける気配がなかった。

ふむ……やっぱり抜けなかったか……

その光景をさも当然と思いながら、刃夜は完全に呆れた様子でギルガメツシュを見ていた。

だがその態度には、「抜けなくて当然」という感情よりも、「抜けなかった」という事実に対する思いが強く出ている様子だった。

刀が抜けなかったことに、ギルガメツシュが刃夜に刀を突き出しながら、睨み付けた。

「貴様、なんだこれは？ 王たる俺を愚弄するのか？」

「愚弄とは？」

「たわけ！ 抜けもしないものを献上するとは！ 王たる俺を侮辱するか！」

「侮辱してきたのはそちらでは？」

「なにい？」

そう言いながら刃夜は左手を前に突き出して、静かに虚空にある何かを握るように拳を作った。

すると次の瞬間に驚くべきことに、先ほどまでなかったはずの左手の中に、一振りの打刀が出現した。

しかしその刀……ギルガメツシュが今持つ刀より、違和感を覚える物だった。

「こいつは今王様が手にしている刀より、数振り前に鍛造した刀です」

そう言いながら、刃夜は静かに柄に右手を持っていき一息に抜刀した。

その刀身は夜であり、僅かな光源しかないにも関わらず自ら輝いているかのようだった。

まるで、生きているかのようには。

「ほう？」

その刀身を見て、さしものギルガメッシュも感心したように声を漏らしていた。

刃夜はその反応に何も返さずに静かに納刀し、出現した刀をギルガメッシュへと投げ渡した。

「抜けますか？ 抜けるのであればその刀、献上いたしましょう」

「なに？」

投げ渡された刀を、右手で受け止めながらギルガメッシュは不快そうに眉をひそめる。

そして先ほど投げ渡された刀を、自らの足を支えに地面に立てて……投げ渡された刀を抜こうとするが、抜くことは出来なかった。

その様子を見て、ギルガメッシュが声を荒げる前に……刃夜は先制した。

「俺が最近打った刀は、刀自身が認めれば誰にでも抜くことができます」

「得物が認める……だど？」

「陳腐な言い方ですが、生きているということでしょうか」

「……何が言いたい、雑種」

刃夜の言いたいことがわからず、ただ不快感をあらわにしながら、ギルガメッシュはただ刃夜の言葉の続きを待った。

「あなたほどの圧倒的な存在感を持った人物……王に自らが打った刀を財宝と認識してもらい、感謝します。ですが……」

「俺が打った刀は、少なくとも俺のことを認めてくれている。その打刀を欲しがってくせに……武器の主であり鍛造者たるこの俺を雑種と呼びわりしてくるような存在に、献上する物はないな」

右手を前に突きだして、虚空を掴むように力強く握った拳。

その瞬間に、ギルガメッシュの足下に立てかけていた刀、そしてギルガメッシュが今手にしていた刀が虚空へと消えた。

そして先ほどまでの態度を一変させて、今にも戦闘を行おうとかのように、その身から裂帛の気迫があふれ出した。

どうやら自らの得物を侮辱されたに等しい行動をされて、それなりに頭に来たようだった。

実際刃夜の言うとおりであり、刃夜が鍛造した刀は、刀自身が認めれば誰にでも使うことが出来た。

だが逆に言えば認めなければ今のギルガメッシュのように、抜くことすらも叶わないと言うことだった。

そして刃夜自身が鍛造した得物は、今瞬時に出現させて消したように、別の空間に保管されていて、瞬時に取り出し、収納する事が可能だった。

この便利な能力は、本人がかなりの努力をしたために身に着けた能力だったりする。

しかし欠点として、自らが鍛造した物しか収納できなかつたりする。

ついでに言うと、一振りずつしか出現させられない。

複数取り出す場合にも、ある程度魔力を回して空間より抜刀しなければ出現させられなかった。

簡単な話、○次元○ケットではない。

他にも身に着けた、便利だが便利すぎない能力はそれなりにあつたりする。

「貴様……よくぞ咆えたな、小僧！」

その刃夜に対して、ギルガメッシュは怒りを露わにし、背後に光り輝く何かを出現させた。

その行動に対して、今度は刃夜が驚く方だった。

何じやこりや!?

虚空に出現した、黄金に輝く穴。

そしてその穴から無数の得物が突きだしてくる。

まだ全体を見ることは出来なかったが……得物を鍛造する存在として理解できた。

その得物は到底普通の人間では作ることが出来ない物であると。

そしてその人間では作ることが叶わない得物が、一斉に自分に向けられたその瞬間に……刃夜は動いていた。

左手を握るような形にすると、途端にその手に短い刃渡りの刀……小太刀……が握られる。

そして後方に下がりながら、雨よあられと降り注がれるギルガメツシユの攻撃を、小太刀一本で防いでいた。

「はっ！ 大口を叩いた割には行動を共にしている狂犬めよりも、手癖は悪くないようだな！」

「知るか！ つーかいくら夜とはいえ少し周りのことを考えて行動しろ！」

全ての攻撃を小太刀で流しつつ、刃夜はそう吐き捨てていた。

だが宙に浮いた桜は未だに起きる気配がなかった。

その様子に、ギルガメツシユは攻撃を繰り返しながらも、内心で少々驚いていた。

「ほお？ この状況でも起きないとは……。この小僧、間違いなく何かしているようだな」

攻撃を全て弾きながらも、その実、刃夜自身よりもむしろ背後に回した宙に浮かせた子供に対しての攻撃だけは絶対に防ぐように力を入れていたようだった。

それを見て、ギルガメツシユは唐突に攻撃を行うのを停止した。

「……どういふつもりだ？」

「興が冷めたただけだ。それに貴様もやるにやれない状況だろう？ 我は畜生ではない。幼子を殺める気はない」

「ほうっ？」

「だが貴様に対しては……少々興味がわいたぞ小僧。貴様はこの我手

ずから粉碎してやろう」

えく。今のやりとりで何故興味が沸く？

内心でもものすごく疑問を浮かべている刃夜だったが、しかしこの場は少々暴れすぎた。

このままこの場にいれば面倒なことになるのは火を見るよりも明らか……というよりもすでに周囲がすでに若干火の海になっている……であり、さらにこれ以上この目の前にいる王と自称するサーヴァントを怒らせると面倒だと判断し、態度を表に出すことはなかった。「周りが騒がしくなる前に、消えるとしよう。開拓者……フロンティアジンヤと言ったか？ せいぜい我を楽しませろ。そのときは我が至宝を賜わしてやろう」

心の底から「結構です」と言いたかった刃夜だったが……言えば面倒になるのはわかりきっていたので、刃夜は内心でため息を吐きつつ、言葉を紡いだ。

「そいつはどうも。一つ聞かせろ」

「何だ、小僧？」

「あんたのクラス名だ」

「ふん。我はアーチャーにて現界した天上天下に唯一の王である。以後その態度を弁えよ」

そう言つて、ギルガメッシュは姿を消した。

おそらく霊体化したのだろう。

その様子を見て、そして気配でいなくなったことを感じ取ったのか、刃夜は大急ぎでその場から離れる。

警察に捕まったら面倒なことになるからな

だがそれ以上に面倒な存在に目をつけられたことに、内心で刃夜は頭を抱えていたのだが……とりあえずこの場から離れること、そして自らの腕で寝ている桜のために、刃夜は家路を急いだ。

そして無事に帰ったその家の玄関を越えた先に……

「……」

黒紫の戦士が、静かに立っていた。

姉妹

ギルガメッシュに目をつけられた刃夜は、そのことに内心で首をひねりつつとりあえず桜のこともあったため急いで自らがリフォームした武家屋敷へと戻り、雁夜に状況を報告していた。

「キヤスターの討伐？」

「ああ。精神分身体で見たからわかっていたことだが、どうやら相当キチガイらしい。昨今ニュースでやってる誘拐と連続殺人の犯人コンビらしい」

「コンビ？」

「マスターもその類の阿呆って事だ」

その刃夜の言葉を聞いて、雁夜は深々と溜め息を吐いた。

やらなければいけないことがあるというのに、予定外の予定が出来てしまったのだからそれも当然といえた。

そんな雁夜に対して、刃夜は探るような目線を向けていたのだが……それを悟らせる程未熟ではなかった。

「とりあえず、行動を起こそう」

「具体的には？」

「キヤスターの討伐だ。他のマスターに対して戦闘を行うのは難しいということだろう？ 聖堂教会から特例でルールを作ったのだから」

「そらな」

「それに、子供が攫われているということは……凜ちゃんが攫われる可能性もある」

「凜ちゃん？」

知らぬ人物の単語が出てきて、刃夜が思わずといったように素っ頓狂な言葉を上げていた。

それがおもしろかったのか、雁夜は一瞬だけ笑みを浮かべたが、すぐに顔を引き締めて説明をした。

「桜ちゃんの実の姉だ。名前を遠坂……凜」

遠坂に何かあるみたいだなあ……

雁夜が一瞬言いよんだ遠坂という言葉に、刃夜は雁夜に気付かれ

ないようにしながら、雁夜の様子を見つめてそう判断した。

実際何かあるどころではないのだが……それをどうにかするのは今後の話だった。

「じじいの話だと、アーチャーを召喚したのが遠坂時臣で、その時臣の実の娘に当たる」

「ほう」

「御三家の一角で……遠坂、アインツベルンそして俺の家間桐が聖杯戦争を始めたらしい」

「ほうほう」

「そして、当然アインツベルンも今回の聖杯戦争には参加している。じじいの話ではセイバーがサーヴァントらしい」

「ほうほう、フオーウ」

聖杯戦争に参加するにあたり、雁夜が間桐臓硯より聞かされていた話を更に刃夜へと説明する。

それについて説明を受けていた刃夜だったが……ふと何かに気付いたように、顔を明後日の方向へと向けた。

「どうした?」

「いや、精神分身体でぶらついてたら……どーも桜ちゃんにだいぶ似た気配を新都で見つけたんだが……。サイズから言っただけ間違いない子供だな」

「桜ちゃんに似た? もしかして凜ちゃんが!」

「いや、精神分身体は前にも説明したが眼で見る訳じゃないし、仮に見てたとしても俺、凜ちゃんとやらの容姿を知らんから何ともいえん」

「凜ちゃんに何かあったら葵さんが悲しむ! 急ごう!」

葵さんって誰だ? まあ声の感じからいって何かあるようだが

感情の機微を口調と声から明確に読み取りながら、刃夜は溜め息を吐いていた。

だがその刃夜の溜め息にすら、雁夜は気付いていないようだった。

それだけでどれだけ「葵」と言った人物に対して執着しているのが非常によくわかる状況だった。

やれやれ、こいつは身体だけじゃなく内面もどうかしないといけないのはわかっていたのだが……ここまでとは

「手伝ってくれるか、刃夜？ 凜ちゃんを助けるのを？」

「マスターの実の姉で同盟者のお前の頼みだ。断るわけなからう」

布団で寝ていた桜を優しく寝袋へと移しながら、刃夜は自らも得物を虚空から取り出していた。

先ほどギルガメッシュに渡した刀よりも遙かに力強さを感じさせる打刀を。

その刀を先ほどの竹刀袋に入れて紐で肩に提げ、寝袋の桜を抱きかかえた。

準備完了したことを察して、雁夜はフードを被り二人と桜は夜の町へと練り出した。

そして戦意十分に新都へと来た……主に雁夜が……のだが

おやまあ。ずいぶんと勇敢なお嬢さんだな

新都に着く頃にはなんと驚くべき事に決着がついてしまっていた。

子供を誘拐しようとしていたキャスターのマスター、雨生龍之介が凜を子供と侮っており、また名家の魔術師の一子相伝の後継者とはいえ、幼子一人で雨生龍之介を撃退し、誘拐されていた幼子を助けている様子を、遠巻きに二人は見つめていた。

「何で今すぐ助けないんだ？」

「安心しろ。俺がいる限りあの程度の人間だったら刹那の時間に抑えられる。これは子供ながらに人を助けようとしている凜ちゃんやらに敬意を表して見守ろう」

刃夜に露骨に怒りの目線をぶつける雁夜だが、それを何も感じていないように、刃夜は雁夜を抑えていた。

そして無事に誘拐されていた幼子達を助けて、凜が自らの帰路につきこうとした時に、路地裏のビルの壁から一匹の海魔に襲われそうになった。

危ない！

すぐに自らの黒紫の戦士に指示を出そうとしたそのままに刹那の時間には……

「見事だ、お嬢ちゃん」

「え？」

直線上で見える距離にいたとはいえ、数百メートルは離れていた距離をその一瞬で縮めて……ちなみに桜は抱きかかえたままである……凜のそばにやってきて、その左腕が紅の炎に包まれた。

「失せる怪物。紅炎解放」

一言そう呟くと、その瞬間には紅蓮の炎が瞬いたと思えば、そこには何もいなかった。

先ほどまでいた怪物が幻だったのではないかと、凜がきよとんとする程だった。

そして刃夜へと目を向けると……そこには穏やかに笑う刃夜がいた。

先ほど同じような成人男性に恐怖を覚えた凜だったが……しかしその笑みにはどこか安心させる何かがあった。

その刃夜が目線をあわせるようにしやがみ込んで……凜の頭を優しく撫でた。

「よく頑張ったな」

「あ、あなたは？」

「うーん。化物かな？ 友達を助けたことには敬意を表するが……ちよつと冒険しすぎたのは良くないな」

「え？」

そう聞こえた瞬間には、凜の意識はとぎれていた。撫でていた頭に直接気を流し込み、刃夜が凜の意識を刈り取ったのだ。

倒れそうになる凜を、桜を抱いている腕とは別の腕で抱きかかえて、先ほどと同じようにその次の瞬間には雁夜の元へと戻っていた。

凜のそばにより海魔を消滅させ、凜との会話をし、そして雁夜のところに戻るまで、30秒と経っていないだろう。

「なっ!？」

そのあまりの速さに雁夜は驚くが、刃夜が腕に抱えた血の繋がった姉妹の安らかな寝顔を見て……心の底から愛おしそうに安堵の笑みを浮かべていた。

「凜ちゃん。良かった。待っててね。必ず元の姉妹に戻してみせるから」

間違いなく悪い奴じゃないんだがなあ……。というか姉妹に戻つたらまずいことになるのわかってないな、こりや

「さてこのお嬢ちゃんどうすればいい？ 親父は遠坂時臣でアーチャーのマスターだろう？ 渡しにいったら戦闘になりそうで面倒なんだが？」

「母親の葵さんは魔術師じゃない一般人だ。きっと彼女が探しに来るから葵さんを探そう」

「はいはい」

精神分身体で、桜と凜に似た気配を持つ女性を捜し始める刃夜は、すぐに高速で移動する精神を見つけて、雁夜と共にその気配の近くにある公園へと向かっていった。

だが、当然凜を探しに来た葵が、公園に偶然やってくる訳もない。ので……刃夜は凜を雁夜へと預けて、高速で移動する葵の元へと向かった。

車で移動している葵が信号で止まったその瞬間を狙って……運転席のそばへと近寄った。

「!？」

突如として運転席の外側にやってきた青年に、最初こそ気付いていなかった葵だったが、すぐに気付いてびくつと驚いていた。

しかし周りの他の車の運転手は誰一人として刃夜の存在に気付いていないようだった。

その刃夜は葵に近くの公園を指さして、すぐに姿を消した。

今のは？

この街、冬木で聖杯戦争が行われていることは時臣の妻である葵は当然知っていた。

そして聖杯戦争が非常に危険なために、葵と凜は時臣の指示で街の

外に避難していた。

故に今自らのそばに現れた存在が普通ではないとわかっていたが……どうもこの存在が無関係に思えず、葵は適当な場所に車を停めて指さされた公園へと足を踏み入れて、探している自らの娘である凜が、公園のベンチで寝ていることに気付いた。

「凜！」

寝ている凜に駆け寄り葵は、すぐに凜の状態を確かめようとしたがその前に声がかげられた。

「凜ちゃんは無事だよ。ただ眠っているだけ」

「!? 誰?！」

後ろからかけられた声に振り向けば、そこにいたのはフードを目深に被った男と思しき人物。

警戒しない方が無理があるだろうが……フードを被った男、雁夜がすぐにフードを取っ払い顔を見せたことで、純粋な驚愕へと変わった。

「か……雁夜君?！」

「ああ、久しぶりだね、葵さん」

「その顔は……どうしたの?！」

「これが間桐の魔術だ」

「へ?！」

「術者の肉を喰らって魔術を行う。これが間桐の魔術なんだ。でも大丈夫。桜ちゃんはこうなる前に、俺が必ず救ってみせる!！」

「……へ?！」

「ここでまさか桜の名前が出てくると思っていなかったのだろう。」

葵が驚愕したように口を開けている。

「臓硯が欲しいのは聖杯だ。だから聖杯さえ手に入れば桜ちゃんはあいつにとつて必要なくなる。聖杯を俺があいつに渡せば桜ちゃんを解放すると、あいつは約束した」

そんなタマじゃないとおもうがね

雁夜のすぐ後ろで、二人を見守る刃夜は雁夜のその言葉に首を傾げていた。

だがその雁夜を見る目は少しの変化も見逃さないとしても言うように、鋭く細められていた。

しかもその刃夜の姿はどうやら葵には映っていないのか、雁夜にか葵は目線を向けてなかった。

「それに桜ちゃんには驚くべき事にサーヴァントだっている。あいつと俺がいれば、絶対に桜ちゃんを救ってみせる！」

「桜に……サーヴァント？　ど、どういうこと？　それに聖杯を手に入れるって……」

「待つてくれ、葵さん。またこの公園で、桜ちゃん、凜ちゃん、葵さんで仲良く遊べる日が来るから。だから祈っていてくれ。俺の勝利を」

そう言い残して、雁夜は刃夜に帰ろうと一言呟いて、先に歩き出した。

その雁夜に続こうとしたが……その前に刃夜は葵へと声をかけた。「安心しろ。あいつと同じ事をいうが、必ず桜ちゃんは救って見せよう。無論、雁夜も……まあお前の夫もな」

「!?」

その声でようやく刃夜が見えたのか、突如として出現した刃夜に驚く葵だったが……刃夜が安心させるように笑みを浮かべて、大げさに肩をすくめていた。

その仕草がちよっと芝居じみていたために、葵は今の衝撃的な状況を忘れて、きよとんとしてしまうほどだった。

だが、こいつにもやっておいてもらわないといけないことがあるからな

「まあともかく早く帰ったほうがいい。この街は少々危険だ。それと自らの夫に聞いた方がいい。桜の状況についてな」

「!?　そう言えば桜がマスターって。もしかして……あなたが？」

察しが良いな

その問いに対して、刃夜は頷くことも否定することもせず、背を向けて雁夜の後を追っていった。

その背中に何かを感じたが、それでも疑問を口を開こうとしたのだ

が……

「う……ううん」

自らが腕に抱いている娘の凜が身じろぎすることで、意識を凜へと向けざるを得なくなった。

「凜！」

「……お母様？」

「もうあなたって子は……」

凜の無事に安堵し、すぐに視線を戻すが……そのときには雁夜の姿も刃夜の姿もなくなっていた。

今の話……まさか本当に、桜が？

にわかには信じられない、受け入れられない事実だった。

夫に尽くすと誓い、同盟者である間桐に桜を養子に出すと言った時臣の判断に対して、葵は何も言わなかった。

魔術の事は葵には何もわからないのだから。

だから夫が正しいと信じて桜を断腸の思いで養子に出した。

だが先ほどの間桐雁夜の姿。

雁夜が話した真実。

そして刃夜の存在。

といっても、葵は刃夜の名前を知らないわけだが。

それがもしも本当だとしたら……桜は一体どのような状況になっているのか？

調べてもらうしかないわね

自らの夫である時臣に調べてもらいたいと、葵はそう決めた。

こうしてまた一人。

運命を狂わされた存在が、自らの願いのために……

行動を開始した。

動き出す運命を狂わす化物

「どうした、葵。聖杯戦争中はよほどのことがない限り、連絡しないようにと伝えておいたはずだが、何かあったのか？」

自宅に備え付けられた電話が鳴り、手に取った電話口の相手は自らの妻である葵だったことに少々驚きながら、時臣は話を促した。

聖杯戦争が開始されるに伴い、争いごとに巻き込まれないように自らの肉親を冬木より遠ざけた時臣。

遠ざけた理由は当然それだけではなく、聖杯戦争は遠坂における大事な儀式であるため、戦いに集中するためでもあった。

故によほどのことがない限り連絡をしないように言いくるめていた。

その葵から連絡があり、若干の苛立ちとそしてそれ以上に何かがあったのかと、不安になる時臣だったが……

「聞かせてあなた。間桐に養子に行った桜は……今どうなっているの？」

!? その話か……

妻からの言葉は、時臣をいらだたせるのに十分な攻撃力を含めていた。

遠坂桜改め、間桐桜。

聖杯戦争の始まりの御三家であり、遠坂と同盟している間桐からの願い。

それが姉妹である桜を魔術的な意味で養子に取りたいという願いだった。

これに対して、姉妹の魔術の才能を感じ取った時臣は快く承諾した。

魔術師の家系は一子相伝が当たり前だからだ。

故に、今は衰退したとはいえ名家である間桐の養子に出すことは、桜が魔術を学ぶことが出来ると言うことだった。

だが……その喜びもつかの間だった。

何せ聖杯戦争が始まってすぐに、イレギュラーなサーヴァントとと

もに桜が聖杯戦争に参加したという……通常では考えられない状況に陥ったのだから。

目下弟子である綺礼のサーヴァントのアサシンに調査を行わせているのだが、一向に調査が進んでいなかった。

だと言うのに、キャスター討伐の説明に桜同伴で訪れた謎のサーヴァントは、驚くべきことにクラス名のみならず、真名さえも明かして来たのだ。

それが聖杯戦争においてどれだけ型破りな行動なのか考えるまでもないことだった。

しかもどれだけ調べても「鉄刃夜」という英霊の情報が一向に見つからないのだ。

当然だが……見つかるわけもないのだが。

様々な要因が重なって、時臣は刃夜に対してよい感情を抱けるわけもなかった。

「間桐の修行を受けているはずだ」

「なら何で、この前凜が冬木に行ったときに、雁夜くんと普通じゃない存在の男の子が凜を助けてくれたの？ 間桐の魔術ってどういうものなの？ 雁夜くんが言っていることが真実なら……桜はどんな目に遭っているの？」

雁夜に八騎目のサーヴァントにあつたというのか!?

意味不明な存在に遭遇したが故に、今まで何も言ってこなかった葵が、聖杯戦争……さらに言えば魔術について言及してきたということだと時臣はすぐに気が付いた。

「魔術の修行は厳しく、辛い物だ。だがそれでも桜の才能を考えれば間桐も愛情を持って育てるはずだ。何せ血縁者にまともな魔術回路を宿した存在がないのだから。だから桜を厳しくも愛情を持って後継者と育てないはずがない」

「でも、雁夜くんの姿はとて普通とは言えなかった。もし……桜が同じ目に遭っていたら」

「……」

それに対しては時臣は何も言わなかった。

なぜなら魔術とは崇高なものであり、魔術師の家系に生まれた上に才能がある者が魔術を習得できないのは不幸でしかないと考えているからだ。

葵は魔術師ではなくただの一般人なため、それが理解できないと思う気持ちはあった。

魔導と血の責任から逃げ出した男と認識している間桐雁夜という存在。

時臣は当初、雁夜を歯牙にも掛けないただの羽虫程度としか捉えていなかった。

だがそれも刃夜と雁夜が行動を共に……同盟を組んでいると思われる行動を取っていることで疑問を覚えたのだ。

何故魔術師の道を捨てた雁夜が聖杯戦争に参加したのか？

最初こそ万能の願望機を望んだのかと思った時臣だったが、しかしそれでは刃夜と行動を共に……それも桜とともに行動をしている理由が説明できないからだ。

始まりの御三家は、その全てが聖杯を欲している。

聖杯が欲しいからこそ三家で同盟を組んで聖杯戦争を始めたのだから。

だが聖杯を手に入れるのはただ一組のマスターとサーヴァントのみ。

故に八騎目のサーヴァントと行動をともにするメリットがあまりないのだ。

確かに最後は戦わなければいけないが、しかしマスターは桜なのだ。

どちらも間桐の存在であれば、聖杯を手掛けた場合どちらかが手に入れればいいだけの話だ。

だがもつとも不思議に思ったのは、桜と雁夜が中古の家を購入してその場所を拠点としていることだった。

何故、百年以上の歴史ある己の工房のある間桐家を拠点としないのか？

同盟者である間桐臓硯とも連絡を取ることが出来ないのも、時臣の

疑問に拍車を掛けていた。

そして時臣がどう言葉を返すべきか悩んでいると、冬木教会と遠坂をつないでいる魔術の通信装置が教会から通信が来たことを知らせた。

「葵、すまないが切るぞ。桜については調べておく」

「!? まって、あな——」

そう一方的に言って時臣は電話を切り、地下の工房へ向かい通信を始めた。

すると、とんでもない通信が綺礼よりもたらされた。

「主。八番目のサーヴァント、アインツベルンの城へと向かった模様です」

「アインツベルンの城に？ 何故？」

「わかりかねますが……しかしご息女を連れておられる様子です」

「!? アサシンを向かわせてもらえるか、綺礼？」

「すでに向かわせております」

「ありがとうございます」

そう答えて時臣はいつでもでれるように準備を始めた。

使い魔ごしに見た刃夜の印象としては、とても強そうに見えなかった。

尊大な王であるギルガメッシュがアインツベルンの森に行くとは思えない。

故にサーヴァントのアサシンですら補足するのが難しい刃夜の動きがわかつている今の状況で、動かないわけにはいかなかった。

さて……さらってきたであろう子供を大量に連れて行くから付いてきたんだが。このうっそうとした森って敵陣だよなあ？

冬木から少し離れたうっそうとした森に入る前で、刃夜は寝袋で寝ている桜を宙に浮かせながら、森の中に入るのを躊躇っていた。

結果入らしきものは張ってあるが、まあ問題ないが……うーん

さすがに敵陣に桜を入れて入るのは躊躇われるのか、真冬の寒空の中刃夜は一人悩んでいたりする。

ちなみに装備品は相も変わらず打刀一振り。

雁夜は体の治療のために薬で軽く運動させてから、強制的に就寝させていた。

刃夜のリフォームの家と、護符があるために早々やばい事態には陥らない。

さらに黒紫の戦士が護衛についている。

まあいいかあ。無駄に友好的になる理由もないしな

一度領くと、途端に刃夜の姿が消えた。

無論宙に浮いている桜も一緒だった。

先ほどまでいたはずの存在が忽然と姿を消したが、周りに人もいなかったためただ静かな夜が、再び訪れただけだった。

「さあ、さあ坊や達。鬼ごっここの時間ですよ。ルールは簡単。私から逃げ切れればよいのです。さもなければ……」

アインツベルンの結界の中、大人数の子供達を引き連れてきたキャスター。

セイバーを自らが敬愛したジャンヌ・ダルクと信じてやまない……実際セイバーの真名はアルトリア・ペンドラゴンであるため、全くの人違い……彼は、昨夜セイバーに顔を見せに行つた際に、一方的に近々セイバーに会いに行くと言つていた。

そうして会いに来たのだ。

自らが敬愛するジャンヌに。

アインベルン……の結界越しに主であるアイリに本来のセイバーのマスターである切嗣達が見ている中で、手近な子供に手を掛けようとしたその時……

スカッ

キャスターが掴もうとした子供が唐突に姿を消した。

余裕に充ち満ちていたキャスターから驚きの気配がにじみ出てきて……周囲を見渡すとさらに驚愕した。

「な……子供が」

先ほどまでいたはずの子供達が全て姿を消したのだ。

何の気配も感じさせずに。

そして子供達が消えたことは、森の主であるアインツベルンのホムンクルスであるアイリスフィールすらも気づけないほどだった。

「一体……なぜ？」

キャスターがまさに途方に暮れたように、辺りを見渡した。

そしてそれは結界の主であるアインツベルンも同じ事だった。

「子供達は……一体どこに？」

思わずといったように、アイリがそう口にした。

誰もが驚く中、さらに驚くべきことが起こった。

コンコン

森から城……アインツベルンの拠点である城の正門。

城の広間に通ずる大門が、ノックされたのだ。

そしてそちらにアイリスフィールが監視の魔術を向けるとそこには、何の気配も感じさせない……それこそ目を離れた途端に消えてしまいそうなほどに……新たな侵入者、刃夜の姿がそこにあっただのだ。

「「「なっ!?!」」」

それにはセイバーの陣営全員が驚いたが、切嗣と舞夜、セイバーの動きは迅速だった。

すぐに戦闘態勢に移行し、それぞれがそれぞれの行動を起こした。

正しくは行動しようとしたのだが……

「争う気はない。とりあえず救出した子供の面倒を見て欲しい。子供を保護しておくために一室借りたい。その見返りに、キャスターを追い払うようにする。事が終われば俺が責任を持って、子供達は街まで送り返そう」

と、とんでもないことを発言してきた。

そしてこの行動は……刃夜の狙い通りでもあった。

さて、この城には現時点で四つの気配があるわけで。んで精神分身体で全員見ているが、どいつがでてくるかな

敵陣のまっただ中で、刃夜は鼻歌混じりに城の門が開かれるのを

待っていた。

そばには宙に浮く蓑虫の桜がいるだけで、先ほど刃夜自身が言っていた子供達の姿は、刃夜の周囲にはいない。

では両手の指の数ほどもいた子供達は一体どこに消えたのか？

そうしてしばし待っていると、カチャリと……刃夜の目の前の正門が開かれる音が刃夜の耳に届いた。

お、開いてくれたか。子供がいないからあけてくれるか少々不安だったが

全く警戒することもなく、刃夜は門の中へと足を踏み入れて……その豪華絢爛な城の内装に驚いた。

開かれた広間の先に二階へと上がるための階段の先に……まるで絵画から出てきたかのような絶世の美女と、美少年と見まがうほどの清廉潔白を絵に書いたような騎士がいた。

それを見て、刃夜はきよとんと……少々驚いたような表情を浮かべた。

魔力のパスがないな。となると後ろの美人外国人はマスターじゃないな。というか……人形つかホムンクルスみたいな感じだな？

騎士の後ろにいる……輝くような白い髪的女性を見て、すぐにその見る対象を、女性を守るように前に出ている金紗の髪を持つ騎士へと目を向ける。

そして……ぽかんとしたかのように、小さく口を開けた。

うわあ……精神分身体で見ていた時も思ったけど、こいつの中にあるものがすげえな。ほとんど竜だな。でもなんか左腕に呪いっぽいのがあるな？

青い衣服に身を包み、そして銀の甲冑を身に着けている騎士。

そして目に見えない右手に持った何かを刃夜へと向けていた。

その向けられた物にちらりと目を向けて、刃夜は思わずといったように鼻で笑った。

「？ 何が可笑しい」

「失礼した。ちよつとおもしろい物を見たと思ってな。さて、まずは突然の来訪にもかかわらずこうして門を開けてくださり、恐悦至極」

言葉こそ軽い感じではあったが、きちんと正しい作法で刃夜は頭を下げる。

「前置きはいいい。イレギュラーなサーヴァント。何の用だ？」

「先に言ったとおりだ。キャスター迎撃に向かうに辺り、先ほど保護した子供達の面倒を見て欲しい。といつても護衛も俺の能力でどうにかするから問題ない。部屋に入れて子供がどこかに行かないようにしたいんだ」

きよろきよろと、周囲を見渡しながら先ほどと同じような事を刃夜はセイバーに伝える。

周りの調度品を見るために周囲を見渡しているのかと思われたが……実は真の狙いは他にあった。

「……実は真の狙いは他にあった。……いたいた。この二人はこんな感じなのか？　んで、セイバーとパスが繋がってるっぽいこの男が、セイバーのマスターの切嗣とやらか」「……その子供達はどこに行った？」

まあそら警戒もするか

先ほどキャスターが連れてきた子供達は、キャスターの幻術でも魔術でもなく、本物の子供だった。

その子供達があわや殺される一歩手前で忽然と姿を消した。

そしてその次の瞬間にはアインツベルンの城の正門を叩いていたのだから、刃夜が言っていることが完全に嘘だとは思ってないのだから。

だが肝心の子供の姿が見えないようでは無理もなかった。

「今俺の能力の一つの結界内に避難させている。この場で姿を見せても良いが……下手すつとパニックになった子供がそれぞれ別々に走り出すぞ？　結界内の様子は……子供達はきよとんとしていたんだな。だが、状況を把握したらどうなるかわからん。出来れば部屋なんかに入ってから子供達を解放したい」

こめかみに手を当てて少々考えるような仕草で刃夜がそう言葉を返した。

もしかしたら結界内部の様子を見ているのかも知れない。

「結界って……まさか固有結界!？」

「この世界における固有結界つてのがどんな物かは知らんが、別次元の異相空間に避難させていると思ってくればそれでいい。魔力喰うから余り使いたくないんだ。それで申し訳ないが一室借りることは出来ないか？」

大げさに肩をすくめながら、刃夜はそう二人に問いかける。

その問いかけにセイバーは後ろのアイリへと視線で問いかけて……アイリは少々迷いながらもはつきりと頷いた。

その返答に対して、刃夜は深々と頭を下げる。

「本来であれば敵でしかない俺の申し出を受けてもらって、感謝します」

「構わないわ。確かにあなたは敵だけど、子供の命には替えられないもの」

アイリはそう返して、案内を買って出て部屋へと刃夜を案内した。

その後ろを付いていきながら、刃夜は少し前でアイリを守るように警戒しているセイバーへと声をかける。

「最後には戦うかも知れないが、それでもこの状況下で襲うようなクズではないから安心して欲しいが……まあ初対面では無理だわな」

「子供を助けたからといって、あなたが完全に問題のない英霊かはわかりませんから」

「英霊なんて大層なもんじゃない。俺はただの化物だ」モンスター

「化物だと？」

「この部屋よ」

刃夜とセイバーが話をしていると、アイリがとある一室の前で立ち止まり、扉を開けて道を譲った。

どうやら閉鎖空間に入るのを嫌ったようだった。

切嗣に舞夜がバックアップするためには銃による射線を確認しなければならぬ。

そして暗殺を主に考えている切嗣も、さすがに壁すらもぶち抜くアンチマテリアルライフルは用意していなかった。

そこらの事情がわかっているのか、刃夜は臆することなく真っ先に部屋へと入った。

その部屋はただ長いテーブルと椅子が置かれただけの、実に簡素な部屋だった。

「おお。さすが城を持つだけはあるな。これなら申し分ない」

「それは……ありがとう」

「では、お借りいたします」

そう言つて刃夜は左腕を前にかざした。

すると紅の炎が刃夜の左腕に灯った。

そして、すぐに刃夜の周りに先ほどキャスターに連れてこられた子供達が、次々と姿を現した。

セイバーやアイリがその刃夜の所業に驚く。

本当に……子供達を助けたのか？

後一步遅ければキャスターに殺されていたであろう何の罪もない子供達。

その無事な様子にほっとした。

そして同時に不思議に思う。

この八騎目のサーヴァントという……異様な存在のことを。

一体……この男は何者なんだ？

そんな品定めをされていると気付いているのかいないのかは謎だが、刃夜は特に反応をすることなく……かざしていた左腕を真上へと伸ばした。

その行動に何の意味があるのかわからないセイバーとアイリは、ただ見ることにしかなかった。

すると、その真上にかざした左腕から……突然淡い紫の炎が湧き上がり、暗い室内を照らした。

「うわぁ……」

「え……何あれ？」

最初こそきよとんと周囲を見渡していた子供達だったが、突然に出来た新たな光源の紫色の炎という……子供でもわかる普通ではあり得ない炎に注目が集まった。

子供達はただ不思議な炎としてその紫の炎を見ていたが……セイバーとアイリは驚愕に目を剥いていた。

何だ？ あの炎から感じる爆発的なまでの魔力と力は!?

子供達は物珍しきで見えていたが、少しでも魔力を感じる物がいれば、その異様な力に驚愕するほどの強大な力だった。

しかもそれだけにとどまらず……刃夜の左腕に今度は別に紅の炎が灯り、その紅の炎が徐々に二の腕から手のひらへ。

そして最後に手のひらから抜け出して空中に漂い……部屋一帯を明るくし、更に暖かい温もりを、部屋へともたらした。

暖かさに、子供達はほつと安らぐような表情をするが、セイバーとアイリはそれどころではなかった。

刃夜の左腕より現れた紅の光球。

その紅の球は、先ほど紫の炎より感じた魔力とは比べものにならないほどの魔力と……それ以上の圧倒的な「力」を感じ取ったのだから。

何だ!?! あの球は!?!

周囲の人間が呆気にとられる中、刃夜は手を叩いて注目を集める。

そして、子供達全員から注目を集めたことを確認して……その手にいくつもの小さな袋に包まれたお菓子を出現させた。

「こんな夜更けに起きてる悪い子達よ。だがお前達はこの状況下に置いても泣かなかった。そのご褒美として、お父さんやお母さんには内緒で夜のお菓子を食べよう。甘いパウンドケーキだ。欲しい人は手を挙げて!」

優しいな笑みを浮かべながら、刃夜はそんなことを宣っていた。

その刃夜に対して一瞬きよとんと驚く子供達だったが、すぐにお菓子という単語に興奮し、我先にと手を挙げ始めた。

そんな子供達に、刃夜は満面の笑顔を振りまきながら、一人一人に丁寧にお菓子を手渡していった。

子供の手と同じ大きさのお菓子だ。

すぐに子供達は食べ終わり、まだお菓子がないのかと刃夜にそんな物欲しそうな目線を向けた。

その視線を一心に受けながら、刃夜は再び左手を翻して……その手から甘い香りのする穏やかな風を、子供達へと吹かせた。

「よい子はもう寝る時間だ。夢の中で……眠るがいい」

そんな事を実にゆっくり丁寧に……且つ優しげな声でそう言い放った。

すると、その暖かな風とお菓子で安心したのか、子供達は次々と眠そうに目をこすって……すぐに眠りについた。

その様子を満足そうに頷きながら見届けて……刃夜は振り返って、セイバーとアイリへと向き直った。

「ご助力感謝する。この子達はよほどのことがない限り問題ないのでこのまま放置してくれば問題ない。風邪なんぞ引かないように護衛兼気温調整の力をこの場においていおく」

「……え、ええ」

今日にした刃夜の異常な所業に、若干頬を引きつらせながら、アイリはそう返していた。

返事ももらったことで満足して……刃夜はすぐに意識を切り替えて、正門へと向かって歩き出した。

「では先に言ったとおり……キチガイのキャスターを追い払ってごらんに入れましょう」

正門を静かに開けて、刃夜はそのまま目にもとまらぬ速さで森を疾駆していった。

そのあまりの速さにさしものセイバーも驚いたが……驚いてばかりもいられなかった。

「アイリスフィール。私もキャスターの討伐に向かいます」

「ええ。お願いセイバー」

アイリにそう告げて、セイバーはその総身に凄まじいほどの戦意をみなぎらせて、刃夜と同じように森の中を疾駆した。

素行調査

森を疾駆して、そう時間をおかずに刃夜は目的の人物……キヤスターの眼前へと躍り出た。

距離にしておよそ十数歩。

刃夜であれば一足にて詰め寄れる距離だろう。

何故わざわざ刃夜はキヤスターに奇襲することなく、足を止めたのだろうか？

「何だ貴様は!? 私に何の用だ？」

「いや、子供を攫った外道が誰か見に来ただけだ」

その刃夜の言葉は劇的だった。

子供がいなくなつたことで怒りを覚えていたのだろう。

だがいなくなつた理由をキヤスターがわからなかったのだ。

腐つても魔術師の英霊であるキヤスター……ジル・ド・レエが。

怒らせた原因が無謀にも目の前に現れて……キヤスターは激昂した。

「貴様……何者だあ!? 誰の許しを得て私の邪魔を……私が連れてきた子供達をどこにやった!？」

「安全な場所に避難させた。貴様のような外道に子供の未来を奪わせるわけにはいかないからな」

左手を掴むように握り込むと、その手に瞬時に簡素な拵えの打刀が握られる。

そして鞘から抜き放つと同時に鞘が消える。

その刀を宙へと投げている間に、持ってきていた打刀を同じように鞘から抜いて、鞘が消失した。

二刀流の構えである。

さらに刃夜は宙に浮いている桜をかなり高い位置へと浮かせた。しかしその桜にキヤスターは気付いていないようだった。

さて、風翔に霞皮、更に紅炎の力が使えないつてのは少々きつそうだなあ。紫炎は……まあ本当にまずそうだったら使うとして

首を軽く動かしながら、刃夜は静かにキヤスターを観察しだした。

こいつ……魔術師キヤスターってんだったか？ あの胸に抱えた書物が、なんか嫌な予感するんだよなあ……

二刀を油断なく構えながら、刃夜は冷静にキヤスターを分析していた。

そして刃夜のその嫌な予感は……見事に的中した。

「ジャンヌを我が元へと招くために来た私を邪魔するのであれば、その肉体をくらって消し去ってくれる！」

キヤスターのヒステリックな叫びとその狂気じみた表情を見て……刃夜は辟易するように溜め息を吐いた。

あくやっぱりこの類の変人かあ……。言葉が通じてるっちゃ通じてるのが救いだが……

と余裕ぶっていた刃夜だったが、次の瞬間キヤスターの書物が光り……。周囲に凄まじい数の怪物が出てきたことで顔を歪ませた。

おぞましい体色をしたタコのような海魔だ。

大きさは成人男性とほぼ大差ない高さで、いくつもある足には鋭い棘がいくつも生えている。

あのとときの凜ちゃんを襲おうとしたのはやっぱりこいつか！
しかしこの数は!?

優に三桁に届こうという数の海魔が一瞬にして現界したのだ。

そしてその数が一斉にして……刃夜へとその触手を伸ばして襲いかかってきた。

それに対して刃夜は嫌そうに顔を歪めながらも冷静に対処する。

迫り来る触手全てを悉く斬り捨てるが、切っても切っても、切った先から再生し、無限に湧いて出てくる海魔達。

さしもの刃夜も囲まれたくないのか、動き回りながら必死になって触手から逃げていた。

げえ!?! マジでめんどくさい！ 紅炎が欲しい！

両の手が見えなくなるくらいのもので振るわれる刀だったが、純粹に敵の数が圧倒的に多すぎるようだった。

それでも全てを数えれば間違いなく三桁に届く触手の攻撃を全て防いでいるのだから、その実力は相当の物だろう。

だが逃げていては当然だが、キャスターを倒すことは叶わない。

「おやおやどうしたのですかあ？ 私とジャンヌの再会を邪魔した割にはずいぶんと逃げ腰ですねえ？」

「やかましいわー！」

しかし刃夜としても実は結構焦っていたりした。

強大な魔法攻撃などが来ると想定していたのに、よもや純粋な数による攻撃に出るとは思っていなかったのだ。

魔力砲とかなら強引に突破できたが……これでは一度絡め取られたら面倒なことになるな！

そう思いながら、何度か隙を見ては懐に忍ばせたナイフを投擲していたりするのだが……さすがにどれほど高速でもこれだけの触手があれば、その前に防がれるないしはたき落とされるのは当然といえた。

だがそんな時……

「はあっ！」

はき出された鋭い呼気と共に振り下ろされた見えない何かが、刃夜へと迫っていた触手を文字通り吹き飛ばした。

後方より目の前に現れた存在……セイバーの背を見つめて、刃夜はニヤリと笑った。

「おお、ジャンヌよ。よくぞ来てくださいました。このジル・ド・レエ。歓喜の極みです。その気高さ、雄々しさ……。生前と変わらぬその美しさ。聖処女であるあなたの前では神すらも霞むでしょう」

「黙れ、外道」

「いやはや熱烈……いや粘着質？ な好意を受けてるみたいでご愁傷様。時に……知り合いか？」

「そんなわけがない。キャスターが勝手に私を別の誰かと勘違いしているだけだ」

勘違い……ねえ。まああれだけ狂人ならそれもやむなしか

前へと躍り出たセイバーと肩を並べるように前に出て、刃夜は二人

を交互に見てその関係性を推し量ろうとしたのだが……その露骨にいやがるセイバーの表情を見て、すぐに納得したように小さく頷いていた。

「助かったが……遅いな、セイバー。最優のサーヴァントってのは鈍足だったのか？」

「だまれイレギュラーなサーヴァント。軽口を叩いている場合ではないだろう」

「そらごもつともで。っーかその呼び名、長いだろ？ 刃夜ないし化物モンスターでも呼んでくれ」

「ならば……ジンヤと呼ばせてもらおう」

「OKだ。セイバー。さて……さっさと片付けよう」

肩を並べて、刃夜とセイバーはまるで競い合うようにして、キャスターへと向かって突進した。

純粋に手数が増えたことにより、先ほどの刃夜のように動き回る必要性はなくなったが……しかしそれでも数が圧倒的に多く、なかなか前へと進むことが叶わなかった。

「無駄ですよジャンヌ。盟友プレラーティの残した魔書により、私は悪魔の軍勢を従える術を身に着けている！ その程度では私を止めることは出来ない！」

実際キャスターの言うとおりであり、先ほどよりも防戦一方にはならないが、それでも二人がかりでなおキャスターへと届かない状況だった。

どちらも卓越した剣技で海魔を斬り捨てるが、斬り捨てた端から再度復活して襲いかかってくるのだ。

これでは埒が明かない状況だった。

そんな中で、キャスターの演劇じみた狂演は、なお続いている。

「その気高き闘志に尊き魂。それはまさしくあなたがジャンヌ・ダルクであるという証だ！」

ジャンヌ・ダルク？ って確か聖処女のだっけか？ 俺日本史専攻

なんだよなあ……

斬り捨てながらそれでもキャスターへと視線を投じ、少し考え込む

ように刃夜は眉をひそめていた。

だがその剣戟に衰えはない。

しかし……状況が好転しないことに変わりはない。

「なのに何故目覚めない！　まだ神を信じるのですか!?　コンピエーニユの闘いをお忘れなのですか!?　辱めを受けたにも関わらず、あなたはそれでも神の操り人形に甘んじるのか!?!」

「そんなものに覚えはない!」

キャスターのその言葉に嫌悪感をあらわにしながら、セイバーは海魔を斬り捨てる。

しかし斬る度に再生されては埒が明かないのは当然だった。

いったん刃夜とセイバーは後方へと下がり……キャスターを油断なく見据えながら小声で相談をする。

「どうするか？　なんか広範囲攻撃はあるか、セイバー」

「あるにはあるが……少々使うのは手間だな」

「というか左腕の呪いは何だ?」

「!?　気付いていたのか?」

刃夜に左腕の呪い……ランサーのデイルムツドの宝具によって負傷した呪いの傷……の影響により、今セイバーは十全に左腕を使うことが出来ない状況だった。

それを看破されたことに驚くセイバーだったが……刃夜はその驚きに対して少々芝居がかった仕草で肩をすくめた。

「まあ見た時から気付いてたよ。呪いに関しては一家言あるんでね。まあ使えないならしょうがないが……埒が明かないな」

「ジンヤよ。先ほどの炎は使えないのか?」

紫と紅。

おそらく紅の炎については刃夜の身体の外に出ていつているため、使うことは出来ないのだろう。

だがそうであればまだ体内に紫の炎を宿しているのは間違いない。

であれば、使えると考えるのは当然だった。

「使いたいのは山々なんだが……俺のマスターの防護のために今かなりの魔力を割いていてな。それにさっきの子供達も護衛の紅炎に、か

なり使ってる。ちよつときついな」

まあ本当は使えるが……ちよつと出て来たのだから素行調査はしておきたいしな……

「そうか……確かにあれだけの力であればやむなしか」

炎であれば再生されようと全て灰にすることも不可能ではないと考えたセイバーだったが、しかし子供の護衛に使っているのであればそれを使うのは無理だとすぐに判断した。

そしてそれは同時に……打つ手無しの状況になったことと同義であつた。

この二人だけであるのならだが……

「なんだ。もう始めていたのか、セイバー。しかもイレギュラーなサーヴァント……ジンヤと言ったか？ 二人いながらその外道相手に苦戦とは……情けないぞ。騎士王の剣はもつと魅せる剣だと思つていたのは、私だけか？」

そういいながら背後より悠然と歩み寄ってきたのは、その両手に長短の槍を携えて若き美丈夫が、二人へと歩み寄ってきた。

後方から声をかけた上で悠然と歩み寄ってきたため、刃夜とセイバーに敵対する気は全くない様子だつた。

「ランサー」

「安心しろセイバー。今宵私が主より賜つた使命は、あの外道めの誅伐だ。今そのイレギュラーなサーヴァントとしてしているように、俺もこの槍を存分に振るおう」

「よろしくなランサー。刃夜で構わないぞ」

「ああ、共にあの外道めを討ち果たそう！」

おや、あつさりとなんつーか雰囲気と容姿どおり清々しい男だなあ

初対面の存在である刃夜に対して、すぐにうち解けるように共闘を申し出てきたことに意外そうな表情を刃夜が浮かべたが、刃夜もその申し出に応えるようにして両手の刀をキャスターへと向けた。

新たに現れたランサーを含めて、三対一。

さしものキャスターもこれには少々ひるむかと思われた。

しかし……

「貴様ら……この期におよんでなお私のジャンヌに対する行為を邪魔するか。いいでしょう。そこまで私に刃向かうというのなら……全力で抗ってみせなさい」

この状況下においてなお、不敵に笑いながらそう呟いて……キャスターが胸に抱いた人が苦悶の表情を上げている、不気味な本から不気味な力があふれ出して、海魔がさらに数を増した。

しかも個々の大きさが更に大きくなっている。

成人男性よりも更に大きな大きさとなつて、身体の随所に生える棘もより肥大化していた。

敵の海魔がまさか今まで以上に強力になるとは予想だにできなかったのか、攻め手側が少々驚いていた。

「まだ増えるか。外道め」

「まだ増えるとはな。しかしそれでも我が槍を止められると思うなよ」

「めんどー」

ここそれぞれに感想をぼそりと口に出しているが……戦意にいささかの衰えもなかった。

だがふと、なにかに気付いたように……刃夜が後方へ僅かに顔を向ける。

アインツベルンの城がある、方角へと奇妙な物を見るような視線を向けていた。

あ……色から言つてそう言うタイプとは思っていたが。相性悪い相手に突つかかつて大丈夫かねえ

「来るぞジンヤー」

「おうよー」

僅かにしか向けていないために、他の二人は刃夜がよそ見をしたのに気付いていなかった。

というよりも目の前の気色の悪い存在を前にしてよそ見をする余裕など、普通はないのだが……。

そのまま三人は突貫する。
キャスターに向かって。

そしてそのとき、同時に……

二つの影がアインツベルンの城へと忍び寄っていた。

素行調査2

刃夜達がキャスターと戦っている同時刻。

それは銀の魔術道具を率いてアインツベルンの城へと侵入し……その魔術を大いに振るった。

「どこへ行った！ 魔術を愚弄する侮蔑者め！ その体切り刻んでくれる！」

ランサーのマスターである、ケイネス・エルメロイ・アーチボルト。魔術の名門の嫡男だ。

だが、その名門もあらゆる手段を用いる切嗣に苦戦し、かなりの痛みを負わされたことで荒れ狂っていた。

そのとき……ふと一つの部屋を見つけた。

「この部屋の中か!？」

そう言っ……ケイネスはドアを開こうとドアの前に立った。

そしてその部屋へと自らの魔術礼装ヴォールメン・ハイドラグラム月 霊 髓 液を使用して、そのドアを突き破った。

その瞬間だった。

!!!!

ケイネスは総身が震え上がるほどの威圧を……感じ取ったのだ。

そしてその恐怖がもたらしたのは……自らの魔術礼装ヴォールメン・ハイドラグラム月 霊 髓 液の一部消失だった。

ドアを突き刺したその先の水銀が……跡形もなく消滅したのだ。

まるで、龍に睨み付けられた……

それほどの恐怖だった。

そしてその恐怖を受けた生物として働く本能は……

逃避以外にあり得なかった。

ここは……まずい!?

敵……衛宮切嗣の魔術である可能性も否めなかった。

だがこれほどの恐怖を感じたことは……ケイネスは今までの生涯でなかった。

実戦経験が乏しいと言うこともあっただろう。

本来名家である魔術師であるケイネスは、相手が魔術使いであり、魔術の戦い現代兵器を

使用した衛宮切嗣の罠と判断していれば激昂したことだろう。

だが、それを考えさせないほどの恐怖が……ケイネスを襲ったのだ。

それは生命として実に正しかったと言うべきだろう。

もしも本能に逆らい、さらに部屋を破壊しようとした場合……

全てを消し去る業火が……

ケイネスを一瞬にして灰も残さずに、消滅させていただろう。

「ふん……」

短い呼気と共に難いだ長大な白刃が、刃夜の目の前に存在した海魔を文字通り斬り飛ばした。

いつのまにか刃夜の手には二刀流から刃渡り五尺はあるであろう、野太刀に持ち替えている。

それに対してセイバーもランサーも戸惑いを覚えていたようだが、それ以上に目にも映らぬほどの速さで振るわれる野太刀に戦慄を覚えていた様子だった。

「……しかしあれだな。いい加減めんどくさくなってきたな？」

三人で背中をそれぞれに預けつつ、刃夜が二人に聞こえるようにそう言う。

それに対して、セイバーもランサーも同じ気持ちだったようで、二人とも手を止めることなく返事をする。

「この戦闘方法は、さすがはキャスターと言うべきなのだろうな」

見えない剣を振り回して、セイバーも忌々しそうに刃夜の言葉を肯定した。

ランサーも同じ思いなのだろう。

両手の二槍を振るいながら、セイバーへと顔を向ける。

「セイバー。何か策はないか？」

「なくはないが……少々場が悪いな」

そのとき……セイバーの対魔力が発動した。

ランサーの泣き黒子をみて魅力の呪いが働いたが、それをセイバーが弾いたのだ。

普通であれば気付かない程度の小さな魔力の消失。

だが、刃夜の左腕の巨大な力が……僅かな魔力の力であっても、見逃すはずがなかった。

なんかあるみたいだな？ 俺は感じなかったが……はて？ セイバーに働いたのは異性って点か？

ちなみに、刃夜はセイバーが女であることは一応見抜いていた。

若かりし頃では気付かなかっただろうが、さすがに数百年の修行は伊達ではなかった。

そしてその呪いの発信源がどこにあるのかも。

だが、うっかりぼそりと呟いてしまう。

「その黒子、呪いかなんかか？」

「何?」

ぼそりと呟かれた刃夜の言葉に反応したのは、ランサーだった。五騎ものサーヴアンとが一堂に会したあの夜。

あの場に刃夜はいなかったはずだというのに、自らの呪いを正確に見抜いたことに驚いたのだ。

「ジンヤ……あなた、何故?」

「消してやろうか? 邪魔——」

だが問答をしている暇は、周りの海魔が与えなかった。

周囲の海魔が、動きを止めた三人へと一齐に攻撃を仕掛けてきた。手を止めていた三人は再度動き出すが、口も止めなかった。

「何故お前が知っている!?! ジンヤ——」

「何、その手の負のものは俺の得意分野だ! 正しくは、邪龍のだから!」

「龍?!」

「まあ、それは今度だな——」

触手だけでなく、つつこんできた海魔を蹴飛ばして、刃夜は話を終わりとも言うように、

右手を掴む動作を行って野太刀を消失させると、次に左手に拵えも柄もない、刀身だけの打刀を出現させた。

茎の下の方を握り、まるで投げ飛ばすかのように頭上に振り上げた。

「何をやる気だ? ジンヤよ?」

思わずというべきなのだろう。

ランサーがいぶかしげに刃夜へと視線を投じる。

そのランサーに対して……刃夜はニヤリと、不敵に笑った。

「見ての通り、投げ飛ばすんだよ——」

信じられぬほどの速さで振り投げられた打刀が、キヤスターへと飛んでいく。

しかし刃夜とキヤスターの間には当然のように、海魔が大量に存在する。

故に海魔が自らの主の危機に対して、何もしないわけがなかった。

刃夜とキャスター間に無数の触手が投げられた打刀をはたき落とそうとするのだが……

「!? な、なんと!?」

幾十、幾百の触手が、打刀に斬り捨てられる。

あまりの鋭利さ故か、その勢いはとどまることを知らずキャスターの眼前に迫り……

刃夜がニタア……と、邪悪に笑った。

「爆散!」

その言葉と共に、投げ飛ばした打刀が刃夜の言葉通りに木っ端微塵に爆ぜた。

「なっ!?」

さすがにこれはキャスターも予想だにしていなかったのか、驚きの声を上げるが……しかしすぐに対応し、自らの体を覆うように海魔を展開して打刀の爆発を防いだ。

すぐに体勢を立て直し、海魔の殻から出てきたそのときには……

すでに勝負が付いていた。

「!?」

海魔の殻から出てきたキャスターの目に映ったのは……眼前へと迫っているランサーの朱槍破魔の紅薔薇だった。

「抉れ! 破魔の紅薔薇!!!」

破魔の紅薔薇。

ランサー……デイルムツド・オディナが持つ二槍の内長いほうの紅の槍。

刃であらゆる魔術を打ち消す能力を保持した槍だ。

その槍の刃先が……キャスターが胸に抱く魔書へと伸びて、その本を切り裂いた。

魔術を打ち消されたその瞬間……魔力の供給が断たれたことにより、海魔が一斉に血の霧と化して消失した。

その様子を、刃夜は実に興味深そうに……だが悟られることなく静

かに……観察していた。

封絶と同じ類の武器かあ。まああいつよりは弱そうだし、意志もなさそう——ってそれが普通か

まさに一瞬の攻防だった。

刃夜の打刀の爆散によって出来た一瞬の隙。

キャスターが刃夜達を認識しなくなったその瞬間。

再び手に二刀を持ち、瞬時にセイバーとランサーに迫る海魔達を、刃夜が斬り捨てる。

さらに投げ捨てた刀によって出来た僅かな細い道を……セイバーが風の槌によって強引に道を飛ばし拓く。

そして拓かれたその道を……ランサーが瞬時に駆け寄ったのだ。

それぞれが一定レベルの実力者であり、また目的が一緒だったからこそなせる、瞬時の連携だった。

「ぎ、貴様らああ!?!」

「ま、我らほどの実力者が三人も揃えば、当然の結果というやつだな」ニヤリと、実に不敵に笑いながらランサーはその槍の先端をキャスターへと向ける。

そしてそのキャスターを逃がさぬように、刃夜とセイバーが更に行く手を阻み、三人でキャスターを取り囲んだ。

「覚悟しろ外道」

「……この類は面倒だから油断しないようにな」

子供を殺そうとしたキャスターを鋭く睨みつけるセイバーに対して、刃夜は他の二人ほど殺意を抱いてないように見受けられた。

というよりも、一段落した途端にやる気をなくしように見受けられたのだが……周りの二人は目の前のキャスターに細心の注意を払っているので気付いていないようだった。

そのとき……

「!?!」

ランサーが何かに気付いたかのように、目を見開いた。

その時間はまさに刹那の瞬間。

その僅かな隙を……キャスターは見逃さなかった。

「ぬううううあぁー！」

そんな奇声と共にキャスターが胸に抱えた宝具から凄まじいほどの魔力が噴出した。

それがキャスターの何かしらの行動を行うことの動作であることは疑うべくもない。

故に、セイバーが剣を振り上げて突進したが……海魔が血のような液体となって消滅したその血のような液体が、魔力を放出しながら爆発した。

爆発といっても威力はなかった。

だがそれでも視界と行動を阻害するには十分すぎた。

そしてその爆発によって生じた血煙が辺り一帯の視界を奪った。

視界が晴れた時には……すでにキャスターの姿は消えていた。

「くそ。逃がしたか」

悔しそうに顔を歪ませるセイバーだったが、しかしランサーは何かに捕らわれたかのように、何も話さなかった。

そのランサーを、刃夜は実に冷ややかに見つめていた。

うーん。なんとというか隙だらけにもほどがあるんだが

自らの得物を虚空へとしまいつつ、刃夜は何も言わないランサーに對して何も行わない。

この状況であれば簡単にランサーの命を取ることができるにも関わらず。

先に冬木教会で聖杯を求めていないという刃夜の言葉は本当のようだ。

「どうした、ランサー？ 何かあったのか？」

無言のランサーにセイバーが何かあったのかと声をかける。

それに対して、ランサーは実に沈痛な面持ちで、静かにこういった。

「我が主が……危機に瀕している。どうやら、そちらの本丸……あの城へと攻め入ったようだ」

契約によりマスターと繋がっているランサーは、自らの主の窮地を

明確に察しているようだった。

そして今のこの状況下で……刃夜とセイバーと相対している状況下で背を向けるのは、いくら休戦状況であるとはいえ躊躇われるのだろうか。

それを……

!?

自らの背後の猛烈な気迫を感じ取り、セイバーは咄嗟に剣を頭上の防御のために振り上げる。

その見えない剣に……目にも写らぬ速さで白刃が振り下ろされた。

!!!!

先ほどまで全くしていなかった強烈な金属音が、辺り一帯の空気を震わせる。

その音を発生させた存在は……セイバーとランサーを除けば、一人しかいなかった。

「なんの……つもりだ！ ジンヤ！」

「ちよつと西洋の騎士と斬り合いたくなっただけだ！」

その言葉と共に、振り上げているためにがら空きとなったセイバーの横っ腹に、刃夜の回し蹴りが綺麗に入り……セイバーを彼方へと吹っ飛ばし、その後を刃夜が追った。

そしてその場にはランサーが一人、残される。

!?! ジンヤ……かたじけない

その意味することをすぐに悟り、ランサーは僅かに頭を下げてすぐに霊体化して姿を消した。

吹き飛ばされたセイバーは、いちど体勢を立てない直して足から地面に着地して……前方の刃夜へと視線を投じていた。

そして殺意の籠もった目を向けられた刃夜は……呆れた物を見るように、ため息を吐いていた。

「どういうつもりだ？ ジンヤ」

「さっき言ったとおり……とは思ってないだろうが、まあこれはお前のためでもある」

「私のため……だと？」

「ランサーとお前がどういう関係かはわからんが、とりあえず聖杯を求める同士敵であることは間違いない。だがその割にはお前らには先ほどの状況下で相手を殺す気がないように見受けられた」

先ほどの隙……ケイネスが危機に陥った事を悟ったランサーが棒立ちとなった隙。

それをもつてキャスターは危機を脱した。

暫定的な特別ルールとはいえ、最終的には敵であることに変わりはなく、あの場で殺そうと思えばランサーを容易に殺すことが出来ただろう。

しかしそれをしなかった。

しかもランサーが自らのマスターの窮状を暴露までしたのだ。

これだけでも二人が互いに一種の信頼関係を気付いているのは明白だった。

それを読み取るのは、そう難しいことではないだろう。

「そしてキャスター討伐という一種の休戦状態であるにもかかわらず、ランサーのマスターはお前のマスター……スナイパーライフルを手に使っていた男、衛宮切嗣とか言ったか？ にちよつかいをかけてきた」

「!? 気付いていたのか？」

「魔力のパスが繋がってないんだ。すぐにわかる。んで、ランサーのマスターが先にルールを破った。なのにお前はランサーのマスターの窮状を聞いたにもかかわらず、ランサーと戦おうとはしなかった。これは、お前が問題ある行動をしている……という自覚はあるのか？」

「なんだと？」

やっぱり気付いてないのか……。これが生粋の騎士つてやつだよなあ。どこ行ってもその類の人間はいるのな

セイバーの言葉がよほどがっかりだったのか、刃夜は大きく肩を落としてこれ見よがしにため息を吐いていた。

「貴様……騎士である私を愚弄するのか!？」

「愚弄はしてないが、馬鹿だとは思って……結局一緒か？」

「貴様……」

「だってそうだろう?」

「あの場で何もしないでランサーを行かせていたら……お前のマスタールはどう思う?」

「……何?」

刃夜の言葉に、意外なことにセイバーは構えようとしていた剣を握る力を抜いた。

それを確認しつつ、刃夜も敵意がないことを伝えたいのか刀を消失させて話を続けた。

「精神分身体、そしてさつき広間の時に衛宮切嗣を直に見た。わかっていたことだがあいつは間違いなく傭兵タイプ……完全な合理主義者だ。騎士道とかいう、曖昧な物を信用するタイプではない」

「……」

あの場で何もしないで行かせれば衛宮切嗣がどう思うか?

自らの絶対の守護者であるはずのサーヴァントが、ちよっかいをかけてきたマスタールを返り討ちにしたにも関わらず、ランサーの妨害によつて止めを刺すことが出来ないのだ。

しかも自らのそばにセイバーがいないため、もしランサーにその気があれば、その場で衛宮切嗣の命も……聖杯にかける願いも終わる。

故に刃夜はセイバーにちよっかいをかけた。

ランサーが自らの主の元に駆けつけることが出来るという……状況を作るために。

それはランサーもすぐに理解した。

そのため、ランサーも衛宮切嗣に対して何もすることも、声をかけることもなく、ただ自らの主を助けるためだけにケイネスの元へと向かった。

「おそらくあの人間じゃない女人……が橋渡し役なんだろうが、それでも少しは考えて行動しろ」

「……貴様、一体何がしたいんだ？」

本来は敵でしかないはずの他のサーヴァントとマスターを助けるという意味のわからない行動をする刃夜に対して……さすがのセイバーも不信感を覚えてしまう。

その不信感はある意味で当然であるとわかっているのか、刃夜は顎に手をやって考える仕草をした。

「前に使い魔向けに言ったんだが……ああすまん何でもない。改めて言うわ」

「？」

何故かちらりと……セイバーとは違うあらぬ方へと視線を一度向けて、両の手を上へと向ける。

するとまるでその腕に導かれるようにして……上空からゆつくりと蓑虫桜が刃夜の腕へと降りてきて、刃夜が大事そうに優しく抱きかえした。

!? 自らのマスターを頭上へと避難させていたのか？

直に蓑虫桜を見るまで全く気付かなかったことに驚愕を覚えながら、セイバーは刃夜へと視線を向けて……驚いた。

……なんと、優しい表情をするのだ

桜を見る刃夜の顔が、本当に大切な物に向ける笑みを浮かべていたからだ。

いくら子供を救うためとはいえ、あれだけの力を……紅の炎を子供達の防護へと回したのだ。

何か理由があるのかと、思っていたセイバーだったが、今の笑みを見て少しだけ納得した。

その笑みの……優しさを見て。

「俺の目的はただ一つ、この子を救うことだ。それを邪魔するのなら相手が誰であろうと容赦はしないしする気もない」

「本当に聖杯に望みはないのか？」

「ないなあ。望みはあるが、それは俺が自らの手で造り上げなければ意味がないからな」

「造る？」

「とは別にもう一つ目的もあるが、まあそれも俺がやり遂げないという意味はない。まあ片方の願いはとりあえず及第点は出来たんだがな」

カラカラと、先ほどの叱責するような表情が嘘のように、刃夜は締まりなく苦笑しながらそう言った。

その意味するところがよくわからずに、セイバーはただ首を傾げるしかなかった。

そんなセイバーに……刃夜はまるで先導するようにセイバーへと背を向けて、桜抱きかかえていない方の手でセイバーを誘うように動かす。

「んで、それとは更に別にさっきの女人ともう一人の女人傭兵があつちで何かに襲われてるっぽい。助けに行こうか」

「!? アイリスファイールが!?!」

「ついてこれるなセイバー? 先に行くぞ!」

その言葉と共に子供一人を抱きかかえているとは思えない信じられない速度で、刃夜が闇の森の中を疾走する。

その刃夜に後れをとらぬように、セイバーが後を追った。

二人して信じられないほどの速度で森を駆け抜けて……二人の女性我倒れている場所へとたどり着いた。

「マイヤ!?! アイリスファイール!?!」

逃げたと言つても……さすがにすぐには……。ああいたいた

セイバーが倒れている二人の女性……アイリと舞夜へと駆けつけている間、刃夜はきよろきよろと周囲を見渡して……見つけた。

今宵の収穫は……まあまあつてところか。必要だったとはいえ少々出だしが遅かったから、覚悟しないとな

!?! 見られた!?!

森を疾走していた綺礼は、背後から感じた猛烈な殺意と恐怖を抱いて、思わずといったように背後へと……さきほどアイリと舞夜と戦つ

た場所へと視線を投じた。

だが月夜とはいえうつつそうとした森の中だ。

おまけに距離もある。

常人の視力で見えるはずもない。

だが確かに綺礼は感じたのだ。

内面を見られた……視線を。

なるほど。アサシンからの報告通り、そしてギルガメツシュが気にかける男。一筋縄ではいかないと言うことか

一体何を目的に動いているのかわからないのは綺礼としても同じだった。

だがそれでもこのイレギュラーな存在が何故ここまで意味のわからない行動をしているのか理解できなかった。

だからこそ……綺礼も興味を抱いた。

あのギルガメツシュが気にかける男の存在を。

セイバーが駆けつけると同時にアイリが突如として回復し、刃夜が治療をしていた舞夜を二人して治療し始めた。

「……礼を言うべきなのでしょうね」

「別に構わんよ。俺も子供の避難部屋借りたしな。それにいくら敵の聖杯戦争関係者とはいえ、目の前で女人に死なれちゃ寝覚めも悪い」

「……おもしろい人なのね、あなた」

「変人で結構だよ」

舞夜の治療を終えたことを確認し舞夜を含めた四人はとりあえず城へと戻った。

子供達を避難させている部屋のドアに穴があいていることに、アイ

リやセイバーが少々慌てたが、刃夜は何も恐れることも慌てることもなく部屋へと入っていく。

そして宙に浮いた紅の玉を再度左腕へと戻した後、寝ている子供達を全員宙へと浮かせた。

「べ……便利な能力ね」

「まあ便利だが……この使い方力自体には不評でね。いつか反旗を翻されそうでめんどくさいんだが」

「力自体？ 反旗？」

「ま、こつちの話だ。では今宵はこれにて」

恭しく頭を垂れて、刃夜はアインベルンの森から姿を消した。

風の能力で風を引かないとはいえ、親が心配していることは考えるまでもないため、刃夜は超高速で冬木の街へと帰還した。

そうして刃夜は子供達を全員、夜勤を行っている交番の警官に押しつけた。

具体的には……

夜勤中の交番の警官の前に道を聞きたく訪れる。

深夜と言うことで少々警戒しながら道案内をする警官の前で、突然外に出ていく。

やはり危険人物かと思い、急いで後を追いつ外に出たその数メートル先の道路に……無数の子供達が眠っていた。

一瞬瞬きした警官だったが……すぐに応援を呼んだ。

複数の警官が子供達をあやししながら住所などを確認している姿を遙か遠くから確認し、刃夜はリフォームした陣地へと帰還した後、再び夜の街へと出掛けた。

二人の狂気と思ひ

それは刃夜とアーチャーが初めて邂逅した、その日の夜。刃夜を待ち伏せるように……いや、実際待ち伏せしていたのだから。

刃夜が帰宅すると、バーサーカーが玄関先に現界したのだ。しかし魔力消費を嫌ったのか、すぐに霊体化した。

その行動の意図を察して雁夜と共に凜を救った後、雁夜が眠る時にいつもとは違う薬を、刃夜は手渡ししていた。

「これは？」

「普段よりも活性化させる薬だ。治療を少し進めようと思ってな。わかつてると思うが毒じゃないから飲んで寝てくれ」

「今更疑わないさ。わかった」

渡された薬を飲んで軽く運動して、雁夜も眠りについた。

二人が眠ったことを確認すると、刃夜は静かに部屋を出て庭先の縁側へと出た。

手に持つのは二つのお猪口。

お猪口を持っているところから言って酒を飲むつもりなのだろうが、酒を持っていない。

……月見酒と思つたが……さすがに庭にまで手がつけられてないから余り綺麗じゃないな

自らがリフオームした家の庭先を見て、実に渋い表情をしていた。

そして縁側へと腰掛けて、左手を握る動作を行った。

普段刃夜が刀を取り出す時とは違い、手のひらをより大きく開いていた。

するとその左手に一升瓶が出現し握られていた。

その一升瓶を一つのお猪口へと注いで飲み始めた。

一升瓶とお猪口であることから、酒なのだろう。

どうやら酒の味はまずまずだったらしく、嚙下した酒の味を実においしそうに味わっていた。

うーん、ちよつと甘みのふくらみ方が甘い……なかなかいける

な。米の磨き方が甘かったか？ もうちよい熟成させればもつとうまくなるかな

小さく領きつつ、刃夜は自らが口につけたお猪口ではないもう一つのお猪口に酒を注いで、静かに自分の眼前へと差し出した。

「やるか？ 俺が造った酒だが……酒も結構造つてるからそこそこの自信はあるぞ？ まあ日本酒が口に合うかはわからなんだが」

「……いたどころ」

虚空へと話しかけた刃夜だったが、すぐにバーサーカーが現界して差し出されたお猪口を受け取った。

黒紫の鎧を身に纏っているが、しかし兜は被っておらず素顔を晒していた。

その顔は……深く、醜いと言つて差し支えのない皺が、刻まれている。た。

何かに……悩み続けたというように。

そして刃夜の目の前に立ったままその酒を口に含み、意外そうな表情を浮かべた。

「ほう、うまいな」

「そらどうも」

「酒も造れるのか？ というか酒税法というのはいいのか？」

「……西洋の騎士様がそれを言うときすげー笑えるな」

「聖杯からある程度現代知識は与えられているからな」

「らしいな。まあ俺はそれを認識してないが……。まあどうでもいいが。別に？ 長生きしているからいつでも自分の国の酒が飲めるようにしたってだけだ」

そう言いながら、先ほど注いだ酒を一気に煽った。

それに倣ったわけではないだろうが、バーサーカーも渡された酒を全て飲み干して、お猪口を刃夜へと渡した。

「もういいのか？」

「わかっているのだろうか？ 話すために私が現界したわけではないのだと」

その言葉と共にバーサーカーが何歩か下がり、庭先に置かれた木材

を手に取り……手に取られた木材が漆黒に染まった。

そしてその木材を剣に見立てて……否実際に剣なのだろう。

その醜い黒く、赤い血管のようなものが走る剣を、刃夜へと向けた。「王を裏切ったとはいえ、私も騎士に端くれ。貴様がどのような存在であるかは……剣で測らせてもらう」

「ふむ。それはいいが条件がある」

「何だ？」

お猪口の酒を飲み干し、刃夜は左手を僅かに握って、打刀を出現させた。

それは……今まで刃夜が数多く出現させた刀よりも、より鋭さを感じさせる打刀だった。

「やつても一分以下だ。そうじゃないと雁夜に負担がかかる。かなり良い薬を飲ませたが、用心に越したことはない」

「……わかった」

刃夜は静かに、緩やかに……だがそのゆったりとした動作とは裏腹に、その身には凄まじく身も凍えて砕け散るほどの重圧を、刃夜がバーサーカーへと向けて放った。

そしてその次の瞬間には……

!!!!

黒き棒の剣と、刃夜の打刀が交差し、庭に凄まじい音が鳴り響き……

すぐに雨が降り注いだかと勘違いするほどの数の音が起こった。

だが、それもそう長くはない時間で止まり……再び庭に静寂が戻った。

「……本当にお前は何者なんだ？」

「何者と言われても……。雁夜と同じ事を答えるしかないのだが？」

「ふざけるなー！」

たまらずといったようにバーサーカーが激昂した。

その反応に対して刃夜は、ただバーサーカーに気付かれない程度に

小さくため息を吐くだけだった。

「今の技量といい、さらに今貴様が使っている風の能力。我が王の「風王結界」以上の宝具だ。しかもそれだけではなく、その刀も宝具に相違ない。それだけの力を有していながら、何故我らを助ける？」

「言ったとおり桜ちゃんを守るためなんだが？」

「それならば私のことはどうでもいいはずだ。なのに何故？」

「何故といわれてもなあ。お前も少しめんどくさそうなもの抱えているからどうにかしてやりたいという、老婆心なんだが？」

「なんだと？」

刃夜の言葉があまりにも意外すぎたのか、バーサーカーは僅かに顔を歪ませながら刃夜を睨み付ける。

その睨み付けてくる瞳を、刃夜はまっすぐに見つめ返した。

嘘は一切言っていないというように。

「どうしようもないやつなら放置するんだが。今のところ俺が接した存在でどうしようもない存在はそういない。それ以外の連中に対して何かをしてやりたいという……嫌な言い方をすれば余裕ある者の驕りだよ」

刀を納刀し、空間へとしまいながら刃夜はただそう答えた。

「何故だ？」

「何故と言われても、好感抱く奴が何か問題ありそうだったらどうかしてやりたいとは思うだろう？ さきにも言ったが老婆心だよ。お前も歴史上の人物ということで功績も実力もあるんだろうが……まあ仙人とかじゃない限り俺よりも年上って事はないよ。少なくとも老化を伴わない年を取るとい……特殊な精神年齢にはな？」

「……」

「信じられないだろうな？ まあ俺も逆の立場だったらそう思うよ。なら……そうだな……」

少しだけ考えるようなそぶりを見せた刃夜の姿が、忽然と姿を消した。

そして消えたとバーサーカーが認識したその瞬間には……背後から首筋を薄皮一枚だけ切られていた。

「!?」

「圧倒的強者が弱者を従えるって言うのでもいいんだが？」

背後へと目を向けると、そこには腕をいつでも引けるように、僅かに腕を曲げている刃夜の姿があった。

腕を伸ばしきつていないため、押すことも引くことも容易だ。

つまり一瞬にして命を奪うことが出来るのだ。

これにはさしものバーサーカー……円卓の騎士であるランスロットが驚愕した。

一瞬で背後に回った……だと

円卓の騎士。

それはアーサー王とともにブリテンを守護せんと最高の騎士が集まった最強の力。

その円卓の騎士の中でも卓越した技量を誇り、アーサー王が携えた聖剣、約束された勝利の剣エクスカリバーと同じく神造兵装の剣を所持し、その剣を十全以上に扱える技量を有していた。

そのランスロット……バーサーカーの背後をとるといえるのは、かなり高度な技量が必要となる。

それをあつさりやつてのけた刃夜。

確かに本人の言うとおり「強者の驕り」と言うだけの力を有していた。

その刃夜は、すぐに刃を引つ込めて空間に打刀を収納すると……今度は先ほどとは別の酒瓶を空間から取り出してみせた。

「今夜は寝なくてもいいか。出来れば寝たいんだが……。まあそれ以上にはやらないといけないこともあるな。また夜に出掛けなきゃいけないから、二時間ほど酒に付き合ってくれないか？」

「……毎晩、マスターとあの幼子が寝た後、一体どこに行っているんだ？」

「ちよつと害虫駆除に……な」

取り出した瓶の酒を先ほどのお猪口に新たに注ぎながら、刃夜は酒を注いだお猪口をバーサーカーへと差し出した。

その差し出された酒と、何よりも刃夜の顔を……バーサーカーはい

ぶかしそうな表情で見つめる。

そのいぶかしげな……端的に言えばうさんくさいものを見る顔……表情に刃夜は少しだけ肩をすくめながら苦笑した。

「敵じゃないことは間違いないんだ。なら酒飲みながら、つまみを食いながら話をして互いを理解するってのは……万国共通じゃないかな？ 少なくとも俺が旅した異世界ではほとんどの世界と国で、この考えは通用したぞ？」

「例外が？」

「そりやまあ中にはあるさ。特に人間同士の戦いじゃない場合はその傾向が顕著だったな。地球外起源種とかを相手にロボットで戦ったこともあるぞ」

「……なんだそれは」

さすがにこうまで邪気のない表情でそう言われては、バーサーカーとしても酒を断るのは難しかったようだった。

こうして二人は静かに酒を飲み、互いのことを話した。

どのような話をしたのかは二人にしかわからない。

同居人とも言える桜と雁夜はすでに夢の中。

ただ冬の澄んだ空気と僅かにかけて月が、二人を包み、見守っていた。

むろんたったこれだけで互いを信頼など出来るわけもない。

だがそれでも、間違いなく二人はこの夜に確かに何かを得た。

それが信頼なのか？

それとももつと違う何かなのか？

言えることは一つだ。

ただ二人は静かに、互いのことをぼつぼつと話して、酒を飲んだ。

それだけは間違いなかった。

と、綺麗に終わるかと思ったのだが……

「あなたのマスターは将来きつと美人になる」

「それは同意だな。あの子はスゲー美人になりそうだな。性格も……まあこの歳じゃ何とも言えないが、優しい子だしな。手伝いもしてきて、料理も習いたいみたいなこといつてるしな」

刃夜が台所で残り物で調理したそれなりの量の料理を二人でつまみながら……

「美人で優しくて料理上手とは……。いかん、思わず想像してしまう」「何を想像したのかはあえて聞かないが……内容次第によっては桜ちゃんから半径数メートル以内には近寄せないぞ?」

「失礼な。私だつて弁えている。幼子に手を出すなど狂気の所業」

「いや、その思考してその台詞を吐いた時点でアウトだよ!」
実に危なげな会話をしていたりする。

「まあでもなんか桜ちゃんほつとけないのと同時に……なんか引つかかるんだよなあ? 　　なんでかね? 　　俺の知り合いに間桐桜ないし、遠坂桜なんていないはずなんだが?」

本当に不思議そうに、刃夜は桜の名前を言いながら首を傾げていた。

「ほう。それはどういう意味でかな?」

「いつとくがお前と同じ理由と思考じゃないことだけは断言するからな?」

　　だがどこか楽しそうに見える……会話の内容から言つて結構危ない事だが……のは気のせいだろうか?

「私は……ただ、狂いたかっただけなのだ」

「狂うか……」

しかし楽しいばかりでもなかった。
酒に酔ったわけではないのだろう。

何せ飲食が出来るとはいえサーヴァントが酒に酔うはずもない。

本人曰く、肉体があり生きていると自称している刃夜も酒に酔った様子もなかった。

ただ……少々騒がしかった会話が一転し、静かに言葉を交わし始めていた。

「私が行ったことは王への侮辱。王への裏切り。王への反逆に他ならなかった。その所業は騎士ではない。ただの畜生にも劣った行動だった」

遠い月を眺めて、そう独白するようにバーサーカーが……円卓の騎士、ランスロットが呟いている。

独白なのかもしれない。

もしかしたら、口からこぼれている言葉に気付いていないのかも知れない。

そしてそれ以上に……言葉から漏れ出る感情に……

気付いていないのかも知れない。

泣き出しそうな

崩れ落ちそうな

消えてしまうような

そんな……言葉だった。

「私は……」

言葉に出来ないと言うかのように……ランスロットは口を閉じてしまった。

閉じたと言うよりも……言葉が出なくなったという方が正しくなったのかもしれない。

狂気を喰われた存在であるバーサーカー。

荒れ狂うために召喚に応じたために……どうすればいいのかわからないのだろうか。

自らが調理したつまみを口に運び、味わいながら……刃夜もぽつりと、

言葉を紡いだ。

「色んな国に行って、人を殺してきた」

「弱者をいたぶって快樂に浸る者。弱者の命を啜るようにして、金銭を得る奴。色んな奴を殺してきた」

酒を飲み、ただ独り言を呟いていく。

「そして全てが狂い、やがて治った。そして色んな事を学んだ」

お猪口の酒に写った月を見つめていた。

まるで、その先に何かがあるかというように。

「だが色んな人を殺し、狂い、学び……旅をしてきた。だが最後に残ったのは、俺が最初にしたかったことだった」

「したいと思ったこと？」

思わずといったように、ランスロットは刃夜の独白に、口を出してしまっていた。

無意識のうちに出した言葉にランスロットは、はっとしたが、撤回することなく刃夜の言葉を待った。

「最後に残ったのは、料理を極めたいこと。そして何よりも……刀を鍛えることだった」

「鍛える？」

「雁夜に言ったが俺の本職は刀鍛冶だ。色んな事を学んだ上で、それがもつともしたかったことなんだろうな」

小さく笑みを浮かべながら、刃夜はそう答えていた。

その笑みは本当に、澄んでいた。

見る者にそう感じさせるほどに、赤裸々に心情を表していた。

その笑みを見て……バーサーカーが思わず息を呑むほどに。

「だから、考えてみればいい。色々間違ったかも知れない。狂ったのかも知れない。だが……俺が言うのはちよつと違うかも知れないが、狂った思考は消し飛ばしたんだ。思わず出来たこの時間で、考えてみればいいさ」

残った酒を一気にあおって、刃夜は立ち上がって左手に打刀を出現させた。

どこかに出掛けるのだとすぐにわかった。

「いくのか？」

「日課の害虫駆除だ。結界があるから大丈夫だけど二人のこと頼む。それと……」

立ち上がり、戦闘態勢を整えながら……といつても打刀を肩に担いでいるだけだが……背後を振り返り、バーサーカーが手にしたお猪口と縁側の床に置かれた料理が盛られていた皿を指さした。

「後片付けしておいてくれ。働かざる者食うべからずだ」

そう言ってニカツと笑って、夜の街へと躍り出ていった。

片付けを言い渡されたバーサーカーは一瞬きよとんとしていたが……すぐに苦笑すると酒瓶に残っていた酒を飲み干して、静かに食器類を片付けに台所へと向かっていった。

狙われる運命

刃夜がアインツベルンの城と森で色々した次の日で、ライダーがウェイバーの命によって川の水を汲みに行って、強制的な居候をしている老夫婦の家で飲み会をしたその日の朝。

さて、そろそろこちらとしても動きたいのだが……どうすっかな？ トントントンと、小気味の良い音が台所で響いている。ぐつぐつと竈から白い蒸気が噴き出して、お米の良い匂いが漂っていた。

更に隣の竈では鍋から味噌のいい香りがしている。

更にだし巻き卵に、焼き魚、大豆とひじきの和え物と……超典型的な和食を調理しているのは、リフォームをした本人である刃夜その人だった。

実に手際よく作業をしており、今も紫色の炎で炒め物を調理していた。

その紫の炎はまるで意志があるとでも言うように、いくつの竈や鍋、フライパンに火を供給しながら、その全てが絶妙な火加減を提供するために、常に火加減が変化していた。

嫌がらせはけっこうしてるからあつちとしても余り悠長には構えられないはずなんだが……何かきっかけがあれば良いかな？

いくつもの料理が次々とできあがり、器へと盛られていく。

そのどれもが実に食欲のそそる匂いを辺りへと運んでいた。

そしてその匂いに引かれたのか……少女が一人、眠そうに目をこすりながら台所へと入ってきた。

「刃夜おじいちゃん。おはよう」

「おう桜ちゃんおはよう。よく眠れたか？ まだ寝ても良かったのだが？」

「刃夜おじいちゃんの料理手伝いたかったから……。でももうほとんど終わってるね」

「優しいな。ありがとう。昼飯は一緒に作ろう。ほら、雁夜を起こし

てきてあげてくれ。飯にしよう」

「うん」

少し悔しそうに……というよりもすねている感じ?……していたが、それでも昼飯と一緒に作ることが嬉しかったらしく、眠そうしながらも笑顔を見せて雁夜を起こしに向かった。

その様子を、刃夜は実に嬉しそうに笑みを浮かべて見送った。

「さて……あの子のためにもそろそろ次の一手を打たんとな」

朝飯の準備を終え、熱いお茶の準備を進めながら、刃夜がぼそりとそう呟いていた。

その笑みは実に快活でありながら、強い憎悪を宿した笑みで……桜が見ていたらもしかしたら泣いていたかも知れなかった。

しかし、その事に本人である刃夜は気付いていなかった。

「おはよう……」

「おう、雁夜。おはよう」

桜に起こされてきた雁夜が、少々眠そうにしながら台所へとやってくる。

そして桜と二人して料理の準備をしている様子を横目に見ていた。

まだ幼いため少々危なっかしい桜をフォローしながらも、その自主性に任せていた。

その二人の笑顔は、紛れもなく幸せな光景であり、また雁夜の人間性の一面を表していることは間違いなかった。

そろそろ……こつちも片付けるか……

そんな雁夜の様子を見つめながら、刃夜は本日の予定を頭の中で組み立てていた。

「昼は何が食べたい桜ちゃん?」

「えっと……その……」

「焦らなくて良いよ。ゆっくり考えて」

「うん」

昼間、まだお昼には早い時間。

刃夜と桜は深山商店街の通りを歩き、買い出しに来ていた。

刃夜の問いに対して、何を食いたいか必死に考え出した桜に微笑まじさと安堵を覚えたのか、刃夜は実に嬉しそうに笑っていた。

これで第一段階はクリアだな。後は元凶を絶たねばならんが……つて、ん？ この気配は

「んお!? そこにいるのは!?」

刃夜が何かに気付いたかのように顔を向けたその先に、同じように刃夜に気付いたらしく、実に巨漢な男が刃夜を指さして笑みを浮かべている。

そしてその巨漢通りに大きく足を動かして、刃夜へと近寄ってきた。

その動作には全く持って邪気や敵意といったものが含まれていなかった。

その様子に刃夜は少々呆気にとられながら、近寄ってくる巨漢の男……ライダーのサーヴァント、征服王イスカンドルを見つめていた。

いや、絶対にこんな奴つてのはわかっていたけど……これほど精神と性格が離れてない奴も珍しいな

「お主はイレギュラーなサーヴァント？ 確かジンヤとかいったな？」

フレンドリーに手を振りながら刃夜に近づいて来たイスカンドルに、刃夜は実におもしろい物を見たと言うような、何とも言えない表情をしていた。

刃夜と手を握っている桜は、突然来た巨漢な男にきよとんととしているが、どうやら怖くはないらしく、ただ自分よりも遙かに背丈の高いイスカンドルを見上げていた。

「!? おいライダー！ あまりその言葉を口にするな！」

そう声を上げながら、ライダーの後ろから走ってくる、小柄な青年がいた。

ひよろつとしており、その上男にしては背が低い。

しかも童顔とも言える顔立ちで、更に本人の雰囲気を実に子供っぽ

く感じさせる何かがあり、走ってくる動作も素人丸出しであり……何となく幼さを感じさせる青年だった。

名をウェイバー・ベルベット。

ライダーのマスターだ。

「とうか、敵に話しかけてどうす——あいた!?!」

後から走ってきたウェイバーに、ライダーは問答無用でデコピンをくらわせて、ウェイバーがひっくり返った。

それがあまりにも見事にひっくり返るものだから、桜が思わず可笑しそうに笑った。

「何が敵だ愚か者。余の方針は最初の夜にきちんと宣言したではないか」

「宣言って……配下に迎えるってあれか!? こんなイレギュラーな奴も誘うのか! お前は!?!」

「誘うことに何の問題がある? むしろこれほど愉快的な男も珍しいぞ、ウェイバー」

「誘うって……何の話だ?」

主従共々よく意味のわからない話をし出したため、さすがに刃夜も疑問符を浮かべて質問する。

あまりにも邪気も敵意もなかったため、思わずいつてしまった言葉だったのだろう。

ライダーは、刃夜に実に嬉しそうに笑みを浮かべると、諸手を挙げて刃夜へところ言い放った。

「開拓者、ジンヤよ」

「ああ、はい」

「我が軍門へ降る気はないか?」

「……は?」

ライダーの提案があまりにも意外だったのか、刃夜が素つ頓狂な声を上げた。

実に珍しいことだと言っていいだろう。

ライダーの行動に、ウェイバーは深々とため息を吐いていた。

「ライダー。あまりにも突然すぎて相手がびっくりしているだろう?」

色んな意味でもう無駄だつてわかつてるけど……でも話さないとわからないぞ?」

「む、それもそうだな。ジンヤ、お主はあの場にはいなかったからな」「はあ?」

あの場とは、ライダーがセイバーとランサーの戦いを妨害し、アーチャーがライダーの侮辱に切れ、雁夜が考えもなしにバーサーカーを現界させて実に混沌として、しつちやかめつちやかになったあの夜である。

第四次聖杯戦争はあのとき本格的に始まったと言っているだろう。

そのときライダーは、大胆にも……大胆といい意味で言っているかは謎だが……真名を明かした上に、こういったのだ。

「聖杯を余に譲る気はないか? さすれば余は、軍門に下った者を友として遇し、共に世界を制する快悦を共に分かち合おうと思つておる」

「……ライダーのマスターさんや」

「な……なんだよ?」

「お前、結構苦勞してそうな?」

「……何で敵のお前に同情されなきゃならないんだよ!?!」

はっ!? 思わず思ったことを口にしてしまった。しかしこいつ……まあこういうキャラなんだろうなあ……

ウェイバーと同じようにため息を吐いて、刃夜はライダーへと目を向ける。

その目には実にきらきらとした期待が込められていた。

本当に刃夜を配下へと迎え入れたいと思つているのだろう。

こうまで裏表のない感情を向けられては、刃夜も悪い気はしなかった。

だが当然……刃夜の回答は決まっていた。

まあ聖杯はマジでどうでもいいんだが……

「待遇は応相談だ。是非よい返事を期待してい——お、そうだジンヤ

よ?。」

「うん? なんだ?。」

「今宵は暇か?。」

「……んあ?。」

次々と色んな事を提案してくるライダーに終始やられっぱなしの刃夜。

主導権を全く握れていないことが珍しいのか、それとも二人の会話がおもしろいのかはわからないが、桜が実に興味深そうに話を聞いている。

ウェイバーは、もう何も言うこともないのか、ただ会話が終わるまで黙っていた。

「何、せっかく王が三人も揃っているのだ。ちよいと王同士の問答を行おうと思っておるのだが……お主もどうだ?。」

「どうだって……。俺王様なんてなったことないぞ? ならないかとは言われたことはあるにはあるが、俺には無理だ。」

「ほほう? 王になって欲しいとは。貴様、何をしたんだ?。」

刃夜に対して興味津々らしく、爛々と輝かせた瞳を刃夜へと向けている。

商店街のど真ん中でそんな会話をしている四人組。

シニールを通り越して実に不気味とも言える風景だった。

「王になれと言うか、窮地に陥った国の手助けをすることになったから敵をぶっ飛ばしたら、娘を紹介されて次期国王にならないかって感じだ。まあ当然蹴ったが。色んな意味で。」

「ほう、王の立場を蹴るとは。なかなかにおもしろい男だな。」

「王様なんて興味がないし、俺は権力的な意味で上に立てる人間じゃない。というかそれ、褒めてんのか?。」

「応とも! だがお主は自らの立場がどのようなものがわかっておらんようだな。」

「ほう?。」

イスカンドルの言葉に実に挑発的な返事を返した刃夜。

その反応に、ニヤリとイスカンドルは笑った。

「で、どうだ？ 王になったことがないとはいえ、王に推挙されそうになったというのであれば参加の資格は十分だ。まあ資格がなくとも誘うおうと思っていたのだがな」

「なんでだよ？」

「なに、お前の存在がおもしろいと思ったからよ。それにお主料理が得意らしいではないか？ 一品食べてみたいと思ったのだ」

何で知っているんだ？ と疑問に思った刃夜だったが、買い物をする時に桜から料理に関して質問をよく受けて、それに答えていたのだから知る機会はいくらでもあつたりした。

いくら問題がないとはいえちよつと油断しすぎたかと自分に呆れた刃夜だった。

「体よく使おうとするなよ。せつかくのお誘い申し訳ないが、少々やることがあつてな」

つまみを作らせようとしたライダーに呆れたような苦笑を浮かべながら、刃夜はライダーの誘いを断った。

「何故だ？ お主とて興味が無いわけではなからう？」

「なくはないが、まあちよつとやることがあつてな」

そう言つて刃夜は？いでいた手をほどいて、隣にいる桜の頭をぽんと撫でていた。

その動作の意味がわかつているのかわかっていないのか……桜は撫でられた頭を両手で抱えて、嬉しそうに笑っていた。

その笑顔を見て、ライダーも誘うのは躊躇ったらしい。

「むう、残念だ。しかしいつか機会があればそのときは是非一献交わそうぞ」

「おうよ。まあせつかくのお誘いを断ったわびつてのもあれだが……」

刃夜がそう言いながら左手を握るような形にすると、次の瞬間には手に一升瓶が握られていた。

突然物を取りだしたことにびっくりしたウェイバーだったが、しかし次の台詞で別の意味で驚いた。

「酒宴つてことは酒があつて困るつてことはないだろ？ 俺が作った

酒で良ければ持ってってくれ」

「ほ？ お主が造った酒とな？ 戴こう！」

「ぼっ!? ライダー！ もらってどうする!? 毒か——あいた!?!」
敵からのもらい物など警戒するのは当然だ。

その当然のことを言うウェイバーの額に、再度ライダーのデコピンが炸裂した。

今度はひっくり返られなかった、しかしのけぞるほどの威力はあったし、再度の大きなデコピン音に、周囲の人間が笑っていた。

「こやつが毒など盛るわけなからう。それくらいは余のマスターとして見抜いて欲しい物だ」

「見抜くってどうやってだよ!?!」

「見ればわかるうに。お主は下らない望みを抱く前にまず、もっと観察眼なりそういったことを磨かねばならんなあ」

「余計なお世話だ!」

仲良いなあ

そんな二人の様子を、刃夜は生暖かい目で見つめていた。

そしてそのとき

キユウウウウ

と、実にかわいらしい腹の虫が、桜のお腹から鳴り響いた。

さすがに少し恥ずかしかったらしく、桜が顔を赤くしてうつむいていた。

「つと、もう昼時だもんな。お腹もすくか。食材買って帰るか」

「うん」

「むう、昼か。坊主、わしらも昼餉にしようではないか！ 新都のモダン焼きでもどうだ?」

「モダン焼き? なんだそれ?」

昼間と言うことを差し引いても、この二人組には争いを行うという考えは皆無のようだった。

互いに聖杯戦争の参加者であるにもかかわらず。

その聖杯戦争としては歪だったが、しかしただの人として見れば実に良好な関係と言っていいだろう。

「ではこいつはありがたく載っていこう」

「日本酒だから余り直射日光に当てないようにな。後温度変化にも弱いからよろしく」

「おうとも」

酒をもらえたのがよほど嬉しかったらしく、ライダーは刃夜の言っていることがわかっていいるのかわかっていないのか、酒瓶を高々と上げて返事をしている。

その仕草に刃夜は額に手をやっていたが……悪い気はしなかったのか、苦笑していた。

うーん。この戦。何とかしてやりたい奴が結構いるなあ……

手を？ぎ、買い物しながらそれとなく刃夜は視線を下げて、桜を見つめる。

出会ってまだ数日だが、桜は以前とは比べものにならないくらいに元気になっていた。

また自分の意見も口にするようになっていいる。

桜が間桐の家に来てからは出来ないことだった。

ただただ嬲られるだけの日々。

体をいじられ、変えられていく日々に楽しみなどあるわけもない。

だが今は違った。

刃夜がその全てをどうにかしようとしているのだ。

だがその対象を桜だけでなく、別の存在にも向けようとしていた。

今のところ問題あるやつらばっかだからなあ……。どうしたものか？

顎に手をやって、考え事をし出した刃夜。

その様子を、桜が不思議そうに見つめていたりした。

ちなみに桜と一緒に作ったの昼飯はパスタとなった。

時間があると言うべきか暇なのかと言うべきなのか判断に悩むところだが……ソースはアスパラを柔らかくなるまで煮込んだ特性のクリームソースだ。

その調理をほとんど桜に任せて作った料理だった。

「だ、大丈夫か桜ちゃん」

桜の調理中、雁夜は心配して何度も手伝いを買って出た。

だが、その事ごとくを刃夜に止められた……。

「大丈夫」

桜は調理に必死になっており、雁夜の言葉にも反応している余裕がなかった。

その様子を刃夜は暖かく、雁夜はびくびくしながら見守っていた。「そんなに心配すんなって。目を離したらまずいが、そこまで難しい料理じゃないし、俺が見てる。ついでに言うとな桜ちゃんが使ってる包丁は俺が鍛造した特別製だ。万に一つもあり得ない」

「……鍛造した包丁？ 特別製？」

刃夜が言う包丁は、桜が今手にしてアスパラを切っている小降りの子供用とでも言うべき物だった。

小さな持ち手もきちんと手の形に波打っている。

「具体的には食材だけを切るといふ、特別な能力を付与している。といても、それだと料理を覚えるという意味で良くないから、浅い切り傷程度は切れる。決して深く切りすぎたりしない、神経は絶対に切らない、子供用に鍛造した包丁だ。人を傷つけられないから犯罪にも使えん。まさに調理のためだけの刃物よ」

「……何だその意味のわからない概念武装」

「概念武装？ なんだそれ？」

実にとんでもない包丁を使っていたりする桜。

そしてそんなとんでもない包丁は、決めた対象を切れなくすると言ふ、概念武装とも言えるべき物であったため雁夜が絶句していたが、しかし刃夜自身は？ マークを浮かべるだけだった。

「まずは料理をする楽しさを知ってもらふこと。そして食べてもらう相手が幸せになるという事を見る喜びと満足感。これを知ればそれでいい」

英才教育というべきなのか……どうやら本当に弟子にするみたいだった。

というよりも刃夜が馬鹿というべきなのかも知れない。

「更に使っている火は俺の信頼する力である紫炎だ。これも包丁同様、桜ちゃんが直に火に触れても大火傷はしない。火傷痕ができることもあり得ない。また火をかけているフライパンや鍋なども、熱さをきちんと伝えつつ、もし桜ちゃんが触れた場合には瞬時に空気の膜が形成されて軽度の火傷しかならないようになってる。もしも仮にお湯なんかを滑らせて体にかかりそうになった場合、俺が別の力ですうにかする。全く問題がない」

紛うことなく馬鹿だった。

「……なにやってんだお前?」

この場に他のサーヴァントやマスターがいても同じ事を刃夜に言っただろう。

宝具の使用のオンパレードだ。

本人に自覚はないが、ある意味で桜が今使用している包丁も宝具と違って差し支えない……戦闘能力は皆無だが……だろう。

「教育だが?」

「過保護すぎないか?」

「何度も手伝おうとしているお前に言われたくないわ!」

どっちもどっちだったりする。

とそばに霊体でいるバーサーカーが思っていたりするのだが、話に夢中な二人は当然気付くわけもなかった。

「刃夜おじいちゃん、次はどうすればいいの?」

「うむ。次はクリームソースを作ろうか。ちよつと難しいかも知れないが、根気よくやってみよう」

「うん!」

刃夜の指示し終えたところまで終わった桜が、次の手順を刃夜に聞いてくる。

その問いに対して、刃夜は準備を指示しながらも、全てを桜にやらせていた。

刃夜に指示に、桜は嬉しそうに笑みを浮かべながら作業を進める。

その笑顔をみれたのが……雁夜にとって本当に嬉しいことだった。本当に良かった……

間桐家に引き取られた桜は全ての感情が死んでいた。

ただ耐えるという感情以外に与えられるものはなく、虫に体を改造される日々。

そんな日々で笑顔など出るわけもなく、ただ死んでいくしかなかった。

雁夜が再会した時には、すでに桜から笑みは失われていた。

だがこの数日で驚くほどに感情を取り戻していく。

笑顔もこうして見せるようになり、また自らの意思もきちんと言うようになってきている。

実に良い傾向だと言っているだろう。

だが、雁夜には不安があった。

当然ながら間桐臓硯の存在だ。

まだ刃夜から倒したって話を聞かないけど……どうするつもりなんだ？

このイレギュラーなサーヴァント、刃夜の事を信じたいという気持ちには当然あった。

だがそれでもあの老人の恐ろしさと狡猾さを知っている雁夜としては、不安に思うのも当然だった。

だがその心配は……当然だが無意味なものだったのだ。

しかしそれを雁夜が知るのはまだ少し先の話だった。

そしてある意味でそれ以上に大事なことに……雁夜はこの後直面することになる。

昼飯を終えて……ちなみに桜が作ったパスタは、雁夜は絶賛し、刃夜もおいしそうに食べていた……午後の一時へと移行した時だ。

普段であれば桜に刃夜が勉強を教えたり、料理教室を開いたり、二人の体の治療を行ったり、雁夜がルポライターの仕事を進めたり、桜と雁夜と刃夜で遊んだりするのだが……今日は違った。

刃夜は自らが身に着けている首飾りを桜へと渡した後、桜と雁夜を普段食事をする場所へと呼び出した。

家を手に入れて以来、刃夜が二人をこうして呼び出すのは初めての事のため、二人は一体何事かと、対面に座っている刃夜へと疑問の目を向ける。

当然その目線に気付いているはずだというのに、刃夜は何も言わずにただ座りながら冷たいお茶の準備をしていた。

何故冷たいお茶？

まだ寒い季節だというのに熱いお茶ではなく冷たい……といても常温なので冷たいというわけでもないが……物を用意しているのかわからなかった雁夜が、頭に疑問符を浮かべていた。

やがて二人分のお茶を用意し終わると、刃夜は重々しくこういった。

「さて、拠点も手に入れ、生活もある程度安定した。二人の体の容態も初期に比べれば全く問題がない」

その際薄く目を開けて、刃夜は雁夜を見つめていたが……雁夜はそれに気付いていなかった。

「少々早い気がしないでも……問題ないと判断し、俺はある提案をしたい」

「提案？」

そしてゆっくりと目を開けて……刃夜は対面に座る桜の顔を静かに見つめた。

普段とは違う雰囲気刃夜に戸惑いながらも、しかし刃夜を見つめる目は確かな信頼の色があった。

何も写さない。

何も宿さない。

何も見えない。

そんな目をしていた桜はもうこの場にはいなかった。

故に……刃夜は静かではあるが、二人にはつきり聞こえるように

……こういった。

「そろそろ……桜ちゃんの気持ちを確認したい」

「ところでライダー。その瓶は何だ？」

それはアインツベルンの城で、酒を酌み交わして問答を交わし始めてしばらくした時だ。

王の財宝より取り出した酒をセイバーとライダーに振る舞ったアーチャー……ギルガメッシュが口にした言葉だった。

「ん？ これか？ これはこの会にあのイレギュラーなサーヴァント……ジンヤを誘ったのだがやることがあると断られてな。その際に断った詫びにと、ジンヤからもらった奴の造った酒よ」

「ほう？」

至宝の財、神の酒を出したアーチャーだったが、ライダーが持ってきたジンヤが作ったという酒だと聞いて、非常に興味深そうに声を漏らしていた。

セイバーも、ジンヤの単語を聞いて少しだけ眉をひそめたが、嫌悪感をだしはしなかった。

自らが取り出した酒器とは別の酒器を取り出し、アーチャーはライダーへと酒器を差し出す。

「その酒、よもや持って帰るとは言うまいな。つげ、征服王」

「無論、この会のために持ってきたのだ。持って帰るわけがなからう。日本酒と言ったか？ 飲んだことがないから少々楽しみだ」

そう言つて、ライダーは差し出された新たな杯に、酒を注いだ。

セイバーも思うところはあるのだろうが、他の王が酒を飲むというのに飲まないわけにはいかないと思つたのか、渋々と酒が入った杯を口に運んだ。

そして……三人がそれぞれ同じような反応を示した。

当然だが、刃夜が造った酒は神代の酒には到底およぶはずがなかった。

だがそれでも……神代の酒という、一種の暴力と言っているいい味覚を味わった後に、美味さと巧さ、そして確かな思いを感じさせる、うまい酒であることは間違いなかった。

「ほ!? アーチャー、お主が出した酒には当然遠くおよばないまでも、なかなかうまいではないか」

「……確かに、うまい」

「く……く……く……」

ライダーは絶賛し、セイバーはその美味さに素直に称賛の意を示した。

だが、アーチャーだけはただ一人だけ、心底可笑しそうに、おもしろそうに……笑っていた。

そしてついには。

「はっはっはっはっは!!!」

と、大声を上げる始末。

一体何がどうしてそうなったのかすぐにはわからないセイバーとライダーは、少々呆気にとられてしまった。

だがその笑い声もすぐにやみ、アーチャーは……ギルガメッシュは不敵に笑ったが、すぐに顔をしかめた。

「ない……だど?」

「ない……とは。どういうことだアーチャー?」

アーチャーの独り言に、ライダーが思わずそう質問をしていたのだが、しかしその問いにアーチャーが答えることはなかった。

しかししばらくしてニヤリと邪悪な笑みを浮かべていた。

その笑みはどういう意味の笑みなのか?

それについて刃夜はそう遠くない将来に、知ることになる。

動き出す王

「ライダーの宝具は、ギルガメッシュの宝具と同格レベルです」

「ふむ、狙い通りではあるが……いささか意表を突かれたと言うべきか……。まあいい。ここからはアーチャを本格的に動員し、敵を駆逐していく。マスターとしての任務、ご苦労だった」

「はっ」

通信装置で報告を終えて、綺礼は我知れずにつため息を吐いていた。

ため息を吐いたことにも気付かず、そして当然そのため息の意味にも気付かずに。

これでようやく……解放された……

そう思いながらも、ただ何かすつきりしないような表情で、綺礼は冬木教会の自らの私室に足を踏み入れた。

その場にはギルガメッシュがおり、綺礼の私物のワインを機嫌が良さそうに味わっていた。

今更ギルガメッシュが自らの私室にいることに驚かない綺礼は、少々眉をひそめたがそれだけだった。

「今日はずいぶんと機嫌が良さそうだな、アーチャー」

「ああ。聖杯の格は未だわからぬままだが……仮にガラクタであったとしても瑣末事よ。我はそれ以外の楽しみを見いだしたのでな。そう言う綺礼よ。貴様も今日は普段よりも機嫌が良さそうだぞ？」

「そうか？　ようやく、煩わしい監視任務から解放されたのだから、それが理由だろう」

しかしその顔にはどこか無然とした感情がにじみ出ていたが、それに綺礼自身は気付いていないようだった。

そんな綺礼を、ギルガメッシュは実に嬉しそうに見つめていた。

その笑みが不愉快だったのか、綺礼が露骨に顔を歪めた。

「何がおかしい？　アーチャー」

「なに、存外におもしろい奴だと思つてな。どうやらこの度し難い世界も、退屈せずにすみそうだ」

「さて、今朝の雁夜さんちの朝ご飯は……なんと桜ちゃんが作ってくれた卵焼きと昨夜の残りの豚汁。そして漬け物にご飯。実にシンプルな朝食です」

「突然どうしたんだ？ 刃夜？」

「いや、どうしたものかと思って何となく言っただけ」

「どうしたもの？」

「ああ」

箸で自らの口に桜が作ったという卵焼きを運びながら、刃夜は思案を巡らせる。

すでに聖杯戦争が開始されてからそれなりの日数が経過している。だが実際に脱落したサーヴァントはただ一騎、アサシンのみだった。

数日刃夜がまともに参加しなかったこともあるが、余りにも動きが緩慢であると言っただけだろう。

布石は打ってあるし、嫌がらせもしている。何かしら事を動かすような「事」が起きてくれれば良いのだが……

「刃夜おじいちゃんどうしたの？ 考え事？」

「ん？ まあな。ちよつとじじいは耄碌しているのかも知れない」

「おいしくない？」

「いやうまいとも。十分合格点を上げられる。その年でこれだけの卵焼きを作るのはなかなかだぞ」

そう言っただけで隣の座る桜の頭を撫でる刃夜。

撫でられたことと、料理を褒められたのが嬉しかったのか、桜は少々恥ずかしげにだが頬を赤く染めて嬉しそうに笑っていた。

その笑顔を感じつつ……刃夜は今後の方策を考えていた。

種はまいている。後は座して待つのみだが……長年生きているが生来の気質はかわらんなあ……

どうやら待つというのがお嫌いな様子だった。

そんな自分の性格に呆れているようだ。

そしてそんな刃夜の正面に座る雁夜は……百面相とまではいかな
いまでも、何度も表情を変える刃夜に若干奇異の目線を向けていた
りした。

「今日はどうするんだ？」

「料理教室と買い出しに出掛けよう。食材も少々少なくなってきたこ
とだしな。それとちよつと偵察したいところもある」

「偵察？」

「この家以外にも、同じような家があったのをこの前見つけてな。そ
こを確認している男が衛宮切嗣……セイバーのマスターだったの
でな」

敵陣営のマスターが近くにいるということは、雁夜としては余り歓
迎すべき事ではない。

刃夜の言葉に驚いている様子だったが、しかし刃夜の表情を見て顔
を引きつらせた。

刃夜の表情が……実に邪悪な笑みを浮かべていたのだから。

さて、あの合理主義者野郎がどう出るのか……楽しみだ。どう邪魔
してくれようか

もしも漫画的表現であれば裂けたかのような口に、鋭い牙、さらに
「ケケケケケケ」と、変な笑い方の擬音が背後に書かれていることだっ
たらう。

それほどに邪悪な笑みをしていたのだ。

またぞろ……何をしようとしているのやら……

そんな刃夜に半ば慣れたと言うべきか……雁夜は内心で呆れ気味
にため息を吐きつつお茶を飲んでいた。

どうやら慣れてきたらしく、雁夜はただ呆れているだけのようだっ
た。

だが呆れている以上に頼もしくも思っているのだろう。

その呆れた表情に、不安そうな感情は皆無だった。

だが、言いたいことは言いたいのだろう。

『今度はどうする気だ？』

と、桜にはわからないように口を閉じたまま言葉を話す。

刃夜はそれに気付き、風の力を使って桜には気付かれないように会話を続けた。

『とりあえず、嫌がらせは十分にしているから、そろそろあちらとしても焦れてくる頃だ。事が起きた時にそれを逆手に取る』

『嫌がらせ?』

『お前と桜ちゃんが寝た後に冬木市市内の害虫駆除』

「!? ごふっ!? ごふっ!」

驚きを隠そうとしたが隠しきれず、飲みこもうとしていた物を詰まらせて咳き込んでしまった。

その雁夜を桜が心配そうに見つめて、水の入ったコップを差し出した。

「雁夜おじさん、大丈夫?」

「ごふっ!」 あ、ありがた……んん！ ありがとう、桜ちゃん」

何とか気管支に入っていた物が取れたのか、雁夜は苦笑しながら桜に礼を言って、

『もうお前がなにをしても驚かないとは思ってたけど、まさかそんなこともしてたのか』

『相手が何をいやがるのかを考えるのが戦争だよ雁夜君。嫌がらせとはずなわち妨害工作に他ならない。しかも相手が人間ではなく、ただのゲス野郎で虫以下の存在ならば、情けや容赦する理由は皆無だ』

ぼりぼりと、たくわんの小気味良い食感と噛み応えと味付けに小さく頷きつつ……ちなみに刃夜がつけた浅漬けである……刃夜は思考を巡らせているようだった。

そんな刃夜に頼もしさと空恐ろしさを感じつつ……雁夜は朝食を口に運んだ。

そして朝食が終わり、雁夜と桜が食器の片付けをしている……雁夜が食器洗いなのは最悪失敗しても問題ない食器洗い（割れても食器がダメになるだけであるため）が担当であり、その雁夜の手伝いを桜が自主的に手伝って、食器拭き担当……その間、刃夜はそんな二人の背後をほほえましく見つめつつ、ぼそりと言葉を口にした。

『さてと……バーサーカーよ、ちよいと相談がある』

『!?!』

刃夜自身が口を閉じての言葉は……不思議と霊体化しているバーサーカーにはつきりと聞こえていた。

それに驚いているのが気配から察せられたが、しかし現界するのは躊躇われたのか、バーサーカーが姿を現すことはなかった。

それに対して、刃夜は安心したようにふっと一瞬だけ笑みを浮かべて……言葉を続けた。

『現界はできないだろうから一方的に話す。異議がある場合は一瞬だけ現界してくれ』

二人の食器洗いの光景を見守りつつ、刃夜は手に持った南部鉄器の急須……当然だが、これも雁夜に買わせた……を右手の五本の指先で支えつつ、手のひらから発する紫色の炎で熱してお湯を沸かしていた。

そして茶葉を取り出す。

おそらく食後のお茶を用意しているのだろう。

お茶は子供もおいしく飲めるように紅茶を用意していた。

ちなみに桜のためか、蜂蜜レモン……これも自家製……を用意している。

『そろそろあっちも焦れて何かしら行動を起こす頃合いだ』

『……』

『その際だが……お前にも役割を担ってもらおう』

『?』

その役割が何なのか？

それがバーサーカーとしても気になったのだが、刃夜はそこで言葉をとぎれさせた。

続きが気になったバーサーカーだったが……しかし現界するわけにもいかなかったため、もやもやとした気持ちになるのだった。

「して、一体どうした綺礼？ いつにも増して上機嫌な理由があるの

だろう？」

時は戻って、再び深夜。

ギルガメツシュが綺礼の部屋でワインを空けている時の会話だった。

その問いは、問いかけであると同時に尋問でもあるといえた。

具体的に先を促されたわけではないが、しかしその問いに答えなければ話が終わらないことは……ギルガメツシュの目を見ればすぐにわかることだった。

その目の眼力に負けた訳ではないだろう。

むしろめんどくさそうに、綺礼は顔をしかめながらその問いに答えた。

「興味がわいた存在が出来ただけだ」

「ほう？」

その答えに対して、ギルガメツシュは興味深そうに顔に愉快そうな笑みを浮かべた。

ギルガメツシュの笑みに、先ほどよりも更に不快そうに顔を歪める。

「それはあの不可思議な存在の事か？」

見透かしたかのように、あるいは見透かされたかのように、ギルガメツシュはそう綺礼に問いかける。

綺礼はそのギルガメツシュの言葉に、一瞬だけ眉をひそめたが……すぐに表情を取り繕った。

「不可思議なのは認める。密かにアサシンに探りを入れさせていたが、開拓者フロンティアなるものの情報はほとんど見いだすことが出来なかった。徒労でしかなかった」

「く……くははははははー！」

そんな綺礼に対して、ギルガメツシュは愉快そうに大声を上げて笑った。

今度こそ、本当に不快そうに綺礼はギルガメツシュを睨み付けたが……その程度でひるむ英雄王ではなかった。

「徒労だと？ それすらもわからぬか綺礼。お前とアサシンの骨折り

には、十分な成果があつたのに気付かぬか？」

「何だど？ 私をからかう気か？ 全てのサーヴァントとマスターの情報渡し、なおその言葉とはどういう意味だ？」

綺礼の言うとおり、先ほどギルガメツシユは綺礼に他の陣営の事について、アサシンから探らせて得た情報全てをギルガメツシユに話して見せた。

それに対するのが、今のギルガメツシユの言葉だった。

綺礼が怒るのも無理はないと言っていいだろう。

だがその怒りの矛先がどこに向かっているのか……綺礼自身が気付いていないようだった。

「解せぬか？ まあ無理もないか。己の愉悦を理解していないのだから」

己の愉悦。

その言葉は、綺礼の胸に何故か突き刺さった棘のように、鈍い痛みを綺礼に与えていた。

それに気付いているのかいないのかわからないが……ギルガメツシユは話を続けた。

「自覚はないようだが、それでも興味を示すのが魂という物。興味を示したという動きが感心として表に現れていた。お前がアサシンによって得られた情報を語らせたのには意味がある」

「何だど？」

「もつとも多くの言葉を尽くして語った部分……その事柄に関することがお前自身が自覚していなくとも興味を示していること他ならぬ。そう……バーサーカーのマスターと貴様が先ほど自ら公言して見せた、八騎目のサーヴァントに対してだ」

一度区切るためか、手にしたワイングラスの中身を一口に煽り、ギルガメツシユはニヤリと……嫌らしい笑みを浮かべる。

その笑みに対して先ほどと違い、感情を露わにして綺礼は言葉を放つ。

「確かにお前の言うとおり、雁夜については入り組んでいると言っているだろう。だが、それも長々語る理由がない。だがお前は他のマスターやサーヴァントに対してはもっと明確に簡潔に語って見せた。だが雁夜ではそれをしなかった。それは何故だと思う?」

「……判断ミスなのは認めよう。無駄に言葉を連ねたところで雁夜は脅威になり得ない。その言葉のせいで、お前から余計な詮索を真似ていたしまったことにな」

苦しそうに、辛そうに……何故かそう思えるような苦渋の表情を浮かべながら綺礼はそう咆えた。

その表情に対してか?

それともその態度に対してか?

はたまたその両方か?

ギルガメッシュはまるで口にしたワインの味と同じように、楽しむかのように綺礼の表情を見つめている。

「なるほど、そう答えるか? だが……もしもお前が今口にした雁夜と八騎目のサーヴァントが残った場合はどうなる?」

「その際にお前は何を想像する?」

「何を想像して苛立ちを覚えている?」

何に苛立ちを覚えるのか?

その問いに対して、綺礼は応えることが出来ず、苦々しそうに顔を歪めるが……何とか平静を取り戻して、逆にギルガメッシュへと問い

かけた。

「教える？ ギルガメツシユ。一体どういう意味があるというのだ？」

「簡単な話だ。意味などない。だがお前にとっては意味があるということだ」

「何だと？」

「仮に他のマスターに対して同じ課題を出されたのならば、お前はすぐに無意味さに気付いて早々に調査を打ち切った。だが雁夜と八騎目のサーヴァントに対してはそうはならなかった。お前は平時の無駄のない思考と判断力を放棄し、永延とやくたいもない思考に耽っているという事実」

「益にならない徒労 それこそが紛れもなく遊興……つまりは愉悦だ」

愉悦という言葉。

先ほどまでは何も感じなかったはずの言葉に、綺礼は激しく動揺する自分に気がついた。

その動揺は当然、そばで綺礼を見つめるギルガメツシユに見抜かれていた。

更に追い打ちをかけるように……ギルガメツシユは更に話を続ける。

「喜んではどうだ綺礼？ お前はついに娯楽のなんたるかを理解したのだぞ？」

「なんだと？」

「雁夜に対して貴様は雄弁に多弁に言葉を重ねた。だが八騎目のサーヴァントに対しては言葉が少なかった。貴様がアサシンによって手に入れた情報から鑑みるに、お前は雁夜の予想して然るべき未来を潰

されたのが気に入くない……ということだ」

「っ!? そんなわけがない! 他者の痛みと嘆きを喜ぶだと? この言峰綺礼が? それはばっせられるべき悪と——!?!」

悪徳とでも言うつもりだったのか……その言葉は続くことがなく、突然右手から発した激痛によって強制的に止められることになった。そしてその右手の手の甲に……血のように赤い令呪が浮かび上がった。

「ほう? どうやら聖杯は貴様にずいぶんと期待をしているようだぞ?」

「何だと?」

「聖杯の求めに応じてはどうだ? 綺礼? 求められるのと同じように、お前にも求めるだけの理由があるはずだ」

「……私が?」

ギルガメツシュの言葉に対して……綺礼はただ茫然とそう答える。そう答えるしかなかったのかも知れない。

何せ今綺礼の心は、疑問で埋め尽くされていたのだから。

「仮に此度の聖杯戦争の聖杯が真の願望機であったならば……お前の自らが理解出来ない心の奥底の願望を与えてくれるかも知れないぞ?」

「だ……だがそれは、他の六つの願望を押しつけることに他ならない。それはつまり……我が主をも敵に回すことに……」

「わかっているではないか綺礼。そうよ、貴様はこの状況……サーヴァントに空きがない状況では、他の者からサーヴァントを奪うことから始めなければならない。せいぜい強力なサーヴァントを手に入れることだな? 何せ……この俺を敵に回すことになるのだから」

爛々と……何故か目を離すことが出来ない妖しい瞳のギルガメツシュ。

その瞳の妖しきにも……視覚的に光っているかのように見える瞳にも気付かなかった。

気付かなかったのだ。

「求めることを成せよ綺礼。娯楽は愉悦を導き、愉悦は幸福のありかを指し示す。その愉悦を……幸福を邪魔する存在をどうするかなど、考えるまでもないだろう？」

綺礼を諭すように言葉を紡ぎながらも……ギルガメツシユは自らも心が躍っていることを十重に自覚していた。

綺礼から得た情報……それはアサシンがほとんど情報を得ることが出来なかつたという事実には他ならない。

気配遮断スキル。

歴戦の英雄……英霊ですらも気付くことの出来ない絶対的な隠密の力。

アサシンとしてそのスキルを十分に有しているにもかかわらず、アサシンは八騎目のサーヴァント……刃夜の情報を全く得ることが出来なかつたのだ。

その事実、ギルガメツシユを喜ばせるには十分すぎた。

さて……あの小僧。どうしてくれようか

怪物出現

「さて、今宵の晩飯は何がいいかね？ とりあえず和洋中他諸々。大概のポピュラーで作りやすくうまい飯は作ってきたが……。桜ちゃんは何がおいしかった？」

「刃夜おじいちゃんの料理は本当に、何でもおいしかった！ だからどれかっていうのは決められないかも」

「ふむ、嬉しいことを言ってくれる。まあそれなりの修行を行っているのだから、ある意味で当然なんだが」

「子供になんつーことを言ってるんだよ、刃夜」

刃夜がリフォームした台所で、いくつかの食材を取り出しながら刃夜と桜は並んで立ち、何の料理を作ろうか悩んでいるようだった。

雁夜は手伝わず……。正しくは刃夜に体のことも考えて調理については禁止令を喰らっている。が、食後の皿洗いはさせられている……。椅子に座って桜の様子を見守っていた。

「事実だから仕方あるまい」

「それはそうなんだろうけど……」

「料理の基礎は教えているから後は手順と食材の扱い方辺りをもう少し教えても良いなあ……。となると何が言いかね？ とりあえず定番の肉料理辺りから行こうかなあ」

「鶏肉の何かがいいな」

どうやら桜は鶏肉料理がお気に入りようだった。

ただそんなことよりも、桜が自らの主張を口にしたことが、雁夜にとっては何よりも嬉しいことだった。

その思いは刃夜も同じなのだろう。

桜に笑みを浮かべながら、刃夜も同じように嬉しそうに口を開いた。

「ほう鳥か。ふむ……では逆に基本に立ち戻って難しい料理よりも簡単な料理で基本的な味わいの料理——」

そこまで言葉を紡いで、刃夜は何故かふと言葉を止めた。

そして、あらぬ方角へと視線を投じる。

突然変な動きをした刃夜に桜と雁夜が不思議そうに、刃夜へと目を向ける。

「刃夜おじいちゃんどうしたの?」

「……どうやら事が来たらしいな」

「事?」

ニヤリと、実に好戦的に笑みを浮かべながら、刃夜はぼそりとそう呟いた。

その呟きがどういう意味なのかわからない桜と雁夜は、ただ不思議そうにするしかなかった。

その二人に対して、刃夜は決定事項とでも言うように、強い意志を込めて言葉を放った。

「とりあえず今夜の料理教室は中止。これから作戦会議を始める。飯は俺がちやつちやと作る」

「中止? どうしてだ?」

「今宵で、最低限行わなければいけない難題を片付ける」

桜にわびるように頭を撫ながら、刃夜はすぐさま調理へと取りかかった。

その速度はまさに神速。

あつという間に簡素だが栄養満点で、実に食欲のそそられる匂いが台所を漂った。

「ごめんな、桜ちゃん。後日に望み通り鳥料理を教えてあげるからね」
「うん」

刃夜の言葉に頷くが、どうやら寂しいことは間違いないらしく、桜は少々残念そうに顔を歪ませていた。

その桜に罪悪感を覚えてはいるのだろうが、しかし刃夜はそれでも雁夜へと、言葉を放った。

「おそらく今夜、相当でかいことが起こる。その際、こちらの問題は片付けるぞ」

「でかいって?」

口を閉じて、刃夜と二人の会話を繰り広げるために、口を閉じたままだったが。

もりもりと、いつもよりも素早く、だがしつかりと噛みながら、刃夜は高速で自らが作った料理を胃袋へと収めていく。

戦前の腹ごしらえという意味なのだろう。

刃夜がここまで明確に戦闘を意識させることを今までしていなかったため、雁夜としても何か大事が起こると嫌でも意識させられて、気を引き締めて食事をする。

そして刃夜と雁夜……そして念話でバーサーカーと雁夜……が会議を行い、夜のとばりが降りて

冬木の川に、巨大な海魔が召喚された。

あらくこれはまためんどくさそうな奴が来たなあ……

夜になり始めた逢魔が時。

その光景はまさに逢魔が時といって何ら問題のない光景となつて、刃夜の目に映っていた。

距離にして未だ数kmはあるはずだというのに、はつきりと見えるその巨体。

大きさは、そばの冬木の新都と旧市街地を結ぶ大橋よりも大きいことから、容易に巨大であることが想像できる。

その巨大海魔へと、刃夜は一人で疾駆していた。

そしてそのそばに、雷鳴が閃いた。

「おおい！ ジンヤよ！」

屋根から屋根へと飛んで高速で移動している刃夜の横を、空飛ぶチャリオット戦車が並走する。

声とその宝具からして考えるまでもなく、ライダーことイスカンドルと、そのマスター、ウェイバーの二人組だった。

「どうした征服王？ 俺はあのデカぶつの退治に向かうところだが、お前は？ 同じじゃないのか？」

「ほ。そいつは重畳。その通りだ。今他の奴にも声をかけているとこ

ろだ。先に向かっけていてくれ」

「了解だ」

短いやりとりを終えて、ライダーが空を駆けて行く。

その様子を横目に見ながら……刃夜はぼそりと、小さく呟いていた。

「さて、これで予定通り終われば良いんだが……さてさて」

そう呟きながら、刃夜は冬木の川辺にたどり着き、その場にすでにセイバーとアイリの姿を見つけてそのそばへと降り立った。

「ようセイバー。それにアイリスフィールのご婦人。ご機嫌いかが？

まあ良くないとは思うけど」

「ジンヤ。あなたも来たのか？」

「そらな。これ、あの怪物の集合体ないしボスだろ？　これが街に行ったらえらいことになるぞ？」

「たしかに……そうね」

一度共闘しているのと、また状況が状況ということで、ジンヤにもセイバーにも互いに戦うという意識はないようだ。

互いにこの膨れあがった巨大な海魔をどうにかするということ共通の目的があった。

そしてすぐにライダーの呼びかけに応じたランサーが集まり、ちよつとした作戦会議が行われた。

「僕とライダーは戦ってないけど、他の奴らは一度戦ったんだろう？」

「あんたらに何か策は？」

この場で唯一のマスターであるウェイバーの言葉。

それに対して言うことは単純明快だった。

ともかくあのデカイ化け物が、岸边に上がって捕食……生命体を喰らって活動する……する前に討伐すること。

これ以外にあり得なかった。

「あんなのが岸边に上がったら……無作為に人を食べてしまう。それだけは避けないと」

悲痛な面持ちで、アイリスフィールがそう言葉を放つ。

ここまで聖杯戦争の……魔術の大原則である、秘匿を無視されたこ

とに対する怒りと、冬木に住む人々の営みが無秩序に犯されそうになっっている事に対しての怒りがあわさったものなのだろう。

一般市民を巻き込んで良しとする人物は、この場にはいなかった。「とりあえず川で足止めをすることで……決め手に欠けるな。あのキャスターめをどうにかせんことにはあの海魔はとまらんだろう。だが、キャスターはあの分厚い化け物の中だ。どうする?」

「引きずり出せば、我が破魔の紅薔薇で仕留めることが可能だ」

「ランサー。あなたの腕を疑うわけではないが……この岸辺からキャスターの宝具を投擲で仕留められるか?」

同じ騎士として、妙な信頼感があるセイバーとランサー。

互いに手の内を明かすことになっているというのに、特にそれに対して思うことはないらしい。

といっても、すでにセイバーもランサーも真名については半ば周知の事実となっているのもあるだろうが。

「造作もない」

「よし、では方針が決まったな。とにかくにもあのキチガイを怪物の腹の中から引きずり出す」

刃夜が巨大な海魔を睨み付けながら、そう絞める。

皆同じ気持ちなのだろう。

とにかくにもあの海魔を退治するのだと。

「それしかあるまいな。さて、ならばランサーはこの場で待機するとして、セイバーにジンヤ。余の戦車は道など不要であるから問題ないが……お主らはどうする?」

「舐めるなよ征服王。この身は湖の乙女の加護を受けている。水が我が歩みを阻むことは出来ない」

「ほう」

セイバーのスキルに、ライダーは実に興味深そうに笑っていた。

その笑みを見て、刃夜はライダーに半ば呆れていた。

以前に自らが言われた軍門に下るといふ事を、こんな時にでもそんなことを考えているらしい。

「ならばセイバーは問題ないとして、ジンヤ? お主は?」

「あー俺は跳べるし、飛べるからどうとでもなる」

「ほほう？ 飛べるとな？」

そして今度は刃夜の言葉に、ライダーはさらに興味津々そう問うてくる。

さすがにこの好奇心と言うべき行動に、この場にいる全員が呆れた様な顔をライダーへと向ける。

そして当然だが……その気持ちが一番大きいのは刃夜だった。

「ともかく行くぞ。もたもたしてると、戦車に先駆けて一番槍をもらつちまうがいいのか？」

「ほう？ それは余に対する挑戦状と受け取って構わないか？」

「どちらでも？ ともかく俺は行かせてもらうぜ？」

刃夜が左手を握り、自らの得物を顕現する。

その左手に握られているのは、優に全長数メートルはあろうかという、巨大な刀だった。

刃渡り二丈（600cm）。

身幅は刃夜がぎりぎり握り込める程度で二寸（6cm）あり、重ねの厚さは下手な文庫本ほどの厚みがある。

柄はその長さに対応してか、二尺二寸（66cm）の長さがあった。だが柄がかなり薄めに作られているようで、その長大な大野太刀を

握り込むのに支障を来さないように拵えられていた。

全長二丈二尺二寸（666cm）の大野太刀、銘をスサノオ・ニガタ斬老刀式型。

そんな、普通の人間は持つどころか、僅かでも上げることすらもできないであろう巨大な刀を……刃夜は苦もなく持ち、重さを感じさせないほどの疾走で、まるで放たれた刃の弾丸のように、海魔へと突貫した。

その速さには、周囲の人間は驚き昂揚するのと同時に、競争心が爆発した。

「ほう!? やるではないかジンヤ！ だが、余の戦車は神威の車輪。そんじよそこらの戦車とは、比べものにならぬ一品よ！」

雷鳴が響き、稲光がいくつも瞬き、ライダーの宝具……神威の車輪を引く神牛である飛蹄雷牛が凄まじいなり声を上げて宙を走る。

状況が状況とはいえ、さすがに二人の英霊の勇士を見せられては、さしものセイバーも気が猛ったようだった。

刃夜に負けじと川の水をしっかりと踏みしめて疾走し、海魔へとつつこんだ。

「行くぞ、キャスター。貴様が何を企んでいるかはわからんが、この場で決着をつけよう！」

見えない聖剣を振りかぶり、セイバーも巨大な海魔へ斬りかかった。

そんな他のサーヴァント達がいる中、英雄王ギルガメッシュだけは、ただ自らの宝具である天翔る王の御座にて、上空で他のサーヴァント達の様子を眺めていた。

計、四騎のサーヴァント達が巨大海魔に攻撃を行っている様子を、実に興味深そうに。

そしてもつとも注視しているのが、刃夜であった。

ほう、あのような巨大な剣も用いるか。あれだけ巨大でありながら、なかなか興味をそえられる得物だ

嬉しそうに笑みを浮かべて他の四騎が戦う姿を、見つめている。

そのギルガメッシュの態度と下の状況を、マスターである遠坂時臣は、苦虫をかみつぶしたような思いで見つめていた。

言峰璃正と共に画策した令呪の報酬を得る事が出来そうになく、また神秘の秘匿……魔術に対する侮辱にしか取れないこの状況であれば、仕方ないのだろう。

生粋の……魔術師らしい魔術師である遠坂時臣では。

その宙の黄金に輝く玉座に座す、英雄の王へと……現代の巨大で無骨な鉄の翼が

踊りかかって来ようとしていた。

「ほう、あの狂犬め。あれから姿を現さないからどうしたのかと思っただが……どうやらまだ生きていたらしい」

「王よ、下にバーサーカーのマスターがいます。私はあちらの迎撃に向かいます」

「よい、許す。遊んでやるがいい」

遙か上空にある天翔る王の御座からまるで階段を一段下りるとでもいうように足を踏み出して、遠坂時臣はバーサーカーのマスター……間桐雁夜がいるビルの屋上へと舞い降りた。

ギルガメツシュただ一人となった一天翔る王の御座へと、鋼鉄の無骨な翼が……襲撃をしかける。

そのコクピットには、黒紫の騎士が乗り込んでおり、操縦桿を握っていた。

「ふん。地に伏す狂犬の分際で、我のいる王の天へと上つてくるとは、ごさかしい。その意気はよしとしてやろう。だが……粹がるなよ、雑種！」

天翔る王の御座の背後に展開される、ギルガメツシュの王の財宝。

その宝物庫から射出されたいくつもの宝具が、バーサーカーが操る鋼鉄の翼へと、襲いかかる。

その宝具全てを、バーサーカーは難なく回避を行い……あろう事か戦闘機に装備されている機関砲で、天翔る王の御座へ攻撃を仕掛ける。

その動きには確かな戦略と知性を感じさせるものがあつた。

「ほう？」

その理知的な戦闘行為に、ギルガメツシュも意外そうな……だが妙に嬉しそうな言葉を漏らしていた。

「狂犬の狂った猛りが消えているな。一体何があつた？ 犬めが」
天翔る王の御座を操作しながら、バーサーカーとの空の戦闘を楽しみながら、ギルガメツシュは実に嬉しそうにその戦闘を行っていた。

片や黄金に光り輝く神話の箱舟。

片や現代科学で作られた鋼鉄の翼。

正反対な空飛ぶ力が、互いを墮とさんとその牙を剥く。

上と下。

聖杯戦争では異例の大規模戦闘。

上は飛行戦。

下は怪物退治。

それはまさに神話の再現と言つていい光景だった。

父として 兄として

「づあっー！」

裂帛の気迫の呼気が、刃夜の口から発せられる。

全長の長さがあり得ないと言っているいい長さの刀を振るっているのだ。

それも当然といえたが……その刀を振る姿は常規を逸していた。

その一薙ぎで、海魔の触手が数本吹き飛んでいく。

また刃夜が先に言ったとおり、何もなければずの宙で足場があるかのように大野太刀を振るい、場合によっては本当に飛翔していた。

さらには、別の二人……セイバーとライダーが危機に陥った際は、左手を軽く握っていくつもの短刀を顕現して、投擲していた。

「電磁投擲刀、^{カケリ}翔」

音速を優に越えた速度で放たれたその短刀は、野太い海魔の触手を一部破碎させるほどの威力を秘めていた。

「かたじけない、ジンヤー！」

「いいから前見ろセイバー……まだわんさと来ているぞー！」

自らに迫り来る幾重の触手を斬り飛ばしつつ、刃夜が怒鳴った。

その言葉通り、いくつもの触手がセイバーへと迫る。

それら全ての触手を、見えない剣でセイバーは易々と断ち切った。

そして宙を走るライダーの戦車と、ライダー自身が振るう剣によって切られるが……切られた端から再生を繰り返す、すぐに復活する。

それどころか、他からそれ以上の触手が自らを斬りつける敵へと……サーヴァント達へと襲いかかる。

それらを単独で、他は互いに互いをフォローしつつ、捌くが……現状、キヤスターを引きずり出すどころか、肉薄すらも難しいと言わざるを得ない状況だった。

「つちー・キヤスターめ」

一向に事態が好転しない状況に、セイバーが歯がみしながら吐き捨てる。

実際、その場にいる誰もが同じ思いだった。

何とか川に繋ぎ止める……街へと進ませることだけは防いでいるがそれだけだ。

しかも徐々にこちらの攻撃を防ぎながら街へと進んでいつているのだ。

焦るのは当然といえた。

やがて、埒が明かないと判断したのか、ライダーが全員を一度岸边へと集めて作戦会議を行った。

といっても時間稼ぎを担っただけだったのだが。

それはライダーの宝具である王アイオニオン・ヘタイロイの軍勢で足止めをしている間に、どうにかしてキャスターを吹っ飛ばす策を考えろという、半ば丸投げの作戦だった。

そしてその作戦に……

「おい、征服王……」

「む？ どうしたジンヤ？」

刃夜が巻き込まれていたりした。

刃夜の眼前に鎮座するのは巨大な海魔。

それはさきほどから変わっていなかっただが、周囲の光景が一変している。

王アイオニオン・ヘタイロイの軍勢の固有結界の砂漠の中にいるのだからそれは当然といえたが……。

「何故俺がこの場にいるんだ？」

別段刃夜がいる理由はどこにもない。

現に、ライダーのマスターであるウェイバーは結界の中にはおらず、この場には巨大海魔と、刃夜、ライダー、そしてライダーが呼びだした部下である彼の軍勢がいるだけだった。

「何、貴様に我が軍団を見せたくてな。これが我の魂の力。

アイオニオ・ヘタイロイ!!
王の軍勢!!!」

己の自慢の兵士達を刃夜へと見せつける。

背後の兵士達の個人の力は、召喚されたのが英雄時代と言うことも相まって、刃夜より劣る。

だが……それでも数という暴力は単純故に恐ろしいことを、刃夜は十分に理解していた。

「数による攻撃……。単純故に最強の力だな。恐れ入った」

そしてこの宝具の力が、「数」だけが恐ろしいものではないことは、兵士一人一人の顔を見れば、すぐに理解できることだった。

「前にも誘ったと思うが、再度問おう。余の軍勢に入らんか？」

刃夜の言葉に嬉しそうに破顔しながら、ライダーは再度刃夜に勧誘の言葉を投げかける。

だがそれに対する答えは、以前と変わるわけもなかった。

「……これほどの力を見せて貰い、さらには、かの征服王から勧誘の言葉を賜って至極光栄だが……遠慮しておこう。俺には……やらねばならないことがある」

刃夜の願い、刃夜が自ら成しえなければならぬこと。

そのために……刃夜は今まで戦ってきたのだから。

刃夜がただ断っているだけではないのはライダーもすぐに看破していたのだが、それでも刃夜に対する興味が尽きないのか、言葉を続ける。

「ふうむ……待遇は弾むぞ？」

「というかあの怪物を前にしてそんな馬鹿なこと言っている場合じゃないだろう？ 行こうぜ？ 怪物退治になあ!!!」

眼前の巨大なこのような真っ黒い生物へと自慢の巨大な得物を向けつつ……刃夜は吼えた。

その刃夜の咆吼に、鬨の声を上げる英雄達。

自らの部下達を鼓舞する刃夜の言葉に、征服王イスカンドルが、震えるはずがなかった。

「応とも！ 征くぞ我が友よ！ そしてジンヤよ！ 足止めにとどまらず、あの怪物の首を落としてくれようぞ！」

「「然り!!」」

王の号令の下、英雄達が怪物へと走る。

そしてその王たるライダーが、戦車を駆って突貫する。そのさらに先へと……刃夜が突風のようにかけだした。

「申し訳ないが本気が出せない状況だからな。その分今使える全力で、刀を振るわせてもらう！」

右手に持った斬老刀スサノオ・ニガタ型とは別の巨大な刀を顕現させて、刃夜は大野太刀二刀流の構えで飛び上がり、海魔へと斬りかかった。

遙か上空から降りてきた遠坂時臣は、その落下速度を余すことなく自らの魔術で打ち消して、雁夜がいる屋上へと優雅に舞い降りた。

そして雁夜の姿を見て、一言、侮蔑の思いを込めた言葉を口にした。「変わり果てたな。間桐雁夜」

「遠坂……時臣」

一方は侮蔑。

他方は怒り。

互いに互いのことを負の感情でとらえ、互いのことを軽蔑していた。

時臣は魔導を諦めなかったと認識して。

雁夜は……あらゆる感情の籠もった憎悪を向けて。

「遠坂時臣。俺から言うことは一つだ。何故桜ちゃんを間桐の家に養子に出した！」

これだけは、自らの身命に賭けて問わなければいけないと誓った、雁夜の思いだった。

自らの愛娘を、あの地獄ですら生ぬるい環境へ送り込んだ悪魔の様な所業。

その所業の由縁を知りたかったからだ。

それに対して、時臣の返答は実に簡潔だった。

「愛娘の未来を思つてのことだ」

「なん……だと……」

時臣からの言葉に、雁夜は今まで心の中で滾っていた怒りすらも忘れて、ただ茫然と時臣を見据えた。

その雁夜の茫然とした姿を見て、時臣は嘆息しつつ、言葉を続ける。

まるで出来の悪い存在に、講釈を延べるかのように。

「魔術は一子相伝。故に、二子を得た場合片方は凡俗へと墮とさねばならないジレンマ。我が妻の葵は母体として優秀にすぎた。生まれてきた我が子は二人とも類似希な魔術の才能を有していた。その才能を潰したくなかった。ただそれだけだ」

「それ……だけ……？」

「いずれかのために、もう片方が自らの輝かしい未来を知ることもなく潰される事を、望む親などいない」

茫然と……雁夜は時臣の言葉を聞いていた。

葵と凜……そして桜。

三人が公園で楽しげに戯れている姿を、暖かく見守っていた雁夜からしたら信じられない言葉だった。

凡俗。

母と娘の幸せな時間を、時臣はただの凡俗と切って捨てたのだ。

そのあまりにも人間らしからぬ……魔術師としてしか考えを持たない時臣に、雁夜は怒りを越えて絶句した。

だがすぐに……

桜の光のなかった瞳を思い出す。

時臣が桜の事を……魔術師としての桜の事を思ったのは間違いなかった。

間桐の家に養子に出したのも、聖杯戦争を知る家名であるため、それだけ根源へと至る可能性が高いと言うことだ。

また親である時臣の鼻目から見ても、確かに姉妹揃って魔術師として才能が溢れているのは事実だった。

故に、「魔術師」という観点から見れば、時臣の判断は間違っていない。

だが……間桐の内情を知る雁夜からすれば……

少なくとも間桐の家に養子に出したこと

何より桜にあの絶望を味合わせたことだけは……「魔術師」である時臣と、「人間」である雁夜の価値観の違いを差し引いても……

決して許すことが出来なかった。

間桐の内情を知らないこともわかっていた。

だがそれでも……

雁夜は……許すことが出来なかった。

知らないから許される訳がない。

許されて良いはずがない。

桜の絶望と……桜の優しさを知った。

その桜に賭けて。

負けるわけにはいかなかった。

「時臣!!!」

その怒りに逆らわず、雁夜は肩から提げている黒い布のシースから、対の双剣を……抜きはなった。

「……ほうっ……」

抜かれた得物の異様さに、さしもの時臣も素直に感嘆の声を漏らしていた。

だがそんなことは雁夜にとってはどうでもよかった。

ただ目の前の存在を……

葵を奪い

凜を悲しませ

桜を地獄の目に遭わせた

遠坂時臣という存在を

【■■■■■■■■】という思いで支配されていた。

「時臣!!!」

咆吼を上げて、雁夜が剣を振り上げながら時臣へと走った。

その走りは、決して早くはなかった。

だが全く危うさがなかった。

変わり果てた姿でありながら、それでも雁夜は普通に走ったのだ。

その対の剣を振りかぶりながら。

剣を持って走って走ってくるだけか。魔術も何もなく、ただの人でしかないということか

始まりの御三家の一つである間桐の家出身である間桐雁夜。

一度魔術の道を諦めながらそれでも聖杯戦争に参加してきた存在。

聖杯戦争という、魔術師においては名誉たり得る戦に参加しておきながら、魔術すらも使用してこないその様子に、時臣は落胆した。

知らずうちに雁夜に淡くも期待していた自分に驚きつつも、時臣は自らの魔術を使用し、手にした巨大な宝石がはめ込まれた杖で、炎の魔術を何の詠唱もせず発動し、火の玉を放った。

だがそこで驚くべき事が起こる。

「おおおおお！」

飛来した火の玉。

触れれば火傷ではすまず、全身が焼けただれるであろう巨大な炎を、雁夜は手にした双剣……封龍剣【超絶一門】で斬り捨てたのだ。

斬り捨てられたその瞬間に……炎が消失した。

「!? 馬鹿な!？」

これにはさしもの時臣も瞠目した。

魔力が込められた凄まじい剣であることは、時臣もすぐに気付いていた。

だが双剣が行ったのは、火の玉の切断ではなく吸収だ。

いかに魔術師として優れた存在である時臣といえど、魔術の吸収は容易ではない。

それをただ剣を振るうことだけで行って見せたのは、驚くには十分すぎた。

だが驚くばかりだけではない。

すぐに体勢を立て直して、連続で紅の炎を使用し、雁夜へと攻撃を仕掛ける。

だがその悉くを、雁夜は対の剣で切り払い、その火の玉を吸収していた。

明らかに素人でしかない動きであるというのに、雁夜はその全てを斬り捨てていた。

そしてこの状況に陥ってようやく、時臣は雁夜の総身からあふれ出す凄まじい魔力の波動を感じ取った。

何かしてきたのか？

その魔力の質と量で、時臣はようやく雁夜の異常とも言える動きの正体に気付いた。

雁夜は刃夜からの魔力供給と、更に服用した数多の薬で半ば無理矢理に身体能力を強化している状況だった。

その事情を知らない時臣からしても、素人でしかない雁夜の異常な

動きが、一時的なものでしかなく、すぐに見抜ける事だった。故に、攻撃を続けられずに倒れると判断し、連続して攻撃を仕掛ける。

だが……

「ああああああ!!!」

鬼気迫る顔と声で、雁夜は叫び続けて……じりじりと時臣へと近寄っていく。

優秀すぎると言っただけで差し支えない時臣の連続攻撃に、さしもの強化された雁夜であっても容易に近づけるものではなかった。

だがそれでも……雁夜は近づいていく。

執念と怨念……憎悪によって。

その死の一步手前まで喰われた体を酷使して。

桜のために。

己のために。

雁夜は進んだ。

時臣を【■■■■■】ために。

死に体の体で突き進んでくる鬼気と狂気。

そして素人でしかないはずの雁夜が、優秀な魔術師である自らの攻撃を、無理矢理強化された体で防ぎ続けているという事実。

それを可能にしている、異様な対の魔剣の存在。

時臣がゾクリと……恐怖を感じさせるには十分すぎた。

そしてその恐怖が……怒りへと変換される。

始まりの御三家であり、名家として自他共に認める遠坂家当主。

遠坂時臣。

その時臣が……魔導を諦めそれでもなお、聖杯という甘い汁に縋ってきた羽虫にも劣る存在に……。

恐怖したという事実が、自らを殺したくなるほどに……怒りを覚えた。

「雁夜!!!」

先ほどもまでの優雅さがかき消えて……時臣が咆える。

そしてその杖の先に……今までは比較にならない魔力が充填される。

その魔力が時臣の魔術刻印によって力が術へと変化し……

屋上を吹き飛ばすほどの爆発が起こる。

爆心地は当然……雁夜。

「っ!!!」

時臣が叫んだその瞬間……雁夜は遮二無二つつこんだ。

だが当然まだ時臣に届くこともなく、爆発を起こす。

やったか……

時臣は爆発の後、煙によって視界が悪い中、そう考える。数でダメならば範囲で。

避けることの出来ない爆発攻撃で仕留める。

実に単純で明快な、殺すための魔術。

普段の時臣からすればあり得ないと言っている、戦術の組み立て方だった。

最初におごりすぎたためのツケと言っているだろう。

そしてその油断が……

「時臣いっいっいっ!!!」

自らの敗北を招くことになった。

馬鹿な!?

明らかに避けることの出来ない爆発を見舞った。

故に普通の人であればいくら強化されていると言っても、確実に体がばらばらに吹き飛ぶほどの過剰な攻撃だった。

いくら魔力を吸収する魔剣……封龍剣【超絶一門】といえども、広範囲の攻撃を全て吸収することは出来ない。

今の状況では。

だが雁夜が所持している宝具は……封絶だけではなかったのだ。

「守」

そう思念を込めて彫られた木の板。

刃夜が自らの気を込めて造り上げた護符。

これが雁夜を守る壁となって……勝利へと導いた。

そして勝負を決める一撃を……

雁夜が振るった。

「あああああ!!!」

渾身の力で振るわれたその刃は……

時臣の体に深く食い込み、時臣の体を深く抉っていた。

「打開策ありの時間稼ぎでいんだな!」

「の、ようだ!」

「ならもう一踏ん張りすつか!」

自らを鼓舞するようにそう声を張り上げて、刃夜は再びその大野太刀を振るう。

自らの背丈を楽々と越える巨大な刀を振り回す姿は、もはや圧巻の一言といえた。

その姿を、ライダーは自らの戦車から見据えて、舌を巻いていた。あれほどの巨大な得物を振り回すとは……一体どんな体の構造をしとるんだ?

両手に握った刀はどちらも刃渡りだけで数メートルはある。

通常持つことなど出来るわけもなく、振るうということは不可能と断言出来る。

刃夜としても、気力によって身体能力を強化してこそ出来る事ではあったが、それを差し引いても恐ろしい膂力である。

またその振るっている刀自体も、ライダーの心の琴線に触れていた。

あの剣は一体何なんだ? 宝具なのは間違いないのだろうが、余り特殊なものを感じないのだが……

宝具と一言に言っても、その種類は多岐にわたる。

武器という明確な物として存在しているものもあれば、能力としての宝具もある。

刃夜の宝具は明確に「物」の宝具であることは見ての通りだ。

だがライダーが気になった特殊な物を感じないというのは、少々意味合いが違う。

ライダーの言う特殊なものというのは、簡単に言ってしまうえば「神秘」が宿っていないということだった。

もっと端的に言えば……神造兵装といった「神」や、「星」といった、超常の存在を感じさせないという事だ。

セイバーは宝具、約束された勝利の剣が神造兵装であり、文字が表すとおり、神が造った剣である。

巨大海魔は腐ってもキャスターの宝具であり、悪魔と言つて差し支えない。

ある種で超常の存在とも言えるその海魔を、易々と切り裂き、千におよぶ斬撃に耐えうる強度を有した武器を、刃夜が鍛造できるとしたら？

そしてその武器を……自らの配下達が扱えるとしたら？

ライダーの野望の一つに世界征服がある。

その自らの目的にかなり有用であることは疑う余地がなかった。

「はくはっはっはっは！」

その事実気付いて、ライダーは心から笑った。

戦闘中に突然笑い出したライダーに、少々いぶかしげな瞳を向ける刃夜だったが、そんなことは今のライダーには関係ないことだった。ますます欲しくなったぞ!? ジンヤ!

なんとしてもこの不思議な存在を自らの軍門へと迎え入れると、気持ち新たにしたライダー。

そのライダーの豪快な笑い声に……刃夜は少々背筋が寒くなる思いだった。

……なんか余計なことにならないと良いけど

余計な一言を口走ったかも知れないと、少々反省する刃夜だったが時すでに遅し。

ミスをしたとって問題ない発言だった。

そして何とか時間を稼いだ甲斐もあり、ランサーが自らの宝具を破壊したことでセイバーの左腕の呪いが解け、それによって対城宝具である約束された勝利の剣が使用可能となり、巨大海魔をそれよりも更に巨大な閃光によって、吹き飛ばすことに成功した。

そしてその瞬間……動き出す存在がいた。

それは約束された勝利の剣が発動する、少し前。

とある屋上にて雁夜が手にした封龍剣【超絶一門】によって、時臣

の魔術をくらって時臣の大技を誘い、その大技を刃夜の護符によって防いだ時だ。

護符によって爆発を防いだ雁夜は、渾身の力を込めて封龍劍【超絶一門】で時臣へと斬りかかった。

だが、その剣は服こそ着ることが出来たが、しかし時臣の体を引き裂くことはなく……大きなあざを時臣の体に刻みつけた。

そして薬によって身体能力が強化された雁夜の力で、時臣は吹き飛ばされる。

「がっ!」

吹き飛ばされたために、時臣が苦悶の声を上げていた。

刃夜から貸し与えられた封龍劍【超絶一門】。

その双剣で、雁夜は確かに斬ったのだ。

自らの妄執を。

吹き飛ばした時臣を見つめながら……雁夜は静かに息を吐き捨てていた。

そして、礼の言葉を紡ぐ。

「ありがとう、刃夜。それに……封龍劍【超絶一門】」

『礼にはおよぼんよ。見事だった』

雁夜と、半ば意識が朦朧としている時臣しかいないはずの屋上で、雁夜の言葉に返す存在がいた。

それは雁夜が自ら手にしている双剣、封龍劍【超絶一門】の言葉だった。

時臣との戦いが始まるその瞬間に……初めての戦闘で焦った雁夜を元に戻したのは封絶の意志だった。

今まで刃夜に言われて言葉を発さなかった封絶。

その理由は、剣が言葉を話すという衝撃的な事実によって、万が一の際の冷静さを取り戻させるためだった。

その刃夜のもくろみは見事に成功したのだ。

封絶は戦闘が始まる前に、怒りで我を忘れそうになった雁夜に……こういったのだ。

『桜の言葉を思い出せ』

と……。

先日、食後の時間に刃夜は言ったのだ。

桜の気持ちを確認したいと……。

「どういう事だ？」

「そのまんまの意味だよ」

桜の気持ちという言葉に、雁夜は疑問符を浮かべる。

その雁夜に対して、刃夜は普段とは違い厳かに言葉を返すだけだった。

「桜ちゃん」

「はい」

桜も刃夜が普段とは違うことが態度でわかっているのか、少々怖がっている様子ではあった。

それにもとりあわず、刃夜は言葉を放った。

「俺がああの妖怪爺を討伐した暁には、地獄のような日々はもう起こらないだろう。その場合、遠坂と間桐の家……どっちに帰りたい？」

!?

その言葉は雁夜に衝撃を走らせるには十分すぎた。

そしてそれと同時に、刃夜に対して初めて怒りの感情を抱いた。

その怒りに逆らわずに……雁夜は怒りを露わにして刃夜に怒鳴った。

「遠坂に家に帰るだって!? 桜ちゃんにあんな想いをさせた時臣の家にか!?!」

雁夜が怒鳴ったその言葉で、桜がびくっ体を震わせた。

だが隣にいるその桜の様子にも気付かずに……雁夜は怒りと憎悪に染まった瞳を刃夜へと向ける。

その瞳を真つ向から受け止めて……刃夜は言葉を続けた。

「確かに桜ちゃんの父親である時臣が、桜ちゃんをあんな目に……地獄の苦しみを味合わせた原因の一端を担っている。だが、その行為を時臣が臍硯に要求したのか？」

「そ……それは」

その言葉に雁夜は言葉を詰まらせる。

桜はあの地獄を思い出しているのか、顔を青くさせていたがそれでも必死になって耐えていた。

その様子を横目に見て、雁夜は更に刃夜に食ってかかる。

「確かに時臣が直接的に要求したのではないかも知れない。だが、あいつが原因なのは間違いない！ 調べようと思えばあの男なら調べられたはずだ！」

「魔術師であるあいつが他家の内情を調べると？ 魔術師である時臣がそんなことをするとは思えん。まあある程度は把握していただろうし、調べただろうが……調べられた程度でぼろを出すようなハマを、あの妖怪爺がすると思うのか？」

「だ……だが……」

「この際だ……はつきり言ってやろう雁夜」

「な……何をだ？」

刃夜の言葉に、雁夜は黙らざるを得なかった。

黙らなければいけないほどの、凄まじい気迫で刃夜がそう言ったのだから。

雁夜は刃夜の言葉を待つしかなかった。

そして刃夜が放った言葉は、鋭い牙となって……雁夜の心を抉った。

「お前のその時臣に対する妄執とでも言うべきその感情。その感情を桜ちゃんのためと、はき違えるのはやめろ」

!?

その言葉に雁夜は息を詰まらせる。

怒りと……胸の痛みが、雁夜の顔から表情を失わせたがそれも一瞬だった。

「刃夜！」

そう怒鳴り、机の先にいる刃夜の胸ぐらをつかみ取っていた。

避けることも払うことも……そして反撃することも余裕だったはずの刃夜は、しかしなにもすることなく、雁夜が胸ぐらを掴んでも、ただ静かに雁夜を見つめている。

「時臣と何があったのかは俺にはわからん。わかるわけもない。何せ俺はお前と時臣のことを知ったのはほんの数日前だ。わかるわけがない」

「だったら!? 知ったような口を！」

「だがそれでもお前がどれほどの艱難辛苦を味わい、そして桜ちゃんが苦しんできたのかは、体の治療をした俺がよく知っている」

どのような過去があったのかは刃夜にはわからない。

だが、聖杯戦争が始まり……つまり雁夜と桜に出会ってから僅か数日だが、その数日の間に刃夜は二人の体を調べている。

二人の体の状態と、二人の話から……どのような目にあっていたのかは考えるのは難しくない。

過去のこととはわからない。

だがそれでも……桜の……

何より雁夜の体を調べ、治療を行ってきたのだ。

雁夜の覚悟を知る機会など……いくらでもあった。

自らの胸ぐらを掴む雁夜の腕を刃夜は放させるでもなく、払うこと

もせず、ただ静かにその手を刃夜は握った。

そして雁夜の眼光に負けない意志を込めて……雁夜を見つめた。

「文字通り死に体になりながらもなお、桜ちゃんを救うために耐えたお前だからこそ……俺はお前を助けるために動いている」

「……俺を？」

刃夜が自らを救うために行動していたのは当然だが雁夜も十分に理解していた。

だが今の刃夜の救うという言葉は、ただ命を助けるためではないと言うことは、何故か雁夜は理解できた。

「桜ちゃんを救うのは絶対条件だ。前にも言ったが、桜ちゃんの保護者が必要だからというのもある。だがそれ以上に雁夜。俺はお前を救いたいんだ。あんな体になるまでお前は何故耐えた？ 桜ちゃんを救いたいからだろうか？」

「あ……ああ」

自らの体内に植え付けられた虫が、自らの肉体を食らっていく。

それを生きながらに味わうというのは、果たしてどれほどの痛みを伴う物なのだろうか？

その苦しみを自らの欲望のためではなく、他者を……幼子を救うために耐えるということ、生半可な覚悟で出来る物なのか？

断言できる。

出来るわけがない。

だが、雁夜は耐えたのだ。

聖杯を得るために。

桜を救うために。

「俺はお前を尊敬している。他者のために自らの命をすり減らしながら、行動をしているお前を」

雁夜から見ても尋常ではない存在である刃夜から尊敬されているという言葉は、雁夜を驚かせた。

サーヴァントと互角以上に戦い、自らと桜のために尽力し、何より間桐家の人間にとって絶対者といつていいあの間桐臓硯を斬り飛ばした男からの尊敬。

驚かないはずがなかった。

だからこそ……刃夜は雁夜に自覚させる必要があった。

己が尊敬している男が、誤らないために。

聖杯を手に入れて間桐臓硯に与えることで、桜を解放する。

それが大きな目的なのは間違いないかった。

目的を達成するための行動の動機の大半を、間桐桜を救ってあげたという気持ちがあったのは間違いなかった。

その心の底に……自らの想い人だった葵を時臣が奪ったという気持ちがあり、その逆恨みが動機の一つではないとは、雁夜には言い切れないだろう。

だがそれでも……間桐臓硯の虫の責め苦に耐え、体は生きた屍となったと言つていいほどに変貌させた。

その覚悟と忍耐と決意には、確かな慈愛の気持ちがあったのだ。

その慈愛の気持ちに、葵への下心にも似た気持ちがあるのも否定しきれないだろう。

だがそれが当たり前なのだ。

それが理性を得ながらも、感情で生きている、不完全な存在である人間という生物なのだから

「お前が話す時の表情と感情から、お前が時臣に対して憎悪を抱いているのはわかる」

知った風な口を!?

知らないと言っておきながら、自らの感情をわかるという刃夜に、怒りを通り越えて殺意すらも抱き始めた雁夜。

その殺意は眼差しとなつて刃夜を睨み付け、胸ぐらを掴む手に力が込められる。

それらを全て真つ正面から、刃夜は受け止め続けた。

「お前が時臣の話題をする際には、はつきりとした憎悪と殺意を感じ取っている。そして葵といったか？ 桜ちゃんと凜ちゃんの母親は？ その葵にお前は言った。聖杯戦争に勝ってみせると」

「……ああ」

「お前が勝利するということとはすなわち遠坂時臣に勝つことと同義。その際……時臣はどうする気だ？」

「……どういう意味だ？」

「わからないのか？ わかろうとしてないのか？ 仮にお前が聖杯戦争を勝ち抜いた場合……アーチャーを倒した際に、お前は時臣を殺すつもりじゃないのか？」

「!？」

努めて平静に、そして冷静に言われた。

また自らも刃夜からの意外な言葉で少々冷静になったことで、アーチャーに勝利し、バーサーカがいる状況で、時臣をどうするのか……考えてしまう。

圧倒的存在であるサーヴァントならば、時臣を殺させることははっきり言って容易だ。

命じるだけで殺すことが出来るだろう。

その状況を雁夜が想像するように誘導した上で……刃夜は雁夜に氷のように冷たい言葉を放った。

「殺したければ殺せばいいだろう。だが、その結果貴様は時臣の血に塗れた手で、桜ちゃんを抱き上げることになるが……いいのか？」

!?

その言葉は、まさに雷鳴のように雁夜の心に大きな衝撃をもたらした。

バーサーカーがいて、アーチャーが滅んだのであれば、雁夜が時臣を殺すのは簡単だ。

いくら魔術師として優秀と言っても所詮は普通の人間だ。

英霊という、超常的存在とも言うべきサーヴァントに勝てるわけもない。

「お前が時臣を殺せば、貴様は間違いなく間桐桜……桜ちゃんの実の父親を殺したことになる。実の父を殺した男のことを、果たして桜ちゃんがどう思う？」

父親を殺した手で桜を抱き上げるという事実が、雁夜の心の殺意を鈍らせていく。

確かに葵を盗られたという思いがあり、半ば逆恨みがあったのは間違いない。

だが、まともになりつつある体と思考で、改めてその状況を考えて、バーサーカーにその命令を出すことが出来るのかと問われれば……即断することが出来なかった。

こうして考えて、踏みとどまる事が出来るということ。

これが、間桐雁夜という男が「間桐雁夜」であるということを証明しているのだろうか。

そして、一番大事なことを……刃夜は雁夜に投げかけた。

「それに何よりも……桜ちゃん自身の意志が大事だろうか？」

「……」

力のゆるんだ雁夜の手を、刃夜は払い……席を立った。そして逃げることなく、必死になって耐えていた桜を後ろから優しく抱きしめた。

「ごめんな、桜ちゃん。辛かっただろう？」

「……うん」

「だが、もう大丈夫だ。俺も雁夜も、桜ちゃんを責めたりしない。間違ったことを桜ちゃんが望んでも、怒ったりはしない」

「……間違えてても？」

間違えても怒らない。

その言葉が意外で、桜は抱きしめている刃夜の腕を力強く握った。桜のその力強さに嬉しく思いながら……刃夜は言葉を続けた。

「ああ、間違えていたらどうして間違っているのかをきちんと教えた上で、正そう。間違っていれば直せば良いんだ」

刃夜の胸に去来する……遠い過去の記憶。

自らを慕ってくれた人々と、足を不自由にした女の子。守れなかったことを今でも悔やんでいる。

その後の間違った行動も。

だがそれでも進むしかなかった。

刃夜は。

彼女らの思いに応えるために。

「間違ってたら正すし、叱りもする。だがまず桜ちゃん。桜ちゃんがどうしたいのか、桜ちゃんの思いを教えてください」

「私の……思い？」

「俺は桜ちゃんを救う。これは俺の今までの仙人もどきの生涯を賭けてでも果たすべき事だ。そのときどうしたい？ 間桐の家に残るか？ それとも事情を話して遠坂の家に戻るか？」

当然だが刃夜には、どうして間桐の家に時臣が桜を養子に出したのかはわかっていない。

だが雁夜と鶴野を見て、それとなく理由は察することができた。魔術師ではないただの普通の家であればわからなかっただろうが、

それでも間桐が魔術師の家系ということで推察するのは難しくなかった。

だからもし間桐臓硯を殺せば、帰るのは難しいことではないと踏んでいた。

だからこの場合……重要になるのは桜の気持ちだった。
とりあえず大丈夫かな？

刃夜は二人の様子を確認して、桜の頭を優しく撫でると立ち上がって、部屋の外へと向かっていく。

「……どこへ行くんだ、刃夜？」

「この場にはイレギュラーな存在は不要だろうか？ 今朝の段階だとまだ出来なかったが、今の二人なら大丈夫だろう。落ち着いて話をしてくれ。俺は晩飯の食材買ってくる。二時間もしたら戻るよ」

振り返り、肩をすくめながら刃夜は本当に外出した。

そして残されたのは……桜と雁夜二人だけだった。

「……」

だが、二人ともすぐに話すことは出来なかった。

はつきり言ってかなり重たい話をしていただけだからそれも当然といえた。

その沈黙の中で、雁夜は今まで自分が、大きく大事な事を見落とし、していることに気がついた。

聖杯を勝ち取った場合、そして刃夜が臓硯を殺すことが出来た場合……つまり聖杯戦争を終えた後の事を。

確かに……帰ることは難しい事じゃないのか？

雁夜もどうして時臣が間桐の家に養子に出したのかはわかってない。
わかかってないというよりも理解が出来なかったのだ。

間桐の内情を知っている……雁夜は。

刃夜の言うとおり、時臣は間桐の内情を知らなかった。

いくら魔術の家とはいえ、愛娘がただの道具にされると知っていれ

ば、時臣も間桐の家に桜を養子に出すことはしなかっただろう。

だがその事情はこのときの時臣にも雁夜にもわからない。

しかしこの事情がわからなくても、聖杯戦争の後の桜の処遇について考えるのには問題がなかった。

帰すのか……桜ちゃんを？ 時臣のいる家に？

刃夜に諭されてなお、雁夜は時臣のことを信頼できなかった。

内情を知らないと仮定したとしても、時臣が桜を養子に出したことは紛れもない事実。

まだ幼い子供を母親と仲の良い姉から引き離した時臣を信じるこ
とが出来なかった。

だが……桜を養子に出したと言っていた時の葵の顔を思い出す。

魔術師の嫁として覚悟をしていたと良いながらも、隠しきれない悲
しみを抱いていた

葵のことを。

帰れるのなら……帰った方がいいのか？

帰ることが出来れば、母親と姉の元に帰ることが出来る。

まだ幼い桜が母親を望むのであれば、帰してあげることが一番良
いのだと……雁夜も十分に理解できた。

「……桜ちゃん」

「……」

「その……桜ちゃんはどうしたい？ まだわからないけど……遠坂の
家に帰ることだって出来ると思う」

うつむいている桜に、雁夜は優しくそう呟いた。

だが桜はうつむいたまま何も答えない。

先ほど刃夜に対して怒った姿を見て怖がっているのかもしれない。

雁夜はそう思った。

怖かったのは間違いなかった。

大の大人が怒鳴っているのだから、怖くないはずがない。

だが、雁夜は……

そして刃夜も……

桜のことを、大いに見誤っていた。

「」

「え？」

小さく呟かれた桜の言葉。

小さすぎて雁夜は聞き取ることが出来なかった。

だから耳を近づけて、桜の言葉を耳にして……

雁夜は言葉を失った。

「帰りたい……。でも……。私は帰れない」

「……どういう……こと」

「帰れるなら帰りたいよ。遠坂の家にはお母さんも、お姉ちゃんもいる。でも私が帰ったら……。きつと」

うまく言葉に出来ないのだろう。

桜の言葉は尻すぼみとなって消えていった。

それでも何とか自分の気持ちを言葉にしようとして、口を開いては閉じてを繰り返した。

その必死な姿。

そして何よりも「帰れない」という言葉。

その言葉の真意を……雁夜は気付けた。
気付くことが出来た。
気付いてしまったのだ。

桜が戻れば、どうしても遠坂の家が歪んでしまう。

すでに養子に出されてからそれなりの月日が経過してしまっている。

その桜が戻ればどうしても今の遠坂の家が歪んでしまう。

断腸の思いで桜を養子に出した葵。

必死に隠している様子だったが、悲しんでいる凜。

そして戻った際に父親である時臣と、どう接すればいいのか？

何よりも、戻ってももしもまた同じ事が……魔術師の家系に養子に出されることが起こると思えてしまう。

また、大切な人と別れるつらさを味わってしまう。

優しい気持ちと、恐れる気持ち。

それらがあわさった言葉であると。

……桜ちゃん

絶句するしかなかった。

まだ幼いながらも、他者のことを考えられる、桜を見て。

「お父さんも、別に嫌いじゃないよ。でも、戻れないとおもう。それに」

「それに？」

「雁夜おじさんも、刃夜おじいちゃんもいるこの家が……好きだから」

もう何も言えなかった。

見上げながら寂しげに笑う桜を見て、雁夜が耐えられなかった。その体を抱きしめて……頭を撫でた。

「ごめんね桜ちゃん。ごめんね」

この子の何を見ていたのだろうか？ そんな思いで雁夜の胸はいっぱいだった。

雁夜はただ上っ面しか見えていなかったのかも知れない。

刃夜に指摘された事が事実であると言うことを……桜自身から教えられたのだ。

桜のためと言いながら、思いながらも……ただ自分のために動いていたのだと。

だがそれも仕方ないことだろう。

自らの体を生ける屍へと変化させられた雁夜には。

死にかけてた状況でまともな思考が出来るはずもなかったのだ。

だが、それでも耐えたのは一体何のためだったのか？

桜の覚悟を考えれば、自らの矮小な気持ちなどどうでもいいと思えた。

このとき初めて……心から雁夜は誓った。

必ず桜を救ってみせると……。

……俺も修行が足りんな

その二人の様子を、家の敷地の外から見守っていた存在がいた。

風の力を用いてもしもの事を考えてまだ買物には出掛けていなかった刃夜だ。

どうしても二人だけで話をさせる必要があったからこそ、席を外したのだ。

桜の身を案じた雁夜自身の口から、桜の意志を確認させるために。だが万が一ということもあったのでこうして見張っていたのだが……逆に刃夜が教えられてしまった。

子供は決して……弱いだけの存在ではないということに。

そしてその自己犠牲の思いが……

刃夜の始まりを思い起こさせた……

「バーサーカーいるんだろ？」

「……」

「今のやりとり、雁夜と繋がっているお前なら把握できたはずだ」

「絶対に桜ちゃんを救ってみせる。そのために力を貸してくれ」

自らの左手を握りしめて、刃夜はそう宣言した。

そばにいるバーサーカーも同じ気持ちなのだろう。

一瞬だけ凄まじいほどの戦意を、辺りへと放った。

周囲の敵を威嚇するかのよう。

これが先日行った、桜と雁夜の会話。

このことで、四人は真にチームとして行動をすることになった。

そして雁夜が時臣と戦う時になり、封絶は沈黙を破って雁夜の手助けをした。

時臣の攻撃のタイミング、狙われている体の部位。

刃夜と共に長い年月を戦闘に関わってきた封絶の指示は的確だった。

その結果……

「ぐ……つつう」

斬り飛ばした時の衝撃で、まだ時臣は体勢を整えられていない。故に今時臣は隙だらけだった。

例え雁夜でなくても、殺すのが容易なほどに。

以前の雁夜であれば、この状況になったならば、おそらく時臣を殺していただろう。

だが今は違った。

凜のために。

葵のために。

そして誰よりも……桜のために。

雁夜は目の前の時臣を……自らが憎んだ存在を見ても、何も思わなかった。

ただ桜のために……

雁夜は自らの憎しみと、妄執を……

【ぶっ飛ばす】

時臣と対峙した時に抱いたその思いを、清算し……

手放した。

「ありがとう……桜ちゃん」

作戦のためにどうしても全員が出払う必要があった。

刃夜の家結界、刃夜がいくつか桜に渡していた物。

万が一が起こることすらないと、雁夜は信じていた。

だがそれでも……僅か数日ではあるが刃夜の家で一人で留守番をしている桜の事を思うと、雁夜は胸がはち切れそうになった。

早く帰らないと……

自らの役目を終えた雁夜は、疲労も相まって隙だらけとなっていた。

この後のことは刃夜がどうにかしてくれると信じていた。

また元々雁夜は戦士ではない。

自らの役目を果たしたために、気がゆるむのも当然といえた。

その背に……執念の塊が、忍び寄っていた。

望まぬ幸運

雁夜の背後より忍び寄った、執念の塊。

この冬木において絶対的な執念を宿した存在は、この老人……存在以外にあり得なかった。

間桐臓硯。

本名を、マキリ・ゾオルケン。

数百年前に聖杯戦争のために海外より、日本の冬木に移住してきた魔術師。

その人だ。

正しくは人「だった」というべきなのだろうが。

人間の体では当然数百年と生きていられる訳もない。

だが自らの願いのために……臓硯は選択した。

人間を辞めることを。

優秀な虫使いだった臓硯は、自らの魂を虫に宿して体を作り替えることで、延命を繰り返していた。

だがあまりにも長い年月は彼の体だけでなく、魂と……自らが目指した理想すらも腐らせてしまった。

聖杯に賭ける望みは、不老不死。

自らの肉体と魂が腐っていくという苦痛故の願いだった。

だが今回の聖杯戦争で、その願いを邪魔する存在が現れた。

鉄刃夜。

第八騎目という、イレギュラーな存在のサーヴァント。

元々臓硯は第四次聖杯戦争は様子見として、本格的に参加しないつもりだった。

だが愚かにも、桜のためにと己を欺瞞し、自らの血族の雁夜が聖杯戦争に参加すると言ってきた。

ただ自らの血統の愚かな行為をいたぶって溜飲を下げていた状況で、刃夜という存在が召喚された。

そこから全て狂った。

刃夜はマスターである桜を救出し、雁夜も救うべく行動を起こし始めたのだ。

刃夜の行動は、桜と雁夜を劇的に変化させたのだ。

当然だが……臓硯にとつて好ましくない形で。

桜はそれなりの日数調整を行っていた魔術を全て潰され、雁夜も残り数日の命だったものが、かなり伸びてしまっている。

また、刃夜自身がりフォームした武家屋敷を得てからというもの、刃夜は暇さえあれば冬木を走り回って臓硯の虫を潰して回っていた。そのため、臓硯にもさすがに焦りが出てきたのだ。

最初は聖杯戦争が終われば消えるだろうと思っていたのだが、その前に二人の体が完全に復調させられてしまうほどの回復傾向だ。

また実力から鑑みるに、聖杯を手に入れることも大いにあり得た……といっても刃夜自身は聖杯に興味は全くないが……ため、それも焦る要因として大きかった。

下手をすれば臓硯自身の消滅を、聖杯に願われる可能性もあるからだ。

そして焦っている時に、大きな事が起こった。

キャスターの巨大海魔の召喚だ。

これによつて、常に桜のそばにいた刃夜が、桜のそばを離れたのだ。最初こそ桜を襲おうとした臓硯だったが、断念せざるを得なくなつた。

桜は強大な力を発する特殊な爪のペンダントを身に着けていたのだ。

結界だけでも一苦勞するということなのに、そんなものを身に着けているのだから刃夜が戻るまでに桜をどうこうするのは不可能と判断できた。

そのため臓硯は近寄ることすらも出来なかった。

だから、後は手を出すとしたら雁夜しかいなかった。

幸い、雁夜も刃夜と行動を別にしていてるので、つけいる隙をうかがっていた。

そして今……屋上にて時臣を倒した雁夜に、隙が出来た。

その一瞬の隙を見逃さずに臓硯は自らの手足の虫を雁夜へと走らせて、その体内へと侵入した。

「開いていた口から強引に侵入したのだ。」

「?!?!」

「突如虫に口から入られたため、雁夜は声を上げることも出来ない。」

令呪を発動させない事も兼ねた手だ。

後は体内に侵入した虫で、雁夜の肉体を操る……はずだった。

そこで、臓硯はいくつかのミスを犯していた。

まず雁夜の体の頑強さを見誤っていた。

第四次聖杯戦争に挑むために、雁夜の体を弄り倒した臓硯であるため、雁夜の体を知り尽くしていると言って良かった。

だがそれは当然刃夜と行動する前の雁夜の体であり、今の雁夜の体

を見くびっていた。

雁夜の肉体は、刃夜の薬物投与による肉体改造で、以前とは比べものにならないほどの頑強さを身に付けていたのだ。

それこそ……体の中の胃の腑に潜り込まれてなお、まだ雁夜自身が行動を起こすことが出来るほどに。

だがそれも当然のことなのだ。

刃夜が雁夜に飲ませている薬は、モンスターワールドの薬。

気力も魔力もなく、自らよりも遙かに巨大なモンスターと戦う……ハンターが使用する薬なのだから。

常日頃生死の境をさまよいながらも戦うハンター達が使う薬が……いくら魔術があるとはいえ、衰えてしまった臓硯にまけるはずもなかった。

「?!?! っ、来い！ バーサーカー!!!」

「咳き込む喉を押さえて、雁夜は令呪を発動させた。」

令呪に逆らうことなく、バーサーカーが瞬時に雁夜のそばへと出現した。

令呪によって空間を瞬時に移動したバーサーカーは、雁夜がお腹を押さえていること、そしてサーヴァントとマスターの関係であるため

に、異物が混入している事をすぐに察した。

刹那の間に察し、判断してバーサーカーは動いた。

絶妙な力加減で、バーサーカーは雁夜の腹を殴ったのだ。

「つぐむ!?!」

打ち合わせをしていたために、何とか耐えられたが、いくら加減されているとはいえサーヴァントの殴打は雁夜にかなりの負担を強いた。

だが、その内部に入っていた虫には、雁夜以上にきつい物だった。

「(っ)はっ!?!」

殴られた衝撃によって吐き出された異物……刻印虫。

臓硯の手足とも言えるその「武器」を、バーサーカーが手に取り……

自らの宝具を発動した。

騎士ナイトは徒手トにて死オーブせずオーナー。

自らが手にした物の所有権を一時的に奪い、自らの武器とする能力的な宝具だ。

敵の武器を奪い取ることでその武器を支配下に置くことが出来るその宝具で、バーサーカーは間桐臓硯の手足である刻印虫を強奪した。

だがそれだけでは意味がなかった。

強奪したところで何も意味はない。

ただの虫に成り下がるだけだ。

もしもバーサーカー一人で対応をすればの話だが。

「ナイスだ二人とも!!!」

その声と共に、屋上に新たなサーヴァントが登場した。

体からいくつもの稲光を放電させて、屋上へと瞬時に飛んできたのは、刃夜だった。

刃夜はすぐにバーサーカーに近寄り……自らもバーサーカーが支配下に置いた刻印虫へと手を伸ばした。

俺一人では無理だが、バーサーカーがいれば!

これは賭けだった。

刃夜にしても。

臓硯が焦っていたのは手に取るようにわかっていた。

虫の数を激減させ、昼間も夜も冬木の街に目を光らせて臓硯の妨害
工作を行っていたのだ。

逆に言えば焦るように仕向けたのが刃夜なのだ。

そして自らの戦闘能力を誇示することで、焦りを加速させた。

だからこそ、刃夜が桜及び雁夜と別行動をせざるを得ない状況に
なつたらなら、何かしら仕掛けてくるのは予想できていた。

そして、臓硯は刃夜の予想通り焦って手を出してきた。

そのチャンスを……最初にして最後かも知れないチャンスを逃す
わけにはいかなかった。

そのチャンスを生かす手段は……刃夜には一つしかなかった。

自らが苦手とする呪術をもって……敵を感知する。

もちろん刃夜一人では不可能だったろう。

だが、刃夜は一人じゃなかった。

この場には、バーサーカーという頼りになる英霊が存在しているの
だ。

騎士は徒手にて死せずで支配下に置いた刻印虫。

その刻印虫を使って逆探知を行うという博打。

刃夜としても短期間という制限があると思っていたため、博打に出
る必要性があった。

そしてその逆探知は……

刃夜の呪術とは違う……ある種の呪いによって、叶うこととなっ
た。

騎士は徒手にて死せずの支配下に置かれた刻印虫。

支配下に置いた刻印虫を操る臓硯の糸よりも細い魔力の手綱を、刃夜は強引にたぐり寄せて……

臓硯の居場所を把握する。

!? 何じゃと!?

これにはさしもの臓硯も驚愕した。

老いたといえども虫使いとして十分に優秀な臓硯の魔術。

過信していたわけでもなく、油断していたわけでもなかった。

戦闘能力では叶わないのは、初見の時に瞬時に斬られたことで十分に理解していたのだから。

だがそれでもなお、刃夜の能力が上手であったのだ。

刃夜の呪いが。

居場所を悟られた事を判断し、すぐに逃げようとしたその臓硯の前に……

「どこへ……行こうというのかね？」

ふざけた台詞を言いながらも、どこか苦しそうな声で告げる、刃夜の姿があった。

「ぼっ、馬鹿な!？」

再度驚くことになった。

何せ臓硯が刻印虫を操っていたのは雁夜がいた屋上と違い、深山町側の山頂だ。

さすがに一瞬とも言える時間で来るのは、通常のサーヴァントではできないことだった。

それこそ令呪による魔法とも言える力がない限り。

だが、それを可能にする技法と力が、刃夜にはあつたのだ。
雷の力が。

だが普段と比べて刃夜にも余り余裕がある様子ではなかった。
端的に言つて、表情が苦痛に塗れていた。

衝撃と反動が荒れ狂うことで走る痛みと吐き気を、歯を食いしばつて耐えて飲み干し、刃夜は左腕に紅の炎を宿した。

そして次の瞬間に……

臓硯は、炎が吹き荒れる灼熱の大地へと、立っていた。

「な……」

もはや驚くことも出来ず、臓硯は茫然と周囲を見回す。

いくつもの炎が荒れ狂い、灼熱の大气が自らの身を焦がす。

炎によつて焼かれた大地は、とても硬質で固く、灼熱の熱を宿しており……虫となつて身を潜り込ますことも出来ないだろう。

仮に出来たとしても、大地の下は極熱の溶岩があるため、逃げることは叶わなかった。

「今日は大盤振る舞いだ、マキリ・ゾオルケンンン。喜べここが貴様の墓場だ」

茫然と辺りを見渡す臓硯の背に、刃夜はそう言葉を投げかけた。

それは紛う事なき死の宣告。

弱者をいたぶり、弱者の意志を奪う存在である臓硯を……

刃夜が許すはずがなかった。

故に殺す。

逃げることも、本体を逃がすことで生きながらえることもさせない。

絶対の意志を持って……

刃夜は臓硯をこの「炎王結界」へと招き入れたのだから。

「この世界は俺が所有する紫炎妃と紅炎王……獅子龍の世界」

左腕から紫と紅の炎が猛るようにあふれ出して……刃夜自身を照らし出す。

「俺を殺さない限りこの世界から逃げ出すことは出来ない」

その背後から……見えないはずの巨大な力の鋭き眼光が、臓硯を逃がすまいと睨み付ける。

「だが、怯えることはない。俺はただ、お前の命の話をするだけだ」

そして左腕の炎が猛って、その猛り狂った炎が収束し……鉞のような刀身の片刃の剣が出現する。

「死の恐怖に怯えることも、すくみ上がることもない」

出現させて、手にした剣を地面に引きずりながらゆっくりと……刃夜は臓硯へと歩み寄っていく。

「何故なら『死ぬかも知れない』という仮定ではない」

疲労しているのか、肩を下げて前のめりに歩いてくる様は、実に幽鬼的だった。

しかしその総身よりあふれ出すのは、淡い紫の炎と圧倒的な魔力と力。

その眼に宿すは、絶対の憎悪と殺意。

「お前はここで俺が殺すからだ」

何が何でもこの場で相手を殺すという、決死の殺意。

「えぐれる物ならば目玉をえぐるがいい！」

手に持つ力の塊を握りしめて……刃夜は咆える。

「掻き切れる物ならば、喉を掻き切って見せるが良い！」

その力の塊の切っ先を臓硯へと向けた。

「だがそれでも貴様に確實なる死を与える！ 我が命と信念を賭して
！」

その言葉と共に、周囲の炎がより一層猛り狂った。

刃夜の意志に呼応するように。

その絶対なる宣言をされて……臓硯は逃げ出した。

自らの恐怖に逆らうことなく。

恥も外聞も捨てて。

死にたくない……

何のために自らの体を変質させた？

死にたくない……

臓硯の思考はただの一色の感情と、思考だけがあった。

死にたくない……

生物として正しく思う感情と、絶対的な存在に抱く恐怖。

死にたくない……

追い求め続けた物にまだ手も届いていない。

死にたくない……

夢のために生きてきたというのに。

死にたくない……

五百年ももがき、苦しみ……耐えてきたというのに。

死にたくない……

なのに道半ばで死ぬというのか？

「こんなん——!？」

逃げた臓硯からはき出された言葉は、最後まで紡ぐことが出来なかった。

刃夜が振るった剣より生まれ出でた炎が、老人としての臓硯の下半身を、一瞬にして消滅させたのだ。

消滅故に、分離することも叶わず、臓硯は焼けた大地へと倒れ落ちた。

倒れた時の衝撃で、言葉を発するための空気が残らずはき出される。

咄嗟に焼けた空気を吸おうとしたその胸を……踏みつける足があった。

「あっ!？」

焼けた大地に押しつけられて、我が身を焦がされる。

通常の人体であれば肋骨がほとんど全て折れているだろう。

痛みに耐えながら目を開けて、踏みつけている存在を見るとそこには……

「貴様には断末魔も上げません。罪も悔恨も全て抱き、魂事その全てを喰らってやる」

この焼けた大地であつてなお、心臓を氷でつきてられたかのような殺意で射貫かれて……

間桐臓硯……マキリ・ゾオルケンは世界から消滅した。

迷い

一部始終を、遠坂時臣は見ていた。

何だ？

もちろん全てをみれていたわけではない。

何だ？

だがそれでもバーサーカーと刃夜が二人して何かをしているところはみることが出来た。

そして、バーサーカーと刃夜が手にしている物を目にした。

何だ……あれは？

目にしたのは醜い肉の塊。

それは直接的に言って、実に醜悪で卑猥な形をしていた。

しかも半ば朦朧としていながらも、雁夜がはき出した物であったはずだった。

自ら雁夜の体内へと侵入していった何か。

それは十分に優秀である時臣がみれば、すぐにどのような物であるのかは看破できた。

そしてその「どのような物」を無意識のうちに分析している間に……イレギュラーなサーヴァントが屋上へとやってきた。

!?! まずい!?

雁夜のバーサーカーと、イレギュラーなサーヴァントが二体。それに対して時臣のサーヴァントは未だ空の上。

今この場で一斉に二体のサーヴァントに襲われたら時臣はひとたまりもなかった。

だが……二体のサーヴァントは時臣には目をやることもなかった。ただ二体共に……「どのような物」対して必死に力を振り絞っているだけだった。

それだけならばまだ時臣としても許容できただろう。

だが……どうしても受け入れることが出来ない要因があった。

雁夜の存在だ。

雁夜は「どのような物」をはき出してからただ……自らのサーヴァントと、協力関係にあるイレギュラーなサーヴァントの様子を見つめているだけだった。

時間が経過していたために、先ほどよりは意識もすっかりと保っており、時臣としても仮に雁夜に襲われたとしても、なんの問題もなく迎撃できただろう。

だが……そうならなかった。

二体のサーヴァントがいるという、圧倒的に有利な状況の中で、雁夜は自らのサーヴァントにも、そして協力関係にある刃夜に対しても……

何も言わなかった。

時臣のことを見向きもしなかったのだ。

二体のサーヴァントが動けないとはいえ、自らは動けるはずだとい

うのに。

雁夜はただ、祈るような眼差しをイレギュラーなサーヴァント、刃夜へ向けるだけで何もしなかったのだ。

時臣
自らに対して……雁夜は何もすることがなかった

そしてその何もしてこないという行動が……

時臣の「魔術師」としての感覚を狂わせる。

無論、雁夜だけでは狂うどころか微動だにしなかつただろう。

だが、圧倒的な存在であるサーヴァントが二体が一向に見向きもしない。

そして、雁夜の体からはき出された存在。

雁夜の存在そのもの。

そして……イレギュラーな存在のサーヴァント、刃夜のマスターであるという、桜の存在。

何よりも時臣を揺れ動かしたのは、雁夜の腹より吐き出された存在。

自然界ではおおよそあり得ない存在であり、その様はまさに「それ」だった。

それがどのように使われるのかも……想像に難くなかった。

そして、その存在が……何に対して使われたのか？

それを想像するのもそう難しい事ではなかった。

何よりも……それから感じられる魔力。

それが自らの娘の魔力の色を……確かに帯びていた。

何だ!? あれは!?

『俺がこの世界でしなければならぬことはマスターであるこの桜ちゃんを救うことです。故に……その邪魔をしようというのなら俺は全力で貴様らと敵対する。それを覚えておいて欲しい』

刃夜は確かに冬木の教会そう言ったのだ。

そのときは余り深く考えなかった。

だがそれでも今の状況が……「どのような物」が、時臣の頭から離

れない。

この全てが重なり合い、時臣を大きく揺れ動かした。

何故こんな物があるのか？

何故、こんな物から桜の魔力を感じられるのか？

だが、答える者はいない。

そんな時臣に目もくれず、刃夜はしばし瞑想するように目を瞑っている……すぐに鋭く目を見開き、一瞬青白く光ると同時に屋上から消えていた。

そして刃夜がいなくなったことで、バーサーカーが自らのマスターを守るようにしながら、すぐに雁夜を抱えて飛び去った。

疑問が胸中を渦巻く時臣だけを残して。

何だというのだ!? あれは!?

想像せざるを得ない……間桐の魔術。

そして自らの愛娘がされたであろう、行為と状況。

おそらく雁夜に敗れる前の時臣であったならば……おそらくそれも是としただろう。

だが、「人」としてあり続けた雁夜が……

一度魔道を諦めた存在の、薄汚い犬畜生にも劣ると思っていた存在からのあの態度。

雁夜が勝ったのだ。

あのとき殺されても不思議ではなかったのだ。

だというに、雁夜はただ、二人の様子を見守っていたただけだ。その態度が。

時臣の「魔術師」を狂わせる。

だがそのことに……

時臣は気付いていなかった。

その様を……遙か上空から見つめる、血よりも紅い双眸があつた。

突如として、空中戦闘を行っていたバーサーカーが消えたため、一体何事かと思つたのだ。

さらに言うのであれば、先の空中戦闘を行つた際、違和感を覚えたのだ。

この狂犬……。以前とは違うな？

最初に戦つた時よりも、狂気が薄れていた……。というよりもなくなつていたのだ。

何よりも、自らと戦っている時に漏れ出ている感情が、狂気でも戦意でもなく……

焦燥

を感じ取つた事が大きかった。

バーサーカーが「焦る」などという感情を抱かないとは言い切れないが、狂化を得ているはずのバーサーカーの焦りというのは、どうしてもおかしいと考えられた。

さらにその焦りは、確かに自らアーチャーに向けられた感情。

戦いながらもどこかがおかしいとアーチャーは思っていた。

そしてそのバーサーカーは自らのマスターのそばへと突如として転移した。

令呪を使ったことは容易に想像できた。

そしてその転移先が自らのマスターのそばと言うことで、さすがのアーチャーも少々慌てたが……。すぐに様子がおかしいことに気がつ

いた。

何を行っている？

何かをしているのかはわかったが、しかしバーサーカーが何を行っているのか見当も付かない。

するとすぐに川辺にいたはずの刃夜がやってきて、バーサーカーと同じようなことをし始めたのだ。

ふむ……

すぐにも助けに行くべき状況だったが、何を思ったのかアーチャーは何もすることなく、その様子を眺めていた。

そして、刃夜が戦意をみなぎらせて……姿を消した。

何だと？

これにはアーチャーも眉をひそめた。

令呪を使ったのかと思ったが、しかしその様子は感じられなかった。

何せ圧倒的なまでの魔力の波動を感じられなかったからだ。

感じられたのは、刃夜から一瞬発せられた稲光と力。

それだけだった。

刃夜がいなくなるとバーサーカーは雁夜をつれて一目散に逃げ出した。

魔術師である時臣に対して、何をすることもなく。

ふ……本当におもしろい男よな

この様子を見れば、アーチャーも刃夜が聖杯に興味がないということも十分に理解できた。

では逆に……刃夜は何のために戦っているのか？

そう、興味を抱かせてしまった。

今まで以上に。

刃夜は。

紛う事なき、最強のサーヴァントに。

こうして、巨大海魔と間桐臓硯。

冬木に顕れた巨大な悪魔と

永劫のとも呼べる長き時間を生きた執念の怪物が

この世界から消滅した。

誓い

あー、もう。今夜はもう寝たいんだがなあ……

少々苦しげな表情で、刃夜はとある廃墟へと侵入しようとしていた。

刃夜が精神分身体で確認した、剣と槍の戦い。

巨大海魔が消滅したばかりだというのに、早速聖杯戦争を再開した二組の存在がいた。

正しくは三組……俺を含めれば四組か。といっても、俺は単独行動ですがね

体のあちこちが痛むのか、しきりに肩や首を回している。

その足取りもどこか少々重たく感じさせるものだったが、いかないわけにはいかなかった。

刃夜は静かに目的の場所へと向かっていった。

以前とは比べものにならないほどに負傷した……ケイネスの元へと。

周囲の状況は、気と魔力、更に精神分身体で容易に探ることが出来た。

また残りの三組も、自らの行動に意識を向けるあまりに、他の連中からの妨害を全く想定していなかった。

だがそれも無理からぬ事。

巨大海魔の討伐には誰もが疲弊したと言っている。

だからこそ、セイバーとランサー……二人の騎士は、この時を選んで死闘を繰り広げているのだから。

道すがら、それとなく刃夜はセイバーとランサーの決闘を見つめて、違和感を覚えたが……すぐに納得したように小さく頷いていた。

ああ、なるほど。なんでセイバーがあんな大技ぶっ放せたのか不明だったが、解呪されたからか

ライダーの固有結界の中にいたため、刃夜はセイバーとランサーの

やりとりをさすがに知り得なかった。

だが、当然約束された勝利の剣が放たれる前には現実世界に戻ってきていたため、疑問には思っていた。

だが、刃夜自身そのときは大元の害虫駆除に意識を集中していたため、セイバーの呪いのことまで頭が回っていないなかった。

しかし今の状況を見て……セイバーが左腕をほとんど使用していない、ランサーの必滅の黄薔薇を使用していない……すぐに察しは付いた。

そして、どうして左腕を使わないのかということ、セイバーがしている理由も。

こりやあれだな。精神分身体で見たとおり、互いに互いのマスターと合わないわけだ

刃夜の左腕が、淡い紫の光が灯っていた。

目に見える距離にいなながら誰も気付いていないのは、間違いなく刃夜が力を使用しているからだろう。

誰も認識出来ないのを良いことに、実に芝居がかったように大げさに肩をすくめていた。

しかし刃夜がそんな下らない挙動をするのも無理からぬ事だった。

一言で言うのであれば、今の二人は「騎士」として……尋常なる決闘を行っているのだ。

だが……それすらも利用しようとしている存在がいることも事実だった

衛宮切嗣という……魔術師殺しの男が。

まあ、俺もこの状況を利用しようとしてるのだから？ 人のことは言えないけどね

左腕に淡い紫の光を宿しながら……刃夜はゆつくりと雨を防ぐことの出来る廃墟の暗がりで行われている様子を、じつと近くで見つめていた。

そして、投げられた書物を瞬時に読み取って……深々と刃夜がため

息を吐いていた。

容赦ないなあ……。まさに合理的というか、冷徹というか……

書物の内容を確認している隙に移動して、刃夜はゆっくりと車のそばに佇む女性へと近づいていた。

そのことに近づかれたアイリはもちろん、死闘を繰り広げているセイバーとランサーも、そして遠くからこの戦いを見ている舞夜でさえも……誰も気付いていなかった。

だがそれも当然だった。

霞みを纏った魔の龍の力に気付くのは……よほどの実力がなければ不可能なのだから。

魔力を宿し、自在に魔力を使う存在の古龍の力。

気付けるはずもなかった。

そしてその際セイバーとアイリへと、無意識に放たれている魔力があることを……刃夜は感じ取っていた。

その魔力の波動を感じ取り……発生源を見抜いて、刃夜は一人納得していた。

ああ……。まためんどくさそうな呪いにかかってんなあ。美貌も相まって苦労してそうだ

ランサーへと同情の視線を向けるが、当然それにも気付かない。

そして刃夜の腕から黒い靄があふれ出し……細長い形状を形成する。

その細長い黒い靄が完全に形になる前に……刃夜はその細長い靄を遙か上へと放り捨てた。

一度剣戟が止み、セイバーとランサーが一度互いから距離をとる。

しばし二人は互いを観察し、斬り込む隙をうかがった。

そして二組の存在が動き出すその一瞬前に……

刃夜が動いた。

パチパチパチパチ

誰もが虚を突かれたことだろう。

何せまさに行動を起こそうとしたその間をつかれたのだから。

その間を突いたのは……刃夜の少々間抜けに聞こえる拍手の音だった。

音の発生源は、車のそばに佇むアイリの隣。

まさに刃夜であれば、一瞬のうちにアイリを殺すことが容易に出来る距離だった。

仮にアイリが逃げようとしても、刃夜の反対側は車で防がれており、またアイリ自身が聖杯として機能し始めた影響で身体能力が著しく低下しているため、逃げようもなかった。

「ジンヤ！ 貴様、一体!？」

明確に敵対行動を行ってこなかった刃夜が、セイバーとランサーの決闘を邪魔するだけに飽きたらず、自らが守護するアイリのそばにいつの間にか忍び寄っていたことで、さしものセイバーも怒りを露わにしながら、刃夜へと怒鳴った。

だがその怒号もどこ吹く風と受け流して、刃夜は行動を開始する。

左腕を軽く握り、一振りの短刀を顕現させた。

それは腕を伸ばせばアイリを殺すことが容易に出来る得物だった。

故に、さすがにセイバーもランサーとの決闘を一時中断し、ランサーに背中を見せてでもアイリへと駆け寄ろうとした。

だが刃夜はその短刀を明後日の方向へと投擲した。

!!!!

一瞬硬質な音が響いたがそれだけだった。

セイバーもランサーも一瞬何をしたのか理解できなかったが、短刀が刺さった場所へと視線を投じ……すぐにそのそばにいる人物の存在に気がついた。

あれは……マイヤ？ 何故——

何故舞夜があんな場所にいるのか？

そう思考するその前に、セイバーは回答を導き出した。

しかし、セイバーとしてはその回答を否定したかった。

だがそのセイバーの気持ちも……刃夜は無情にも否定した。

「でてこい、暗がりでこそこそしてたマスター二人組。出てこないならこの場で女人二人が血を流すことになるがそれでもいいのかな？ 前にも言ったが俺は聖杯に全く興味はないので、それを考慮した方が良いと思うぞ？」

おどけたようにしながらも、しかしその目はほとんど笑っていないかった。

また自らの台詞を強調するように、左腕を再度に握って打刀を出現させた。

抜刀こそしていなかったが、アイリをすぐにでも殺せるという意思表示なのだろう。

さすがにこの状況下に至っては、切嗣も素直に刃夜の要求に応じるしかなかった。

アイリが聖杯であることを、刃夜が知っていることに少々疑問を覚えたが、間桐雁夜から情報をもたらしているのだろうと、容易に想像できた。

実際は刃夜は確信を得ていたわけではない。

アイリに違和感を覚えていたためだったが、それを切嗣がわかるはずもなかった。

暗がりの廃墟の中から、衛宮切嗣と車いすに乗ったケイネス。

そして……意識を失っているケイネスの許嫁であるソラウが、切嗣に引きずられてやってきた。

「ソラウ様!」

まさか主と自らの探し人がいるとは思っていなかったのだろう。

ランサーは殺意の籠もった瞳を、切嗣へと向ける。

だがそれは切嗣も同じであり、憎悪を宿した目で、刃夜を睨み付けていた。

ケイネスは何故自分が呼ばれたのかわからず刃夜へと目を向けるが、だがそれ以上に意識のないソラウが心配なのか、せわしなく交互に目を向けている。

当然だが、そばに刃夜が佇んでいる状況のアイリも、そしてセイバーも舞夜も。

誰もが刃夜に注目していた。

その注目されている刃夜はあつけらかんと……皆にこう言った。

「深夜にお疲れ様」

……はあ？

誰もがこう思っただろう。

何を言っているのかこいつは？ と。

だが刃夜が言いたいのは当然これではなかった。

一度息を吐き、刃夜は言葉を放った。

「セイバー、何で左腕を使わないんだ？」

「何？」

セイバーとしても予想外の問いかけだった。

刃夜は呪いの事を知っているのだから。

だがそれでも必滅^ゲの黄薔薇^{ボウ}を折ったそのときには、刃夜が川辺にいなかったことに気付いて、その問いかけも無理からぬ事に気付く。

事情を言おうとしたその前に、刃夜が言葉を紡いだ。

「左腕を使わないのはランサーに対する侮辱とも取れるのだがいいのか？」

「!? 貴様！」

侮辱と言われて、セイバーが殺気を露わにしながら詰め寄ろうとしたが、しかし刃夜は手にした打刀の鯉口を切る事で、セイバーの動きを止めた。

あれほど巨大な刀を振り回していた刃夜だ。

打刀であれば瞬時の内に抜き放ち、車ごとアイリをぶった切ること
も容易なのは、容易に想像できた。

故にセイバーは止まるしかない。

そんなセイバーにニヤリと、少々嫌味な笑みを向ける刃夜。
そして、そんなことをしながらも、刃夜は別に行動を、行っていた。
それぞれに対して。

それぞれにだけ聞こえるように……。

『お前は何故、あのスクロールを承諾しようとした？』

何!?

突然、左の耳にだけ聞こえた声に、ケイネスは驚き一瞬だけ視線を
巡らせた。

だが誰も声を上げるために口を開いていなかった。

にも関わらず、声はさらに続いていた。

『承諾すれば聖杯戦争に敗北するのと同義……いや敵前逃亡なのだか
らそれ以下か？ いかに極東と言っても、調べることも不可能ではな
いだろう。逃亡にも等しい敗北を、果たしてほかの連中が……お前の
母国の味方や敵がどう判断するか？ それが全く頭に浮かばなかつ
たわけではないだろう？』

左耳に直接聞こえるその言葉は、ケイネスを侮辱するには十分すぎ
た。

いかに極東の冬木であろうとも、魔術協会であれば調べることは難
しいことではない。

そして調べられた結果どうなるのか？ 考えなかった訳ではない。

だがそれでも……声の言うとおり、承諾しようとしたのか？

その答えはただ一つ……今は意識のない存在が答えだった。

『それを選択した理由と同じ事が言えるのが、自らの僕じゃないのか
？』

何？

その言葉に、ケイネスは周りに気取られぬように、小さく瞳を動かして自らのサーヴァントである、ランサー……デイルムッドへと目を向けた。

ランサーは自らの仮の主であった、ソラウを引きずってきた切嗣へ射殺さんばかりの激しい感情がこもった瞳を向けている。

それに対してケイネスが思うのはランサーの逸話だ。

自らの主君の婚約者を奪ったという間男の逸話。

魔術師であった己。

騎士であった僕。

良くも悪くも、生来の性格と生きてきた互いの立場と思想の違いで、二人が信頼を結ぶのは難しいのは必定だった。

特にケイネスは伝承としてランサーを知っているのだ。

余計な先入観が働かないわけがない。

そして、互いが互いを理解出来なかったことも不幸と断言していいだろう。

だがもしも……

今の自分と、僕の立場が……

同じであると感じることが出来たならば？

ただ愛する人を助けたかったのだと……

ケイネスがそう思えたのなら……

『さて、切嗣。その女人死にかけてるよな？』

突如として口も動かさず、また右耳だけに聞こえてきた刃夜の言葉

に対して、切嗣は驚きつつも決してその感情を表に出すことはなかった。

刃夜に隙と弱みを見せないための、必死の抵抗だった。

「……」

刃夜の問いに切嗣は答えない。

だが、右腕を切断されろくな治療もされてないのだ。

ソラウの容態は余り良いとは言えないだろう。

感染症になる可能性は非常に高い。

「……」

切嗣は何も答えずに、刃夜の隙をうかがっていた。

だが隙をうかがっても、すでに人質が二人もいる状況では、動きようがなかった。

『この戦いでケイネスは令呪を失うだろうな？ セイバーが全力で戦えば、得物を失って全力が出せないランサーは死ぬだろう。ケイネスにももはや戦意がないことはお前がよくわかっているはずだ。その意識を失った女人。解放しないとは言うまいな？』

何故こんなことを？

しかしそれでも切嗣の頭の中は、刃夜に対する疑問で渦巻いていた。

何故邪魔をするのかわからなかったからだ。

確かに聖杯に興味がないとは刃夜が前から言っていた。

それがブラフであると言うことも考えていた切嗣だが、しかしこの状況に至っては本当に聖杯を欲してないと認識せざるを得なかった。

その切嗣に取り合うこともなく、刃夜はアイリから離れてゆつくりと切嗣の元へと……ソラウの元へと向かっていった。

おそらく無言の要求なのだろう。

人質交換の。

刃夜から行動を起こされては切嗣も動くわけにはいかずに、決して刃夜から目をそらさずに、ゆつくりと距離を離していった。

「ソラウー」

切嗣が離れた事で、車いすを走らせてケイネスが倒れて意識を失っ

ているソラウの元へと向かおうとしたが、その前に刃夜が歩み寄り……腰から小さな小瓶を取り出した。

「!? 待てー!」

刃夜がソラウに何か得体の知れない物を飲まそうとしていることに気付いて怒鳴るケイネスだったが、そんなことで刃夜が行動を止めるはずもなかった。

小瓶の中身をソラウの口へと流し込んだ。

「ソラウー!」

ケイネスの悲鳴にも似た怒号が響いたが……流しこまれた液体を無意識のうちにソラウが飲むとほぼ同時に、元気よく体を動かした。

「……私は……」

「!? ソラウー!」

「ソラウ様!」

ソラウ自身が、周囲の状況を把握しようとしてると、その前にケイネスとランサーが声を張り上げていた。

ランサーがソラウへと意識を向けたその刹那の瞬間に、刃夜は誰にも気付かれずに落下してきた長大な超野太刀をランサーの一点……泣き黒子へと振るっていた。

どうやらかなりの能力を使用しているのか、セイバーもそして振るわれたランサー自身も気付いていなかった。

そして振るわれたと同時に虚空へと巨大な超野太刀は姿を消しているため、この場で刃夜が何かをしたことに気付いた者は誰もいなかった。

「ソラウー!」

刃夜がソラウの様子を一瞬だけ見て確認して、引いたその場所へ……ソラウにケイネスが近寄り、地面に座り込んでいるソラウを車いすの上から抱きしめた。

その瞳には大粒の涙が……溢れだしていた。

「ケイ……ケイ……」

「無事で……良かった……」

声も体も僅かに震わせながら、ケイネスが力強くソラウを抱きしめ

る。

以前とは比べものにならない弱々しい力だった。

だがその弱々しくも力の限り抱きしめられる体と、その涙が……ケイネスの気持ちこそソラウに伝えるのは十分すぎた。

ただ政略結婚として結ばれた間柄だった。

だからソラウはケイネスに対して何の感情も抱いていなかった。

ケイネスがどう思っているかも、ソラウ自身はきちんと理解していなかった。

だが、自らが^{ソラウ}ケイネスにしたことを思い出す。

令呪を強奪し、ランサーを従えた。

だというのにケイネスはこうして自らを抱きしめてくれている。

本当に大切な者であるというように……。

「どうして……」

か細く紡がれた、ソラウの疑問の言葉。

その声はどれほどか細くあろうとも、すぐそばにケイネスの耳があるのだから聞こえていないはずがない。

その声に応えるように、ケイネスは更に力を込めてソラウを抱きしめた。

その力なく握りしめる抱擁が……返事であるというように。

「ソラウ様」

そしてそばにランサーがいることを、ソラウはその声を聞いて自覚し、そちらへと目を向ける。

そこには己を心配そうに見つめるランサーの……デイルムツドの姿があった。

そしてそのそばにセイバーがいることを把握して、ようやくソラウは自分がどういった状況に陥ったのかを理解した。

私は……セイバーの陣営に捕らえられたのね

そこでようやくソラウは自らの右腕が一部消失していることに気がついた。

だがそれがどうしたというのか？
ソラウは本来、この場で死ぬはずだったのだ。
さすがにソラウもそのことは十分に理解できた。
だがこうして今間違いないで生きている。
恋ではなく……愛してくれる人がそばにいてくれる。
それを思えばどうということもなかった。

ソラウ様？

そしてそのソラウの様子に、ランサーは違和感を覚えていた。
先ほど巨大海魔の迎撃に向かう前の、ソラウからの半ば狂気とも言える恋慕の感情が綺麗に霧散していた。
当然感情がなくなっているのだから……ランサーへと向けられる視線にも変化があつて当然だった。
だがその変化は何故起こったのか？

『呪いなら喰わせてもらったぞ。俺の得意分野だ』

!? 何？

突如聞こえてきた声。

それは間違いなく刃夜の言葉であることは、ランサーはすぐに気付いた。

だが当の刃夜は口を動かしていなかった。

なのに聞こえてくる声と今の状況。

刃夜の意味のわからない行動。

考えるべき事が多く、すぐには返答が出来なかった。

だが返答をする事はなかった。

する意味がなかったのだ。

刃夜はただ一言、こう……呟いたのだ。

『俺に出来るのはここまでだ。後はお前次第だ……ランサー』

何だと？

その意味がわからなかったが、しかしすぐに気付いた。

呪いをどうにかしたというのが、紛れもなく真実であるということに。

狂気じみていたソラウからの恋慕の思いが消えて、ケイネスに抱かれていることに答えるように、自らもケイネスの体に腕を回していた。

そして抱きしめながらも、自らにわびるかのように、柔らかく微笑むソラウを見た。

嘘だと思った。

あり得ないとも思った。

自らの呪いが消えてなくなったなどと。

生前の苦い記憶、サーヴァントとして召喚されたこの第四次聖杯戦争でも、この呪いによつて辛酸を舐めたのだから。

だが、ソラウの態度がそれを否定していた。

先ほどまでの狂気じみた思いがなくなつてるように見受けられたのだから。

それに何より、懸念すべき要素だったソラウの救出は無事に果たされた。

しかしソラウを連れてきた……正確には引きずつてきたのは敵のマスターであるセイバーのマスターと共に出てきたのだ。

それも自らのマスターであるケイネスとともに。

敵方である切嗣と共にケイネスが、廃墟より出てきた状況。

さらに切嗣がソラウを引きずつてきた手とは違う手に、何か書物を手にしていることから、何かが行われようとしていた事は容易に想像が出来た。

具体的な事はわからない。

だが自らの婚約者が人質に取られている以上、ケイネス 主にとつても自らディールムツド

にとつても不利な何かであることは想像に難くない。

正直に言えば、生前と同じ事が起こりえたのかも知れないと、聡明なランサーは十分に理解していた。

だがその状況に追い込んだのは自分にも責任の一端があった。

迫られてしまったとはいえ、ソラウとの契約を選んだのはランサー自身だったからだ。

そして、ソラウが攫われてしまったこともある。

無論ランサーがケイネスに反論したように、契約が完全ではないという、無理からぬ事情は多々あった。

だがそれでも、主君が命じた命令を守れなかったのは紛れもなく自分自身だった。

故に……ランサーは、今度こそ……

万感の思いを込めて……ケイネスへと語りかける。

『主よ。どうか私を信じてください。必ずや、あなたとソラウ様を救って見せます。我が騎士の誇りに賭けて！』

解呪されたことで、セイバーは完全に復活した。

またアイリが戦闘を行えないことは何となくわかったが、しかしマスターである切嗣と舞夜が戦闘可能であることは間違いない。

刃夜がどのような行動を起こすのかは不明だが、それでも普通に考えれば敵であることは間違いない。

実に三対一対一。

下手をすれば四対一になりかねない状況だ。

さすがにこの状況下ではランサーとしても、敵サーヴァントを撃退

し、マスターであるケイネスに勝利を捧げるのは不可能と
いい。

だがそれでも出来ることがある。

自らの騎士としての忠節を貫くこと。

今のこの状況下においては、自らの主達を逃がすことに他なら
なかった。

故にランサーは本心から……そして心の底から願った。

自らを信じて欲しいと。

ケイネスもまた、決断を迫られた。

念話によって聞かされた、この状況に至ってなお、騎士の誇りとい
う曖昧なものを賭けて自分たちの命を救うといってくるランサーに、
不信感を覚えなかったとは言えなかった。

だが……今の言葉と、ソラウが自らに答えてくれる事。

何よりも……ソラウがこうしてそばにいてくれることが、何よりも
嬉しかった。

今のこの状況に至ってなお……聖杯戦争に勝ち上がることが可能
だと思えるほど、ケイネスも馬鹿ではない。

そして先の刃夜の言葉が示す通り……自らが選択しようとした決
断も、ケイネスの決意を決めるのを手伝った。

全てを失う選択を選ぼうとしたのは事実だったのだ。

それを考えれば……ただ一言、言葉を発することがどれほど対価と
して安いのかなど……考えるまでもなかった。

「ケイネス、信じましょう。私たちのサーヴァントを」

そして、ソラウからもたらされたその言葉が普通であったこと。その言葉を聞いて、ケイネスは体を離して、ソラウを見つめた。ソラウがただ静かに微笑んだ。その笑顔が……ケイネスの最後の一步を、踏み出させた。

ケイネスは一画の令呪が宿る右腕を……掲げて見せる。

「我が令呪を持って命ずる」

その言葉と共に令呪が赤く光る。

その光は、ケイネスの決断と決意の光。

自らの血肉が明滅するように瞬き……その魔力を散らした。

「私とソラウを無事に逃がせ。貴様の命が果てようと。それを持って……貴様を我が配下と認めよう」

!?!?
主よ……

その命は、ランサーに対して死ねと言っていることと同義。

得物は片方が失われた。

ケイネスも魔術回路が傷ついており、ろくなバックアップも出来ないだろう。

対して、解呪されたことでセイバーは万全の状態となり、マスターがバックアップも出来る状況だ。

圧倒的不利な状況であり、逃がす……つまり殿を努めると言うことは、普通に戦うよりもよほど困難なことなのだ。

だがそれでも……その命令はランサーが何よりも焦がれた忠義の証。

主君に誉れある騎士の忠節を捧げるための、命を捨てる戦い。

この命令を……ランサーが……

デイルムツド・オディナが……

拒むわけもなかった。

「我が命と誇りに賭けて。我が主とソラウ様の命……救ってごらんに入れます！」

右手を堅く握り、深く深く……ランサーは頭を下げる。

その様子を……切嗣は冷めた瞳で見つめていたが、すぐに自ら向けられた視線に気付き、そちらへと視線を向ける。

自らへと視線を向けていたのは……イレギュラーなサーヴァントであり、自らの策略を台無しにした刃夜だった。

刃夜と切嗣の視線が交差した。

互いに互いのことに対して、対して興味がない……そんな目を互いに向けていた。

だが切嗣の瞳には、若干の苛立ちと憎悪が、込められていた。それも当然といえるだろう。

自らの必勝を……必殺を阻害されたのだから。

ちっ！

切嗣は舌打ちをするのをどうにかして堪えた。

今もソラウとケイネスが、外へと……自らの殺害可能範囲から出て行くのを止めることも……

殺すことも出来ない。

聖杯が遠ざかっていくのを感じてしまう思いだった。

そしてこの場に至ってようやく切嗣は確信した。

言峰綺礼とは別に、最大の障害とも言うべき存在が、この鉄刃夜という存在であると。

『な』

「なに」

刃夜の隣を通り過ぎる際……ケイネスが驚くような声を上げていた。

ケイネスが驚いたのが、おそらく刃夜が何か言ったのだとは理解できたが、当然わかるはずもなかった。

自らが先ほど体験したように、刃夜は個々にだけ会話することが出来る能力を使っているのは、切嗣もすぐにわかった。

ケイネスはいぶかしげに思いながらも、すぐに背を向けてソラウと共に立ち去っていく。

刃夜はケイネスとソラウに対して何も言うことはなく、目を合わせることもない。

だがその立ち位置が全てを物語っていた。

舞夜の射線を封じるための立ち位置。

先ほど短刀も投げてはいるが、再度立ち位置で手出しをさせないことを強調していた。

「イレギュラーなサーヴァントも、粹なことをするな」

事ここに至っては、刃夜の真意を掴めぬが、それでも己達にとって

は望ましいことをされれば、敵意を抱くこともない。

ましてや自らがやるべきことを果たすのみと、自らの命を散らす覚悟であればなおさらだった。

「あなたは……どうやらマスターとわかりあえたようですね」

セイバーからのその言葉は、ランサーに対する誉れであり、羨望にも似た気持ちだった。

「セイバー……いや、アーサー王」

「……どうした？」

「疑うわけではないが……確認させて欲しい。今、俺の顔を見ることは出来るか？」

？ どういう――

ランサーからの疑問の言葉に、それこそセイバーは……アーサー王は疑問符を浮かべた。

だが、その言葉に意味にすぐに気がついた。

以前に自らの対魔力でかき消されたランサーからの呪いが消えていることに。

何故消えたのかと、疑問に思ったがすぐに回答を導き出した。

以前の会話を……アインツベルンの森で言っていた刃夜の言葉を思い出したのだ。

にわかには信じられなかったが、しかしここまでいくつも通常では考えられない行動を起こした刃夜であるために、もしかしたらと思えたのだ。

何よりその証拠に……今セイバーはランサーの顔を……

「ええ、ランサー……いや、ディルムツドよ。今なら、あなたの顔をまっすぐに見ることが出来ます」

対魔力が発動することもなく、まっすぐにセイバーはランサーを見つめた。

それが回答だった。

刃夜はそんな二人を見て数歩下がり……得物を消失させてドカツ

と座り胡座を掻いた。

そして手を出すつもりはないと、腕を組んで観戦の構えをとった。おそらく態度の通り、手を出すつもりはないと言いたいのだろう。だがそれでも、ケイネスが逃げた道をふさぐように座るその姿は、その後ろに行けば容赦はしないということなのだろう。

また舞夜のそばに投げた短刀も消失させていない。

故に……今この場において、誰も二人の邪魔をする者はいなくなつた。

「ああ……これで我らの決闘に対する憂いはなくなった！ では……死合おうぞセイバー！ 我が主の名にかけて……私は全力でお前を止めてみせる！」

胸に宿すのは忠義の心。

体は芯まで熱く、血がたぎっている様だった。

その気持ちを更に加速させて……ランサーは残された自らの赤い得物を得物を振りかざし、名乗りを上げた。

「ファイオナ騎士団が一番槍！ デイルムツド・オディナ！ 参る!!!」

その気持ちに応えるのは可憐ながらも熾烈な力を宿した騎士王。

「……いいだろうランサー。この剣の名にかけて……貴方と全力の決闘をしよう！」

手にした光り輝く尊い聖剣を胸へと掲げて……騎士として剣を振るうことを誓った。

そして掲げた剣を振りかぶり……構えた。

「ブリテン王アルトリア・ペンドラゴンが、受けて立とう！ いぎー！」

「勝負！」

赤き槍を持つその男の顔には、言葉以上に晴れやかな表情が浮かんでいる。

それを見て、相対する人間も……セイバーも、朗らかに笑みを浮かべた。

先ほどと違い、両の手で自らの剣を握りしめて……セイバーはランサーへと走った。

今のこの状況において、ランサーへと全力を出さないのは逆にランサーの尊厳を損ねかねない。

今のこの場において、ランサーを全力で倒すことがセイバーのランサーに対する礼儀であり、ランサーはそのセイバーの全身全霊を、己が命を賭けてでも止めて見せなければならぬのだから。

互いに名に恥じぬ英霊が、全力で斬り結ぶ決闘。

小さな姿からは想像も出来ないほどの速さと力で、手にした聖剣を振りかぶるセイバー。

セイバーの剛剣を、巧みな槍捌きで受け流し、その長さを利用した線と点の連撃で迎え撃つランサー。

見れば誰もが魅了されるであろう、実に見事な戦いだっただ。

その決闘を実に冷めた目で見つめている存在がいた。

これが英雄様……いや、今は英霊様か……。まあどつちでもいいけど、これが多くの人を狂わせた決闘とやらか……

まるで空虚な物を見るような眼で、切嗣は二人の決闘を眺めていた。

それはまるで興味のない演劇を見ているかのように、何の感情も表

していなかった。

否、一つだけ感情が漏れ出ていた。

悲憤と悲嘆。

その瞳をする切嗣の姿は、どこかひどく曖昧だった。

戦いを否定するかのような悲哀を抱きながらも、戦闘に対する手段は実に容赦がない。

徹底的な合理主義と殺害。

今回のケイネスとランサーに対する周到な行動もその一つだった。

刃夜によって殺害こそ失敗には終わったが、しかし令呪を失った以上、そう脅威にはなり得ない。

切嗣としてはそう割り切るしかなかった。

さすがに刃夜がこの場で動くことを許してくれないのは理解できしており、舞夜に指示を出すことも叶わず、切嗣は実につまらなさそうに、二人の決闘を見ていた。

手持ちぶさたな切嗣は、懐からタバコを取り出して火を点けて、深々と吸い込んだ。

くゆらせた紫煙の先の決闘を見つめる。

その決闘は切嗣から言わせれば滑稽でしかなかった。

そして怒りもこみ上げてくる物だった。

こんな物のために……どれだけの人が犠牲になったんだ？

『本当に興味なさそうだな、お前』

その切嗣の耳に、再度刃夜の声が届いた。

他の人間にばれないように、切嗣は声をかけて来た存在……刃夜へと目を向ける。

その視線の先には……同じように決闘を見つめている刃夜の姿があった。

同じようにといっても刃夜は二人の戦闘を並々ならぬ熱意を持って見つめていた。

「どうやら技を盗んでいるようだった。」

「お前は一体……何なんだ？ 何故僕の邪魔をする？」

小声でぼそりと……周りに気取られないように切嗣はタバコを吸う動作で口元を隠しながら、刃夜へと問いかけた。

それは小声ながらも明確な問いだった。

刃夜であれば、おそらく周りに気取られることなくやりとりが出来るであろうと睨んだのだ。

そしてそれは可能だった。

『邪魔をするさ。自身の妻を戦場に立たせて自身は暗殺に走るような輩相手には。俺も同業者みたいな物だがな。それでも自分に取って大切な者を矢面に立たせるのは感心しない』

同業者？

その言葉に、切嗣は意外に感じると同時に、素直に納得した。

自らの手口を邪魔するのに最適な手段を用いてきたのだから、暗殺などに精通していることは容易に想像できる。

本人が言っていた現代の青年であるならば、現代兵器についても知識があつて不思議ではない。

『魔術師殺しなる存在だったらしいな。だが傭兵家業は聖杯戦争に参加するに伴い、ぱったりと止めたと』

「……それがどうした？」

自らの経歴が知られていることに少々不思議に思ったが、切嗣はすぐに結論を導き出した。

間桐雁夜と同盟を結んでいるのだから、ある程度の情報が知られていても何ら不思議ではなかった。

『傭兵か……』

そう漏らした言葉は、今までと違って明確な意志が込められていた。

その言葉から漏れ出た感情が……切嗣に刃夜がどのような存在であるのかわからせた。

自らと同じような考えを持っているのだと。
傭兵を侮辱するでも、誇るわけでもない。

ただただ淡々としていて……けれど乾いていた。
それが同じ地獄を見た者だと……

わかった。

『現代戦の傭兵家業はなかなかきついものがあつたんじゃないか？
紛争地域の状況つてのは、本当に……地獄と称してなお生ぬるいから
な』

「……」

『俺も紛争地域の子供を攫つて臓器売買をしている糞野郎どもを、何
人も殺してきた』

子供を攫つての臓器売買。

その単語を聞いて、切嗣は吐き気を催すほどの憎悪を抱いた。

一瞬だけ別の何かを見ているかのように……僅かに目を細ませた
のだ。

その反応が、刃夜に切嗣が真の外道ではないことをわからせるには
十分すぎた。

では何故狂おしいと称して良いほどに、聖杯を欲するのか？

聖杯の売り文句が「何でも望みが叶う願望機」ということ。

そして傭兵家業という事実を当てはめれば、一つの推論を導くには
十分だった。

……それが出来たら苦労はしないんだけどな

刃夜盛大にため息を尽きたくなる気持ちをぐつと堪えていた。

人らしい精神を持ち合わせている人物が、戦場を訪れて何度も経験
すればおそらくかなりの人間が考えることだ。

何故こんな事が起きているのかと？

戦争という行為。

争い、人の命がまるでゴミのように消費されていく。

現代戦はそれが顕著と言っている。

何せどれだけ鍛え上げた屈強な兵士も一瞬の油断で……一発の弾丸で命を奪われるのだから。

奪う側も、奪われる側も……ただ指を動かす程度の力で相手を殺せる。

だがそれはまだ良い方だろう。

現代戦は、他にもいくつもの非道な殺し方が出来る兵器が、多く存在しているのだから。

だがその非道さを知るからこそ……刃夜は用心として揺さぶりをかける。

切嗣を見極めるために。

『聖杯を求めて妻を矢面に立たせるとは……お前も結構外道だな』

「……」

『黙りか。まあ聖杯を殺したらどうなるかはわからんからな』

『聖杯は……な……』

その台詞が切嗣の耳に入って脳がその言葉の意味を理解した瞬間には……切嗣は動いていた。

否、動こうとした。

だが……それを刃夜の殺意が止めた。

紛争地域でいくつもの死の危機に瀕しながら、戦い続けた歴戦の戦士である切嗣が、止まらざるを得ないほどの膨大な殺意で……切嗣の動きを強引に止めたのだ。

動こうとした事で今度こそ刃夜は切嗣が外道ではないことを、十分に理解できた。

まあ殺そうと思えば殺せるけど、殺す理由はないしな

刃夜の言っていた相手は、当然だが聖杯を除けば舞夜しかいない。

そして刃夜は先ほど投げた短刀を爆散させれば、舞夜に致命傷を与

えることは難しくなかった。

また他にも殺りようはあったが、殺る理由もないので当然することもなかった。

ある程度切嗣のことを把握した刃夜は、それから何も話すことなく、セイバーとランサーの決闘を見つめていた。

セイバーとランサー。

二人の決闘はまさに騎士同士の純然たる決闘だった。

互いの全力をぶつけ合う、死闘。

令呪によって、ブーストされたランサー。

解呪されたことで全力を出すことが出来るセイバー。

実力伯仲の騎士の戦いは、華やかと言っていていいものでもあった。

だがそれでも……終わりは訪れた。

永遠に続くことなどありはしない。

必ず終わりは訪れる。

それが例え……英霊の決闘であっても。

令呪によるブーストがあったといっても……やはり本来の得物を片方失ってしまったランサーが不利になるのは致し方ないだろう。

やがて、セイバーの聖剣によってその胸を貫かれた。

だがランサーの顔は……

実に晴れやかであった。

騎士として全力で戦ったの敗北。

そのことに対して思うところがないわけではない。

だが今のランサーにとって、それ以上に大事なことを果たすことが出来たのだから。

長くはないが、決して短くはない時間だった。

だがそれでも、ケイネスは無事に逃がすことが出来たのだと……ランサーは確信できた。

「感謝する、アーサー王。全力の決闘。彼の騎士王との決闘は、私にとってこれ以上ない榮譽となった」

「それは私の台詞だ、デイルムツドよ。あなたとの死闘を、私は生涯忘れることはないだろう」

互いに本心からの言葉だった。

互いに全力を出し切ったの死闘。

そして自らの願いを……望みを叶えることが出来たこと。

これでランサーは、何も思い残すことはなかった。

「さらばだ。セイバー。そしてジンヤよ」

「ああ。見事だった」

刃夜も確かな尊敬の念を乗せて、ランサーに言葉を贈って……見送った。

魔力の霧となって散っていくランサー。

その魔力の霧は……どこか輝いているように見えていた。

その魔力がどこに向かっているのか……刃夜は明確に把握していた。

な—るほど。そういう仕組みか
一人小さく何度か頷く刃夜。

その様子に気付いているのかいないのか……セイバーはランサーを見送ると、鋭い視線を切嗣へと向ける。

「キリツグ。さきほどの婦人はどういうことだ？」

「……」

返答によつては剣を向けかねないほどの剣幕で問うたセイバーの言葉。

だがそれに対して切嗣は徹底的な沈黙と、無反応を返した。

何よりも切嗣がセイバーへと向ける目が、二人の関係を如実に物語っていた。

まあ……合わないだろうね

その二人の様子を、刃夜は内心で呆れながら見つめている。

切嗣はセイバーの問いに答える気がないのか、すぐに視線を外して廃墟の外へと向かっていく。

その切嗣の前に、セイバーが足止めをするように立ちふさがるが、それに対しても切嗣は何も言わなかった。

「答えて切嗣。今回は、私もあなたに聞きたいわ」

アイリも同じ思いなのか、切嗣へと車に寄りかかりながらそう問いかけていた。

するとセイバーに対する態度が嘘のように……切嗣は恥ずかしげに苦笑しながらアイリへと目を向ける。

その瞳には明らかに親愛の感情のこめられていた。

本当に大切に思っているのは間違いないのか……

その笑みを見ながら、刃夜は何も言わなかった。

切嗣を養護するわけでもなく、セイバーを援護するわけでもない。ただ成り行きを見守っている。

「僕の殺し方を見せるのは、初めてだったね、アイリ」

セイバーへと向けている視線とは打って変わって、アイリへと向ける視線は愛情と恥じ入るような感情が入り交じっていた。

「違うわ切嗣。今は私ではなく、あなたの言葉で、セイバーと話して」

「話す事なんてあるわけがない。人を殺しておきながら栄光だの、榮譽だのと……そんなもので自らの罪を顧みないどころか、誉れだと称える愚か者なんかには、何を言っても無駄だ」

「!? 貴様―」

アイリへと話しかけているが、明確な侮辱の言葉に、セイバーが激昂する。

しかしそれすらも切嗣はとりあわず、完全に黙殺して……切嗣は更に言葉を続けた。

「騎士なんて存在に世界は救えない。救えるわけがない。戦場に幻想を抱かせて、若者達を無駄に死なせてきた連中になんて」

「幻想ではない！ 命の遣り取りであっても、そこには確かに法と理念がある！ ないわけがない！ もしもなければ、何度この世に地獄が出現したことになるという！」

凜然と、セイバーはそう反論したが、その言葉に、切嗣は心底呆れたとでもいうように、鼻で笑っていた。

「聞いたかい、アイリ？ この英霊様は、こともあろうに戦場が地獄ではないと言っている。そんなわけがない。戦場は地獄でしかない。希望もなく、敗者の命と尊厳を踏みにじって成り立つ、ただの罪そのものだ」

吐き捨てるように、切嗣は言葉を紡いでいく。

その言葉と表情には……これ以上ないほどに憎しみが込められていた。

「だっていうのに……人類はその事実気付かない。なぜならいつの時代も勇猛果敢な英雄様が、武勇譚でその罪を消してしまうからだ。そんな血を流すことを……人を殺すことの邪悪さに気付かせないせいで人間は、全く進歩していない！」

何に向けられたものではない言葉。

だが全てに対して向けられている言葉だった。

当然それは……自分自身に対してすらも。

そしてなにより……英霊として召喚に応じた、英雄達に対して。

自らがもつとも嫌う存在達の戦いを、切嗣は一体どのような気持ち

で今まで眺めていたのだろうか？

だがその怒りを呑み込んで、切嗣は乾いた笑みを……アイリへと向ける。

「僕は聖杯を勝ち取り世界を救う。そのために、もつともふさわしい手段を執っているだけなんだよ、アイリ」

マスターの令呪を全て消費させた上で、サーヴァントを殺す。

これではマスターは令呪がないため、マスターが死んでしまったサーヴァントと再契約をすることも叶わない。

まさに徹底的な戦略といえた。

「今の世界、そして人の在り方では、戦いはどうあっても避けることができない。でもそれを最小限にすることは出来る。最小限で、最大の効果を。それを卑怯だと、卑劣だと蔑み、罵るのならば好きにすればいい。正義では世界は……救えないんだから」

キリツグ……

先ほどまで卑劣で卑怯だと自らのマスターに反逆することすらも考えていたセイバーは、今の切嗣の言葉と、何よりも彼が初めて見せた激情と、戦火に対する怒りと憎しみを見て、冷静さを取り戻していた。

冷静……というよりも、憐憫と言つていいかもしれない。

その気持ちを抱き、どう言葉にすればいいのかわからなかった。

一瞬沈黙がこの場を支配するが……その沈黙を、刃夜が破った。

「ご大層な事を言っているが……果たして聖杯は本当にあるのかね？」

未だ存在していた刃夜がそう言葉を投げかける。

黙って話を聞いていた刃夜がそんな聞き捨てならない言葉を投げかけてきたものだから、切嗣は再度鋭い視線を刃夜へと向けた。

「まあお前達が聖杯とやらにどんな幻想を抱こうが俺にはどうでもい

い話だが……。あえて言わせてもらおう。果たして、聖杯はあるのか？　そしてそもそも……」

「その聖杯は本当に万能なのか？」

ニヤニヤと、刃夜は実に嫌らしく笑みを浮かべていたが、だがすぐに霞がかかるようにして、姿を薄れさせて、やがて消えた。

目の前にいながら姿を……。そして気配すらも消失させたため、セイバーが慌ててアイリへと駆け寄り周囲を警戒するが、しばらくしても何も起きなかった。

本当に去ったものと判断し、切嗣は舞夜が運転するライトバンの車で、廃墟を後にした。

「殺しますか？」

「いや、止めた方が良いでしょう。あの体でケイネスが逃げ込むとしたら冬木教会……。聖堂教会以外にあり得ない。それに、あの意味不明なサーヴァントが何も言ってこなかったのは、暗にこちらに殺すなど言ってきているのだろう。令呪も失った以上、リスクを冒してまで殺す必要性はない」

舞夜の運転に任せて背もたれに身を預け目を瞑った切嗣の脳裏に浮かぶのは……。先ほどの刃夜の言葉だった。

『本当にあるのか？』

『本当に万能なのか？』

この言葉が切嗣の頭から……。どうしても離れなかった。

切嗣が消えたことで気を張っていたアイリは、新たなサーヴァントの魂を取り込んだことで更に体調を悪化させ、倒れてしまった。

セイバーが介抱している姿を……先ほどから一步も動かずにその場に立っていた刃夜が……

最後にアイリへと……言葉を投げかける。

どうしても聞かなければいけないことがあったため……力を行使する。

『アイリスフィール。お前は本当に消えていいのか？』

耳に響いたその言葉に驚きながらも、その言葉の意味を考え……そして実際に起きている体の変調により「人としての死」を実際に感じて……

アイリは今までとは別の意味で顔を歪ませた。

はい、了解

そのアイリに対して得心するように刃夜は一つ頷いて……今度こそこの場から立ち去った。

魂と器

「大丈夫ですか、アイリスフィール」

「ええ……ありがとうセイバー」

切嗣が用意したセーフハウス……くたびれた武家屋敷の土蔵で横になるアイリのそばに、心配そうに跪きながら、セイバーが問いかけた。

問いかけられたアイリはただ力なく微笑むだけだった。

その弱々しい姿に、セイバーとしても何も言葉を返すことは出来なかった。

ぎこちない会話で何とかアイリを慰めようとして逆に空回っていた。

そんな優しいセイバーに、アイリはクスリと穏やかに笑っていた。だがそれでも騎士であり、戦士なのだろう。

舞夜が持ってきたバイクに興味をそそられて、土蔵を後にする。

そして、アイリと舞夜が二人で重い会話をしているのを……

あ……そう……そういう感じなのか……

土蔵で堂々と、刃夜は胡座を搔いてセイバーとアイリ、そしてアイリと舞夜のやりとりを聞いていた。

当然だが、三人はだれも気付いていなかった。

刃夜の左腕は、淡い紫の陽炎のような光が、灯されていた。

完全なる気配遮断と認識阻害。

その力を遺憾なく發揮して……刃夜は女性三人の動向を監視し、その会話を堂々と聞いていた。

はつきり言って完全にストーカーまがいの行動と言えなくもない。

だがこの行為が必要だと……何故か強迫観念にも似た何か、刃夜に強く働きかけられていた。

だが、刃夜自身も自分自身の行動が不可解で苛立っているのだろう。

実に渋い顔をしてアイリと舞夜のやりとりを見ていた。

違和感の正体はわかったが、しかし俺の力だけではどうにもできない
どうやら情報収集を終えたらしく、刃夜は舞夜が扉を開けると同
時に外へと出て、一目散に走り出した。

その方角は自らの家へと向かっていた。

「……」

「……」

「……」

実に重い沈黙だった。

刃夜がリフォームした武家屋敷の居間。

普段は三人で和気藹々と食事をしたり、桜が勉強したりしている部
屋なのだが、今いる人物の影響で非常に重苦しい雰囲気と相成ってい
た。

ちなみにいるのは雁夜、ケイネスとソラウだった。

「……」

「……」

「……」

「あの……お茶入れたよ、雁夜おじさん」

「ありがとう、桜ちゃん」

どうして良いかわからなかったが、それでもどうにかしたくてお茶
を入れてきて、場を和ませようとしてくれた桜に心から、雁夜はお礼
を言った。

昨夜のドーピングによる肉体の痛みがあっただが、何とか気力で雁夜
はそれを表に出そうとはしなかった。

だが当分無理をすることは出来ない、自分でもわかっていた。

刃夜にもしばらく安静を言い渡されていたので、大人しくしてい
た。

そんな雁夜の対面に座っているのはケイネスとソラウ……。

元はランサーのマスターだ。

車いすから降り、ソラウに支えられながら慣れない畳に座って、自らの対面に座っているケイネスとソラウという図式。

どうして……こんなことに？

元々聖杯戦争という魔術による戦いの敵対者だ。

正直こうして対面しているのは落ち着かなかった。

だが雁夜はまだ余裕があった。

何せ現界こそしていないが、自らのサーヴァントであるバーサーカーがそばにいるのだから。

逆にケイネスとソラウは丸腰でこの場にいるのだ。

どちらかというところの方が萎縮しそうなものだ。

が、そこはケイネス……貴族の当主とでもいうべきか、平民に対して弱みは見せたくないのか、気丈にも平静を保っている。

そばにソラウがいるからかっこわるいところを見せられないという理由もあるのだろう。

そしてそれ以上に興味を持ったのは、雁夜自身だった。

……ここまで体が回復しているとは

ケイネスも使い魔を使用していたため、ある程度は自分以外の聖杯戦争参加者の情報を持ち得ていた。

そして自らのサーヴァントであったランサーと、戦術的に相性が良かったバーサーカーのマスターだ。

知らないはずがなかった。

そしてその雁夜は、遠からず自滅するだろうと踏んでいたのだ。

今でこそ刃夜の肉体改造という名の治療で回復へと向かっているが、実際問題、雁夜は聖杯戦争を無事に切り抜けても一週間と持たない命のはずだった。

だが、その予想を裏切る形で、雁夜はケイネスの目の前にいた。

それも体をずいぶんと回復させて。

それどころか以前よりも体からあふれ出る魔力の量と質が変わっているのを、ケイネスは傷ついた体でも感じていた。

そこまで回復させたのがなんであるのかわからなかったが、それで

も「どのようなに」したのかはわならなくとも、「誰が」したのかは考えるまでもなかった。

あのイレギュラーなサーヴァントか……

その存在を思い起こして、ケイネスは思わずギリッと、歯を食いしばっていた。

ちなみにどうしてケイネスとソラウがこの刃夜の武家屋敷にいるのかというと、昨夜ケイネスとソラウを切嗣の魔の手から救った際に、刃夜がこの武家屋敷に来るように言っておいたのだ。

ケイネスからその場にいない、別の誰かの濃い血の臭いを嗅ぎ取っていた刃夜は、ケイネスに逃げ込み先として自らがリフォームした家を案内していたのだ。

刃夜は明確には理解していなかったが、ケイネスが殺したのは言峰璃正であり、第四次聖杯戦争の監督役だった。

人殺しをしたケイネスが無事に逃げられるかわからなかったため、匿うために刃夜は武家屋敷を逃げ込み先として提案したのだ。

以前のケイネスであれば問題なかっただろうが、しかし今の体ではケイネスはほとんど魔術を使うことが出来ない。

逃げる際には大きなデイスアドバンテージになる。

さすがに命だけ救ってそれで終わりというのは刃夜としても看過できなかったのだろう。

ケイネスとしては正直敵からの施しなど受けたくもなかったのだが、しかし自らの体と何よりソラウのことがあり、刃夜の提案に乗るしかなかった。

そして昨夜はソラウの治療を重点的に行い、問題ないレベルにまで回復して皆が就寝したのだ。

もつとも、正式に調べられたのならば、言峰璃正は裏で遠坂時臣と繋がっていたためそこまで大事にはならなかったりする。

なお、この晩で刃夜はこの世界に召喚されてから初めてまともに就寝をすることが出来ていた。

臓硯を殺すまでは油断できなかったためだ。

眠そうにしながらも刃夜の帰りを待つ桜と、その桜を見守るために一緒に外で待機していた雁夜は、刃夜が予想外の二人を連れてきて驚いたものだった。

とりあえず刃夜が匿うと言い出したこと、そして自らが絶対的な優位者ということもあり、雁夜としても反対する気にはならなかった。

だが、その提案者でありこの家の最強の存在である刃夜は朝から不在だった。

ほとんど事情を説明されていないため、こんな重苦しい沈黙が起こつていたりする。

「……」

「……」

「……」

当然だがケイネスとしても何も言うことが出来ない。

平民に平伏する気もないが、しかしかといって未だバーサーカーが脱落してない以上、魔術も使えないケイネスでは話にもならない。

ソラウも素養はあれど魔術的な修行はほとんど行ってないため、魔力はあるが戦力にはならないのだ。

故に沈黙するしかなかった。

「……」

「……」

「……」

「ただいま」

そんな沈黙を破つたのは当然と言うべきか、居間へと音もなく気配もなく突然出現したと喋っていい刃夜だった。

全員が驚くが、ケイネスは貴族として何とか平静を保っていた。

雁夜は驚きそちらに目を向けて、直ぐに恨めしそうに目を細めた。ソラウは純粹に驚いているのか、口を開けてぼかんとしていた。

そんな中桜だけは特に驚くこともなく、刃夜の元へと近寄って刃夜の足に抱きついていた。

「刃夜おじいちゃん、おかえりなさい」

「ただいま桜ちゃん。留守にして悪かった」

「刃夜、どこに行つてたんだ？」

「ちよいと情報収集にな」

情報収集？

刃夜が行うことが意味不明なのはいつものことだったが、それでも悪いことはしてきないと思える程度には、雁夜も刃夜のことには信頼していた。

だが迷惑な行為をするなど言う気持ちがないわけはなかった。

「とりあえず飯にするか？ ケイネスとソラウの二人組は……パンで良いか？ リクエストがあれば叶えられる範囲で答えるが？」

「そんなものはどうでもいい。何故私たちを助けるようなことをする？」

刃夜の朝食の言葉に反応せず、ケイネスは刃夜に問いを投げた。

だがそれが当然だろう。

何せケイネスからすれば、刃夜は紛れもない敵であったのだから。

ケイネスから見れば……だが……。

まあ警戒もするか？ さて、どうしたものか？

敵対するつもりがない刃夜……敵対する気があるのなら、とつくの昔に殺している……だったが、ケイネスの気持ちは当然理解できるため蔑ろにする気はなかった。

「別に？ どうもするつもりはない」

「何？」

「どうかどうとでもするつもりならとつくにそうしている。雁夜にもいったが、これは強者の余裕だよ」

「何だど!？」

さすがに自分を格下と見られてはケイネスとしても黙ってられなかったのか、怒りを露わにしながら刃夜に食つてかかろうとする。

だが傷ついた体では満足に怒鳴ることも難しく、体のバランスを崩してしまう。

「ケイネス、落ち着いて」

「ソラウ……」

そのケイネスをソラウが支えた。

片腕を失っているが、それでもソラウの体の欠損はそれだけのため、成人男性とはいえケイネスを支えるのは問題なかった。

まだ愛情というのは遠いようだが、しかしその支え直す仕草には確かな心配と情があった。

どうやらそれなりにうまくやれそうみたいである。

「ともかく飯にしよう。あんなあばら屋で過ごしてたからろくな生活送ってなかっただろ？」

「それは……」

事実を言い当てられてケイネスは黙るしかなかった。

ちなみに刃夜が巨大海魔戦後、すぐにケイネスの元へ行けたのは拠点を知っていたからだ。

深夜に臓硯の害虫駆除を行う際に、街の見回りも行っていただけだ。更に精神分身体での監視があるため、人の様子を看破するのは朝飯前だった。

精神分身体スキルって、そのために身に着けたものだしな

精神分身体という……若い頃の刃夜だったなら絶対に匙を投げるような技術を身に着けたのは、他人の精神状況を知るために必要になったからだ。

精神体はよほどの修練がなければ隠すことは難しい。

それで相手の黒いところを見抜いたり、また相手の精神状態を知ることが人を助けることも出来るためだった。

特に……しゃべることすらもままならなくなった人を助けるためには、かなり重要なスキルだった

そして有無を言わさずに食事をさせるため、刃夜は……

「秘技！ 分身もどきー！」

と、超高速で動き、紫炎、風翔の力などを使用しまくった。

具体的には風翔の力で食材を宙に浮かせて、紫炎の力で宙に浮いた食材を調理するという……完全に離れ業をしていた。

溶き卵を作る際も卵を割ったと同時に宙へと浮かばせていくつもの卵が固まって、宙に浮かせたまま菜箸でかき混ぜたりしていた。

調味料も適当に宙に舞わせた後、風の力を用いてそれぞれの料理の宙へと向かわせて調理を進める。

コンロの数がいくつもあるようなものなので、僅か十数分で五人分の料理を用意した。

「ふう、良い仕事した」

「相変わらず、無駄なことには無駄に力使うよな……刃夜って」

そんなあほな刃夜に雁夜は半ば呆れていた。

しかしきちんと配膳は手伝っているため、呆れつつも仲は良好のようだった。

桜も進んで手伝いを行っている。

ケイネスとソラウが逃げ出す暇も、立ち去る暇もなく……食卓にくつもの料理が並べられた。

「では、食べよう」

「いただきます」

大皿に盛られた卵焼きや、パンに載せるための卵サラダ等をそれぞれが好きに取り合って食べるスタイルだ。

大皿に盛られているため、毒を混ぜるのも難しい。

それをアピールしているのだろう。

またパンにしたことで、二人とも体が不自由になっても食べやすいという配慮なのだろう。

何故ここまでする？

純粹に朝食を振る舞われ、さらには一夜の寢床まで用意されて、ケイネスの頭を疑問で一杯だった。

だがそれも当然だろう。

間違いなく聖杯を巡る敵同士だったのだから。

当然だが、刃夜もその辺わかつているため、食事をしながらケイネスの疑問に答えた。

「安心しろ。無償って訳じゃない」

「!? 何が目的だ？」

「いや、ちょっと手伝って欲しいことがあってな。それに対する前払いだよ」

「手伝う……だど？」

「とりあえず食え。毒も入ってないし、手伝うことが難しいとか出来なかったとしても、代金なんかも請求しない。その程度で困る程、金がない訳じゃない」

「それを刃夜が言うのはお門違いな気がするがね」

黙々と食いながら、刃夜の言葉に雁夜はぼそりと致命的な口撃を仕掛けてきた。

さすがにそれには刃夜も反論できなかった。

「……すみません、調子に乗ってました雁夜さん。お金出してもらってありがとうございます」

ヒモである……といっても桜と雁夜の体の治療や、食事の用意、勉強や料理の手ほどきなどしているため、ヒモという表現は語弊があるが……ため、低姿勢になるしかなかった。

「……気持ち悪いからさん付けやめろ」

「雁夜おじさん、いつもありがとう」

「雁夜おじさん、いつもありがとう（声真似）」

「桜ちゃん、良いんだよ気にしないで。刃夜……さすがに切れるぞ？」

「うん、悪い。今のは俺も「ないわ」と思った」

「全然似てなかった」

「だな、桜ちゃん」

そんな三人の下らないやりとりを見ながら、ケイネスは更に懐疑的な目を刃夜へと向けるが、しかし先ほどよりはましになっていた。

一応要求があることである程度は納得したのだろう。

そしてそれ以上に、目の前の料理に引かれていたことも事実だった。

「ケイネス。大丈夫よ……。殺すつもりならきつともう殺されているもの」

「ソラウ……」

「私とあなたにとって……いいえ、私達三人にとって、この人は恩人の

はずよ。恩人からの要求を断るような狭量ではないでしょう?」

さすがにソラウにそう言われては返す言葉もなかったらしい。

添えられたソラウの左手の優しさを感じながら……右手の平をな
くしてしまったソラウの右腕に優しく触れた。

「心配しないでくれソラウ。君の右腕は直ぐにどうにかしてみせる。
私の体も、なんとかかなる」

「そうなの?」

「ああ、協力を仰げる魔術師がいる、それに頼めば——」

「その話……詳しく聞かせてもらえないか?」

何?

先ほどまでのひょうひょうとした態度とは打って変わって、刃夜が
真剣に聞いてきているのがケイネスとしても直ぐに理解できた。

だがとりあえず飯を食う話になり、一通り朝食を終える。

そして刃夜は全ての事情を……ケイネスへと話した。

一人の女性をどうにかしたいこと。

その女性が、どうやら普通の人間ではなくホムンクルスの存在であ
ること。

ホムンクルスの肉体から魂を抽出し、別の肉体に植える必要がある
こと。

この三点を話されてケイネスはふむ、と……小さく頷いていた。

「出来るか? 悪いが俺は前にも話したが並行世界の人間で、魔術は
からつきしだ。並行世界の魔術的なものはある程度使えるが、それ
も人形とかから魂を取り出すなんて高度な技術は俺にはない」

「そんなことが出来るのか? というか、どうしてそこまでやる必要
があるんだ?」

「何故かはわからんが、しなければならぬと思う俺がいる。それだ
けが理由だ、雁夜」

首をひねっているが、それでも自分の気持ちを否定する気はないら
しく、刃夜まっすぐにケイネスへと目を向けていた。

おそらく先ほどの会話でケイネスの力が頼りになると、刃夜もわ
かっているのだろう。

逆に言えばそれに縋るしかないとも言えた。

そして刃夜の読み通り……ケイネスは今の話を聞いてほとんど問題ないことがわかった。

だが……ケイネスには刃夜の頼みに答えるための気持ちになかった。

恩もある。

義理もある。

だが、勝者とも言える刃夜に対して何か力を貸すという行為を……ケイネスは納得できそうになかった。

だがケイネスだけではないのだ。

この場にいるのは。

「力を貸してあげましょう、ケイネス」

そう、ケイネスがもつとも大切であると断言できる、ソラウが。

「ソラウ……」

「この人が困っているのは間違いない。あなたもプライドが許さないのかも知れないけど……けどその気持ちを抱くことが出来るのも、この人のおかげでもあるわ」

「それは……そうだが……」

「それに先にも言ったでしょ。これはあなただけの問題じゃない。私たち三人の問題でもあるの」

三人とは、ケイネスとソラウ……そしてランサー事、デイルムツドの事だ。

先の切嗣の奸計で殺されそうになったのは、この場にいるケイネスとソラウだけではないのだ。

あのまま刃夜が妨害しなければ、三人は間違いなく何の望みもなく、死ぬだけの運命だったのだから。

そして、ソラウがランサーの名を出したことで、ケイネスはランサーに対してソラウが抱いた……恋慕の気持ちを思い出す。

「ソラウ……君はまだ、ランサーのこ——」

ランサーのことを思っているのか？ そう問おうとしたケイネスの口を、ソラウが左の人差し指で強引に塞いだ。

予想外に触れられた事で思わず頬を赤らめたケイネスだったが、そのソラウの寂しげで優しげな笑みを見て……固まった。

「確かにランサーに恋をしたのかも知れない。初めて感じた心から湧き上がる衝動に、抗わなかった」

「……」

「でもあのときわかったの……。命の危機に瀕し、聖杯戦争を投げ出してでも、私を取ってくれたあなたがいてくれたから」

「ソラウ……」

「確かに恋をしたのかも知れない。でもそれは恋でしかないわ。まだあなたに対してどう接すればいいのかわからないのが、本当のところなのだ。でもあなたといたいと……私は思っているわ」

その言葉はケイネスに驚きと喜びをもたらした。

自らが惚れているのは重々自覚していたが、それでもソラウが自らに対して惚れているとは思っていなかった。

だからこそ、今の台詞は何よりも嬉しいものだったのだ。

「……別に構わんが、人前でラブラブするのはどうなんだ？」

ぼそりと、だが風の力を使ってはつきりと二人に聞こえるように、刃夜がそんな言葉を漏らしていた。

だがその表情がニヤニヤと実にいやらしく笑っているところを見ると、からかっているだけなのだろう。

だがケイネスとソラウは慣れてない恋愛的な行動ということに気付いて相当恥ずかしかったのか、二人とも顔どころか耳まで真っ赤にしていた。

そんな様子を雁夜は少々疎ましく、そして桜はどうやら恥ずかしく思えたのか、少し顔を赤くしていた。

少々気ままずくなりながら……気ままずかったのはケイネスとソラウだが……先ほどの話へと戻った。

すなわち……アイリスフィール・フォン・アインツベルンを救うための話だ。

刃夜も隠す必要はないため、アイリの事を話していた。

といっても、致命的な秘密などは明かしていなかったが。

そして刃夜からの願い……アイリの魂を分離すること……:対してケイネスはこう答えた。

「おそらく可能だろう」

「マジか!？」

ケイネスの言葉に刃夜は驚きと喜びを隠せなかったのか、思わず大きな声を上げていた。

何故敵陣営の存在をここまで気遣うのかわからないケイネスはいぶかしんだが……:そこまで気にしなかった。

「だが、今の私では無理だ」

「……体的な意味でか?」

「……ああ」

この状況では嘘を言うだけ無駄だと判断したのだろう。

ケイネスは素直に自分の弱みを晒した。

といっても、ケイネスとしては体をどうにかする伝手があるからこ

そ、こうしてさらけ出すことが出来た。

また刃夜が相手であるということもあるだろう。

間違いない命の恩人であることは、ケイネスもわかっているのだから。

しかしそのケイネスに対して刃夜はあっさりと

「ならお前も治療しよう」

と、ケイネスがある程度は予想しつつも、しかし言ってくるとは思えなかった言葉を口にしたのだった。

「治療だど？」

「ああ」

「……それはその男と同じようにと言うことか？」

聖杯戦争開始時よりも、回復しているのはケイネスもわかっていた。

だがその治療を……かなりの高度な治療を平気で敵であった者に施そうとする刃夜の思考が、ケイネスにはわからなかった。

「必要なことはするまでだ。そしてそれとは別に頼みたいこともある」

「……それは抜き出した魂の新たな器の話か？」

「さすがだ。話が早い」

そう言いながら刃夜が取り出したのは、拳ほどの大きさの宝石の原石だった。

だがそれを見て、ケイネスは瞠目した。

宝石自体が見事なこともあったが、その石に秘められた膨大な魔力の波動を感じ取って驚いていた。

「魂の器。これが代金で足りないか？」

「代金……だと!？」

ケイネスはその申し出に再度驚いた。

確かにケイネスが自らの肉体と、ソラウの右腕に思っている物は、間違いなく一級品であるため安くはない。

だがそれでも決して手が出せないものではない。

刃夜が取り出した宝石の原石の価値とは、比べるべくもなかった。

「先にも言ったが、この件に関しては俺は俺のために動いている。故に出費などは全く惜しまない」

「そんなにすごいのか？ 確かに綺麗だけど」

「だね。すごい綺麗」

これだから魔術に疎い人間は……

自らの目的のためとはいえ、法外な報酬を出そうとしている刃夜と、宝石の価値を全く理解していない雁夜と桜に対して内心で辟易していたが……それでも宝石が欲しくないと言えば嘘だった。

ちなみに、この宝石はレビテライト鉱石天閃石と呼ばれるものだった。

だがここに至っても、ケイネスは手を貸すのを渋っていた。

確かに報酬も破格であり、自らの技量であれば不可能ではないと思っていた。

そんなケイネスの心境を正確に見抜いていた刃夜は……居ずまいを直し、正座して床に手をつけて、深く深く頭を下げた。

「!?」

「刃夜……お前」

「ケイネス……いや、ケイネス・エルメロイ・アーチボルト殿。どうかあなたの比類なきその技量で、俺を助けてください」

刃夜の行動に、ケイネスだけでなく雁夜も驚いている様子だった。

圧倒的存在である刃夜が頭を下げるというのは、それだけ衝撃を伴うものだった。

刃夜の力を重々に知っている雁夜からしたら目を疑う光景だろう。

だが刃夜としては必要であるため行った行為なので、別段頭を下げることを嫌う理由はなかった。

それにこの類の……プライドの高い人間ってのは頭を下げないとダメな奴は多いからな

と、ケイネスのことを正確に見抜いていたりする。

さすがに肉体的年齢が若いとはいえ、精神年齢は年の功というべきなのだろう。

また、プライドの高い人間のため頭を下げなければならぬという打算的な行動だったが、ケイネスの力が必要なのは事実なので、刃夜

としては本心から頭を下げて、お願いをしていたりする。

そしてその読み通り、ケイネスの協力を刃夜は取り付けたのだ
た。

といってもまずケイネスを運動させることから始まったのだが
……。

そしてケイネスの伝手を使って、近日中に体を入手する手筈を整え
た。

といっても、もともと体に負傷を負った際にすでに段取りをつけて
いたので、すぐに届く事となった。

翌日の朝、日本に届く手筈となっていた。

「なるべく急いだ方が良いのは間違いない」

「やはりか？」

「お前の話が本当であれば、おそらく次にサーヴァントが失われれば
魂が持たない。明日にでも行うべきだ」

「オーケーだ。なら明日は人妻を攫いに行きましょう」

この発言だけ聞くと実に危ない言葉を、刃夜は何の臆面もなく発す
るのだった。

宴会問答

その日のウェイバーの起床は早かった。

朝に起きて間もなく、自分が寄生している……誤字ではない……老夫婦に帰りが遅くなることを告げると、必要な物を求めて新都へと向かった。

寝袋や食料品、医薬品、更に使い捨てカイロなどを大量に買い込み、とんぼ返りのように深山町へと戻る。

そして少々血生臭がかすかに残る芝生へと足を踏み入れて……先ほど購入した鰻卵丼を食し始めた。

そして実に珍しいことに……そのそばにライダーの姿がない。だがそれも無理からぬ事だったのだ。

二夜連続に、自らの切り札である固有結界を発動していたのだから。

必要な魔力が枯渇しかかっているのだ。

そのため一晩経ってもライダーが現界しないことに違和感を覚えたウェイバーは、ライダーを召喚した魔法陣があるこの場所へと、赴いていた。

「何で黙ってたんだよ?」

『いや、余は生粋の魂喰らいであるが故になあ。下手をすると命すらも奪いかねんだ。それよりも、坊主、それはうまいのか?』

「自らの事よりも食べ物が優先なのか!? お前は!? ……まあ正直に言ってみろよ。日本の食文化も底が知れるな」

「よろしい! その言葉!! 俺への挑戦状と受け取った!」

まるで独り言のように、虚空に話しかけている……といっても霊体化しているライダーと会話しているのだが……ウェイバーの耳にそんな大声が響いた。

周囲に先ほどまで誰もいなかったはずだというのに、響いた言葉と……何よりいくら会話していたとはいえ、自らのサーヴァントである

ライダーが全く気付かなかったことで焦った。

だが、相手を見てすぐにその焦りは疑問へと変わった。

「……えつと……ジンヤだったか？　なにしてんだよ？」

思わずウェイバーがそう問いかけてしまいうくらいに。

ウェイバーの言うとおりに、自らのそばへといつの間にか忍び寄っていたのは刃夜だった。

桜を片腕で抱き、もう片方の腕は……何故か台車を引いていた。

しかも台車の後ろに更にもう三台の台車が紐で結ばれて牽引されている。

計四台。

一台目は大量の風呂敷に包まれている何かが置かれており、二、三、四台目はビニールシートで覆われている。

二代目は角張っている山盛りだが、三、四代目は正真正銘山盛りの何かが積載されている様子だ。

「なに、ちよつとライダーに詫びをしにきたんだ」

詫びつて……どうということ？

ウェイバーは刃夜の言っている意味がわからず、首を傾げるしかなかった。

敵対しているはずのサーヴァントである刃夜と、ライダーが現界すらも難しいほどに消耗している状況で対峙しているというのに、少々危機感に欠けている言っているいいかもしれない。

だが刃夜が戦闘をする気がないというのは、その荷物を見なくてもわかる程に、刃夜からは一切の敵意を感じられなかった。

そんな刃夜は台車からシートを取り出して地面へと敷いた。

そしてその最中に、小さな小瓶を取り出してシートに座らせた桜に、一口瓶の中身を舐めさせた。

「うう……おいしくない」

「ごめんな桜ちゃん」

……何してんだ、こいつ

意味不明でしかない刃夜の行動に、さすがに呆れ始めたウェイバーへ、刃夜は桜へと中身を一口飲ませた瓶を投げ渡す。

「とりあえずライダーが現界しないことにはどうしようもないからな。それは魔力回復薬だ。毒じゃないから飲んでくれ」

何を言つて――

敵からの施しであり、飲食物を口にするなど普通で考えればあり得ない。

だが刃夜は自らのマスターであり、幼子である桜に一口それを吞ませたばかりだ。

つまり自らのマスター……それも幼子……で毒味役をさせるといふ、普通のマスターであれば侮辱にも等しいことを行ったのだ。

さすがにこれを飲まないわけにはいかなかった。

『坊主。これを飲まなかったらさすがに男が廃るというものだぞ?』

「誰も飲まないなんて言っていないだろう!? 飲むよ!」

飲もうとしていた矢先に自らのサーヴァントからも言われて腹が立ったが、少し疑つてしまったのは事実なので、少々焦りつつもウェイバーは渡された瓶の中身を飲み干した。

ドロドロの黄色い液体を。

っ!? なんだこ!?

味の強烈さに一瞬顔をしかめるが、それはすぐに驚きと感動に変わった。

何せその液体を飲んだ瞬間に、凄まじいほどの活力が体に満ちたのだから。

それと同時に凄まじいまでの魔力で満たされたことに気付いた。

「こ、これは!?!」

「魔力回復薬だな。まあ正しくは活力剤だけど……効力は一緒だろ」

活力剤つて……これが!?

先ほど栄養ドリンクで驚愕していたウェイバーからしたら、これはもはや魔力そのものだった。

魔力を液体にして飲んだ、と言つてもいいほどに。

それほどまでに体に魔力が溢れている。

それこそライダーが現界するどころか、戦車で空を飛び回ることが出来るほどに。

「これでライダーも現界出来るだろう。ライダー、同じものお前にも渡すから実体化して飲んでくれ」

「ずいぶんと気前がいいな？ どういう風の吹き回しだジンヤよ？」

「先にも言ったが、キャスター戦での詫びだ」

ライダーが現界し、刃夜から投げ渡された小瓶を受け取り、一気に呷る。

ライダーも魔力の回復に驚きつつ、刃夜に問うた理由が「詫び」だった。

二人とも意味がわからないとわかっているのか、刃夜は苦笑しつつ、姿勢を正して静かに頭を下げた。

「!?」

「どうしたジンヤ？ 何故頭を下げる？」

「すまない。巨大海魔との戦闘で、俺は全力だったが、本当の全力ではなかったんだ」

「む？ そりやどういう意味だ？」

頭を下げられたライダーは、静かに刃夜を見下ろす。

その静かな迫力に、ウェイバーは言葉を発することが出来ず、成り行きを見守るしかなかった。

その雰囲気を感じてか、桜も何も言えないようだった。

刃夜はそれがわかっているのか、頭を上げるとただ静かに、ライダーへと……征服王イスカンドルへと瞳を向けた。

「俺は自らのマスターを救うために動いていた。そしてあの巨大海魔がおそらく……最初で最後のチャンスだった」

「……ふむ」

「故に戦闘を行いつつも力を温存しなければいけないため、巨大海魔に手こずる結果となった。そのせいでライダー。お前に過度な負担を強いてしまった。その詫びに来たのだ」

ウェイバーは刃夜の台詞で、冬木教会でキャスター討伐のために集まった使い魔の中で唯一、単身乗り込んできた刃夜の台詞を思いだし

ていた。

自らのマスターを救う為だと。

その目的のために、刃夜は巨大海魔とは別の行動を行っていたという。

確かにウエイバーも少々気になっていた。

巨大海魔が、セイバーの宝具で消されるそのとき……つまりライダーの固有結界が消え去ったそのとき、刃夜の姿はどこにもなかったのだから。

しかし刃夜は何をしていたのかまでは語らなかった。

ただ確かな意思の込めた瞳を、ライダーへと向けるのみだった。

「一つ聞かせよ。ジンヤ」

「ああ」

「無事に役目を果たせたのだな？」

それは確かな問いかけだった。

それこそ、王からの問いであるというように。

その二人の光景を見て、ウエイバーの胸に何か痛みが走ったが……そのことについて考える前に、刃夜その問いに答えた。

「ああ」

刃夜のその答えに、ライダーは静かに、だがはつきりと頷き……破顔した。

「ならばよい！ 貴様は己がすべき事を行い、それを果たした。それなら何も問題はなからう！」

快活に笑みを浮かべて、ライダーはそう豪快に笑った。

その様子にウエイバーは呆気にとられていたが、何故か胸にもやもやした感情が宿った事に、気付いていなかった。

「してジンヤよ。まさかこれで終わりとは申すまいな？」

問答は終わったとでもいうように、ライダーは刃夜の肩を叩きながら、刃夜の背後にある台車数台に乗った大量の何かに、目を奪われている。

そのライダーの様子に苦笑しつつ、刃夜は大きく頷いた。

「無論だライダー。ちょうどこちらのやるべきことも終わったので

な。お祝いもかねて盛大にやろう！」

そう言いながら刃夜は一台目の台車に乗せられた、いくつもの布に包まれた何かを、レジャーシートの上へと載せて……その布を開いた。

その布の中身は……五段重ねの巨大なお重だった。

しかもそれが数にしておよそ40。

段数で言えば200にもおよぶ膨大な数だ。

そしておそらく何かしらの力を使っていたのだろう。

布をとくと同時に、凄まじいほどおいしそうな匂いが、辺り一帯を支配した。

「ほっ!? これはよもや」

「俺が造った大量の料理だ。更に当然……」

「酒もあると言うことだな?」

これ以上ないほどの喜びようで、ライダーが刃夜にそう問うた。

その問いに刃夜は応えるように……手から酒瓶を出現させてはシートにおき、出現させてはシートに置いておく。

一升瓶にしておよそ二本。

だが、とりあえず出現させただけのようで、まだまだあると見て良いだらう。

さらに台車には瓶ビールが二十ケースほど置いてあった。

他にも水やオレンジジュース等の清涼飲料水が瓶詰めがケースで五。

一体何十人で宴会をするのかと言うほどの、料理の量と酒の数がシートに並べられる。

「行くぞ征服王! 胃の貯蔵は十分か!」

「良からう! 貴様の料理! この征服王イスカンドルが直々に征服してくれようぞ!」

ドカッとシートの上に座り、ライダーは喜色満面にそう宣言した。

その対面に刃夜が座り、持つてきていた巨大な枡をライダーに渡した。

意図を読み取り、ライダーは刃夜へとその枡を掲げた。

刃夜はライダーの枡に注いだ後、自らも枡を持ち酒を注いで……枡を打ち付け合った。

「では、大いに騒ごうぞ！」

「ああ、望むところだライダー！」

「乾杯！」

そして盛大に宴会を始める。

ちなみに今現在は真つ昼間である。

置いてけぼりで話が進んでいたことと、何よりも先ほどまでの静かな迫力のある問答は何だったのかと……そういう気持ちで支配されたウェイバーは……

「なにやってんだよおおおっおおおおお?!?!?!?!」

と、同じく大声を上げるのだった。

だが、その程度で酒の入った子供のような大人と、酒と料理が好きな仙人もどきの二人を止められるはずもなかった。

さらにそこで予想外の事が起こった。

ライダーは刃夜と杯を交わして直ぐに……刃夜に問うた。

「刃夜よ、貴様は先ほど余に詫びをすると……確かにそう言ったな？」

「……言ったが？ 氣にくわなかった？」

確認された事で、自らの行動がライダーを不快にさせたのかと、刃夜は思わずそう問いを返した。

だがライダーが怒るわけではない。

怒っているわけではないが……少し考えがおよんでいなかった。

ライダーがニヤニヤと、実におもしろいことを思いついたと言うよ

うに笑みを浮かべているのを見て、刃夜に少し悪寒が走った。

「それでは足りん、足りんぞジンヤ！」

「何？」

そしてその笑みを横から見ていたウェイバーにも……嫌な予感を悟らせたが、そのときにはすでに遅かった。

「出でよ！ 我が無双の軍勢よ！」

「ふあ？」

「ちよっおまっ!？」

刃夜が間拔けな声を上げ、ウェイバーが驚愕に目を剥くが時すでに遅し。

照りつける灼熱の太陽。

晴れ渡る蒼穹の空。

僅かに風ぐ程度の風が、暑い灼熱の空気を泳がせている。

先ほどまで確かにちよっとした木々に囲まれた芝生の上にあったのだ。

そしてその灼熱の砂漠には、場違いなレジャーシートに座った刃夜と桜、ライダーとウェイバー。

そしてライダーの背後には……数えるのがばかばかしくなるほどの人間がいた。

ライダーの固有結界、アイオニオ・ヘタイロイ王の軍勢。

それを発動させたのだ。

本来であれば警戒して然るべきだろうが……しかし警戒する理由がなかった。

何せ臣下は誰一人として、武器を手にしておらず、更に鎧も着ていなかったのだから。

何よりライダーの臣下の表情には、確かな敬愛の笑みが浮かんでおり、その笑みを自らの王と刃夜へと向けていた。

「何してやがりますかおまえはあ!？」

当然だが、この状況になってウェイバーが咆えないはずがない。

あまりに驚きすぎて声が声になっていなかったが、それでも彼の叫びを止められる者は誰もいなかった。

「せ、せっかく回復したのに!? いきなり切り札使ってどうすんだよおお!? しかも、戦う気がないだろう!? なんて使いやがりますかお前ってやつはああああ!」

「まあ、落ち着け坊主。これには余にも考えあつての」

「考え……か」

刃夜はため息を吐きながらそんな言葉を漏らした。

そしてその言葉の口調で、ライダーが何を言わんとしているのかわかったのか、大いに肩をすくめていた。

だがそれはどちらかというライダーに向けたのではなく、自らに向けたかのようなだった。

その仕草でライダーも刃夜が自らの意図をきちんと察したと理解したのである。

ライダーは再度嬉しそうに笑っていた。

それは悪戯が成功した子供のような笑みで、どこか憎めなかった。

「貴様は確かに詫びに来たと言った。詫びを求める気はなかったが、貴様の心意気は良い。素直に受けよう。だが……詫びをするというのであれば余一人ではない。そうだな?」

「ああ……」

刃夜が巨大海魔と一緒に戦ったのは、何もライダーだけではない。

アイオニオ・ヘタイロイ
王の軍勢とともにライダーの部下とも戦ったのだ。

もしも詫びを入れるのであれば、確かにライダー一人に詫びを入れるのはおかしな話なのだ。

「貴様の気遣いは確かに嬉しい。余も、そして余の臣下も貴様の事を好ましく想っておる。しかし余と貴様はまだ聖杯を求めて争う好敵手だ。一方的な施しは受けるわけにはいかん」

「そうだな……」

「魔力を過剰に回復されては、余が納得出来ん。詫びるといふのなら……貴様の料理と貴様の心。この二つで十分だ」

「で……でも……」

言っていることはもつともだった。

だがそれでもせっかく回復したというのに、わざわざそれを宴会を

行うためだけに魔力を消費するのがウェイバーとしては納得が出来なかった。

だがこの場でそれを言うのが憚られて……口を紡いだ。

「さてジンヤよ。貴様の心は確かに受け取った。だが……余と余の臣下。満足させることが出来るかな？ それなりの量を持つてきたようだが……果たして？」

「さすがだな、征服王。俺の持ち物を見て、よくぞ気がついた」

その挑発的な物言いに、刃夜も好戦的な笑みを浮かべて……左腕に魔力を回した。

左腕に淡い鋼色の光が灯り……それに呼応するように、後方の二、三、四番目の台車のビニールシートが外れて、下の荷物が露わになった。

そこには……

「……キャベツ？」

ウェイバーがちよつと間抜けな声を上げたが、それも無理からぬ事だろう。

大量のキャベツがあった。

当然だがキャベツだけではない。

キャベツ、巨大なラムの肉塊、卵、むき身のエビ、中華麺、山芋、小麦の袋。

それら全てがまるで見えない糸で釣られているかのように、宙に浮いて来た。

そして薄い茶色の水が入ったペットボトルも浮いてきて……刃夜のそばへと来て漂った。

「秘技！・分身もどきー！」

自らのそばに飛来した大量の食材達を、いつの間に手にしたのかぎらりと鈍く光る鋼色の包丁で、瞬時に細切れにした。

そして宙に浮いたペットボトルの中身の水を出す。

左腕に紅の魔力の灯火が宿り、瞬時に沸騰させる。

更に風の力を用いてそれらを混ぜ合わせて……薄い茶色の水は出汗……タネを作り上げる。

大量に浮いたそれを……再度どこかから取り出したお玉で一定の量を取り出して、宙へといくつも浮かせていく。

その宙に浮いたタネが平べったい円形に変化して……瞬時に良い焼き加減の狐色に染まった。

誰がどう見ても……非常においしそうなお好み焼きだ。

ラム肉にエビ、そして中華麺でポリユームがある。

食い応えはもちろん、漂う臭いから考えて味も抜群だろう。

「はあ!!」

そんな芝居がかった声を上げて、刃夜が更に左腕を振るって……台車から大量の割り箸と紙皿を飛来させた。

割り箸は全てライダーの配下の眼前に飛来し、紙皿も同じように飛来した。

配下達はそれを何も臆することなく手に取った。

良い焼き加減のお好み焼きが宙を舞い、皿に飛来する前にいつの間にかマヨネーズとソースを混ぜ合わせたタレが巨大な水玉のように浮いており、お好み焼きが次々と片面をソースにつけて飛翔する。

そしてその皿に次々と……乗せられていった。

目の前で行われた事があまりにも信じられなくて………さすがすぎる魔術のようなことをしているのに、やっていることがあまりにも馬鹿げているから……ウエイバーは叫ぶことも忘れてぼかんとしていた。

大量の割り箸や紙皿に、大量の調理前の食材。

どうやら刃夜も配下に料理を振る舞うことになる、想定していたのだろう。

桜は刃夜のそばで刃夜が行った調理を必死に見て技を盗もうとしていたが、当然だがマネは出来ない。

「舐めるな、征服王」

「ほう?」

「俺の数百年の修行を舐めるなよ? 貴様の臣下程度の人数で音を上げるほど、俺は甘くはないぞ?」

「まだまだ焼けるぜ!」と言わんばかりに次々宙に置かせた食材を調理しながら刃夜が咆えた。

すでに三桁におよぶ程の数の好み焼きが宙に浮いてスタンバイしている。

皿に紙コップも用意されて、空になった一台の台車に整然と置かれており、酒が注がれるのを待ち望んでいるかのようだった。

「その意気やよし！ 者ども！ 我らと刃夜の真剣勝負！ 臆せず征くぞー！」

「「然り！」」

「ではいただきます！」

「応よ！」

「「然り！」」

そして大宴会が始まった。

「おいしい」

「全くだな、ジンヤのマスターよ！ おいジンヤ！ 貴様一体どういう生活をおくったのだ？ この料理は余が今まで食してきたなかで極上の料理だぞー！」

「ジンヤどの！ これは何という料理ですか!？」

「経験値が違うんだよ！ 経験値が！ 残したら許さなんぞ！ お好み焼きだ！ ラム肉……羊だから食べる奴は多いだろうが、宗教的に肉がダメな奴がいたら言え！ 野菜オンリーで焼いてやる！」

「なんと!? そこまでの配慮を!? さすがジンヤ殿。我らが王が欲するだけありますな！」

「無意味に持ち上げるな！ 残したら殺すぞ!？」

「ほう、手合わせが出来ると?」

「そういうのは今はナシ！ 飲んで食って騒ぐだけ！」

「刃夜おじいちゃん。からあげとって」

「おう食べる桜ちゃん。だけど野菜も食べような」

「うん！」

「いや、だからさ……」

「おいジンヤ！ 酒をつけい！ とことん飲もうぞ！ 余を酔わせた

くば今の三倍はもってこい！」

「良いだろう、とことん付き合うぞ！ 三倍どころか六倍だってあるわ！」

「貴様と余でちょうど半分か！ それでは足りぬのではないか!？」

「違ういな！」

「「我らの分は!？」」

「全貯蔵量絞り尽くしても構わん！ 好きなだけ飲め！」

「「「だあゝゝゝはっはっはっはっは！」」」

「だから人の話を……」

「何だくわんのか坊主？ ジンヤの料理は本当に絶品だぞ！ 食わんというのなら余が全て平らげるが？」

「食べるけどさ！ でもお前ら敵だろ!？ もっとそれらしくしろよ！」

ウェイバーの言い分も間違ってたが……しかし目の前の料理の誘惑に負けて口にすると言っている時点で、ウェイバーも人のこととは言えなかつたりする。

そしてしばらく大騒ぎの宴会が繰り広げられた。

砂漠のために暑いはずだが……そこは刃夜が風の力でどうにかしていた。

ライダー達は慣れているだろうが、桜はへたすれば倒れてしまうからだ。

これだけ便利な能力扱いをしているのだから、能力自身が怒るのも無理からぬ事かも知れない。

だがそれでも、この宴会は非常に楽しげであり、実際に楽しかったのだ。

戦争を繰り広げているはずの存在が……仲むつまじく朗らかに。

しかもいつのまにか木で出来た酒樽がいくつも出現しており、その中身を皆がうまそうに飲んでいた。

「ところでジンヤ。貴様あの黒いのとそのマスターはどうしたのだ？」

「ああ。ちよつと無理させたから、今日は休憩するように言っている。」

だから留守番させている。飯はきちんと作ってきた。桜ちゃんが「作ったっていつても……卵焼きとお味噌汁だけだよ?」

「いや桜ちゃんが作った料理で喜ばないはずがない」

桜が少し恥ずかしそうにしているが、だがそれでも褒められた事が嬉しいのか、桜は頬を赤らめながらはにかんでいた。

その肴になる話題に、ライダーが飛びついた。

「ほう。貴様のマスターも料理を行うのか?」

「ああ。俺の料理の弟子の1人だな」

「料理のだと? 貴様……他のことでも弟子がいるみたいな口ぶりだな?」

「まあそういうこつたな」

「本当におもしろい奴だなあ、お主は。全く飽きさせん奴だ」

豪快に飯を食らい、酒を飲み干す姿は圧巻と言って良かった。

だがそれ以上に嬉しそうに食べるものだから、見ている方も幸せになれる……そんな食べ方だ。

大量の料理はみるみるうちになくなり……そして酒もほとんどを飲み干した。

大量に作られたお好み焼きも全て消化されて、最後にはちよつとした争奪戦となっていたりする。

ウェイバーも少々飲まされたため……お酒は二十歳になつてから!……飲み慣れていないのか目を少々回して眠りについていた。

桜もお腹がふくれて眠くなったのか、レジャーシートの上で丸くなって寝ていた。

そんな桜に上着を掛けて風邪を引かないように……当然桜の周囲の温度は力で調整している……配慮する。

やがて全ての料理が尽きていき、臣下達の詫びを終えると、ライダーは王の軍勢を解除した。

皆この飲み会が終えるのを名残惜しそうにしていたが、それでも去りに際に刃夜に好戦的な笑みと戦意を向けて去っていった。

そして元の芝生の上へと、四人は返ってきた。

食い散らかされた物は綺麗に台車に詰まれており、きちんと片付け

るつもりなのだろう。

ライダーは最後の一杯を飲み干す前に、刃夜へと問いかける。

「ジンヤよ。お主に聞きたいことがあるがかまわんか？」

「何だ改まって？ 別に構わないが？ 答えられないことは答えないぞ？」

「構わん。ではジンヤよ。お主が作った料理と酒は実に見事であった」

「お褒めにあずかり光栄で」

「酒を作るのは簡単なことではあるまい？ それもこの酒はかなり上等な酒だ。料理もそうだったが……並々ならぬ修練をしたのか？」

何故そんなことを聞いてくるのかわからない刃夜だったが、しかしライダーが……イスカandalが真面目に問いかけていることに気付いて、刃夜も真面目に答える。

「俺は並行世界の人間で、様々な並行世界で修行を行ってきた。その際自らの世界とは全く異なる世界も多かった……というかそんな世界がほとんどだ。故郷の酒を飲めるようになりたかったから、貯蔵及び熟成するための蔵を造った。むろんそこに収める酒もな」

「では次に……ジンヤ。貴様は巨大海魔との戦闘でこういったな？ タントウ？なるものの制作費を余に要求する……と」

「言ったな」

別段嘘をいう理由がなく、答えられる質問であるため、刃夜は素直にライダーの質問へと答える。

「すると何か？ 貴様が振るっていたあの馬鹿でかい刀や、いくつも投擲していた小剣などは、お主が自ら作ったのか？」

「ああ」

刃夜はそう良いながら左手を軽く握って、簡素な鞘に収められた打刀を出現させて鞘から抜きはなした。

それは今まで刃夜が出現させて使っていたどの刀よりも美しく、圧倒的な力を感じさせた。

刃夜はその刀を納刀し、ライダーへと手渡した。

ライダーはその刀を受け取ると、同じように静かに抜き放ち……そ

の刀身に見ほれていた。

「これほど見事な刀を……ジンヤよ。お主が作ったのか？」

「ああ。俺の生涯の命題は刀の鍛造と料理だ。そいつは俺の中でも傑作の部類だ」

最高傑作ではないと申すか!?

ライダーは刃夜の言葉に納得すると同時に、衝撃を感じた。

鍛造と料理。

実際に料理を食らい、鍛造した刀を見て、更に傑作の刀をこうして手に取った。

さらに刃夜自身の人柄と戦闘技能。

王としてのイスカンドルが……欲しいと思うのは当然といえた。

さらに……

「ちなみにジンヤよ。貴様、いくつもの刀を出現させたりしておるが……数はいかほどあるのだ？ また刀しかないのか？」

「総数はそれなりにある。刀以外に剣も作ってたりするが……刀に比べれば微々たるもんだな」

そう言いながら、刃夜はライダーに渡した刀を刀蔵にしまうと、それとは別に簡素な鞘に収まった直剣を取り出した。

サイズ的にライダーが持てばちょうどいいサイズだ。

それを再度ライダーに手渡して、刃夜は言葉を続ける。

「基本的に刃の武器を作る。日本の槍とか薙刀とか短刀にナイフ。まあ他の武器も作れなくはない。メイスとか金棒とか。鎧も作れるが……まあ一番得意なのは刃物だな。刀か剣」

「具体的な数は？ そう……たとえば余の軍勢に、武具を行き渡らせることは可能か？」

「……そちらの軍勢の総数がわからんから何とも言えないが、さつき宴会で騒いでいた連中だけなら問題ない。ちなみに最強の鎧は遙か遠くにあるし、俺以外に着れないから渡せないし渡すつもりもない。新たに鎧を作るならその限りではないが」

さすがにこの問答で、ライダーがどのような意図で自らに問いをしてきているのか、刃夜も気付かないわけがなかった。

だがそれでも、刃夜はまっすぐに見つめて問いを投げかけてくるライダーに対して……同じように真剣に答えていた。

「サーヴァント、フロンティア開拓者ジンヤよ」

「……」

「余の友となつて、余に仕えぬか？」

「……何？」

その問いは少々意外だったのか、刃夜から疑問の言葉が漏れ出ていた。

「貴様の鍛え上げた刀、そして剣は、実に見事な出来映えであった。それこそ神代の武具にも遅れをとらんだろう」

「そら褒めすぎだ」

「いや、余は嘘は言わぬ。そして貴様の料理も、実に見事だった」

「……」

「そして貴様が鍛え上げた武具が余の軍勢に行き渡らせることが可能というのは、余にとって実に魅力的なことだ」

「魅力的？」

軍勢に行き渡らせるというのはてつきり数がどれほどかと問うてきていると思つた刃夜だったが、しかしどうやらそういう意味ではないと判断し、話を聞いた。

「余は、今再び、この世に生を受けて、今度こそ、この世界を制覇するという野望があるのだ。もしその隣に貴様がいたのなら、これほど心強い事はあるまい」

「何故だ？」

「簡単な話だ。貴様の實力、人柄、そしてその技量と能力。どれをとつても申し分ない。さらに貴様が持つ武具を余の軍勢に装備させれば間違いなく強力な軍となる」

「だが今ライダーが持っている俺の剣は、あのアーチャーが持つ武具よりは劣るぞ？　なにせただの鉄の剣だからな」

小さく肩をすくめながら、刃夜はライダーの言葉にそう返した。

それはライダーも十分にわかっていたことだった。

ライダーはアーチャーの正体が……英雄王ギルガメツシュであることにすでに気付いていた。

仮に気付いていなかったとしても、あれだけの宝具を持ち得ている存在であるため、ライダーとしてはギルガメツシュも欲しいと思っていた。

それでもライダーは……イスカンドルは刃夜も欲しいと思ったのだ。

自らが手に持つ剣を鍛え上げる技量を有した……刃夜を。

「そんなことは問題にならん。余が貴様を欲しいと思つたが故に、余はこうして貴様に問うておるのだ」

「……」

「更に言えば、前にも同じような事を言つたが……貴様は己という存在のことを、まだよくわかつておらんようだな？」

「ほう？」

そのライダーの挑発的な発言に、刃夜は興味深そうに言葉を返す。

刃夜の反応に満足げに頷きながら、ライダーは言葉を続ける。

「余が貴様を欲しいと思つたのは、何も武器に料理と酒の腕前だけではない。先にも言うたが貴様の人柄もあつてのことよ」

「人柄？」

「そうだ。貴様には他者を惹きつけるものを持っている。以前に窮地に落ちいった国の姫を紹介されたと言つておつたな？ 救国というのは確かに偉業だが、それだけで王が自らの娘と一緒に王位を渡すわけがない」

これは王であるからこそライダーはよくわかっていた。

生まれながらにして王の資質を持ち、王として育ち、王として生きたライダーの言葉には、信憑性が大いにあつた。

そして当然だが……ライダーは自らの考えが間違っているとは思っていないかつた。

そしてこの場合、その考えはあたつていたと言つていい。

「貴様に王位を譲りたいと思つたからこそその言葉だ」

「……なるほど」

「貴様には確かに人を惹きつける魅力がある。現に余の臣下も、貴様のことを好いている者は大勢いる。といっても、余の臣下は生粋の武人が多いため貴様の強さに惹かれているというのが実情だが」

はっはっはと、快活に豪快笑いながら、ライダーはそう刃夜に言い聞かせた。

その言葉に刃夜は反論を返さない。

いや、おそらく返せないのだろう。

ライダーのことを見つめて、真摯にその言葉を受け止めていた。

「改めて問おう。ジンヤよ」

「余の友として、余に仕える気はないか？」

ライダーの……イスカンドルの真剣な思いであると、誰もがわかった。

刃夜は当然として……その場にいたウェイバーも容易に理解が出来た。

自らのサーヴァント……ライダーが刃夜を心から欲していることに。

この問答に……ウェイバーは齒がみしている自分に、最初は気付くことができなかった。そして知らず知らずの内に、体に力を込めている事にウェイバーは気付いていなかった。

横になり、背を向けている状況で手を握りしめていた。

その握りしめた拳に気付いて初めて、ウェイバーは悔しいという気持ちを抱いている自分に……

気付いた。

三度にわたって問われたライダーからの……

征服王イスカンドルからの問い。

その問いに対して、刃夜は静かに……答えた。

「断る」

ただ一言、簡潔に、そう返していた。

それに対してライダーは何も言わなかった。

すぐに刃夜が言葉を紡ぐとわかっていたのかもしれない。

「お前ほどの男にそこまで必要とされて嬉しく思う」

「……」

「だが俺は自らに課した命題がある。それを極めるために俺は生きて
いる」

「俺が心の底から望み、心の全てを賭けて挑むのは、我が命題のみ」

「故に申し訳ないが、征服王イスカンドル。あなたの申し出は受け
られない」

まっすぐに……そして真摯に、刃夜はライダーへとそう返した。

「まあもつとも。ただの友であるというのであれば、俺としては歓迎
だがな」

そう言つて刃夜は最後に柀に残っていた酒を飲み干した。

それに続くように、ライダーも柀に残っていた酒を飲み干し……こ
う告げた。

「よかろう。ならばその貴様の命題……余が篡奪してくれようぞ！」

「……はあ？」

さすがにこの返答は予測できなかったのか、先ほどまでの真剣な声とは違う、実に間抜けと言える言葉を漏らしている刃夜がいた。

その刃夜に、刃夜同様先ほどの真剣な問答はどこへやら、ライダーが快活な笑みを浮かべて刃夜へと挑んだ。

「余は征服王であるが故、貴様が拒むというのであれば、我が覇道をもつて貴様を奪うまでだ」

「……どういう意味だ？」

「貴様のありように余は敬服をもつて挑む。余の征服は……奪い、侵すこと。貴様を侵し、王として貴様を魅せることが出来るか……」

「その勝負と言うことか？ 剣を交えて」

「然り」

刃夜の問いに、ライダーはただ一言そう返した。

ライダーの顔には、実に挑戦的な笑みが浮かんでいた。

その言葉と笑みに……刃夜も笑って、答えた。

「良いだろう征服王イスカandalよ。我が信念と命題に賭けて、貴様の篡奪、阻止してくれる」

人攫い×2

切嗣がアイリに外の世界を見せるといふ約束を果たせないことを謝罪し、約束された勝利の剣の鞘を切嗣へと返した。

その後、アイリと舞夜が、互いの心情を吐露していた。

互いに、互いの思いと心で、切嗣の事を想っている、二人の女性が。「舞夜さん。あなたがキリツグに伝えて。私の言葉で慰めてあげて欲しいの」

「善処はしますが……それは戦いが終わった後になるかと。予断を許せる状況ではありません。彼も、私も、気を抜くことなど出来ませんから」

油断していなかったと言えば嘘になるだろう。

先ほどまで魔術的な戦闘力の高い切嗣がいたのだから。

また決して強力なものとは言えないが、それでも結界がきちんと張られていた事もあった。

だから大丈夫だと思っていた。

だが、そんな物など、何の意味もないものだと思える存在がいたのだ。

「残念だが……そんな悲しい願いを叶えさせる訳にはいかないなあ？」

土蔵で互いの内面を吐露していたアイリと舞夜の耳に、そんな声が響いて二人は驚きのあまりに体を飛び上がらせた。

といってもアイリはほとんど体が動かなかったが。

しかし歴戦の勇士と言つていい舞夜の行動は早かった。

直ぐに自らが肩にかけているキャレコ短機関銃を掴み、声が出た方向へと向ける。

だがその時にはすでに遅かった。

銃口を相手へを向け終えるその前に、舞夜の鳩尾に刃夜が手にした

打刀の鞘尻が突き刺さり……舞夜は意識を失った。

「あなたは……ジンヤ!」

「よう、アイリスフィール・フォン・アインツベルン。息災で何より」
いつからここにいたの!?

動くことも出来ないため、倒れた舞夜の介抱も出来ず、アイリは歯がみするしかない。

だがその歯がみする力さえもほとんどなく、アイリはただ力なく刃夜を睨み付けることしかできなかった。

今までもよくわからない行動をしていた刃夜だったが、舞夜やアイリに直接手を出してきたことはなかったため、悪い人間ではないと思っていたのだが、しかしそれでも二人の会話を黙って聞かれて気分が良いはずもなかった。

その心境を十分に理解しているのだろう、刃夜は困ったように苦笑しながら、素直にわびた。

「秘密の女子会に勝手に邪魔して悪かったな。そして会話を盗み聞いたことも謝罪しよう」

「謝れば許されることではないと思うのだけれど?」

「その通りだ。必要なこととはいえ、忍び込み会話を盗み聞いたことは弁解のしようもない。だがお前らがどういう存在なのか……衛宮切嗣にとってどんな存在なのかを確認したかったのね。話を聞かせてもらった」

「キリツグの……ですって」

イレギュラーな敵対者から聞かされる、切嗣という言葉。

それは戦闘に疎いアイリであっても良くないことであるというの
は、重々理解できた。

その切嗣に何か伝える手段はないかと、何とか上着のポケットに入
れてある携帯電話へと手を伸ばそうとする。

が……サーヴァントの魂をいくつも吸収し、人としての機能がほと
んど失われたアイリの行動を刃夜が妨害できないわけもなく、上着か
らあっさり携帯電話を取られてしまった。

「……一体、何が目的なのかしら?」

何も出来ない自分に歯がみしながら、アイリは精一杯の抵抗として、刃夜を睨み続けた。

その眼光を真つ向から受け止めながら……刃夜はこう答えた。

「アイリスフィール・フォン・アインツベルン。貴様のその魂、もらい受ける！」

その言葉と同時に、刃夜が舞夜にやったのと同じように、アイリの鳩尾に鞘尻で殴打し……アイリの意識を刈り取った。

あゝゝゝゝやだやだ。精神分身体で見てたから絶対まともな人生送ってないとは思ってたけど……ここまでとは

土蔵にいる二人の女性を意識を刈り取って、刃夜は深々とため息を吐いていた。

必要なことだからこそ、刃夜は霞皮の護りを使用して土蔵に忍び込み……前と同じ手段で、舞夜が土蔵に入ったのと同じに忍びこんだ……二人の話を最後まで聞いたのだ。

刃夜自身も当然だが理解していた。

今の自分の行動が、決して褒められた事ではないと。

そしてはつきりいってしまえば、刃夜自身もこの二人……特にアイリスフィール・フォン・アインツベルンに対して自分が執着する理由が全く理解できなかった。

何故ここまでしてまでこの女性を助けたいと思うのか？

だが、この女性を……アイリスフィール・フォン・アインツベルンの顔を見ると、脳裏に浮かんでくるのだ……。

まるで雪の精霊の様な少女の……満面の笑みが……

脳裏に浮かぶ顔を何とか捕らえて記憶を総ざらいしても、刃夜には

その脳裏に浮かぶ少女の顔に覚えがなかった。
だが何故か感じるのだ。
自らの魂が叫ぶのだ。

絶対に……何とかしなければいけないと。

不思議な感覚だったが、しかし刃夜はその自らの思いを否定せず
……こうして行動していた。

意識を失い、倒れているアイリと舞夜を風力で浮かせて、懐から
一枚の手紙を取り出して、床へと捨てていく。

「さて……それでは人攫い開始〜」

自分の気分を少しでも上げるためか、刃夜は努めて道化っぽくそう
言って、姿を消した。

定時連絡が来なかったことで、舞夜とアイリに何かあったと判断
し、切嗣は慎重な足取りでアイリを潜伏させている古びた武家屋敷へ
と向かっていった。

遠くから屋敷を確認し、侵入者がいないと判断したが、それでも隙
を見せないように家へと入り、直ぐに銃を取り出してゆつくりと土蔵
へと近寄り……中へと入る。

しばし土蔵を調べたが罫が仕掛けられている様子もなかった。

そして切嗣は……落ちているメモに気がつき、目を通した。

『衛宮切嗣。お前の女人二人は預かった。返して欲しくば夜の柳洞寺
まで手ぶら&単身で来ること』

切嗣が土蔵へと訪れる少し前。

それは刃夜の武家屋敷にて行われた。

庭の一角に、魔法陣。

その魔法陣の中心部に、横たわされたアイリスフィール・フォン・アインツベルンと、無味乾燥とでも言うべきか……何の特色もない人形がアイリスフィール・フォン・アインツベルンの横に並べられていた。

そしてその魔法陣に歩を進めるのは……驚くべき事にケイネスその人だった。

といっても、完全に体が回復したわけではないのか、そばに寄りそうソラウに体を支えられながらだった。

それでもなお足を引きずっていたが、それでも車いすで移動していた事を考えれば驚異的な回復だろう。

しかしケイネス本人としては、この回復は半ば屈辱的なものだった。

色んな意味で

しかし一度行くと盟約を交わした以上、それを反古するのは貴族としてのプライドが許さなかった。

そして何とか必要なだけの魔術回路を回復させて、こうして儀式を執り行っていた。

「すごい……こんな大魔術を行使するなんて」

「……綺麗」

「確かに……マジですごいな」

雁夜、桜、刃夜は、そんなケイネスの様子を縁側から興味深そうに眺めていた。

といっても、三人とも魔術については素人以下なので何をやっているのかはさっぱりわからなかった。

だが刃夜はある程度は理解していた。

そしてそれがどれほど高度な事を行っているのかも。

故に、刃夜は誇張なく演技でもなく、純粹にケイネスのことを称えた。

その三人の抽象的なほめ方が、ケイネスとしては不満ではあったが、しかし刃夜からの賛辞の言葉は嬉しかったようだった。

僅かに口角を上げて笑みを浮かべソラウに支えられながら、ケイネスは魔術を行使した。

アイリ、舞夜……

心の焦りとは裏腹に……切嗣は慎重に長い石段を上っていく。

手ぶらでこいと要求されたが、懐に忍ばせることが出来る起源弾を撃つためのトンブソンコンテンドーを持ってきている。

また腰に小さなナイフを隠し持つており、完全に刃夜の言うことを聞いていない。

あのイレギュラーな存在相手に……果たして起源弾が通じるかどうかはわからないが……

切嗣はそう思いながらも、表に不安や焦りを出すことなく、泰然とした態度でゆつくりと階段を上っていく。

セイバーを連れてくるなどという要求があったため、切嗣はセイバーを呼び出すこともなかった。

最悪は令呪を使用することも考慮していた。

セイバーは今も街を散策しているだろう。

そして山門へとたどり着き、懐からタバコを取り出して火を点ける。

ゆつくりと紫煙を吸い込んで吐き出し……切嗣は単身で柳洞寺へと足を踏み入れた。

探す必要性はなかった。

あるわけではない。

何せ探し人である刃夜は、隠れもせず柳洞寺の山門からまっすぐに伸びている、参拝所のところにいるのだから。

いくら夜とはいえ、柳洞寺の静けさは異常だった。

その静けさは自然と不気味さを醸しだし……刃夜をより恐ろしく

させている。

その足下には……目を閉じている自らの妻である、アイリスフィール・フォン・アインツベルンが横たわっていた。

さらにまるで見えない十字架に磔にされたかのように、宙に舞夜が浮かんでいた。

どちらも意識がないように見えた。

舞夜は意識を失っているだけだと、呼吸していることですぐにわかった。

だが……アイリは動いている様子は見受けられなかった。

「ほう？　てつきりセイバーを連れてくると思ったが……本当に一人で来たのか？」

胡座を搔いて座りながら羊皮紙の表紙の本を読んでいる刃夜が、切嗣へと目も向けずに淡々とそう言った。

憎悪に満ちた目を切嗣は刃夜へと向けるが……しかし努めて冷静になりながら、切嗣は刃夜へと問いを投げかけた。

「聖杯が目的ではないくせに……どうして二人を連れ去った？」

アイリスフィール・フォン・アインツベルン。

その正体は英霊達のサーヴァントの魂という純粹で強大な魔力を回収し、その魔力で生成される聖杯そのもの。

聖杯戦争が始まって以来、アインツベルンが聖杯を用意してきたが、第四次聖杯戦争では第三次の失敗を経験し、聖杯という器に意思を宿した。

それがアイリスフィール・フォン・アインツベルン。

魔力がなければ聖杯としては機能しないが、しかし器であることは間違いがなかった。

だがその事実を知っているのは一部の人間のみで、途中参加の刃夜が知るはずもない。

なのに何故アイリを攫ったのかが切嗣には理解できなかった。
更に舞夜を攫う理由が欠片もない。

聖杯が望みではないため、アイリを攫う理由がない。

アイリを攫う際に舞夜が妨害しようとしたのかも知れないが、それでも手間をかけて攫う理由がない。

舞夜に至っては殺せばいいのだから。

そんな疑問が渦巻く切嗣に……刃夜は予想外の言葉を口にした。

「そうだな？　信じないだろうが……お前をどうにかするためだよ」

「……何？」

言っている意味が理解不能だった。

何故敵である刃夜が自らの事をどうにかするのか理解できなかつた。

本を勢いよく閉じたことで小気味のよい音が、二人の耳朶を打つ。

本を懐にしまうのと同時に、刃夜は懐から拳銃を……グロック17を取り出した。

それは舞夜が持っていた拳銃。

その拳銃の銃口を自らへと向けるかと思った切嗣だが、それは非常にゆつくりとした仕草で……宙で礫にされている舞夜へと向けられた。

その意味など考えるまでもない。

「！　ま——」

待て、そう叫ぶ前に発砲音が一つ。

大腿部へと向けて撃たれたその弾は外れることなく、舞夜の体に怪我を負わせる。

「！　！」

痛みによつて強制的に目覚めさせられ、舞夜は苦悶の表情を浮かべた。

だが悲鳴を上げることはなかった。

いや、もしかしたら上げているのかも知れない。

唇をきつく噛みしめていた。

咄嗟に動こうとした切嗣だったが、どうにかして体を押さえつけた。

目下刃夜のそばには人質が二人。

距離もあるため、切嗣の魔術である固有時制御を発動させても、二人の救出は難しかった。

自らの体内にはすでにアイリから返却されているエクスカリバーの鞘、全て遠き理想郷が体内にあるため、固有時制御を通常と違い四倍加速まで可能であると、切嗣は踏んでいた。

だが、四倍速で迫っても、救出出来ると微塵も思えなかった。どうする!?

切嗣が高速で思考を巡らせる中、刃夜は至極ゆっくりと、今度は舞夜のふくらはぎへと銃口を向ける。

そして再度止めるも間もなく第二射が放たれる。

乾いた音が響いて、その音に反応するように、舞夜が体を震わせた。「さて? その反応から察するにそれなりに大切に思ってはいるみたいだな」

何……?」

切嗣自身は気付いていなかったが、その表情は先ほどまでとは打って変わって、能面の様な無表情ではなく、顔を憎悪に歪ませている。必死になって表に出すまいと自らを律していた切嗣だったが、さすがに目の前でいたぶられている様子を見て冷静ではいられないようだった。

魔術師殺しとして悪名を響かせている、衛宮切嗣が。

道具として舞夜を扱っている……本人はそう思っていた。

実際その通りに接してきており、また舞夜自身も同様だった。

だというのに、手が白くなるほどに手を握りしめるのは何なのか?

その理由は考えるまでもないだろう。

そんな切嗣のちぐはぐな態度と接し方と反応を見て……刃夜はため息を吐いていた。

「これが世界を救済すると言う愚か者か」

「——何?」

その言葉に、切嗣は反応した。

別段馬鹿にされたことに対して反応したわけではない。

世界を救済するという言葉に反応したのだ。

その言葉に意味を考える前に……刃夜は今度はその銃口を、舞夜の頭部へと向ける。

向けられただけで引き金に指をかけてはいない。

だが、その指はトリガーガードの中にあり、いつでも引き金が引けることを如実に語っている。

「さて世界の救済を望む者よ」

「見ての通り俺の手元には二人の人質がいる」

「どちらか一人を選べと言われたら、お前はどちらを選ぶ？」

この問答を、切嗣は何の迷いもなく選択しなければいけない。

一人はアイリス聖杯ファイル・フォンの・アインツベルン器。

一人は久宇舞夜補助機械。

自らの願いを叶えることが出来るはずの万能の願望機。

自らの願いを叶えるための補助機械。

もしも真に世界を救済するのであれば、迷う事すらないはずだ。

彼は……切嗣は今までそうしてきたのだから。

少数を犠牲にして、多数を救う。

一殺多生という考え方。

その思考で、切嗣は今まで戦ってきた。

この憎悪と地獄を内包した……世界で。

最初は……幼い頃には出来なかった。

自らが思いを寄せていた少女を殺すことが出来ず……島が一つ消失し、自らの父を殺した。

そしてそこから衛宮切嗣の……今の衛宮切嗣の始まりだった。

様々な戦場を駆けめぐった。

何度も殺した。

より多くの命を救うために。

より多くの命を助けるために……非道とも取れる手段も淡々としてのけた。

少数の命を切つて捨ててきた。

飛行機の乗客全てがグールと化したために……乗客の唯一の生き残りだった自らの母親と思つていた女性ごと、旅客機を撃墜させたとすらあつた。

多数の人々を救うという……「正義」の行為。

もしも全ての事情を知り得たのなら、誰もが切嗣の行動を称賛しただろう。

少数を犠牲にして、大勢の命を救つたのだから。

だが切嗣は耐えられなかった。

耐えられるわけがなかった。

こんな正義があつていいはずがないと叫びたかつたのだ。その人のことを……殺したいと思つたことすらなかった。

確かに自らの父を殺しに来た人だった。

だが、彼女は自らを育ててくれた。

彼女が自分のことをどのように思つていたのかはわからない。

だが少なくとも切嗣は慕つていた。

母親だと思つていたので。

だがそれでも……たつた一人の存在のために、多くの人が犠牲になることを見過ごせなかった。

だから殺したので。

殺すしかなかったのだ。

その正義の代償に去来した痛みを歯を食いしばって耐えるしかなかった。

だから求めたのだ、聖杯を。

万能の願望機を。

もうこんな思いはごめんだと。

こんな世界はもうたくさんだと。

万能の願望機で、全てを救うために。

そのために戦っている。

そのための最後の血の犠牲だった。

確かに切嗣の聖杯戦争の戦術と戦略は非道と言えた。

だがそれでもその行いはちぐはぐだった。

ケイネスを殺すためにホテル事爆破を行うという行為も、宿泊客と従業員を避難させた。

本当に殺すつもりであるのなら、避難させる事もない。

最後に聖杯という願望機で、人間全てが救われるのなら、一殺多生と考えれば良いだけなのだ。

だがそれをしなかった。

否出来なかった。

喪う者を……手に入れてしまったがために。

故に、切嗣は即断出来なかった。

道具として接してきた。

舞夜もそう動いていた。

ならばこの状況下で選ぶのは間違いなく妻であり、願望機であるアイリを即決出来なければならぬ。

だが……それが出来ない。

なぜなら……今でこそ悪逆非道の手段で戦ってはいるが……

衛宮切嗣という人間は……優しい性格をしているのだから。

その切嗣に……刃夜からの問答に迷っている切嗣に、舞夜は小さく頷いた。

痛みの苦悶を何とか抑えつけて……舞夜は自らを捨てろと……
そう切嗣へと言っているのだ。
その舞夜の行動が……切嗣を再び「機械」へと戻らせた。
その刹那の瞬間に……

「結局……こうなったか」

刃夜が落胆したように深々とため息を吐いて……その引き金を引いた。

!!!!

乾いた音が響く。

それと共に……舞夜の頭から赤い液体が飛び散り、その首を力なく落とした。

「!!!」

その瞬間には動いていた。

舞夜が作ってくれたその一瞬の間で、切嗣は右手の令呪に命じた。

「来い！ 我が傀儡よ！」

そう叫ぶと同時に、自らも懐に手を伸ばしてトンプソンコンテナダーを取り出していた。

そしてセイバーが令呪による空間転移で柳洞寺へと出現する。

突然の召喚のため、セイバーにとっては完全なる不意打ちだった。
だが召喚されて自己の状況を認識したその瞬間には……セイバーも状況を把握した。

目の前に……外道がいるのだと。

「ジンヤ！ 貴様！」

瞬時に見えない剣を出現させて、爆発的な疾走で刃夜へと斬りかかった。

それと同時に切嗣も走りだし、アイリの救出を行う。

刃夜はそれでも動くそぶりすら見せなかった。

だが、セイバーの剛剣を、刃夜は驚くことに左腕でつかみ取った。

胡座を掻いて座ったままの姿勢であるにも関わらず、セイバーの突進を左腕のみでその衝撃と突進力を受け止めたのだ。

更に切嗣の眼前に紫の炎が一瞬灯った。

その瞬間には小規模な爆発が起きる。

固有時制御で傷を負うことはなかったが、切嗣は後方へと吹き飛ばされてしまう。

刃夜のその左腕には、淡い紅の炎と淡い紫の炎が灯されていた。

何だと!?

さすがにセイバーも自らの渾身の一撃が、座ったまま受け止められるとは思っていなかった。

その驚きの表情を向けてきているセイバーに、刃夜は言葉を紡ぐ。

「主従揃って……実にどうしようもない願いを抱いているよな、お前らは」

「何だと?」

再度剣を振りかぶろうとしたセイバーだったが、しかし刃夜が剣を離さなかった。

そのためセイバーに一瞬の隙と停滞が生まれる、そのセイバーに……刃夜はこう断言した。

「正反対とも言えるくせに、間違った望みを抱いているのは、主従共々なんだな？」

!? 何故私の願いを!?

刃夜の言葉に嘘がないことが……自らの願いを知っているのだと、セイバーは理解できた。

何故知っているのかがわからなかった。

だがそれでも知られても不思議ではないと、セイバーは自らを叱咤した。

聖杯問答で自らの願望を話したのだから、知ること自体は不可能ではない。

あの場にいたのは自身とアイリ、ライダーとそのマスターにアーチャー。

アサシンもいたがあの晩に消滅したため除外した。

ならばライダーから聞き及んだと考えが至るのは、別段難しいことではない。

実際、刃夜はセイバーが予想したとおり、ライダーからセイバーの望みを聞いていたのだから。

先日の飲み会……宴会問答にて。

故に、刃夜は行動する。

セイバーを……口撃する。

「亡霊が過去のやり直しを願うのが、果たして正しい行いか？ 騎士王」

何!?

その言葉に反論する前に、刃夜が拵んでいた剣をセイバー事遠くへと投げ飛ばした。

切嗣も体勢を立て直して、刃夜へとトンプソンコンテNDERを向けている。

サーヴァントとマスターという、二対一の状況であつても刃夜は涼しい顔で言葉を続けた。

「願望機で世界を救う。願望機で自らの国の救済」

おどけるように肩をすくめて、刃夜は見下すように顎を上げて、二人にこう断言した。

「はつきり言って、度し難いほどの馬鹿だな。二人とも」

「……」

「貴様……王としての私を侮辱するのか！」

「するに決まつてるだろ、過去の亡霊が万能の願望機で過去の改竄を願うなど……あつて良いことなのか？ お前の国が滅んでからどれだけの年月が流れたと思ってる？」

「……どうということだ？」

「過去を改竄する……それは結果を変えろと言うことだ。その影響がどうしてこの現代に影響しないと思うんだ？」

「!? ……それは」

「仮に聖杯によってお前の故郷が救われたとしよう。だがその改変がより大きな悲劇を生むかも知れないと……何故わからない？ 更に言えばその滅びの運命を受け入れた人々の胸中を……たった一人の貴様の我が侘でなかったことにするといふのか？」

刃夜の言葉にセイバーははつとなり、逡巡するように顔を伏せる。

だがそれでもセイバーは顔を上げて刃夜を睨む。

その反応で刃夜はセイバーの胸中と悩みをそれとなく察する。

悩んでいるのだと……

それがわかればセイバーに対して刃夜がこれ以上する必要性はなかった。

刃夜「は」……だが。

「そしてそんな事も考えられない愚か者よりもさらに馬鹿な奴が衛宮切嗣、お前だよ」

そのセイバーを捨て置いて、刃夜は吐き捨てるようにして、切嗣へと言葉を投げかけている。

切嗣はその刃夜へトンプソンコンテNDERを向けたまま微動だにせず、表情も変えなかつた。

まあこの程度でどうにか出来たら苦勞はしないか

そんな二人の態度を鼻で笑いながら……刃夜は最後に、こう述べた。

「確かに万能の願望機だったのかも知れない。だがそれが果たして今もそのままなのか？ 本当に真の意味で願望機たり得ているのか？ そんな反対の結果も想定しておくことだな？」

立ち上がり、手を広げて静かに言葉を紡いでいく。

「人は確かに理性を持ち得ているがそれでも動物……有機質生命体であることに変わりはない。その軀がある以上……決して争いはなくなるらない」

手を広げたまま、刃夜は静かに目を閉じた。

何かを思い起こしているのだろうか？

「そんな生命体が真に平和になるのにはどうすれば……いや、どうなればいいのか？」

ただ紡がれる言葉には一切の感情が含まれていなかった。

無味乾燥な……まるで機械が読み上げているかのような、そんな声だ。

「そうなってしまった存在が……果たして人なのか？」

だがその声が……不気味なほどに静まりかえった柳洞寺と、天空から注がれる月光のせいで、実に妖しい雰囲気醸し出す。

「人「間」なのか？」

二人を睥睨するように……目を薄く開いて、刃夜は二人を見つめた。

「いや、そうなくても生きているのならばまだ幸せなのか？」

見つめた後に再度目を閉じて、実に芝居がかった仕草で肩をすくめて首を静かに横に振る。

「変わり果てたその願望の力……それがどのような結果を及ぼすのか？」

最後にすくめていた肩を戻して柏手を一つ。

小気味の良い乾いた音が響いて……刃夜が最後の呪いを口にする。

「それを……覚悟しておくことだな？」

そんな言葉と共に……刃夜の姿が薄れていく。

この消え方は以前にランサーと戦った時と同じ消え方であると、セイバーは察して直ぐに刃夜へと斬りかかった。

だが肉薄して振り下ろした剣は虚しく空を切るだけだった。

呪詛の様な言葉が消えていく。

切嗣とセイバーの胸中に……

決して消えない呪いとなって。

ジンヤ!!!

問いかけられた言葉と、刃夜の外道な行動。

二つが相まって、セイバーは刃夜という存在を測りかねていた。

子供を助けたこともあった。

刃夜の幼いマスターを助けるために尽力している事も知っている。

ランサーとの決闘を果たさせてくれた恩義もあった。

決して嫌いになれない存在だというのに、こうして自らを苦しめる

ような所業を行う。

わからない

それがセイバーの刃夜に対する素直な思いだった。

変わり果てたその願望の力……それがどのような結果を及ぼすのか？

この言葉が、どうしてか切嗣の頭から離れなかった。

セイバーとランサーとの決闘の時……切嗣がケイネスを殺そうとした時にも似たような言葉を口にされて、どうしてかその言葉が、切嗣の心の中でずっと居座っていた。

その口調は、まるで聖杯がどんなものであるのか、知っているかの

ような口ぶりだった。

普通ならば何を根拠に言っているのかと……一顧だにしない言葉だ。

だが何故がその言葉を切って捨てることが出来ない。

その言葉が……ただの出任せではないという確かな重さと想いがあつた。

「キリツグ……アイリスファイルとマイヤを……」

セイバーも同じ気持ちなのだろう。

先ほどの刃夜の言葉と、舞夜を慮った沈痛な面持ちで、切嗣へとその言葉をかけていた。

その言葉に反応は返さずに、切嗣は刃夜がいなくなったことで地面に崩れ落ちた舞夜の元へと歩き……その体を抱き上げて、驚いた。

「……生きている？」

宙から落ちたことでうつぶせで倒れていた舞夜を抱き上げると、確かな暖かさと命の脈動を感じ取り、切嗣は驚いた。

慌てて胸に手をやれば……確かな鼓動が切嗣の手に返ってきた。

そして先ほど撃たれた頭へと手をやり、その赤い液体に触れて……その赤い液体の正体を察した。

血糊……だって？

手に触れた紅い液体の感触は、触れ慣れたくなかった血の感触ではなかった。

そしてその臭いも鉄の臭いではなかった。

当然だがその頭部に触れてみても……弾丸による穴が開いていることもなかった。

間違いなく生きているのだと……切嗣は安堵の息をこぼしていた。

そしてさらに気付いた。

……何かが？

触れた胸にある違和感。

舞夜の胸ポケットに何かがしまわれていることに気付いて……切

嗣はその違和感を取り出した。

それは一枚の紙。

紙に記されたのは……柳洞寺の裏手の沼へと誘う言葉だった。
罫である可能性はぬぐえなかった。

この紙を胸にしまい込んだのは、間違いなく刃夜だ。
だがあれほど外道な事をしていた刃夜が、舞夜を殺したように見せかけたにも関わらず、舞夜を殺していなかったのだ。

故に、切嗣はまさかと思った。

舞夜を優しく地面に横たえて……直ぐに切嗣はそばのアイリへと
駆け寄る。

アイリの元へと駆け寄り、生命として活動していないことを認識し
て……直ぐに寺の裏手へと走った。

突如として走り出した切嗣に驚きながら、しかし舞夜が死んでいな
いことにセイバーも直ぐに気がついた。

そのセイバーを置き去りにして切嗣は走り……刃夜が残したと思
われる紙の場所へとたどり着き……

驚愕した。

「……アイリ？」

安物のブルーシートの上に横たわる、純白の姫君。

先ほど柳洞寺の参拝の場所に横たわっていたアイリとうり二つ
だった。

無論服装は違った。

だがそんなことなど瑣末事である違いがあった。

先ほどのアイリと……アイリだったものと決定的な違いが。

呼吸をしているのだ。

苦しげでもなく、無理矢理でもなく。

ただただ……穏やかに眠っているだけというように。

そのアイリへと、切嗣はゆっくりと歩を進めて跪き……その頬に触
れた。

触れれば壊れてしまうそうだった。

だが壊れていない。

生きているのだ。

万能の願望機として死ぬはずの運命しか与えられなかった……

アイリスファイル・フォン・アインツベルンが。

「アイリ……」

慈しむかのように、愛おしい者の名を呼んだ。

その言葉で目を覚ましたのかアイリがうつすらと目を開き……そばで跪く切嗣へと目を向けて、本当に嬉しそうに穏やかに笑った。

「キリツグだ……」

その声は今まで聞いてきたアイリとは少々違う声色だった。

もっと正しく言えば、まともに発音が出来ていなかった。

体も満足に動かせないのか……細かく震える手を必死になって伸ばして、自らの夫の頬に触れようとしてくる。

だが思うように体が動かないようで、途中で力を失ってしまふ。

その落ちそうになった手を……切嗣が大事な者を握りしめるように優しく、けれど確かな意志と優しさを込めた力で握りしめていた。

「アイリ……なのか？」

「そうだよキリツグ。私だよ。あなたの妻の、アイリです」

震えていた。

噎れていた。

うまく言葉になつていなかった。

だが確かに横たわる女性は……アイリは。

自らの意思と思いで、切嗣にそう言葉を返したのだ。

体から発せられるもの、声、体の要所要所。

所々確かな違和感を覚えた。

だがその存在が間違いなく自らが愛した妻であると……アイリスファイル・フォン・アインツベルンであると。

切嗣は理解した。

「アイリー」

力も満足に込めることが出来ない手を、切嗣が力の限りに握りしめる。

「本当に大切な者を感じたくて。」

その力に痛みを感じているはずだった。

だがまだアイリも体の自由がきかないのと同じで、まだ体に慣れていないのだろう。

そしてそれ以上に、自らの安否に涙してくれる切嗣が愛おしかった。

「泣かないで、キリツグ。私はここに……あなたのそばにいるわ」

「……ああ、そうだね」

涙を流している事に気付かず……ただアイリが生きているという事実が嬉しくて、子供のように何度も何度も、アイリの名を呼んでいた。

その様子を……刃夜は柳洞寺の屋根の上から、見下ろしていた。

……壊れている……いや壊れてはいないのか？ やはり俺の行動

は間違っていないかったようだな

アイリの命に涙する切嗣の姿を見て、刃夜は心底呆れるように深々とため息を吐いていた。

だがそのため息はどこか切嗣のことを哀れんでいるかのような吐息だった。

だがそれも当然といえた。

何せ刃夜も切嗣と同じ経験を有しているのだから。

地獄のような……地獄そのものの戦場をいくつも駆けてきた。

現代の世界だけではない。

並行世界のあらゆる戦場を越えてきた。

人同士の泥沼の戦い。

人と別生命体との戦い。

様々な経験をして乗り越えてきた。

怪物と戦い。

神と戦い。

他にも様々な存在と戦った。

故にわかるのだ。

切嗣がどんな気持ちを抱いたのかも。

どんな凄惨な経験をしたのかも。

故に切嗣の望みを全否定する気にはなれなかった。

刃夜もそう望んだことがあったのだから。

だがそれはしてはいけないのだと……気付いた。

自らの経験と……自らを生かしてくれた人々からの贈り物だった。

だからその贈り物を受け取った者として……切嗣へ贈る者を消すわけにはいかなかった。

刃夜はアイリを攫うと、ケイネスに助力を請うて、新たな器にケイネスが抽出した魂を……アイリの魂を新たな器へと移し替えた。

純粹たる魂に、純粹な何の色もない肉体に写すことで、その器はアイリスフィール・フォン・アインツベルンへと変化した。

柳洞寺の参拝所に横たわっていたのは、アイリスフィール・フォン・アインツベルンの魂が抽出された後の、聖杯の器だった。

そして当然だが舞夜も殺していない。

自らが調査した血糊の弾丸で殺したように見せかけたのだ。

切嗣を目覚めさせるために。

切嗣を推し量るために。

当然だが舞夜の足に撃った二発の弾丸も血糊の弾丸であるため、殺

傷能力はない。

だが血糊の弾丸とはいえ、頭部に撃たれたため意識が飛ぶのは必然といえた。

意識を取り戻した舞夜にネタバレ……本物の弾丸に撃たれていないこと……されるわけにはいかなかったので、風翔の力で舞夜の口を封じていたりする。

また柳洞寺の異常な静けさも当然刃夜が犯人であり、モンスターからはぎ取った睡眠袋の中身を風に乗せてばらまき……柳洞寺の住人を強制的に夢の中へと誘っていたのだ。

また読んでいた本も、雰囲気作りのために羊皮紙のカバーをつけただけのもので、中身の本は「お父さんのための女の子の育て方」という育児本だったりする。

そしてついでに言えば刃夜が行ったこと……切嗣を押し量るために舞夜に行った所業……は、間違いではなかったがやり方は決定的に間違えている。

ぶつちやけ外道そのものだった。

やれやれ、こんな事しなくなかったんだが……まあいいか。別段あいつらに嫌われても問題ないし

と、自分の行動をきちんと自覚していたが、余り反省している様子は見受けられなかった。

大げさに肩をすくめながら立ち上がり、曲がっていた腰を伸ばして……ふとその意識を地下へと向ける。

さてと……本当にろくでもない物みたいだな、聖杯つてのは顎に手をやって、少々考え事をしているようだった。

だが考えたところで地下にあるものをどうこうできるわけがない。行動しなければ何も変わらないのだから。

刃夜が一人屋根の上に立って思案していると、セイバーに支えられ

ながら、舞夜が切嗣と合流する。

そして取り残された聖杯の器が……その内面で活発に脈動し始めたその何かを感じ取りながら、刃夜は鼻を鳴らしていた。

……どうやら、俺がどうにかしなければいけないのはまだまだあるみたいだな

自らがこうしてこの世界に召喚された理由をようやく理解して、刃夜は肩をすくめて力を使う。

柳洞寺の参拝所で横たわっている、もはや聖杯としての機能しか残されていない器を……宙に浮かせる。

さて、駄賃としては破格と言うべきか……まあとりあえず載っている
こう

飛び降りて宙に浮いた聖杯と並び、その姿を薄れさせていく。

そして今度こそ、刃夜は柳洞寺を後にした。

聖杯の黒い泥と陰

それは巨大海魔との戦闘が空けた翌朝。

遠坂時臣は、懊悩していた。

昨夜見た「物」が忘れることが出来ず……考え事ばかりを繰り返していた。

それは言峰璃正の死を告げられた後も続いていた。

確かに璃正が死んだことは悲しむべきだった。

だがどうしても昨夜見た物が忘れられなかった。

また多大な干渉は盟約反古となってしまうが、それでも何とか桜のことを調べようとしていた。

以前からコンタクトを取ろうとしている間桐臓硯とは一切連絡が付かず、残された間桐の家の人間に至っては魔術を使用できないため、コンタクトをとることすら叶わなかった。

一体……桜はどんな状況に置かれているんだ？

あのイレギュラーなサーヴァント……刃夜が必死になって何かをしていた。

その刃夜が宣戦布告をした台詞……桜の為であることは容易に想像できた。

容易に想像できた要因が「アレ」であった。

それでも時臣は愛娘のためを思っ間桐へと出したのだと……以前ならばまだ割り切れたかも知れない。

だが雁夜の態度がどうしても心に残り続けた。

凡俗でしかないはずの雁夜に見逃されたという事実が。

己は間違っていないのだと……そう信じたくて半ば必死になって時臣は桜のことを調べようとしていた。

その様子を……自らのサーヴァントが見ているとも気付かずに。

以前からつまらない男とは思っていたが……ここに来て狂うとは、度し難いほどにつまらない男だな、こいつは

こうして必死になっている自分に気づきもせず、ただ自らが知りたい答えのために必死になって奔走する姿を辟易しながら、アーチャーは時臣を見つめていた。

元々真面目すぎるというよりもおもしろみがない人間だとは思っていた。

だが初めから臣下の礼を取られていたため、アーチャー……ギルガメッシュとしても無碍にするつもりはなかった。

だがアーチャーにとつて大事なことは、愉悦と業を楽しむことが出来る存在なのだ。

愉悦も業もなく、ただただ魔術師足らんとするこの遠坂時臣という存在のことを、アーチャーが好きになる理由はなかった。

だがそれでもこの苦悩と懊悩がどの様な方角に向かうかで、時臣に対するギルガメッシュの評価が決まる。

迷い、悩み、彷徨う

一つの答えを求めて苦悩する様とその哀れさは、実に人間らしく、愚かと言えた

だがその苦悩の果てにどのような結末を見せるのか？

どのような答えを……導き出すのか？

故にギルガメッシュは時臣が必死になっている様を、実に愉快そうに見つめていた

ちなみにそのとき当の刃夜が何をしていたのかと言うと……ケイネスとソラウを匿い協力を取り付けた後、大量の料理を作っていた。ケイネスとソラウが準備に奔走……ちなみにその前にある程度ケ

イネスの体の治療を施した……している際に、自分は最低限の目標を達してライダーと宴会をしていた。

その姿を仮に時臣が見られていたら心底侮蔑されていたことだろう。

もつとも、その程度では刃夜としてはへでもなかっただろうが。

また雁夜は自らも考え事をしていた。

最大の障害であった臓硯を刃夜が殺したことを聞いて、心底安堵したのは間違いなく雁夜だろう。

そのためサーヴァントとして現界しているはずの刃夜がいなくなった事を考えて、色々手続きを調べていた。

そして何よりも……自分が時臣を倒し自らの我執を手放したことで、今後自分がどう生きていくのかも考えるようになった。

それだけの余裕が出来たというべきだろう。

ちなみに雁夜の兄である鶴野にも臓硯を殺したことは伝えてあった。

最初こそ鶴野も信じなかったが、それでも虫が完全に消えたことで信用したらしく、心の底から安堵していた。

そしてその際外道な男が、今後雁夜と桜の生活費の援助を命じていたりする。

最初こそ渋っていた鶴野だが、しかし臓硯を殺してくれたことを考えれば安い代金だと思い、今後の援助を約束した。

これにより、雁夜の陣営は資金的にも問題がなくなったと言える。

以上のような理由から、聖杯戦争は続いていたが……ある意味もつとも余裕があるのはバーサーカー陣営だろう。

雁夜が聖杯を求めた理由は桜の解放であるため、すでに聖杯を求める理由はない。

刃夜は最初から聖杯に興味はない。

そのため他の陣営に比べれば心に余裕はあった。

「まあ、まだまだやることあるんだけどな」

「いきなりどうした刃夜？ 変なこと呟いて？」

「独り言」

そして、時臣は最悪の選択をしてしまった。

狂った上でなお……それでも自分で決めた選択をすればまだ救われたのかも知れない。

だがそうはならなかった。

結論として時臣は刃夜を「存在しない存在」として扱ってしまったのだ。

時臣としては娘の存在よりも聖杯の方がより大事な物であると思っただのだ。

迷いもした。

だがしかし魔術の深奥を目指し、進む者としては修行は厳しいものであると……自分を偽ったのだ。

また自らが使役するサーヴァントが、扱いこそ難しいといえど、実質英霊最強存在であるギルガメッシュなのだ。

刃夜がイレギュラーな存在で推し量るのが難しいというのもあったが、それでもギルガメッシュが負けることはあり得ないと考えたのだ。

故に時臣はセイバー陣営へと話を持ちかけて、ライダーとバーサーカー陣営を倒した後に聖杯戦争の決着をつけることをアインツベルンへと持ちかけた。

その思考とその行動……迷ったまま進んでしまった姿

自らを偽ってしまった「偽物」を

ギルガメッシュがどのように見ているのかも考えずに。

令呪という絶対命令権。

一画消費してしまったとはいえ、それでもまだ二画あった。

時臣は最後には令呪でギルガメッシュを自害させる魂胆のため、実質後一画しか使えないが、それでも令呪があればこそ、時臣はギルガメッシュをどうにか出来ると踏んでいた。

だが、それも自らが信じていた弟子と、自らが使役しているアーチャーの裏切りにより……自らの家でその生涯を終えた。

「それで……体の調子はどうなんだ、アイリ？」

古い武家屋敷の居間で、切嗣はそうアイリへと問いかけていた。

ある程度改装こそしたが、それでも今回の聖杯戦争時のみ使えれば良いと認識しているため、最低限しか改修されてない。

寒さをしのげるが、その手入れの行き届いてない姿と、最低限の調度品しかないことも相まって、ものすごく寒々しい雰囲気を感じている。

だがそんなことは今はどうでもよかった。

アイリの隣には同じように布団で横になっている舞夜がいて、その直ぐそばに心配そうに座っている切嗣とセイバーの姿があった。

ただ切嗣も、セイバーも舞夜も、アイリの体を心配していた。

だが、アイリ自身は体の不調を全く感じ取れていなかった。

「全く問題がないわ……。むしろ以前の体よりも調子がいい位だわ」

今の布団の上で横になりながら、アイリは手を伸ばして弱々しく手を握ったりする。

体をぎこちなく動かすその姿では、とてもそうは思えなかったが、しかし嘘を言っているようにも見えなかった。

間違いなく体にまだ慣れていないのだろう。

だがそれも当然だ。

魂を抽出し、別の無垢な体に移し替えたのだから、魂と体がまだなじむはずもなかったのだ。

魂を新たな体に移し替えたということは当然だが、切嗣もセイバーも舞夜も理解できておらずわかっているわけもない。

だがそれでも切嗣にはアイリの肉体が別の物になっていることは理解できた。

何年も夫としてアイリを見てきた切嗣だけは。

だが肉体を別の物になっていると理解できたとしても、その「理由」を、切嗣は推測することが出来ない。

一体……どうして

浮かぶのは疑問のみだ。

アイリの様子と、切嗣自身がアイリの体を見ても、肉体に何か呪いや罠などが仕込まれている様子は無い。

自分が見落としている事も大いに考えられると切嗣も思っているが、アイリの体があまりにも普通すぎて、とてもそんな不純物が入り込む余裕はなかった。

さらに言えば……

「舞夜。お前も体に不調はないか？」

「問題ありません。ペイント弾を撃たれた箇所はまだ痛みますが……それでも一晩寝れば活動出来ると思います」

舞夜を生かす理由もわからなかった。

生かすのを百歩譲っていいとしても、磔にして痛めつける理由がまったくわからない。

その理解が出来ない行動をしたのが刃夜であるため、更にその疑問に拍車をかけている。

先ほどの刃夜とのやりとりを、切嗣は思い出す。

アイリの魂が抜かれて空になった聖杯アイリの抜け殻を手中に収めて、宙に磔にしている舞夜を痛めつけていた刃夜。

二人を攫うことでも理解出来ない行動だというのに、アイリの魂を抽出して新たな肉体に宿す。

舞夜を痛めつけながらも、殺さずにいたことが、更に理解に苦しんだ。

一体、何がしたいんだあのイレギュラーなサーヴァントは

だがちやつかりと聖杯アイリの抜け殻を持って行っているのが、少々気になつていた。

普通であれば聖杯を欲したからこそ持つていったと考えるが妥当だ。

相手が普通の敵であれば、切嗣も直ぐにそう判断を下して、聖杯の奪還に動いただろう。

だが、聖杯を奪った存在があのにレギュラーなサーヴァントである刃夜なのだ。

今まで聖杯をいらな^{アイリの抜け殻}いと言いつづけていた刃夜が、ここに来て聖杯を持っていったために、刃夜が何をしたいのかが切嗣には全く理解できな^{アイリの抜け殻}い。

聖杯を欲しないというのがブラフであつたとも考えられたが、とてもそうは思えないと、切嗣は自らの考えを否定していた。

『そうだな？ 信じないだろうが……お前をどうにかするためだよ』

先ほど柳洞寺での刃夜の言葉が、切嗣としては更に理解が出来なかつた

何故敵でしかない自分をどうにかしようとするのか？

更に切嗣だけではなく、アイリに舞夜まで救おうとするのが理解できな^{アイリの抜け殻}い。

考えても、どれだけ考えても、切嗣には刃夜の行動がわからなかつた。

といつても、刃夜自身

「なんかなんとかしなきゃいけない気がする」

と、その程度の理由で動いており、また一部を除いて聖杯戦争に参加している人間については、刃夜自身が嫌いでないためなんとかしようとしているだけなのだ。

はつきりいつて刃夜自身にも大した理由がないと言えるだろう。そのため刃夜の行動の意味を考えるだけ無駄なのだが……敵である切嗣がそんなことわかるはずもない。

またこの「考えさせる」という事はある意味で刃夜の狙い通りだったりする。

だがそのことを切嗣がわかるはずもなく、ただただ答えを出すことが出来ない疑問に頭を悩ませる。

しかしそれも直ぐに無駄だと判断し、初期の目的を優先する。聖杯を勝ち取り、世界に平和をもたらすという、その目的を。

「舞夜、とりあえず僕が警戒を行っておくからアイリと一緒に休んでおけ。明日はアイリの警護を頼む」

決定事項としてそう告げて、切嗣は反論も意見も許さず、さつさと部屋を出て行って外へと向かっていく。

セイバーに声をかけることもしない。

さすがに慣れてきたとはいえ、不快にならないわけはなく、顔を僅かに歪ませていたが、それでもセイバーも切嗣に声をかけることはなかった。

「切嗣が許せない？ セイバー」

そんなセイバーの心情を察してか、アイリが何とか口を動かして、セイバーへと問いかける。

体に問題がないことは間違いないと、セイバー自身も判断していたが、しかしそれでも余り無理をさせるのはセイバーとしても本意ではなかった。

だが、この心優しいアイリが無理をして話しかけてきてくれたのだから、それに返答をすることをしないのもどうなのかと、セイバーは一瞬話をすべきか悩んだ。

そんなセイバーの心情を明確に察して、アイリは返事を待たずに言

葉を続けた。

「ランサーとの戦闘時に、切嗣がランサーのマスター達に何をしようとしてたのかは、私もきちんとわかっている訳じゃないわ。けれど、これだけはわかってあげて。切嗣も……舞夜さんも、決してあなたを貶めようとしているわけではないの。ただ、自らの心から欲した願いのために聖杯を求めている。ただそれだけ」

ランサーとの戦闘時……廃墟の奥から出てきたケイネスと、婚約者のソラウ。

そして自らのマスターである衛宮切嗣。

敵対しているはずの二人が共に廃墟から出てきたのだ。

それもイレギュラーなサーヴァント、刃夜に半ば脅される形で。

刃夜の様子と脅した時の言葉と、引きずってきた婦人の様子から、切嗣が己にとって快くない手段を用いようとしていたのは、容易に想像できる。

刃夜が手を回したためにランサーとの決闘を無事に行うことが出来たが、問い詰めて切嗣は何も言ってくれなかった。

一晩が経ち、アイリと舞夜が危機的状況に陥ってなお、切嗣はセイバーとは口をきこうとしなかった。

「アイリスフィール、私は……」

セイバーとしても、どうすればいいのかわからないのだろう。

セイバーも、あのとときのやりとりは、切嗣が外道ともいえる手法を用いようとしたことは、ソラウの様子を見れば一目瞭然だった。

だがそれでも、切嗣が聖杯を求める理由を知ってしまったのは、余り反発することも出来ない。

セイバーも切嗣も……互いに、確かな理由と己にとって間違いない信念の元に、聖杯を欲している。

だというのに、これほどまでに相容れないマスターとサーヴァントの二人組は、聖杯戦争の中ではこの二人しかいなかった。

アイリとしても、これは頭の痛い問題でもあった。

自らの夫のことを愛しているし、信じたい。

そしてそれと同じくらいに、この優しくも不器用な騎士の事を好ましく思っていた。

二人の架け橋として行動していたが、今は体が思うように動かず、フォローをすることが出来ない。

命あるこの身だが、満足に動くことも出来ないこの状況は、アイリとしても実に歯がゆかった。

「……」

舞夜はこの状況では何も言えない。

自らの役目を全うできなかった舞夜としては、自らに発言権があるとは思っていなかった。

だが当たり前だが、舞夜が刃夜を相手にしてどうにか出来るわけがない。

故に……アイリはただ僅かに顔を横に向けて、同じく横になっている舞夜へと笑いかけた。

確かに何も出来ない。

だがそれでも生きている。

本来であれば死んであろうことは、アイリも舞夜もわかっていた。

だからこそ、互いに命があることが喜ばしかった。

特にアイリは……今朝の話で、舞夜のことを以前よりも好ましく思ったからおさらだった。

互いに、新たな夢が、出来たのだから。

「舞夜さん……あなたも、無事で……良かった」

「マダム……」

必死になりながら、自らを慰めようとしてくれるアイリに対して、舞夜もぎこちなかったが、それでも同じように笑いかけた。

友と言うには、生まれも育ちも違いすぎる。

それどころか、そもそも同じ「人」という種族ですらもない。

だがそれでも、二人は確かに互いのことを心配し、大切に思っていた。

だから、二人は新たに誓った。

切嗣を勝たせてみせると。

それで切嗣が救われるのなら……と。

だが、その願いは叶わなかった。

叶えさせる訳にはいかないために、全力で妨害する存在がいたからだ。

叶えさせるわけにはいかないという確固たる理由があるわけではない。

だがある程度、聖杯と言う物がどのようなものか……刃夜はすでに気付き始めていた。

それを知るのは、そう遠くはない。

決戦前夜の決戦

さて……勝負というからやってきたのだが……

深夜の深い闇の中。

その闇を更に濃くする木々が見える山の中腹にある山間を？ぐための道路に、刃夜は宙に寝袋で浮いて寝ている桜と共にやってきた。た。

宴会の後にライダーから勝負を持ちかけられて、刃夜はそれを疑うことなく承諾し、指定された場所であるこの場所へと訪れていた。

周囲には当然だが人はおらず、また大きめの道路だがこの時間帯にはほとんど交通がないらしく、冬と言うことも相まって実に静かな状況だった。

そして片側二車線の車道。

実にライダーに有利な戦場と言っているだろうか。

ちなみに徒歩の場合かなりの時間を有する場所だった。

刃夜は車の免許、オートバイの免許（大型含む）、挙げ句の果てには重機の免許も一部持っていた……また長年勝手に乗り回しているの、大概の乗り物は無免許ではあるが、普通に運転が出来る……が、当然初めて来たこの世界には刃夜が所有している運転できる乗り物など存在しない。

雁夜にバイク辺りを購入してもらおうことも考えた刃夜だったが……さすがにそれは憚られたためやめておいた。

まあライダーと勝負するからといえど、乗り物がなきゃいけないってことはないな

刃夜としても別段あれば便利と言うだけで、乗り物関係はあまり必要性を感じていなかった。

何せ自分で走り回った方が速いからだ。

ついでにいえば、いつ別の世界に行くのかも不明なため、必要不可欠なもの以外は持たないようにしていた。

が……

でも出来たら久しぶりにバイク乗りたかったなあ……

と思っっていたりもする。

気と魔力によって強化された身体能力と防護膜で、仮に時速二百キロで壁に激突しても怪我をしないので、事故による後遺症などを気にせず速度を出して運転することが出来る。

その際はナンバープレートを外して警察などに、足が付かないようにしていたりする。

そして仮に警察に追い詰められてもバイクを捨てるか、もしくはバイクを担いでバイク以上の速度で脱兎のごとく逃げ出す……もはやバイクに乗る意味がほとんどない……こともできる。

実際その方法で何度か警察を巻いたりしていた。

強引な運転が出来ると言うだけで、決して運転技量が並外れている訳ではない。

そのため当然だが騎乗スキルもない。

閑話休題。

そうして誰もいない深夜の道路で、ぼけつとしていると……遙か空より雷光を瞬かせて宙より飛来する、巨大な戦車が舞い降りてきた。

「よくぞ来てくれた、ジンヤよー！」

「そら勝負を挑まれたら来ないわけにはいかないだろう。それに相手がライダー……イスカandalとあってはなおさらな」

そう言いながら、刃夜は左腕を軽く握り込み、その手に刀蔵より取り出した刃渡り五尺の野太刀を手にした。

身幅も重ねも厚い……まさに剛刀と言っていていい、そんな野太刀だ。そして鞘から抜き放ち、長い鞘をくくりつけられた紐で背負う。

悠然と立ちながらも、その佇まいに一部の隙もなかった。

その様子を、ライダーの戦車に乗っているマスター……ウェイバーも見ており、感じ取れた。

刃夜がただ者ではないということに。

確かに型破りな存在だとは思っていた。

酒を普通に渡してくる。

飯を振る舞って宴会をする。

他にも巨大な刀を振り回したり等、様々なことを行ってきた。

だが初めてだったのだ。

刃夜が明確に敵意を向けてくるのは。

倒すべき敵であると……ライダーと相対したのだ。

その強大な殺意と膨大な魔力を目の当たりにして、距離があるにもかかわらずウエイバーは恐怖で震えた。

「ら、ライダー……」

声も体も震わせながら、か細い声でウエイバーは自らのサーヴァントを呼んだ。

その当のライダーは……刃夜の殺意にあてられて、同じように戦意が昂揚していた。

「余との戦いにそこまで震わせるかジンヤよ！ よかろう！ 貴様を屈服させるために、余も力の限りに貴様を討とう！」

腰の帯剣を抜き放ち……戦車の手綱を振り下ろす。

その隣で、こんなにも昂揚し……何より嬉しそうにしているライダーの姿を見て、ウエイバーはまた胸にもやもやとした何かが渦巻いていることに気がついた。

ライダーが何故ここまで昂揚しているのかはわからなかった。

だが、ライダーを昂揚させている存在が何なのかは……考えるまでもなかった。

先ほどまで見ることも難しかった自らの正面……神代の牛に引かれし紛れもない宝具に、身一つと野太刀で佇む存在を見据えた。

本人の言葉を信じるのであれば現代の人間。

その言動の端々に、確かに現代のことを知っているとかがかいま見えた。

そしてそれ以上に、長い年月を修行してきたということに納得させる技術の数々。

何よりも……その修行と技術

そして心胆によって宝具に生身一つで立ち向かうという心と勇氣。

その刃夜を見て……
ウェイバーは悔しいと……
そう素直に思った。

「征くぞ！ ジンヤ！」

「かかってこい……征服王！」

「彼方ト・ファイにこそ栄え在りロ・テイ！ 遙かなる蹂躞制覇ヴィア・エクスプグテイオ!!!」

突撃の合図は、ライダーの宝具の真名解放だった。

解き放たれた魔力と真名。

猛然と雷を放ち、戦車は戦場を疾駆する。

速さがあった。

何よりも力があった。

この戦車に吹き飛ばされては、その全てを粉碎されるであろう事が容易に想像できるほどに。

だがその戦車が突進してくる状況でも、刃夜は一步も動かなかつた。

それどころか手にしていた野太刀を宙へと放り投げて、驚くべき事に四股を踏んだ。

右足を高く振り上げて、地面へと打ち付ける。

左足も同様に高く振り上げて……地面へと踏み込ませた。

その四股は山を振動させるほどの力を秘めていた。

実際刃夜の足下は、足首までアスファルトを陥没させている。

自分自身を固定するかのよう。

そして宙へと上げているため自由になった両手を広げた。

「ハイおー!!!」

怒号。

それだけで人が気絶するほどの気迫と音量。

そして空の手を上へと振り上げる。

まるで見えない野太刀を最上段に構えたかのようにだった。

「AAAA L a L a L a L a L a L a L a L a L a i e
!!!!」

征服王が咆える。

刃夜の行動の意味を考えることなどしない。

する必要がない。

今はただ、刃夜を屈服させて自らの配下に加えるための勝負をしているのだ。

故に、刃夜の行動が全く意味がないとは思っていないかった。

そして今のこの状況で卑怯な事をしてくるつもりがないことは、先ほどの刃夜の怒号に込められた気迫で直ぐに理解できる。

故に……今はただ刃夜を倒すことだけを考える。

昼間に刃夜より飲まされた薬と刃夜の料理で、体の魔力は荒れ狂うほどの猛りを見せている。

気分も、魔力も……最高だった。

故に、この勝負に負ければ、互いに互いが納得するしかない。

そんな状況だ。

故に、ライダーは刃夜を殺すつもりで倒しにかかっていた。

後一丈もない程の距離。

そのとき、刃夜の手にまるで吸い込まれるかのように……

先ほど刃夜が宙に放った野太刀が……

宙より降ってくる

その野太刀の柄をしかと握り絞めて……

刃夜が咆えた。

「剛刀、撃月〔廿〕……縦閃!!!」

まさにそれは閃光だった。

闇夜の僅かな光を、その刀身の鋼が反射し……光にも迫るほどの速さで振るわれた野太刀。

野太刀に纏わせた膨大な気と魔力が、

ライダーの宝具を纏う膨大な魔力と激突する。

!!!!!!

先程の刃夜が地面へと踏みつけた音とはまた別種の音が……辺りの空間を震わせる。

その音が鳴りやまず、続いている。

驚くべき事に、戦車と刃夜の大上段の切り下ろしが、

拮抗していたのだ。

「づあああああー!」

「ぬうううう!」

戦車と野太刀の拮抗。

互いの魔力の壁がぶつかり合つて、互いをつぶさんとしている。その状況に陥り……ライダーは驚愕し、瞠目していた。

我が戦車の突撃を……よもや体一つで止められる者がいようとは!?

確かに拮抗している。

戦車と野太刀がぶつかり合って、その力を遺憾なく発揮していた。だが違うのだ。

ライダーは戦車の真名解放を行った上での戦車の突撃だ。

しかし刃夜はただ渾身の力を用いて野太刀を振り下ろしたにすぎない。

サーヴァントの切り札とも言える真名解放を行っていない。

それは秘められた魔力を爆発させずして、ライダーの宝具と拮抗していることになる。

この光景を他のサーヴァントが見ても驚愕したことだろう。

だが、それは長く続かなかった。

「ぐっー！」

拮抗していたが徐々に徐々に……刃夜が押され始める。

そしていざ拮抗が崩れると、決壊するかのよう刃夜が体勢を崩し、

吹っ飛ばされた。

だが本当に吹っ飛んだだけで、怪我を負っている様子はなかった。

刃夜とライダーの魔力をまともに受けていた野太刀には、刃こぼれすらもなかった。

いわば刃夜自身の完全なる力負けだった。

そばで宙に浮いていた桜も、ふき飛ばされている刃夜とまるで見えない何かで繋がっているかのよう刃夜の後について行っていた。

勢いを殺しつつ戦車を反転させながら、ライダーは注意深く刃夜を

観察し、全く傷を負わせていないことを明確に察して……歯がみした。

よもや真名解放の余の戦車とまともにぶつかり合つて、かすり傷すらも負わぬとは……

反転を終え、再度突撃の準備を整えながら、刃夜をどう倒すべきかライダーが思案する。

その隣で、ウェイバーが不思議そうにライダーへと問いをかけた。

「ライダー、アイオニオ・ヘタイロイ王の軍勢を使わないのか？」

今の遙かなる蹂躞制覇が、ライダーの全力であることはマスターであるウェイバーはわかっていた。

刃夜との宴会と、宴会前に飲まされた薬によって、ウェイバーもライダーも魔力は充ち満ちている。

何よりもライダーが刃夜を殺すつもりで倒そうとしていたのも十分に理解できた。

そうでなければ倒せないと理解しているからだ。

魔力も気力も充実しての一撃。

確かに勝負には勝ったと言つていいかも知れない。

だがそれではダメなのだ。

少なくとも今の一撃で刃夜は怪我の一つも負つてない。

そして空中で器用に体勢を整えて足から地面に着地し、数百メートル離れた距離からもわかるほどに鋭い眼光を自分たちへと向けてきている。

それを少しでも感じ取れば、刃夜が心でも負けていないことなど考えるまでもなかった。

故に、同じ事を繰り返しても無駄だと思つたのだ。

ウェイバーは。

ライダーも正直なところ、ウェイバーと同意見だった。

ヴァイア・エクスプログティオ
遙かなる蹂躞制覇で刃夜を倒すのは難しいと、もつとも理解しているのは間違いなくライダー本人だ。

だが……それではダメなのだ。

「ジンヤには使わん。いや、使えないのだ」

「使えない？」

使えないという言葉に、ウェイバーが思考を巡らせる。

もしかして……アーチャーを相手にすることを考えているのか？

この聖杯戦争において、もつとも強敵だと言えるのは間違いなくアーチャーだった。

セイバーの約束された勝利の剣も厄介なのは間違いなかった。だがそれ以上に脅威を覚えていたのはアーチャーだ。

それは戦闘において素人であるウェイバーにもわかっていた。

故に、この戦闘に全力を出すことが出来ないのだという意味だとウェイバーは思った。

それも大きな理由の一つだった。

だが違ったのだ。

「確かに王アイオニオ・ヘタイロイの軍勢は余の奥の手だ。切り札でもある。だがそれではダメなのだ」

「ダメ？」

勝てないではなく、ダメであるという言葉の意味が理解できず、へたり込んだ姿勢のまま……ウェイバーは前に立つライダーの横顔を見た。

その顔には……陰しくも、実に嬉しそうに野趣溢れる笑みを浮かべたライダーの横顔があった。

「あやつ……ジンヤは間違いなく一級の戦士であり、武器を造る者だ。あれを配下に加えようとするのであれば、余が臣下達の力を借りてはダメだ。出なければあやつが納得せんだろう」

再度の突撃のために力をためながら……豪快にライダーは笑っていた。

だがその笑みに嫌な感情も焦燥もない。

「なによりな……」

へたり込んでしまっているウェイバーに視線を向けて、ライダーはニヤリと笑った。

その笑みは本当に楽しそうで、おもしろそうで……

まるで子供のような純真な笑みをしていた。

「何よりも、余自身が納得出来ん。あやつは余が直々に征服すると決めたのだ。余が全力を持って征服し部下に加えたいと思った男。そやつとの差しの勝負に……臣下はいらぬ」

その子供のような純粋な笑みには

ただただ……刃夜を屈服させたい、征服したいという……

ライダーのそんな野蛮じみた想いだけがあった。

その笑みを見て、今度こそウェイバーは自身の胸の痛みを理解した。

羨んでいるのだと……そう思ったのだ。

自分はライダーのマスターでしかない。

嫌われてはいないことはウェイバーもわかっていた。

だが、ジンヤと自身とでライダーが扱いを変えているのはわかっていた。

間違いなく、ライダーはジンヤのことを欲しいと思っているのだ。

なんとしてでも手に入れて見せると……そういう強い思いを抱いている。

それが羨ましいと……ウェイバーは理解した。

何だよ……それは……

自分がそう思っていることに慥然としながらも、だが妙に納得している自分があることも、ウェイバーはわかっていた。

わかっただけは良かったが……なぜそう思っているかはまったく理解できなかった。

しかし考えている時間は与えられなかった。

ライダーが突撃の準備を終えたからだ。

「再び征くぞジンヤよ！ 先ほどよりも練り上げた余の戦車で、挽きつぶしてやろう！ 一度でダメなら二度。二度でダメなら三度で！ 何度でも突撃し、貴様を屈服させてくれる！」

ライダーが咆えた。

その思いに呼応するように遙かなる蹂躞制覇ヴァイア・エクスプラグテイオが唸りを上げ、雷鳴を激しく瞬かせた。

この場だけ、まるで昼間になったかのように激しく鋭く、力強く稲妻が走る。

その力を全て乗せて……ライダーは再度叫ぶ。

「AAAA L a L a L a L a L a L a L a L a L a i e
!!!!!!」

そしてその渾身の一撃とも言える突進。

ライダーの咆吼。

唸りを上げる遙かなる蹂躞制覇。ヴァイア・エクスプラグテイオ

戦車の上にいるため、ウェイバーはそれ以外の音も、光も見えないはずだった。

だが……ライダーの突撃によつて近づいていく刃夜に目を向ける
と……

何故か聞こえたのだ。

見えたのだ。

刃夜がぼそりと……着地し、頭を下げて跪いている姿勢で僅かに上げた頭から覗かせる口元が動き……

眩いたのが。

「俺個人では……力でも韌つよさでも負けるか。俺自身も、鍛造もまだまだ未熟か……」

そんな眩きが聞こえた気がした。

そして何故聞こえたのかと考えていると……刃夜が跪いたまま右手を握って使用した剛剣の野太刀をしまう。

消えるのとほぼ同じ速度で、刃夜は左手を握り……再び刀を取り出

した。

見る限り刃渡りは先ほどの剛剣の野太刀とほとんど変わらなかった。だが先ほどの刀よりも遙かに鋭さを感じさせた。

見ただけで、ゾクリと……本能が恐怖を覚えるほどに。

鞘から抜いて鞘を宙へと放り投げると同時に……刃夜が伏せた。否、伏せたと見まがうほどに体勢を低くしたのだ。

おそらくそこまで背が高くないウェイバーの膝下まで、体勢を落としているだろう。

思わず戦車から乗り上げなければ、刃夜の姿が見えないほどに。そして刃夜はその低姿勢のままに突進してきた。

突進し、後僅かで戦車とぶつかるであろう一瞬間に、僅かに角度を横へとつける。

正面衝突を狙っていたと臭わせた虚。

そしてその低い姿勢のまま、手にした刃渡り五尺の野太刀を、突撃してきたライダーの宝具へ振り抜いた。

「斬刀、虚月【御】……横閃!!!」

その閃きは……見ることもすらも叶わず……

まるで宵闇にとけ込むかのようだった。

何より、先ほどと違い、ライダーの宝具遙かなる蹂躞制覇の纏った

魔力に触れてすらいないかのように……何の抵抗もなく振り切られる。

その薄い刀は、ただただ静かに、空を疾った。

左に風ぎ払われた野太刀の勢いと重さで、刃夜が地面で独楽のように回転する。

だがすぐにぴたりと、急制動すると同時に、手にした野太刀を高くまつすぐに上げる。

するとその野太刀に吸い込まれるように、鞘が空から降ってきて……綺麗に納刀された。

鋭く、小さな金属音が、はつきりと刃夜の周りの僅かな空間を震わせる。

その音が引き金だったかのように……ライダーの宝具が

ヴァイア・エクスプラグテイオ遙かなる蹂躞制覇が、横一文字に両断された。

「!? なんと!?」

「うわわわ!!!」

車輪と御者席を見事に斬り飛ばしたのだ。

神牛が足を振り上げたその瞬間を狙って野太刀をくぐらせて、そこから跳ね上がるように野太刀を斜め上へと振り抜いたのだ。

ライダーの宝具の戦車の台座が、その纏っていた魔力事刃夜の刀に切断された。

直ぐに形を維持できなくなり、ライダーの宝具は魔力の霧となって宙へと消えた。

その一瞬前に、ライダーはウェイバーを抱えて跳んでおり、地面へとたたきつけられるのを回避していた。

ウェイバーも、そしてライダーも……何をされたのか全く理解できなかった。

だが、振り抜かれた刀で宝具を切られたことだけは、直ぐに理解ができた。

そしてこの結果を見れば誰もがわかる。

何よりライダー自身が認めるしかない。

この勝負に……自らが敗北したのだと。

しばしウェイバーは何が起きたのか理解できなかった。

だがそれも僅かばかりの時間だ。

さしものウェイバーも、自らが戦う者ではないにしても、この状態がまずいことは重々理解できた。

こちらは無傷だが戦車がなくなった分、不利になった。

そして当然だが……勝負に勝った刃夜は無傷であり消耗もない。

戦車を失った今、「ライダー」として現界しているイスカンドルは、そこまで強くはない。

正しくはイスカンドル単体では余り強くないと言うべきだろう。

だがそれでも何ら問題がなかった。

何せまだイスカンドルにはあのアーチャーですらも認めた宝具アイオニオ・ヘタイロイの軍勢があるのだから。

だが王アイオニオ・ヘタイロイの軍勢を展開せずに戦闘が再開した場合、万に一つも勝ち目はないだろう。

イスカンドルも優れた戦士ではあるが、白兵戦においてはそこまで強い部類ではない。

対して刃夜は「造る者」だが、「戦うことも出来る者」だ。それともかなり上に位置する絶対的な強者である。

ただの強者でしかないイスカンドルではどうしようもないだろう。故に、マスターとしてウェイバーが言うことは一つしかない。

「ライダー！ アイオニオ・ヘタイロイ 王の軍勢を！」

だがこの言葉に、ライダーは……イスカンドルは小さくだがしつかりと首を横に振った。

「ダメだ」

「何故!？」

「アレを使う相手は……すでに決まっておる」

ウェイバーを地面へと下ろしながら、ライダーは腰の帯剣に手を伸ばした。

そして力強く抜き放ち、前へと躍り出た。

どうやら意地でも引かぬつもりらしい。

戦車での戦いに負けてなお、ライダーは刃夜に挑もうとしている。

己が負けないために。

そして己のマスターのために。

ライダーは剣を取っていた。

だがその胸中を……ウェイバーは明確には理解していなかった。

そんなにあいつがいいのかよ……

ただ刃夜に負けなかったために……刃夜を欲するが故の行動だと思っ
てしまったのだ。

それがあるのも間違いなかったが、しかしそれだけではないことを
ウェイバーは見抜くことが出来なかった。

だがそれも無理からぬ事だろう。

ウェイバーには圧倒的に経験が足りていないのだから。

そんな中、着地した刃夜はライダーにもウェイバーにも目もくれず
に……ぶつぶつと自問自答を繰り返していた。

「確かに斬のが出来は良かった。「御」の字をあてたのもある。だが何
故「甘」が劣った？ 俺の力不足もあるだろうが……競り負けたこと
は事実。刀身に全く問題がないとはいえ……「甘」で行けると思った
が、勝てなかったことを見抜けなかった。「甘」を選択したこと、見抜
けなかったことでどっこいどっこいか……」

なぐにをぶつぶつ言つとるんだ？

どうやら刃夜から戦闘の意志が半ば抜けているということ、ライ
ダーは遠目に観察しながら感じ取っていた。

それを証明するように、ライダーが抜剣したということにも目もく
れず、ただただ跪きながら一人事をくりかえす。

だがやがて、悔しそうに拳を地面へとたたきつけて、立ち上がった。
もう戦う気がないとでもいいいいのか、刃夜は刀を虚空へとしまっ
ていた。

「どういふつもりだ？ ジンヤよ」

さしものライダーもこれは少々不愉快だったのか、いぶかしげに眉をひそめた。

そのライダーに対して刃夜は降参とでもいうように、両の手を挙げていた。

だが、その仕草には馬鹿にした雰囲気はなく、本当に心から「参った」と言っている様子だった。

「すまないライダー。そんなつもりはなかったのだが、お前のことを見くびっていたようだ」

「何？」

言っている意味が理解できないのだろう。

それはそうだ。

真名解放をした宝具を切り裂いておきながら、降参する理由がどこにあるのか？

さらに言えば見くびっていると理由もなく言われても、首を傾げるしかないだろう。

それを説明するかのようになり、刃夜は先ほど最初に取り出した、剛刀を左手に出現させた。

「この刀で、お前に勝るとふんだんだが……どうやら観察眼も、俺自身「力」も、鍛造の腕もまだまだだよ」

「……ふむ」

見くびったわけでもなく、侮ったわけでもない。

ただ自分が鍛え上げた刀と己だけの力で、勝ると判断したが、その判断が謝っていたと言っているのだ。

そう言われても、普通であれば怒っても無理はない状況だろう。

だが、ライダーは怒らずに納得していた。

自分から見ても今刃夜が使用した刀二振りには、確かに今まで見てきたいくつかの刀よりも出来が良いと、ライダーでも判断できる程に輝いて見えていたのだから。

「だからこの勝負は間違いなく、俺の負けだ」

「ふむ。……まあ貴様が言うのならこれはそれで良いのだが。しかしそうなるとお前……余の部下になると言うことになるが、いいのか

？」

先ほどまで確かに殺し合い……といっても、刃夜もライダーも、互いを「生命的に」殺すつもりは欠片もなかったわけだが……をしていたというのに、半ば親しげに会話を行うものだから、ウェイバーとしては少々呆れてしまうものだった。

「うーん。それを言われると俺としても困るんだが……だが、約束を反故にするつもりはないが受け入れるわけにもいか——」

そう言っていた刃夜だったが、ふと何かに気付いたかのように……あらぬ方角へと目を向けた。

その横顔には……驚愕と、焦りの感情が色濃く浮かんでいた。

「何だと……」

「？ どうしたジンヤ？」

「すまないライダー、急用が出来た。失礼する！」

そう言い捨てると、ライダーの返事も聞かずに刃夜はすっ飛んで冬木へと向かっていった。

止める間もなかったため、ライダーもウェイバーもただただ茫然とするしかない。

「どうしたんだ？ あいつ？」

「さあなあ？ だが余の戦車にまともにぶつかって全く損傷しない刀に、余の戦車を切り裂いたあの刀。どちらも刃夜が鍛えた刀なのは、奴の態度を見れば間違いない。更に欲しくなったぞ、ジンヤよ」

普通に考えれば怒ってもいい場面なのだが……それでもライダーはジンヤに対して更に部下に加えたいという欲望を抱いたようだった。

その様子に呆れながら、そして……嫉妬しながらウェイバーはため息を吐くしかなかった。

そしてふと気がついた。

「ところでライダー。僕らは……ここからどうやって帰るんだ？」

「そりゃまあ……歩くしかないわな」

「……だよなあ」

深夜の山の中腹部。

いくら道路のためライトがあるとはいえ、周りには人の気配など当然微塵もない。

遙か彼方の新都の光が眩しく見えるくらいだ。

その光景を遠望しながら……ウェイバーはただただこれから始まる長い徒歩の事を考えて、大いに肩を落とすしかなかった。

ライダーとの戦いで精神分身体を一度完全に撤退させた。

それは間違いなかった。

だから反応が後れたのか？

いや、それは言い訳にしかすぎなかった。

ライダーとの全力でのぶつかりあい。

余力を残す余裕が余りなかったのだ。

故に反応が後れたのだろう。

そう分析は出来る。

だがその分析は、当然ながら結果と過程を考え、判明するだけで、今自らの目の前の結果に影響を及ぼすことはなかった。

「……遠坂……時臣」

一度桜ちゃんを家に戻した。

さすがにこの光景を起きていなくても、同じ空間に行かせることが躊躇われたから。

だが、一度桜ちゃんを家に戻すという行為をした時点でわかっていたのかも知れない。

すでに、手遅れなのだ。

気付いていたのだ。

俺は……

刃夜はただ静かに、遠坂邸の時臣の居室へと不法侵入を行い……その床に染まった赤い血を見下ろしていた。

当然ながら遺体はない。

ただ赤い絨毯を更に赤く染めた命の液体が……床に広がっているだけだ。

その量は、絨毯に染みこんだ分を含めれば明らかに致命的な失血量だ。

何よりもその空間に漂う、死の気配を……刃夜が感じ取れないわけがなかった。

「……くそっ」

ただ僅かばかり悔しそうに……刃夜はそう一言呟いていた。

正直な話、刃夜としては別段時臣自身についてはどうでも良かった。

興味がないといってもいいくらいだった。

何せ刃夜は時臣と直に顔を合わせたことはないのだから。

間桐臓硯を葬る際に屋上でバーサーカーと共同作業をしていた時に初めて、同じ空間にいたのだが、そのときは刃夜も作業に集中していたため、意識が朦朧としている存在などどうでもよかった。

だが、それはあくまでも「刃夜にとつて」どうでもいいというだけであり、

「遠坂時臣」が、どうでもいい存在という訳ではないのだ。

『安心しろ。あいつと同じ事をいうが、必ず桜ちゃんは救って見せよう。無論、雁夜も……まあお前の夫もな』

それは、凜を助けた時、凜を探しに来た遠坂葵へと放った、刃夜の言葉。

桜と凜の……幼い姉妹の父親。

確かに立場的に敵ではあった。

刃夜が敵対視をしてないといえども、それでも相手は間違いなく刃夜を敵とみていた。

刃夜も本来であれば、敵意を向けてきた相手を倒さないし殺すのが普通だった。

だが、遠坂時臣だけは殺すわけには……死なせるわけにはいかなかったのだ。

確かに刃夜にとっては心底どうでもいい存在だ。

桜をあんな目に遭わせたという感情がないわけでもないが、しかしそれでも自身が雁夜に言ったように、時臣がその行為を強要したわけではない。

当然怒る部分もあるにはあったが、殺すほどではなかった。

だが、まだ幼い姉妹の父親を死なせたくないと思っていたのも事実だった。

桜のために、時臣を殺したくはなかったのだ。

雁夜に言い聞かせたように、桜のために……

桜がどのような感情を抱いても、ぶつける相手がいるために……

時臣を生かしておきたかったのだ。

……油断したか

精神分身体で見張っている事で安心していた……悔っていたと、刃夜も認識せざるを得なかった。

厄介なサーヴァントがそばにいるとは思っていた。

だが厄介なサーヴァントは明らかな強者だった。

故に早々負けることはないかと踏んでいたのだ。

また、精神分身体で見たアーチャーと時臣の精神の色は、あつてなくもなかったのだ。

故に……死ぬことはないかと踏んでいたのだが、甘かった。

黒印騎士団の友よ……。お前と同じように死者の声が聞けたのなら、会話が出来るのなら……時臣に事実を伝えることも、家族に言葉も残すことも出来たのだろうか……

遠い過去……友となった男の背中を、刃夜はふと脳裏に思い出していた。

死者の声を聞き、死者の魂に形と力を与えて、魂が自らを吊う事が出来る……そんな不思議な能力を持った友のことを。

寡黙ながらも敵味方関係なく、死者の弔いをする……優しい男だった。

とある限定的な条件下であれば、刃夜もその能力を使用することが出来たが、この世界では出来ない芸当だった。

死なせてしまったという油断と、何もすることが出来ない自分の無能さが悔しいのか……刃夜はただただ静かに歯を食いしばっていた。

だが耐えることが出来ず、自らに対する怒りか……刃夜は先ほど地面を殴ったときと同じように、血に染まった絨毯を殴っていた。

一夜に二度もヘマをすると、やはりそれなりにへこむな……

濡れた絨毯の血が打ち付けた刃夜の拳に付着した。

その手に付いた血を見つめて……刃夜はため息を吐くと同時に紅の炎を出現させて、その付着した血を瞬時に蒸発させた。

そしてその熱が消えないうちに……静かに黙禱を捧げた。

「……」

何も言うことはなかった。

何も言えなかった。

言う資格など、あるはずもなかった。

助けるつもりだったはずだというのに……死なせてしまった刃夜には。

そして、この状況を……時臣を死なせた存在が誰であるのか、刃夜は正確に見抜いていた。

さて、あいつが相手となると、俺も全力で挑まねばなるまいが……

刃夜が握りしめた拳が、僅かに震えていた。

それが恐怖によるものなのか？

それとも怒りによるものなのか？

もしくは……興奮によるもののかは……

刃夜以外にはわからなかった。

28 最後の昼

前夜が……明ける。

本来であれば第五次へと続き、幾人もの生を狂わせた聖杯戦争。数百人の命を奪った。

一人は壊れて、壊して……最後に救った少年に救われた男がいた。

壊されて、壊れて……壊れたことに気付かぬままに「人」が抜け落ちた少年がいた。

そして誰よりも

翔られ、

犯され、

全てを踏みにじられた少女がいた。

本人も当然だが、意識して行ったわけではない。

何せ本人は、当たり前だがこの世界の先のことなど知るはずがないのだから。

だが、その存在は誓ったのだ。

その全てのしがらみを切り裂き、その少女を救ってみせると。

その最後の戦いが……始まるその日の昼間。

その存在は……

「さて、今日のお昼は……ふわふわっの、とろっとろのオムライスだ！」

「やった！」

「……うわ、うまそう」

呑気に昼飯を作っていたりする。

しかも刃夜としてもかなり力を入れたのか、少し額に汗を滲ませていた。

当然だが、刃夜が調理したのだから、調理の仕方の問題などあるわけもない。

さらに食材も、莫大な金と長年の経験に培われた人心掌握術で、八百屋の店主や地元の農家、畜産業の人々と直接交渉して、最高の食材を仕入れたりりする。

その二つにさらに刃夜が「桜」と「雁夜」のために心を込めて……手間暇かけて作った料理だ。

故に……

「おいしいー！」

「……うまい」

まずいわけがあるはずがない。

「そうだろう、そうだろう。出来れば家庭菜園で作った俺の野菜で作りたかったが……さすがに無理だった」

「家庭菜園にしては、本格的すぎるだろ……あれ」

本気で悔しがっている刃夜に呆れた視線を向けながら、雁夜は次に庭へと目を向ける。

そこには改築時、草刈り程度しか手入れされていなかった庭はななく、土興しを行われ、更に畜産業の糞や枝葉、米ぬかなどを練り込ん

で堆肥を作成していた。

堆肥を作るにはそれなりの日数がかかるのだが、しかしそこは一応「英霊」として存在する刃夜は伊達じゃなかった。

風の力、霞の力、炎の力……それら全てを使用して、一兩日で堆肥を作成して、作物を育てていた。

その作物の育て方も異質……というかまねできない……超高速で動いて分身もどきを作って労力を惜しまず手をかけている。

さすがに作物……というよりも育てている植物が普通の植物なので、当然だが一週間も経たずに収穫などできるわけもない。

だが、それでも刃夜のマネをして、一緒に嬉しそうにはしやぎながら土いじりをしている桜の姿を見ている雁夜としては、苦笑するしかなかった。

そして桜に誘われるままに雁夜も一緒に土いじりをしているのだ。

あまり人のことを言えなかったりする。

そして刃夜の料理を味わいながらも、さすがにそれなりの付き合い合いになってきたために……雁夜も刃夜の行動を見抜いていた。

だが問いただす前に、刃夜から話を持ちかけられたため、その鋭さもある意味で無意味となった。

「おそらく………というか今宵、終わらせる」

「……終わらせる？」

食後、朝には遅く、昼には早い……そんな時間に、刃夜は桜と雁夜を居間に集めて、お茶を飲みながらそんなことを言い出した。

一瞬刃夜の言葉の意味がわからなかった雁夜だったが、しかしそれでも少しでも考えればわかることだった。

終わらせるとはすなわち……聖杯戦争に他ならなかった。

「終わらせられるのか？」

雁夜が疑問の声を上げるがそれも当然と言えた。

何せ聖杯戦争は別のサーヴァントとの生き残りを賭けた戦いだ。

最後の一騎まで戦うという、表向きのルールしか知らない雁夜だが、それでも現時点で正式なサーヴァントは四騎残っており、イレギュラーな刃夜も含めれば五騎だ。

刃夜とバーサーカーが戦うことはおそろくないだろうと、雁夜も思っていたがそれでも残り三騎。

その全てを打倒しなければ聖杯戦争は終わらない。

確かに刃夜が強いのは雁夜も十分理解していたが、残り三騎の英霊を単独で倒せるとは思えなかった。

刃夜としてもやろうと思えば出来なくもなかったが……しかし刃夜の目算が正しければ、刃夜が後戦うのはおそろく一騎のみだった。その「一」が……べらぼうに大変そうだが……

内心で盛大にため息を吐いている刃夜だったが、しかし桜の手前それをするわけにはいかないので、刃夜は無表情を保った。

その桜がいるということも……今の刃夜にとっては急ぐ理由になつた。

急ぐ理由はないが……幼子だからと隠すのがいいというわけではない。だが戦争中に話すのはちよいと……な

己の力量不足に歯がみするしかなかったが、それでも起きたことを巻き戻すことは刃夜にも出来ない。

故に……少しでも自分に出来ることをしようと刃夜は決めたのだ。そして刃夜は一度お茶をすすって心の整理をしつつ、言葉が続けた。

「始まった以上、終わることは間違いない。ならばこれ以上被害が大きくなる前に、終わらせなければならぬ」

確固たる意志を持って、刃夜はそうはつきりと口にした。

その表情は……今まで見たこともないほどに力強かった。

刃夜としてもかなり苦戦を強いられるのである相手がいるのだからそれも当然だった。

というか、ちよつと不安だな……アレに勝つのは。まあ負けることはないと思うが……

不安に思う気持ちは確かにあった。

だがそれでも刃夜には負けない理由があった。

その理由へと、刃夜は視線を向けると……少々不安そうに刃夜を見ていた瞳を見つけた。

あれま、さすがは桜ちゃんだ……いやこの場合、俺が未熟と言うべきか？

数百年の修行をしているにもかかわらず桜に不安を与えてしまったことに刃夜は内心で反省し、素直に桜に詫びていた。

「怖がらせちゃったかな？ 大丈夫だ桜ちゃん。俺は絶対に戻ってくる」

「……本当？」

「必ずだ。当然五体満足で。まだまだ俺にはやらなきゃならないことが山積みだからな」

少々大きさに肩をすくめながら、桜に笑いかけている。

だがそれでも不安をぬぐうことが出来ないのか、桜は不安そうに刃夜を見つめていた。

まだまだ未熟だな……と、内心で猛省する刃夜だったが、しかしそれでもこれ以上刃夜としても、桜の不安を取り除くのは難しいと思っていた。

人の心に敏感な桜ということもある。

だがそれ以上に刃夜自身も、絶対的な自信がなかったのだ。

あの黄金の英霊を相手にして……無事で済むのか？……と。

勝つことは出来る。

だが今まで見せた武器以外にも、何か絶対の一を持っていると、刃夜は確信していた。

そしてその一が……とてつもない物であるということも。

だがまあ……やるしかないんだけどな

内心でそう愚痴りながら、刃夜はさらに内心で深々とため息を吐いていた。

そしてそれと同時に……自分が醜い感情を抱いていることも十分に理解していた。

個人的に恨みがある訳じゃない。

自分が万能でないことも理解している。

八つ当たりと言われても、刃夜としては強く言い返すことは出来ないだろう。

だがそれでも刃夜は絶対に殺さなければいけない相手がいた。

あちらもこちらを意識しているようだしある意味でちょうど良かったか

何故か最初から目をつけられていた。

最初は刃夜としてはどうでもいい存在だった。

だが今はそうも言ってもらえない。

自分が納得するためにも、刃夜はあの黄金の存在を……

英雄王ギルガメッシュを殺すのだと……誓っていた。

その後は刃夜も注意して、態度に出さないように注意していた。

桜を不安にさせるのは当然だが、刃夜の本意ではないからだ。

だがそれでも桜が怖がっているのは刃夜もわかっていた。

そしてその恐怖を払拭するのが難しいことも。

だから刃夜がやれることはただ一つだ。

その恐怖を現実の物にしないこと。

ただそれだけだ。

そのために……刃夜は再び外道になると誓った。

卑怯と言われようと言われよう……俺は、この子を守る

胸に宿した恐怖を必死になって隠しながら、自らが作った料理を食べ
べて笑顔を見せている桜を見れば、外道になる程度のことなど、刃夜
にとつては瑣末事だった。

必ず殺す……

胸に宿した滾る思いをしまい込みながら、刃夜は力を練っていく。それが己に出来ることならば。

だがそれでも、外道だけで終わるつもりは、刃夜にもなかった。

「見つけたか……？」

昼ご飯を終えると、刃夜は庭に出てぼそりとそう問いかけた。それは独り言ではなく、確かな問い。

問いかけであって、問いかけではない……ただの確認だった。

その証拠に……現界したバーサーカーの表情には……

一切の迷いのない、確かな強い意思を宿した瞳が刃夜を射貫いていた。

「正しいかどうかはわからない。だが……私の思いは確認した」

「ならそれでいいだろう。俺もお前の戦いが出来るように、力を貸す。故に、お前の力を貸して欲しい」

「ああ。わかった」

二人のやりとりは短かった。

だが二人は互いに互いの内心の事がある程度理解している様子だった。

当然……刃夜がどのように考えているのかも。

……構わない。我が王と戦えるのなら

刃夜の狙いを騎士であるバーサーカー……ランスロットは理解していた。

だが刃夜がただただ目的のためだけに、自分を利用しようとしているつもりではないのは理解していたのだから。

ある意味で刃夜の目的のために動いているのは間違いないのだが。

さて……もう一つやらなきゃいけないこともあるわな

深々と溜め息を吐きながら、刃夜は昼飯の片付けを桜と雁夜の二人に任せて、とある老人の家を訪問していた。

といつても家の近くに来ただけで、家の中に上がる込むことはしない。

だが、近くに来れば自ずと出てくる存在がいることはわかっていた。

故に、刃夜は気配が付いてきていることをきちんと把握した上で、すぐそばの話が出来る交差点へと足を運んだ。

「昨夜は申し訳なかった、征服王」

「自ら負けを認めておきながら余をすっぽかして消えるとは、なかなか度胸のあることとしていくな、ジンヤよ?」

周囲に誰もおらず、誰も見てないことを確認し、刃夜が虚空へと声を掛ける。

それと同時に現界してライダーはニヤニヤと、実に嫌らしい笑みを浮かべて刃夜へとそう文句を言っていた。

といつても、それほど怒っているわけではないのだろう。

その嫌らしく見えつつも快活に笑っているのがその証拠だ。

だが当然だが、すっぽかされたこと自体を不快に思っていないわけがなかった。

刃夜もそれがわかっているからこそ、こうして一人でライダーの元へやってきたのだろう。

苦笑しつつ素直にわびた。

「昨夜は突然帰って申し訳なかった。ちよつと緊急事態が起きてな」

「まあ別段かまわんが。あのときは間違いなく余の負けだろう」

「だが……」

「言うなジンヤよ。確かに貴様の言い分も一理あるのだろうが、それでも余が納得出来ん」

反論は許さんとばかりに、ライダーはその巨大でたくましい肉体で腕を組んで、刃夜を軽く睨みつける。

刃夜としてもこの問題を長引かせたくなかったので、ちようどよかったといつてよかった。

そしてそれ以上に、刃夜もライダーも……高ぶっていたのだろう。終わりが近いことをそれとなく察して。

故に未だ敵である互いがあまり話すことはない、二人は言葉にせずともわかつていた。

故に話は長くなくすぐに終わる。

刃夜が詫びの品を渡して終わった。

夜が更けていく。

そして刃夜は動きだす。

不安そうにしている桜を限りない優しきで宥めて……眠りにつかせた。

そして刃夜、雁夜、バーサーカーの三人は動き出した。己が胸に抱く目的のために。

二人組は静かな寺の参拝所へ。

刃夜はその深奥へと向かって……器を置いた。

そしてその器を置いた先にある……巨大な地獄の大釜を見つめていた。

これが大元か……。こんな邪悪な物で何を叶えるって言うんだか

地獄の大釜に呼応し、手にした超野太刀が疼き、嘶く。

さらに超野太刀から伸びる呪詛の黒き渦が、野太刀を持つ刃夜の右手に絡み付いていく。

早く喰わせろと……

そう吼えているかのように、その黒き渦は赤黒く明滅していた。

その黒き波動を受けつつも、刃夜はただ静かにその地獄の大釜を見つめて、鼻で嗤った。

この場にいるのは刃夜のみ。

故にその嗤った対象は他の誰でもなく、刃夜自身に向けられた物だった。

どうやって説得というか、正気に戻そうか考えてたけど……考えるまでもなかったな、こりや

鼻で嗤った後、乱暴に自らの頭をかきむしり……。そして盛大にため息を吐いた。

どうやら心底自分の事に呆れている様だった。
だがそれでも、手間が省けたのだからそれは歓迎すべき事なのだろう。

切り替えるためか、それとも抑えつけるためか……。刃夜は右手で握った狩竜で自らの右肩を軽く叩き、一つ小さく頷いた。

「さて、準備は整った。これより俺は外道となり、修羅となろう」

軽々しく言ったその言葉は、言葉だけであればただの軽い文字の羅列にしかならなかっただろう。

だが、その場に他の誰かがいて、刃夜の表情と、言霊に込められた凄烈な感情を少しでも感じ取れば、誰も笑うことなど出来なかっただろう。

もしかしたら無意識のうちに感じ取っているのかも知れない。

今宵の戦いが刃夜にとって、生涯忘れる事が出来ない戦いになるのだと。

自らの信念の命題を賭けた戦いになるのだと。

地上に戻り、刃夜は柳洞寺の山門へと足を運び……その左腕に強烈な紅い焰と、紫の焰をが灯った

「聖杯戦争最後の夜の幕開けだ！ 盛大に、派手に行こうか！」

誰に聞かせるわけでもなく、刃夜は一人大声で叫び……左腕を空へと伸ばす。

その刃夜の動きに合わせて……紅と紫の焰が天へと走った。

季節外れの花火が上がる。

残っている全ての聖杯戦争の参加者を招き入れる……呪われた火の花。

そして最後の夜が訪れる。

五百年に及んだ……聖杯戦争の最後の夜が。

29 その胸の想いは

ふんっ、実に下らん男だった

胸のむかつきを洗い流すかのように、アーチャー……英雄王ギルガメツシユは冬木教会の地下にある言峰の部屋でワインを飲んでいた。先ほど言峰と結託し、遠坂時臣を……己のマスターだった男を殺したばかりだ。

別段、時臣を殺したから苛立っているわけではない。

人を殺すという行為はギルガメツシユにとってただの作業でしかない。

「それも自らが価値がないと決めた存在に、ギルガメツシユの感情が波立つことなどあるはずもない。」

では何故こんなにも苛立っているのか？

それがわからないことで、ギルガメツシユ自身が苛立っていた。

だがそんなことなど瑣末事であることだと、ギルガメツシユは直ぐにその感情を切って捨てた。

聖杯戦争もすでに半分ほどのサーヴァントが消えた。

それに伴いマスターも半分ほどの数となっている。

通常であれば最後の一組になるまで終わらない聖杯戦争だが、綺礼から聞いていたがそんなことは関係なかった。

ギルガメツシユ自身も感じていたのだ。

もうじき聖杯戦争が終わると。

何故そう感じたのかはわからない。

そしてそのわからないという感情は、ある存在へと向けられる。

鉄刃夜という……意味不明な存在へ。

何故ここまでギルガメツシユが刃夜に執着するのか？

それはギルガメツシユ自身にもわかっていないことだった。

最初に見た時は、冬木教会で周囲の聖杯戦争参加者に喧嘩を売っている姿だ。

そしてその後直に見に行き、新都と旧市街とを結ぶ大橋の直ぐそばで生意気にも、ギルガメツシュを相手に啖呵を切って見せたのだ。

あそこまでただただ侮蔑もなく、純粹に……怒りの感情をぶつけられたのはギルガメツシュも久しぶりの体験だった。

その印象が強かったというのは間違いなくあるだろう。

だが、本当にそれだけなのか？

戦闘を行った際の違和感を覚えたことは、ギルガメツシュも否定できなかった。

あのときは子供がいたからその気になれなかったとも考えた。

それもあるがそれ以上に何かがあると思えなかった。

その「何か」が

刃夜にあるのか？

自分にあるのか？

それすらもわからない。

そのわからないことが、ギルガメツシュの心をいらだたせていた。

そう……わからなかったのだ……

優れた知識と洞察力を有し、相手の本質を見抜くだけの頭脳を持つたギルガメツシュが……

この俺が、あんな小僧ごときに心を乱すとはな……

自らの心の高ぶりを思つて、ギルガメツシュは軽く鼻で笑つた。
そう高ぶっていたのだ。

自ら臣下の礼をとっていた、取るに足りない存在……遠坂時臣を殺したことも間違いなく関係しているだろう。

別段血に飢えるような戦闘凶ではない。

だが、それでも自らの気持ちが高ぶっているのを自覚するには十分すぎた。

征服王イスカンドル。

騎士王、アーサー王。

そして……鉄刃夜。

たった七騎しか存在出来ないはずの聖杯戦争で、これだけ自らを愉しませる存在が出てくると、一体誰が予想できたか？

だがギルガメツシュとしては三人に対する対処は変わらない。

逆賊は誅殺し、あの哀れな女は自らの所有物とする。

これは決定事項だった。

その最後の戦いまで……あと少し。

ギルガメツシュもそう感じていた。

否、聖杯戦争に参加している誰もが、もう長くはないと自覚しなくとも感じてはいただろう。

そう感じた原因が……ナニであるかもわかっていなかった。

だがそれでも感じたのだ。

凄まじいまでの魔力の波動を。

地下に蠢く……悪意の塊を。

それが破裂すればどのような悲劇が起こるのかも知らずに。

変化していると……堕ちていることも知らずにその力に自らの願いを託そうとしている。

唯一変化に気付いていた存在は、地の底で蠢く悪意の塊とは比較にもならない怨念の中を、悠久の時間をさまよっている。

しかし知り得ているだけで意味がなかった。

唯一気付いていたその存在も、変化にこそ気付いているが、悠久にも等しい時間に狂わされて、どうすることも出来なかった。

地獄の釜の蓋を開けて、中身をどうにか出来る存在が一人だけいた。

「いた」というよりは、おそらく喚ばれたのだろう。

桜だけでなく、聖杯に。

聖杯に宿った……一人の女性に。

当然だが本人は全くわかっていない。

本人にしてみれば、やることはただ一つだ。

それに付随していくつもやらなければいけないことが増えていた。

だがそれでもやってのけるだろう。

そのために……鉄刃夜は、刀を振るっているのだから。

30 征服王と狂気の騎士

その花火は実に奇妙な物だった。

何せ火の玉が上がったというよりも、まるで火の波動が広がるかのような

燃えたぎり、広がる焰のように、宙に花を咲かせていったのだから。

当然だが、そんな花火などあるはずがない。

魔力を大量に放っていた強大な力だった。

その時点で……誰がその花火を上げたのか？

誰が全ての存在に喧嘩を売ったのかなど、考えるまでもなかった。

特に切嗣やセイバーは、その炎に助けられたことも、行動を妨害されたこともある。

わからないわけがなかった。

「あれは……」

少し離れた山頂……柳洞寺より放たれた宣戦布告。

その炎を、何とか起こせるようになった体を動かして、アイリが見上げている。

そしてその宣戦布告を見上げるのは当然だがアイリだけではない。

……動き出したか

夜に向けて武装の準備を進めていた、壊れそうな人が。

……あの魔力は、ジンヤか

月明かりの下……中庭で静かに瞑想をしている、間違いをさらなる間違いで正そうとする騎士が。

「ほう……あれは、ジンヤが犯人か？」

寄生している老夫婦の庭先で、夜空を見上げる先導者が。

「……かかってこいだって？」

未熟ながらも、それでも何かを掴もうとしている青年が。

「仕掛けてきたか……」

教会で神へと祈りを捧げていた、壊れかけの人形が。

そして……

「ようやく動いたか小僧。ここまで大々的に挑発するとは、我も思わなかったぞ」

自らの昂ぶりを抑えている……我王が。

聖杯戦争に関係する全ての存在が、刃夜が打ち上げた挑戦状を見上げている。

他者からのメッセージを……それも挑発を王が見上げる事は本来であればあって良いことではない。

正しくは看過するはずがない。

だがその愚かな挑発行為を、アーチャーは是とした。賊を誅罰するということ。

相手が刃夜であると言うこと。

そして自分でも不可思議な程の高揚感。

これらが全て合わさって、ギルガメツシュの気分は最高潮へと達していた。

「コトミネ」

「何だ、ギルガメツシュ」

だが誅罰を下すべき相手は一人ではない。

残ったサーヴァントのうち、二騎は確実に己自身が手を下さねば気が済まなかった。

そのために、アーチャーであるギルガメツシュも下準備……というよりも純粹に魔力が必要だった。

「我が宝具を使う際は、令呪を純粹な魔力として我に献上せよ」

「ほう？ そんなに膨大な魔力が必要なのか？」

「ああ。我自ら直々に手を下さなければいけない賊が二人もいるのである。我としても少々自分だけの貯蔵魔力では不安が残る。父親から過去の聖杯戦争の余剰令呪を受け取ったのだ。不可能ではあるまい？」

「ああ、いいだろう」

断る理由が言峰としても見あたらなかったため、アーチャーの提案には素直に首を縦に振った。

言峰自身も、自らの昂ぶりを抑えるのに必死になっていたからだ。

長年の探求の果てに見つけた、敵対者。

もしかしたら自分の答えが見つかるかもしていないという期待。

この聖杯戦争において、新たに遠坂時臣を殺すことで新たに生まれたアーチャー組。

この組が今残っている聖杯戦争の参加者の二人組ではもつとも強いだろう。

だが、強さが全てではないのだ。

無論、戦いに勝つためには強くあることは重要だが、最重要というわけではない。

魔術師としては下の中の下。

だがその信念のみで責め苦に耐え抜いて、未だ聖杯戦争参加者として生き残っている雁夜のように。

気持ちはあれど実力はまだ幼く、だが相棒の強さと、自らの気持ちで最大の敵に挑もうとしているウェイバーの様に。

実力もある、容赦もなく冷徹であり合理的である。

だがそれでも……最後の一线を越えず壊れず、戦い続けている戦闘機械が、未だ他の相手を殺せてないように。

そして……下地こそあっても、実力的にはいつ死んでもおかしくなかった青年が……

力を身に着けて他者を救っているように。

力が全てではない。

力が全てでいいわけではない。

それを黒紫の騎士と、一人の鍛造士が……

他の者達にそれを教える。

無論二人にそのつもりはない。

結果的にそうなるだけだ。

だがその教えは強固な意志と想いとなって……その者を救い、その者が、更に多くの人を救うだろう。

その開拓をする者が……動き出した。

といっても……

まあ特殊工作に走りますが……

山門へと続く長い石段の途中から山に入り、刃夜は黒い、暗い……闇の地獄の釜へと続く裏道へと続く場所へたどり着くための案内板を作っていた。

といっても直ぐに見えない様に工作をしているのだが。

更に山門の中の門扉側に和紙を貼り付けて、気を込めた筆と墨で文字を描く。

『山門へと続く石段中腹辺りで左に曲がって地下へと続く道へ進め』

これで舞台は整ったと……

「このことは内緒にしておいてくれよ」

「ああ……」

背後の参拝所のそば……脇に兜を携えて佇む黒紫の騎士がいた。最近では被っていないかった兜を脇に携えて、ただそこにいるだけだった。

「……」

「……」

二人はそれ以上言葉を紡がない。

否、正しくは刃夜にはかける言葉が見あたらなかった。

もつと正しく言うのであれば……言葉をかける言葉が見あたらないのだ。

今この場で……

決闘場所と決めたこの場所で、次の場所へと誘う言葉を書いた文を残す。

そして文を差し出す相手が……黒紫の騎士でないことは、

今の状況を見れば誰にでもわかることだった。

何度もしてきたが……慣れることはないし、慣れるつもりもないが

……

刃夜としても自分がひどいことをしているつもりはわかっていた。だがそれでも自らが描いた絵を……目的を達成するために実行することを厭わなかった。

やると決めたのだから。

だがそれでも自らがやる外道行為を慣れたくもなく、慣れたいとも思っていない。

「悔しいが、クラススキルを失ってしまった私では我が王にも、当然……ジンヤにも、勝つことは出来ないだろう」

黒紫の騎士は……兜を携えていない右の手の平を、じつと静かに見下ろした。

その目に悲壮はなく、ただただ静かに自らの手を見つめているだけだった。

仕草にも、その体からも……何も感じさせなかった。

ただ静かにそこにいる。

最初は狂いたいがために、召喚に応じた。

狂って

壊して

全てを壊して

全てを狂わせて……

全てが狂えば……狂わせてしまった何か元に戻るかも知れないと。

そう思った。

そして狂った思考の中で、全てが霞み、全てが闇に覆われて……全てを狂気で満たした

全てが霞み闇に閉ざされてなお……それでもこの仮初めの生に……

輝ける金色の光を見つけた。

その輝きがあまりにも眩しすぎて……その輝きを消滅させたかった。

だが叶わなかった。

他の闇に邪魔をされて。

そして……

目の前に男に……出会ったのだったな……

自らの右の手のひらを見下ろしていた目を……顔を上げて、黒紫の騎士はその相手を見つめた。

長大な超野太刀を左手で持ち肩に乗せながら、山門の裏側に貼り付けた和紙に右手の毛筆で文字を書いている男。

鉄刃夜。

刃夜が手にした禍々しい超野太刀で、全てを狂わされた。

いや、もしかしたら全てを狂わされたのが再び狂って……戻ったのかもしれない。

結果論だが、今は黒紫の騎士は……

円卓の騎士、ランスロットはそう思えた。

全ての闇を……狂気を喰われてこの場にいる。

狂ったのは事実だ。

今の仮初めの生も……

自らの生涯も。

裏切り狂って。

それでも今こうしてここにいた。

考える時間を与えられた。

ただただ考えるだけだった。

それでも一つの答えを導き出せた。

自らの……気持ちで。

だからここから先は、誰のためでもない、自分のための戦いなのだ。

無論、ランスロットも刃夜が何を狙っているのかもわかっていた。

それでも、自らの目的のために、その兜を……

狂気の仮面を被った。

それは決別の証。

狂気を奪い取られてから、刃夜の前では決して被らなかつた狂気。

狂気を顕した兜。

バーサーカーとして顕現した姿。

つまり……敵対していた時の姿だ。

その意図を察して……刃夜は右手で持っている毛筆をバーサーカーへと投げ捨てる。

弧を描き飛んでいく毛筆が、二人のちょうど中間点の距離で、紅の炎に一瞬にして消滅させられた。

二人は互いに互いの意志を確認した。

「……雁夜」

「……なんだ刃夜？」

バーサーカーのそばで佇んでいる雁夜。

空だったり、中身が入ったりしている小瓶がいくつも入った黒い買い物バッグを提げている。

更に右手に黒い布の双剣が収まったシースを手にはしている。

「腹がタプタプだろうからあまり動くなよ。封絶の貯蔵魔力はそいつ自身が限界とを感じるまで使ってくれ。封絶、大丈夫だとは思うが魔力使い切って意志なくすとかへマするなよ？」

『馬鹿にしないでもらいたいな。仕手も十分に気をつけろ』

「おう」

そして刃夜は背を向けた。

だが別れを惜しむかのように……刃夜は一言だけ、言葉を放った。

「がんばれよ」

その返事は必要ないと言うように、直ぐに歩いていき石段を下つていく。

これが、刃夜とランスロットの別れとなった。

言葉を残して、刃夜は疾走した。

自らの戦場へと。

それぞれがそれぞれの目的へと向かって走っていく。

現界した愛馬に跨り、疾駆する二人。

賊を駆るために黄金の舟で移動する、我王。

自らの国を救うために走る王。

全ての怨嗟を終わらせるために走る男。

探求の果てを望む男。

そして己が目的のために、走る男。

だが刃夜の足を持ってしても、間に合わなかった。

否、間に合わせようと思えば間に合っただろう。

だが刃夜には今宵も全力で戦うわけには行かない理由があった。

故に、自らの気力を駆使して走ったが……そのときにはすでに決着が付いてしまっていた。

征服の王と、英雄の王との……死闘が。

イスカンダルとギルガメツシュの死闘は、当然のことながら、最大戦力のぶつかり合いとなった

征服王アイオニオ・ヘタイロイイスカンダルの最強宝具、対軍宝具王の軍勢

英雄王ギルガメツシュの最強宝具、対界宝具天地乖離す開闢の星

最大にして最強同士の力のぶつかりあい……たった一振りの剣によって、勝敗が決した

アイオニオ・ヘタイロイ
王の軍勢は破られた

最大にして最強の力を破られてしまった以上、敗北は必至だがそれがどうしたというのか？

挑むべき敵がいる

自らも、そして相手も認められた申し分のない敵

敵へと迫り、戦っても敗北は必至

何せライダー……イスカンドルは戦略家であって、戦士ではないだが、それがどうしたというのだ？

そんな事実など、胸に燃えたぎる興奮と思いに比べれば何のことはない

敵は間違いなく世界最強の英霊だ

世界を引き裂く剣を持ち、数多の宝具を携えた存在

ならばこそ……超える事が出来ればそれは世界の果てへと至った

のと同じ事

届かぬからこそ挑むのだ

覇道を示さねばならない

今新たに臣下となったウェイバーのためにも

自らの背中を見守る……臣下達のためにも

故に走った

イスカンドルは疾駆した

愛馬と共に

最後には己の足で夢中で駆けていた

後ろを振り返ることはしない

ただただ……胸が高鳴る最果ての海の潮騒を味わいながら、ギルガメッシュへと肉薄し……

新たな愛剣を振り下ろした

よくぞ……ここまで来た

そのイスカンドルの魂の……命の疾走を、相對したギルガメツシユは馬鹿にすることもなく、蔑むこともなく……

静かに見つめていた

そして自らの秘中の秘にして、もつとも信頼を置く兵装の一つである、天の鎖で相手を拘束した

そのときだった

イスカンドルが手にした劍が僅かに輝いたのだ

何？

その輝きは周りを照らすことも出来ないほどの淡い光でしかなかった。

否、もしかしたら光つてすらもないのかも知れない。

だがそのイスカンドルが手にした劍は、まるで自らの使い手を鼓舞するかのように一瞬だけ瞬き……

僅かな力をイスカンドルへと与えた

「あああああつああ！」

一度止まったイスカンドルの右腕が僅かに動き……その切っ先数mmが、ギルガメツシュの頭髪を僅かに切り裂いた

だがそれだけだ

それ以上は動くこともなく、剣も再度光ることもなく……今度こそイスカンドルは完全に動きを止められた

光の瞬いた際に放たれた力の波動で、それがなんなのかを察したギルガメツシュは、一度その存在へと皮肉げに笑い……イスカンドルを殺す

手にした最強の武器、乖離剣がイスカンドルの胸を貫き、イスカンドルは消滅した

ギルガメツシュ……世界最古の英雄王から確かな賛美と言葉をもらい、霊基が完全に消滅する

だがそのイスカンドルが消えてなお、イスカンドルが手にしていた剣は消えず、手からこぼれ落ちた剣はその切っ先をアスファルトに突き立てる

その剣をギルガメツシュは手に持ちゆつくりと、ライダーのマスターであるウェイバーへと近寄り、その是非を問うた

だがその場でウェイバーは引くことだけはしなかった

自らの夢の在り方を示した、王の在り方を語り継ぐために
令呪を使い切ったためマスターでもなく

賊でもなくただの雑種

故にギルガメツシュはウェイバーを誅殺することなく、手にした剣をウェイバーの前に突き立てて、その場を後にした

そして……直ぐに次の獲物を見つけた

見つけたというのは少し語弊があるだろう

何せその存在が、ギルガメツシュを誘っていたのだ

その総身に、凄まじいほどの殺意と戦意を漲らせて

ギルガメツシユとイスカンドルの戦場であつた大橋の直ぐそば
……新都の公園で

いくつもの得物を持ち、その得物を扱うだけの技量を持ち得た

鉄刃夜が

英雄王、ギルガメツシユへと……一対一の、決闘を挑んだ

刃夜の宣戦布告に応じた、二人。

一人は騎士王。

一人は魔術師殺し。

先ほどの花火がどこから放たれたのかは、くたびれた武家屋敷で見
ていたセイバーが場所を特定するのは、そんな難しいことではなかつ
た。

当然衛宮切嗣も。

切嗣はいつも通り、セイバーなどいない者として扱い、慎重に歩を
進めていった。

ある意味でそれは当然だ。

どんな罠があるかもわからないのだから。

だがセイバーは違う。

セイバーも当然罠を警戒すべき事だと理解はしているが、それでも
切嗣とは戦闘能力が桁違いだ。

またそれだけの力を扱いきる腕前も、気持ちもある。

故に、慎重に歩を進める切嗣を追い抜き、疾走して行く。

その姿はまさに一陣の風だった。

そして、柳洞寺へと通ずる参道へたどり着き、罠を警戒しつつすぐ
さま石段を登っていく。

普段のセイバーであればもつと慎重に行動しただろう。

だがそれでもセイバーとしてはこれ以上切嗣に戦って欲しくないという思いがあった。

切嗣の手段は確かに合理的だが容赦がない。

残る聖杯戦争参加者は確かに敵だが……それでもどのような手段を用いてもいいわけではない。

とりわけ切嗣の戦い方はセイバーは受け入れがたいものだった。

故にセイバーは全力で石段を駆け上がり……黒紫の騎士と相対した。

バーサーカー!? そうか……ジンヤと組んでいる様子だったとマイヤが言っていたな

見えない剣……聖剣エクスカリバーを現界させて構えつつ、セイバーはゆっくりとバーサーカーへと近寄っていく。

参拝所は静まりかえっていた。

人気はあるというのに不気味なほどの静けさだと……セイバーは静かに周りの様子をうかがう。

だがはつきりと気配を感じ取れるのは目の前のバーサーカーと、そのマスターである雁夜だけだ。

それ以外に気配はなかった。

深夜のために灯りはほとんどない。

山頂の柳洞寺であればそれはなおさらだった。

だがそれでも……一歩近づく度に、バーサーカーの姿が近づく。

以前では黒い靄がかかっていたため見ることが叶わなかったその姿。

その鎧姿を見て……セイバーはその顔に驚きを張り付かせていく。

その……鎧は……

「バーサーカー……」

その静けさを……雁夜がはつきりと聞こえる声で、バーサーカーを呼ぶことで破った。

敵が動くと思いきや咄嗟に構えた剣はしかし、敵からの攻撃を受けることはなかった。

雁夜の言葉は合図ではなく、ただただ呼びかけたただけだったのでそれも当然だった。

「刃夜にいくつか助力をしてもらったけど、それでも俺の実力ではそう長い間お前を全力で戦わせることは出来ない」

「……」

「でも、俺としても頑張るから……どうか頑張って欲しい」

頑張って欲しい……

その言葉に偽りはなかった。

だが意味合いが違った。

戦うことについて頑張って欲しいと言ったわけではない。

自らの目的のために頑張れと……そう言ったのだ。

歪な主従関係だった。

蹴られるために従わされたサーヴァント。

ただただ狂いたいがためにその召喚に応じた、狂気の騎士。

元は卓越した剣技と実力を持ち、最強と謳われた存在だった。

だがその自らの栄光を……ランスロット自らが穢してしまったのだ。

裏切るつもりはなかったと、ランスロットは嘘偽りなく、心から思っていた。

彼自身、セイバーを……騎士王アーサーを誰よりも尊敬し、忠誠を誓っていたのだから。

だが、王妃を奪い、王妃を奪うために円卓の騎士数名を斬り殺した事実はなくならない。

更にモードレッドの反逆が重なり……ブリテンは崩壊した。

故に、ランスロットは狂おしいほどに自らを呪った。

それは己が死してなお、英霊の座へと渡つても自らに対する呪詛は消えることもなく、ランスロットを苦しめた。

だからこそ第四次聖杯戦争に参加したのだ。

騎士としてではなく、獣ですらなく、畜生として生きられてのであれば……救いがあったのではないか？

だがその狂気を、刃夜が切り裂いた。

そしてこういったのだ。

『最後に残ったのは、料理を極めたいこと。そして何よりも……刀を鍛えることだった』

『雁夜に言ったが俺の本職は刀鍛冶だ。色んな事を学んだ上で、それがもつともしたかったことなんだろうな』

『だから、考えてみればいい。色々間違つたかも知れない。狂つたのかも知れない。だが……俺が言うのはちよつと違うかも知れないが、狂った思考は消し飛ばしたんだ。思わず出来たこの時間で、考えてみればいいさ』

狂いたいがために召喚に応じたというのに、その狂うための力を奪った存在は実に半ば無責任に、ただその言葉だけをランスロットに言い放った。

それから雁夜の護衛を霊体で行いつつ、刃夜の手伝い以外では、ただただランスロットは自問自答をした。

確かに裏切った。

確かに国を崩壊に導いた。

その事実は例えランスロット自身がどれだけ否定しても、否定する

ことの出来ない事実。

本人はその事実を否定するつもりはない。

甘んじて罰を受け入れるだろう。

アーサー王に、罰して欲しかった。

それは今際の際にまで抱き続けた本当の思いだった。

だがそれはあくまでも裏切った後の願いだ。

では、本当の願いは？

狂うことか？

騎士王に……アーサーに罰してもらうことか？

王妃を愛することか？

それらも確かに願いではある。

だが最初に抱いた願いは違う。

出会う前は、ただただまだ未熟な騎士が調子に乗っていただけだと思った。

噂話を聞き、アーサーのその姿を目にした時ランスロットは……

心奪われてしまったのだ。

それ以降、ランスロットは忠誠を誓い、王の力になると誓ったのだ。

そう……王への忠誠と

王の力になることを

誓ったのだ。

その誓いを……今こそ果たすべきなのだ。

これ以上自らの王が……道を踏み外さないためにも……。

「感謝する。カリヤ。我がマスターよ」

狂気の兜を被っているため、その声は少ししやがれてくぐもっていた。

だが、その声を聞いてバーサーカーと相対しているセイバー……騎士

士王アーサーは目を見開いた。

己の今の疑念が間違っていないと確信に至った。

聞き間違えるはずがない。

忘れるわけがない。

幾度も共に戦場を駆けた。

幾度も背中を預けて戦った。

彼は何度も自分が最高の騎士であると言っていた。

だがセイバーは……アーサー王は彼こそが、最高の騎士であると思っていた。

「自らが手にする聖剣エクスカリバーの姉妹剣であり、同じく神造兵装である聖剣アロンダイトを所持した、円卓の騎士の中でも最強と謳われるほどの腕前を持つ、騎士。」

「サー……ランスロット
湖の騎士」

そのセイバーの呟きに応えるように、バーサーカーは一步前へとゆっくりと歩みつつ、その兜に手をかけて、素顔を晒した。

「はい、我が王……アーサーよ。ランスロット湖の騎士、御身の前に」

素顔を晒してその兜を脇に抱えて、恭しくバーサーカー……ランスロットは膝を折り、頭を垂れた。

恭順の礼を取った。

だがセイバーとしては訳がわからなかった。

確かに今自分の目の前にいるのはあの漆黒の鎧を身に着けていた、狂戦士、バーサーカーだ。

だがその正体が、自らの部下であり、自分が騎士として信頼していた人物だったランスロットであったのだ。

驚くなどという方が無理があるだろう。

そしてそれと同時に納得している部分もあった。

先ほど晒された、素顔。

その顔には以前にはなかった醜い皺が深く刻まれていた。顔にも生気がなく、髪も幽鬼のようにしおれているかのようだった。

そして狂戦士の時に自分のことを執拗に攻撃してきたこと。それら全てがランスロットであるという事で、納得が出来た。

「……恨んでいるのでしょね、私を。ブリテンを崩壊へと導き、皆を導けなかった、愚かな王を」

顔を伏せて、セイバーは……アーサー王は視線を気まづげに逸らした。

己が王として未熟であったがために、国が崩壊した。

国が崩壊するのに至った経緯を思い出す。

自らの子であるモードレッドに反逆され、その身に傷を負って、ただ一人で生涯を終えようとしている。

騎士が離れていった。

人民が離れていった。

ただ一人で……王の選定の剣を抜いた。

王として治世を必死になって行っていた。

だがそれでも国が崩壊した。

自らが王として未熟だったばかりに。

ライダー……征服王イスカンダルにも否定された自らの王の道。

救うだけで導くことをしなかった。

ああ……確かにそうなのかも知れない

自らの脳裏に浮かぶのは、最後の光景。

夥しい数の屍と、その数の屍が気付いた血の大河。

かつての自らの臣下であり、友であり、肉親だった者たち。

選定の剣を抜いた時にすでに予言されていた通りとなった。

そしてそれだけでなく……今こうして自らの望みを否定するかの

ように……

最強の騎士が憎悪で醜く染まった顔を、自らへと向けている。

カムランの丘での苦悩が深く刻まれた顔を見れば、確かにイスカンの言葉も正しいのかも知れないと……セイバーも思ってしまった。

自らが王として未熟であったために……民と臣下が苦しみ

国が滅んでしまったのだと

滅ぶのは仕方がないとわかっている。

良くも悪くも時代が時代なのだ。

ならばせめて安らかに滅んで欲しいと……そう願った。

だが、それをさせるわけにはいかないと……ランスロットは王の願いを止めに来たのだ。

刃夜の告げ口によって、自らの王が道を誤ろうとしていることを知って。

言葉と

思いと

剣で……。

止めてみせます……我が王よ

「はっ」

静かだがはつきりと、ランスロットはアーサー王の言葉を肯定し

た。

その肯定に、一瞬息を呑んだアーサー王だった。直ぐにランスロットが言葉を続ける。

「あなたを恨んでおりました」

完璧な騎士だった。

「あなたが憎かった」

完全な王だった。

「一人の女性すらも救えなかったあなたを……」

后を犠牲にしてそれでもなお、王としてあり続けたあなたが……
そして誰よりも……

「一人の女性をただただ、悲しませることしかできなかつた私自身を……」

憎かつたのだ。

騎士として誉れ高く、精霊にまで祝福すらもされた。

「何より……私を罰してくれなかつたあなたを……」

だというのに女一人を救うことも出来なかつた自らが

「憎んで……おりました」

憎かつた。

致し方ない事だったのかも知れない。

困窮の時代に、他国からの侵略、侵攻。

日夜戦い続けて己の国を守るために戦う騎士。

そしてその騎士を支える民。

民と騎士。

その双方から国が盤石であると、知らしめる必要があった。

故に、強く気高い騎士王と、美しくも優しい后が必要だった。

言い方が悪いが、人身御供と何も変わらなかったのだ。

国を救うために少女でありながら王を選定するための剣を抜き、少女でも人でもなく……

「騎士王」としての生を受け入れたアーサー……アルトリア。

女性と知りながらも、民のため、騎士達のために后となった、ギネヴィア。

二人は互いに女性であるために、どちらも幸せになれなかった。

一人は騎士王として忙殺される日々。

王が女性であるために、「女」としての幸せを得られなかった后。

自らが忠誠を誓った騎士王と、影でなく后を救いたただけだった。

そう、救いたかったただけなのだ。

「確かに、あなたが私を罰さないことを恨んでおりました。憎みました」

面を上げて、少しでも想いが通じるように膝を折ったまま、自らの

騎士王へと言葉を続けた。

「ですが、私は騎士王……アーサー王、あなた自身を憎んだわけではな
いのです！ 何よりあなたが……アーサーが騎士王としてブリテン
を続けていたことを恨んだ事も、ただの一度もありません！」

胸に手を当てて、自らの仮初めの体の鼓動を感じながら、ランス
ロットは必死になって言葉を紡いだ。

嘘偽りではないのだと、自らの王に伝わることを願って。

「ブリテンで、あなたが王としてあつたことを恨んだ者は少なからずいるでしょう。ですが、少なくともあなたの元を集った円卓の騎士達は……あなたが王であつたことを誰もが誇らしげに思っておりまして」

確かにあまりに完璧すぎたが故に、王の元を離れてしまった騎士はいた。

だが、彼らも、騎士王のことを憎んでいたわけではない。

騎士王のことが理解できないために、逃げ出したのだと、ランスロットは思っていた。

確かに恨んだ者もいるだろう。

王に認められないがために、反逆を起こしたモードレッドのように。

だがモードレッドも、騎士王を慕っていたのだ。

故に、あの滅びが騎士王一人だけの問題ではないのだと、伝えなかった。

理解できずに離れていった騎士達。

信頼を逆転させて、反逆を起こした騎士達。

そして、自分のように……王の信頼を裏切り、誰一人として救えなかった愚か者。

国が滅びたのは、誰のせいでもない……滅びるべくして滅びたのだと。

「だが……ランスロット、私は……」

だがそれでも、アーサー王の心は晴れない。

確かにランスロットの言葉は届いていた。

だがそれでも、自責の念が消えない。

そう簡単に消えるはずがない。

死後、世界の守護者という……「呪われる存在」として存在し続けると約束する程に……

アーサー王は自らの国の救済を望んだのだから。

言葉ではダメなのだ……、ランスロットも理解した。

ならば……騎士として、王に忠誠をみせるにはどうすればいいのか？

簡単だ。

自らの命を賭けて……止めればいい。

「マスター」

生半可な武器ではアーサー王の剣に……神造兵装に対抗できるわけがない。

ならば、対抗しうるのは……同じ神造兵装。

「宝具の使用許可を……」

「ああ。頑張れ」

刻印虫をなくした雁夜の魔力生成量では、大した時間聖剣を使うことは出来ないだろう。

だが、それでもこの時間を長引かせるために、雁夜も尽力すると誓った。

『ぎりぎりまで好きに使い。あの騎士に、力を振るわせてやるがいい』

「ああー！」

雁夜が手にした封絶が淡い紫の光を帯びる。

さらに、雁夜は最後の切り札を使用する。

自らの手に刻まれた、令呪を掲げた。

「令呪を持ってランスロットに命ずる！」

二画残された、令呪を純粹な魔力として使用すれば、飛躍的に聖劍を扱うことが出来る。

「聖劍の使用を許可する！」

聖劍の使用許可という簡単な命令のみで使われた令呪は、そのほとんどが純粹な魔力としてランスロットへと流れ込んでいく。

その魔力に導かれるように……ランスロットの右手に、アロンダイトが現界する。

更に……

「重ねて令呪を持ってランスロットに命ずる！」

顛れた漆黒の劍。

純粹であったために、同胞に手をかけたために呪いに染まってしまった聖劍。

魔劍を携えて、ランスロットが立ち上がる。

「正々堂々と、己の想いを伝えるために戦え！　これは、お前がやらなければいけない戦いだ！　だから、最後までその劍を振るえ！」

あまりにも曖昧な命令だった。

だがマスターとサーヴァントの想いに応えるように、令呪は一瞬強い光を放つて……ランスロットへと魔力を供給する。

令呪を使い切った。

二画とはいえ、サーヴァントという絶対的な存在を束縛を可能とする令呪の魔力は桁違いだった。

今までに比類しないほどの充溢した魔力が、ランスロットの体を包

み込んだ。

そして……その呪いによって……

王を救うことも、后を救うことも出来なかった黒き剣の切っ先を

……

ランスロットは自らの王へと向ける。

「我が王、アーサーよ。もはや言葉ではあなたを止めることは出来ない」

だから……自らの剣であなたを止めてみせる。

すでに罪を犯し、魔剣を携えて裏切りの騎士。

これ以上罪を重ねようと構わない。

自らの王を止めることが……

出来るのならば。

「だから……私の剣で、あなたを止めて見せます！」

一度剣を胸の前で祈るように掲げた。

それは王へと自らの剣と自身を捧げる誓い。

そして、ランスロットは自らの剣をアーサー王へと振るった。

最初こそとまどったセイバー……アーサー王だった。

だが止まっているわけにはいかない。

自分には聖杯を手に入れてブリテンを救うという願いがあるのだから。

故に、ランスロットの剣を自らの聖剣で受け止める。

剣戟へと移行し、辺りには打ち付けあう剣の金属音が響いていく。

一合。

一合。

何度も静まりかえった山寺に、聖剣と魔剣が交差する音が、響き渡る。

澄んだ剣戟の音が……辺りの空気を震わせていた。

力任せに振るっては……感情にまかせたまま振るっては絶対に出せない……

本当に綺麗で澄んだ音だった……。

その剣技を遺憾なく振るい、本能任せではない確かな技量で魔剣を振るう。

その剣に……狂気は微塵もなかった……

それを感じ取って、その少女は心を震わせる。

斬り合いをしている二人以外にはわからない……二人だけの時間がすぎていく。

雁夜は、ただそれを見つめることしかできなかった。

至高とも言える剣戟を……雁夜が黙って見つめていた……。

確かな力と想いが伝わってくる。

嘘偽りでないと、剣が教えてくれる。

技が教えてくれる。

ランスロットの確かな気持ち。

だが、それも長くは続かなかった。

!!!!

ぐっ！ やはり厳しいか！

最初こそ拮抗していた決闘だったが、しかしそれも徐々にランスロットが圧され始める。

何とか卓越した技量で耐えているが、それでも根本的な力の差があるのだ。

「狂戦士」バーサーカーのサーヴァントとして召喚されたランスロット。

その体は当然だが現実として肉体があるわけではなく霊である。英霊に「狂戦士^{バースーカー}」というクラスとかぶせることによって、サーヴァントとして存在しているのだ。

特に「狂戦士^{バースーカー}」のクラスは狂化のスキルによる恩恵が大きい。では、その狂化をはぎ取られてしまったサーヴァントは「狂戦士^{バースーカー}」たり得るのか？

答えは否だ。

はつきり言えば、今のランスロットは本当にただの騎士でしかないと云っていい。

英霊ではなく、肉体のない英雄と言えば適切だろうか？

はつきり言ってしまうえば、ランスロットはサーヴァントですらないのだ。

ギルガメッシュと空中戦が行えたのも、ひとえにランスロットの宝具「騎士^{ナイト}は徒手^トにて死^{オー}せず^{ナー}」と、戦闘機の相性が良かったことで耐えることが出来た。

だが今は騎士同士の剣による真つ向勝負だ。

いくら膨大な魔力があっても、今のランスロットにはそれを出力するだけの肉体と力がない。

だがそれでも……いや、だからこそ、必死になった。

王の目を覚まさせるために。

持ってくれ！ 私の体よ！

今も悲鳴を上げる関節と体の痛みを食いしばって、ランスロットは剣を振るっていた。

剣を交えているからこそ、わかることもある。

それが今の決闘だった。

必死になってランスロットはその剣を振るう。

その必死な姿が、その必死な想いが、アーサー王にその気持ちを伝えてくれる。

良くも悪くも一人の気持ちでしかない。

これだけでアーサー王の気持ちを全て変えることが出来るとは、ランスロットも思っていない。

だがそれがどうしたというのだ？

幸運にもこうして再び相まみえることが出来たのだ。

ならばこの気持ちを伝えるのは今を置いて他にない。

故に、命を賭けてランスロットは剣を振るった。

ランスロット……あなたは……

だがそれも長くは続かず……ランスロットの胸を、エクスカリバーの刃が貫いた。

聖剣が赤い血で染まっっていく。

核たる心の蔵を貫かれたのだ。

絶命は必至だった。

だが……胸を貫かれたランスロットの顔は……

とても穏やかな笑みを……浮かべていた。

「感謝します。我が王よ」

「ランスロット……」

「最後に……貴方の胸を借りられた」

「友よ……私は……」

「王の腕に抱かれて、王に看取られて逝くなど……。何よりも、あなたの剣で裁かれるなど……。まるで私が忠節の騎士であるかのようだ」

「!? そんなことはない! あなたは……貴方こそが……!」

アーサー王の言葉を、ランスロットは身を離し首を横に振って遮った。

自らは裏切りの騎士。

裁かれこそすれど、これ以上の報奨を賜るなど、あつてはならないのだと……。

「私は貴方に裁かれたかった。その願いが果たされました。これでも、素直に消えることが出来る」

「待て……待ってくれ!」

「王よ……」

伝えるべき事は伝えたのだ。

語るべきも剣で語ったのだ。

ならば最後に……自らの素直な気持ちを伝えたい。

ランスロットは素直にそう思って、微笑を……

本当に晴れやかで、穏やかな微笑を浮かべて……こういった。

「騎士王。円卓の騎士として、貴方の元で戦えたのが……私にとって何よりの誇りであり、喜びでした」

その言葉を投げかけた時のアーサー王は、ひどく驚き、怯えているかのような表情を浮かべていた。

それをぬぐってあげたいと思うランスロットだが、すでに自分には時間がない。

だから最後は、自らの本懐を果たさせてくれた男に……願った。

後は頼んだ……ジンヤよ

こうして湖の騎士は消滅した。

生前では叶えることの出来なかった願いを叶えて。

聖杯を欲してはいなかった。

だがそれでも、こうして本当の自らの願いを叶えることが出来たのだから……。

奇蹟は間違いなくあったのだと。

ランスロットはそう思いながら、消滅していった。

3 1 壊れかけの戦闘機械と壊れたことに気づかない人形

それは、セイバーとバーサーカーが剣を交える少し前。

罨を警戒しながらゆっくりと歩を進めていた切嗣が参道を上り始めた辺りの時だ。

罨に警戒しながらも、だがそれでも遅くなりすぎないように、歩を進めていて切嗣は気がついた。

アレは……？

参道の中腹辺りで、奇妙な物を見つけたのだ。

『聖杯の大元、大聖杯はこちら↓』

はつきり言ってふざけているとしか思えない呪符の様なものがあつたのだ。

魔力の波動を受けると文字が浮かび上がるだけの呪符だ。

そのため先ほど駆けていった清廉で強力な魔力を有したセイバーが通り抜けたことで、文字が浮かび上がったのだ。

こんな巫山戯た物を設置するのが誰かなど……考えるまでもないだろう。

あのイレギュラーなサーヴァントめ……

切嗣としては内心で毒づくしかなかった。

今までの切嗣であれば、こんなものなど無視して山頂へと向かい、おそらく山頂にいるサーヴァントのマスターを殺しにかかっているだろう。

だが……どうしても切つて捨てることができなかった。

皮肉にも……先日この柳洞寺で巫山戯た存在の刃夜に罨に嵌められたばかりなのだから。

『変わり果てたその願望の力……それがどのような結果を及ぼすのか？』

『それを……覚悟しておくことだな？』

その呪いの言葉。

変わり果てた願望の力というのは、聖杯戦争に参加しているのであれば、誰もが簡単にわかる。

聖杯の事を差しているのだと。

だが聖杯が変わり果てたというのが一体どういう意味なのか？

それがわからない。

わからない……疑問というのは厄介だ。

また不確定要素というのは戦闘に置いては十分に考慮する必要性があるのも事実だった。

故に……切嗣は罫であると疑いながらも、呪符が指し示す先へと進んでいく。

そして岩に偽装された地下への……

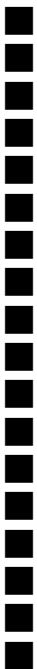
地獄の釜の中へと入っていき……

それを目にした。

「な……なんだこれは……」

隙だらけになっていくことにすらも気付かずに……切嗣は眼下の……

くぼんだ釜の底より伸びる呪いの塊を見上げて絶句した。



凄まじいほどの魔力の波動を感じる。

それに比例するかのよう……怨嗟の声が、気持ち伝わって

これだけの巨大な魔力の波動を感じ取れるのは間違いない。

これが真の聖杯であると……

魔術師の端くれである衛宮切嗣はそう理解した。

理解できたのだ。

この黒き呪いの塊の様な物が、聖杯であると。

こんな物が……自らが追い求め、出来ないと悟ったがために継つた、万能の願望機なのだ。

「馬鹿な……」

逃れるように、気付かぬうちに切嗣は後ろに下がってしまっていた。

だがそれはある意味で生命として自然な行動だった。
こんな物を受け入れられる者がいるのなら、それは人間ではな
い。

「そんな……馬鹿な!？」

こんな物が……こんな呪いが聖杯であるというのか!?

自らの妻がなるなれの果ての姿だったとでも言うのか!?

こんな物が、どうして万能たり得る!?

どうやって世界を救うと言うんだ!?

今までの苦悩と懊悩。

世界で起こる悲劇と戦闘という地獄。

それら全てが切嗣の頭の中を駆けめぐっていく。

あまりの邪氣と聖杯の真実に……切嗣は思わず吐きかけた。

だがそれを寸でのところで無理矢理呑み込んだ。

背後の気配に気付いたからだ。

もしも背後から忍び寄ってきた男が、問答無用で切嗣を殺すつもり
であつたのなら、すでに切嗣は死んでいただろう。

だがそうはならなかったのだ。

何故か?

背後から迫ってきていた男……言峰綺礼も、その存在に心奪われて
いたからだ。

切嗣は絶望と恐怖。

綺礼は……

驚愕と歓喜で……。

目の前にそびえる地獄の聖杯を……見つめていた。

これが……聖杯だというのか?

あまりに醜い、あまりに恐ろしい……

そしてあまりにも美しい……

何かだった。

その美しい物を見上げて……綺礼は生涯で初めて、心が何かで震わされている事に気がついていた。

「言峰……綺礼……」

自らの最強の得物、起源弾を放つトンプソンコンテナーとサブマシンガンをお断なく綺礼へと向けて……切嗣はぼそりとそう呟いた。だが宿敵とした相手が自らに凶器を向けているにもかかわらず……綺礼は茫然と、取り憑かれたかのように……

黒き大聖杯を……見上げていた。

胸の鼓動が鳴りやまない。

どれほど激しく体を動かしても、今の綺礼では、僅かにしか心臓の鼓動は高鳴らないというのに……。

過去に感じたことがないほどに、心が震えていた。

これほどの物があふれ出せば……どれほどの憎悪と絶望があふれかえる？

何よりも……これが誕生を望んでいると……

綺礼は気付いた。

生まれ出れば自らの迷いの全てを導いてくれる物だと……

本能的に綺礼は察していた。

「素晴らしい……」

綺礼がこぼした一言の言葉。

憎悪と絶望が蠢く地獄の釜の底で、何故か聞こえたその一言。その言葉が耳に入った瞬間に……衛宮切嗣は動いていた。

指を掛けていた引き金を絞り、言峰綺礼へとサブマシンガンを乱射した。

言峰綺礼は、その弾丸全てを瞬時に取り出した黒鍵ではじき飛ばす。

唐突に……

必然として……

最後の戦いが始まる。

二人の生涯最後の戦いが……

幕を切って落とした。

今、目の前にいる相手だけは殺さなければならないと

二人が互いを絶対の意志と殺意を持って……

殺し合いを始めた。

32 心打

新都と旧市街を？ぐ、冬木の大橋。

その橋の下で、二人は初めてあった時と同じように、

対峙していた。

「……」

「……」

初めて対峙した時と同じように対峙している。

だが、致命的なまでに違うことがいくつもあった。

刃夜のマスターである、幼子の桜がないこと。

そして二人の表情と感情。

相手に抱いた感情だ。

「……」

「……」

一方は憎悪と憎しみを込めた鋭い瞳を。

もう一方はその瞳を受けて、挑戦的に高圧的に……

だがそれ以上に戦意を宿し、戦闘意欲と興奮を宿した瞳で……

英雄王、ギルガメッシュは小僧である刃夜の視線を……

受け止めていた。

「……」

「……」

互いに言葉はない。

大橋より降りてきたギルガメツシュは、刃夜が立つ同じ大地に足を踏み下ろした。

対峙した刃夜はその好戦的な戦意と殺意以外に何もなく、

手にただ一振りの打刀……夜月だけを手にして……

ギルガメツシュを睨み続けた。

「……一つ応えろ、アーチャー」

仁王立ち、ただただ立ちつくしていた刃夜が、ギルガメツシュへと言葉を放った。

普段のギルガメツシュであれば、否応なく刃夜の言葉に耳すらも貸さず、塵殺していただろう。

だが相手が刃夜であり、そして先ほどの戦闘で気持ちが昂ぶっているが故に、その言葉を流すことはせず、刃夜の問いへと言葉を返した。

「ほう、許す。述べるがよい、小僧」

この問答。

おそらく最後になるであろう問答にて、果たして刃夜が何を問うのか？

その興味でギルガメツシュは刃夜の問いを許した。

だが放たれた言葉は、度し難いほどに……ギルガメツシュの期待を裏切った。

「……何故……遠坂時臣を殺した？」

「……何？」

あまりにも平凡で愚鈍なその問いに、ギルガメツシュは思わず問いに答えるわけでもなく、ただただ意味のない言葉を、口にしていた。

「答えろ、アーチャー」

偽りでなく純粹な怒りを乗せたその言葉。

それ故に刃夜のこの問いが、真正正銘、気まぐれでもなく、己

ギルガメツシュ

との戦闘が始まる前に聞きたいことだという事であることは明白

だった。

これが自らが気に掛けていた男の……刃夜の問いであることを認識し、ギルガメツシュは先ほどまでの昂揚が吹き飛ばすほどの怒りが、胸中に荒れ狂った。

失望したぞ……小僧！

もはや言葉を交わすことですらも、ギルガメツシュの総身に怒りを吹き荒れさせるだけでしかなかった。

だがそれでも先に問いを許可したのは己自身。

故に、応えぬのは王としての矜持が許さなかった。

生涯最後の問いが、己のことも、私の事でもなく……あんな愚物の誅罰の動機とは……

「良からう、答えてやろう」

右手に宝物庫の鍵剣を握りしめ、その剣を回して……最上にして最高の剣を解錠する。

すでにこの剣を振るうのは今宵で二度目。

故にギルガメツシュは直ぐに言峰に命じて令呪の魔力を供給させた。

令呪の爆発的な魔力によって……その剣が再びこの世界に、姿を顕した。

乖離剣エア

最古の英雄王にして、あらゆる財を手中に収めた王、ギルガメツシュ。

そのギルガメツシュのみが持ちうる剣であり、彼がもつとも信頼する最強の宝具。

故にこの剣を使うのは彼自身が使うに値すると認めた敵のみだ。

先の征服王……イスカンダルのように自らが手を下すに値すると判断した男。

だが今ギルガメツシュがこの剣を抜いたのは、刃夜を認めたからだではない。

確かに認めてはいた。

この小僧は自らが罰すべき敵であると。

だが先の問答にてその興味と余興としていた愉悦は、完全にギルガメツシユから消え去った。

期待していた分、落胆も大きい。

故に、ギルガメツシユは跡形すらも残さずに吹き飛ばすと、そう決めたのだ。

元々使う予定だった相手ではあるが、このような興の乗らぬ状況で抜くことになるとは、ギルガメツシユ自身が予想もしていなかった。

「あまりにもつまらぬかったからだ」

「……何？」

ギルガメツシユの答えに刃夜が顔を歪めた。

それは理解できない者が浮かべる疑問の表情。

それを認識して、更にギルガメツシユは落胆した。

興も、愉悦も……何も理解できない小僧だったのだと。

「我を呼び出し、忠節を持って接したが、それだけの男だ。我を最後に供物にするつもりだったという話を聞き、少しは見応えがあると思っただが、あのような馬鹿な面を晒して死ぬような男……私の興味にはない」

「……なるほど」

地の底より響き渡るかのような……それほどまでに低い声だった。

思わずギルガメツシユが、眉をひそめるほどに。

そしてこの暗がりの先に……一度俯けた顔を上げた刃夜の顔を見て……

ギルガメツシユはほくそ笑んだ。

「どうやら……絶対に斬らねばならない相手のようだな」

憎悪と怒りに塗れたその表情。

左手に持った打刀の鯉口を切って抜刀し、その切っ先をギルガメツシユへと向けて構える。

鋭き刀の刃と、それ以上に鋭い怒りの感情を露わにしたその視線。

その表情はギルガメツシュに興を乗らせるのには十分な顔だった。これほどの純粹な怒りをぶつけてくる男は、過去ギルガメツシュの記憶にもそうは居ない。

それも当然だ。

何せギルガメツシュは自他共に認める英雄王。

数多の財宝と強大な力と魔力を有した英雄王だ。

そんな存在に刃向かえる存在など普通はいるわけがない。

確かに普通とは言い難い小僧ではあったが、それでもここまで純粹な憎悪を向けてくるのはなかなか、愉快なことだった。

そして今からこの小僧を挽き潰すと考えれば……それなりに興が乗った。

だがそれ以上に……

私の期待を裏切り、不快にさせたのは万死に値する！

右手に掴んだ己の最強の剣。

三つに分かれた剣身が唸りを上げて世界を引き裂かんと回り始める。

期待を裏切ったが故……そして己の怒りを収めるために、最初から加減はなしの全力の一撃。

その溢れんばかりの魔力と、剣から溢れでる圧倒的な力に、刃夜の顔が歪んだ。

だがすでに遅い。

乖離剣エアは唸りを上げて、ギルガメツシュの号令を待っている。

その相棒に答えるように……ギルガメツシュは天高く掲げていたその剣を振り下ろした。

「消え失せよ小僧！ 天地乖離す開闢の星！」

全てを……それこそ空間すらも引き裂く最強の力。

ギルガメツシュの最強の剣。

周囲に存在する風を巻き込んで超高速で回転し、圧縮による真空波にて空間すらも引き裂く……間違いない最強の剣だ。

地獄を識るもの。

原初の地球よりこの世界に存在し、あらゆる「死の国」の原点とも言えるその生命の記憶の原初の光景を刻みつける、究極の一。

この剣を防ぐことは普通であれば不可能だ。

だがその不可能を覆すことが出来る男……否……

覆すことが出来る究極の一を持った存在が……

ここにいたのだ。

!? なんだアレ!?

それがギルガメッシュの究極の剣が唸りを上げて力を練り上げた姿を見た、刃夜の正直な思いだった。

だがこの「空間すらも引き裂く」力によく似た力を知っていた。故に……刃夜の選択肢は一つだった。

自らがもつとも信用し……

もつとも愛用し……

もつとも信頼し……

そして……ある意味でもつとも憎悪する刀を地面へと突き立てて……

気力と魔力を最大に練り上げて夜月へと纏わせる。

そして、内に秘めたその力を解放した。

「刃氣！・ 刃魔！・ 解放！」

力強く吐き出されたその言葉に応じるように、夜月の刀身が光り輝き不可視の壁を造り上げる。

そして荒れ狂う力と、不可視の壁が……

激突した。

!!!!

物言わぬ何かが……悲鳴を上げたかのような音が響いた気がした。

だがそれは鼓膜を震わす音ではなく、もつと別の概念的な悲鳴であるために、二人の鼓膜を震わすことがなかった。

けれど……その悲鳴は確かに二人の体を打っていた。

ぐっ……きつい……

だがそんな聞こえない悲鳴の事など、今の刃夜には考える余裕はなかった。

百年単位のため込んだ刃氣と刃魔。

その全てを解放し、さらに……己にとって禁忌とも言える力に手を出したのだ。

全てを守る……否……

刃夜の生を縛りつける……絶対の守護防壁。

初めてこれが発動したのは破壊神と相對し、破壊神から放たれた衝撃波を受け止めるだけでなく霧散させた、究極の壁。

僅かながらもその力を引き出すことが出来るようになった刃夜だったが、これを使用するのはつまり未だ己が未熟であることに他ならなかった。

だがそれでも使わないわけにはいかなかった。

まだやるべきことを果たしていない。

過去の因縁も。

今の約束も。

そして……己がすべき事柄も。

何一つ果たしていない。

だから使わざるを得なかった。

暗殺することも不可能ではなかった。

だがそれでもどうしても聞かなければいけない事柄を聞くために、こうして一騎打ちの形となった。

理由を聞いたところであの愚か者が帰ってくるわけではない。

だがそれでも……殺された理由を教えることが出来る状況にはするべき責務があった。

桜を……

時臣も救ってみせると言った……

刃夜には。

だがその結果がこれだった。

自らのうかつさに少々思うところがあつたにはあつたが、それでも刃夜としても勝算もなくこの問答を行ったわけではない。

先の戦闘で、凄まじいまでの魔力の奔流を感じ取つた！

イスカンドルが展開した固有結界から漏れ出た圧倒的な力の奔流。

固有結界すらも突き抜けて魔力の波動を感じさせたその威力は当

然、生半可な物ではない。

だが、それだけ強力であれば当然、それだけ凄まじいほどの魔力が必要となる。

最強の防壁を使用しての魔力切れ。

それを刃夜は狙っていた。

そしてその隙を狙い、刀蔵から別の得物を出してアーチャー……ギルガメツシュを殺す。

そのつもりだった。

「何だ、その小細工は……」

刃夜のこのあまりにも消極的であり、

王である自らの決定をただ長引かせるだけの愚鈍な行動。

そして何よりあまりにも侮辱に等しい行為に、ギルガメツシュの怒りは頂点へと達した。

「失せよ！ 小僧！」

怒りに呼応するように、更に乖離剣エアが唸りを上げて更にその強大な力を発揮する。

その瞬間に……

!?

目の前の不可視の壁が……

夜月の絶対防壁に、幾重ものヒビが走った。

!? ば……馬鹿な!?

この世界に……第四次聖杯戦争に参加して初めて……

刃夜が真に瞠目した。

この不可視の防壁は、絶対の壁。

今まで一度も破られたことはなく……

破れるはずのない……究極の壁。

そして……

刃夜自身が壊さなければいけない……

呪いの壁なのだ。

その防壁が破られた。

絶対の信頼と……

絶対の憎悪の対象である……

夜月の防壁を。

なるほど……俺は再度見誤った訳か……

先のイスカンドルとの決闘。

あのとき確かに自らが最初に出現させた刀で勝てると踏んだ。だが結果ははじき飛ばされた完全なる敗北。

あの場ではイレギュラーな自体が起きたことで刃夜が逃げ出したために、うやむやとなった。

だが本人も言っていたがアレは間違いなく刃夜の敗北。

そしてその敗北を覆す機会も……

あの快活で豪快な笑顔の男と再び勝負をすることも……

もう出来ない。

ならば……!!!

刃夜は刃気、刃魔の解放を止めて立ち上がり……その両手を左の腰へと持っていく。

刃気、刃魔の力が失われて、更に防壁にヒビが入る。

未だ破ることが出来ぬ防壁に苛立ちを感じ……ギルガメツシュが吼えた。

「こざかしい！ 小僧ごうのときが……私の決定を拒むか！ 失せよ小僧！」

ああ……拒むさ

ギルガメツシユの怒りの声が聞こえてきた気がした。
だから刃夜はそれに対して心で拒んだ。
受け入れる訳にはいかないのだ。
死ぬわけにはいかないのだ。
この世界ですらやらなければいけないことが多いというのに。
約束も果たさなければいけない。

何よりも……

斬らねばならないやつらがいる！

腰に回した両手の指を僅かに握り込む。
まるで見えない棒状の様な物が……抜刀する刀があるかのように。
その瞬間に……刃夜の左腕からいくつもの燐光が灯った。

「光嘶き閃く、雷の精霊よ……」

淡い青白い嘶きの様な光。

「霞み全てを溶かす、蝕の龍よ……」

淡い紫の禍々しい光。

「凍てつく風を吹かす、鋼の龍よ……」

淡い鋼と凍てつく風の光。

「全てを燃やす紫炎の龍妃に、全てを壊す紅炎の龍王よ……」
連なるように光り出す、淡い紫と紅の焰の光。

「そして……全ての命の息吹を司さどる、老山の龍よ……」
灯る全ての燐光よりも大きく、優しさを感じさせる無色の淡い光。
その全ての光が集まり一つになって……

刃夜の前腕から伝うようにして左の手のひらへと移動していく。

そして……その左手の光を、力強く握り込んだ。

その瞬間に、その光が伸びていき……刀の形を形成する。

「夜月の防壁を破ったお前ならば……こいつの試し斬りには申し分ない……」

ぼそりと……呟かれたその言葉。

小さき声。
取るに足らない小僧であり、自らを苛立たせた逆賊。

王の決定を受け止めず、ただただ無駄に時間だけを浪費させる愚か者。

見えぬ防壁の先で……何かをしていることは、当然だがギルガメツ

シユは気がついていた。

何だ？

凄まじいまでの魔力の波動を感じて、ギルガメツシユの怒りの中に、疑問が生じる。

そして乖離剣エアの魔力放出を止めぬままに、刃夜の手元に顕れようとしている何かを見つめた。

「、、」

刃夜が何かを呟いた。

その呟きと同時に光りが収まり……

「それ」が姿を顕す……

ひび割れた不可視の壁は……まるでひび割れた鏡のように……

幾重にも刃夜の姿を映し出した……

だが……不思議なことに……

ギルガメツシユの瞳には……ただ一振りの刀しか……

彼自身の意識に入ってこなかった……

何だ……あれは……

怒りもなく……

驚きもなく……

ただただ茫然としていた……

静かに抜かれ、姿を表した白刃……

幾重にも写るその刀……

まるでひび割れた鏡は……

その刀を映し出すためだけに存在するかのよう……

その刀を映し出して……

刃渡り二尺五寸……

均一に反った刀身……

刃にはまるで、焰のような二つの波紋の皆焼が、その刀身を飾って
いた……

身幅も重ねも、通常の刀よりもより大きく、太く……

その力強さを訴えかけているかのようだ……

柄、鐔、鍔、鞘……

そのどれをとっても、絢爛さとは程遠く、実に質素な佇まいだ……

だがその刀からギルガメッシュは……

眼を離すことが出来なかった……

白刃が……閃く……

不可視の壁を……

膨大な引き裂く力すらも……

全てを……斬り捨てて……

……何？

裂帛の怒号……

その言の葉に負けない程に総身の膂力全てを練り上げて……
振り上げた打刀を……

袈裟斬りに振り下ろした……

「閃!!!」

それは全てを斬り裂いた……

振り上げた乖離剣エアの剣身を……

身に着けた黄金の鎧を……

そしてギルガメツシュを……

全てを斬り裂きながらも……

その刀には一切の曇りも、毀れも……

なかった……

先ほどまで轟々と吹き荒れていた大気と、軋みを上げていた空間の
悲鳴が嘘のように……

刃夜とギルガメツシュがいる公園は……

静まりかえっていた……

吐息すらもこぼさず……

僅かな時間ではあったが……完全なる静寂が二人を包んだ……

「っー」

だがそれも直ぐに、刃夜が止めていた吐息を吐き出したことで、音が生まれた……

数回ほど荒い呼吸を繰り返し、刃夜が呼吸を整えた……

これは……一体……

目の前で、剣を、鎧を……

何より自らの肉体を斬り裂いたその刀がなんなのかという疑問に

……

ギルガメッシュは思考を支配されていた……

「それは……なんだ？」

故にこの問いも、意識して問うた言葉ではなく……

自然と紡ぎ出された言葉だった……

「エアを超える剣など……宝物庫にはない……」

ゲート・オラ・バビロン
王の財宝

古の都の王が所有した全ての財を……武器を収める究極の宝物庫。

ギルガメッシュが射出する武器は、その全てが宝具の原点であり、比類なき究極の武具だ。

比類なき究極の武具であるが故に、彼が死した後に、宝物庫より散

らばった武具達が数多の英雄達の手に渡り、その伝説を造り上げていった。

だがこの宝物庫の恐ろしいところはこれだけではない。

王ゲイト・オウ・バビロンの財宝は人類の知恵の原点であり、あらゆる技術の雛形を収集しているということだ。

遙か過去……

遙か彼方の未来の物であっても、全てが保管されているのだ。

だが、今この僅かな時間にギルガメッシュが調べても、宝物庫には今刃夜が手にした刀と同等の物は存在しなかった。

当然だが「刀」自体は数多の数が存在していた。

だが、それでも刃夜が手にした「刀」はどこを探しても見あたらなかった。

「何だ……その刀は？ 何故、私の宝物庫に存在しない物が……ここに……」

「？ あるわけないだろ」

そのギルガメッシュの疑問に対して、刃夜はいぶかしげな表情を浮かべながら、ただ一言ばつさりと斬り捨てた。

当然だが、刃夜は王ゲイト・オウ・バビロンの財宝がどのような物であるか認識している訳もない。

さらに言えば、刃夜は目の前のギルガメッシュ……アーチャーが……

人類最古の英雄王「ギルガメッシュ」であることすらも認識してい

ない。

振り下ろした姿勢を正し、刃夜は何の変化もしていない手にした刀を一つ振って、左の腰に下緒さげおによって固定してある鞘に収めた。

そして下緒さげおを外して、鞘を左手に持ち……言葉を紡ぐ。

「前にも献上は断ったはずだが？　しかもあの時の刀ではない「こいつ」が、貴様の宝物庫？にあるわけがないだろう」

侮蔑もなく、憤りもない。

ただただ淡々とした事実を述べているだけの様子だった。

「こいつは今の俺が打てる最強にして最高の刀」

鞘を握る指に力がこもる。

その刃夜の想いに応えるように……その刀全身から、燐光が発せられた。

「あいつら二人を……いつかぶった切るために造った究極の一振り」

自ら鍛造したと言いながら、その刀へと視線を投じている。

その見下ろした刀の先にいる何かを見据えているかのよう。

刃夜が見据えているその先がなんなのか？

思わず抱いたギルガメッシュのその想いに反応するようにして

……

ギルガメッシュの瞳がとある「人物」を写しだした……

勝手に……

無造作に……

朗らかに……

純粹に……

心から……

おかしそうに……

なるほど……そう言うことか!?

笑っているのは理解したからだ……

刃夜の刀が一体「何」に対して鍛えられた刃なのか?

何故、刃夜の行動に苛立ちを覚えたのか?

何故、刃夜の事を気に掛けていたのか?

その全てを……

かつて道化がいた
泥より造られて人になり、人ですらないその道化は、神の子の隣に
並び立っていた

だが身の程を弁えないその傲岸不遜な行いは神々の怒りを買い、その命を落とした

生涯ただ一人の友

同じだったのだ

【人】の身で在りながら

神を越えようとしている

神に挑んでいる

愚か者である……【道化】

そう、刃夜はギルガメッシュからしてみれば生粋の【道化】でしかなかった

だが、自らの目の前にいる男はただの【道化】ではなかった
間違はなく【道化】であり、愚かでもある

けれどもその愚かさも……この刀と同じようにここまで練り上げ、
鍛えた

その結果が、今の斬り裂くという結果になったのであれば話は別
だった

【人道化】でありながら、【道化^人】を越えた者

それが

「鉄刃夜」

という存在だった

「全く、不敬な小僧よ。よもやここまで私の決定を否定するか」

刀の献上

そして刃夜の誅罰

王の絶対の意志を持って下されたその審判を……刃夜は最後まで
否定し続けた

「受け入れる訳にはいかないからな」

「だがよい……許そう」

しかし【道化】であってもこの存在はギルガメッシュにとっては、ど
こまでいっても小僧でしかない

故にこの男の生き様は、ただの愚かな小僧が足掻いて、藻掻いてい
ているにすぎない

この小僧の存在自体は、尊くもなく、眩いものでもない

ただ【道化】でありながら越えようとする愚か者

淀むことなく自らの化かした道を貫けるのか？

ただその結末だけが……

ギルガメッシュにとって興味あることであり……

この小僧に対して向ける、唯一の感情だった

「貴様のその道の行く先を……見ていてやろう」

そう呟きながら、ギルガメツシユは魔力の塵となって消滅した。
刃夜のその眼と脳裏に……

呪いにも似た憎たらしい笑みを……

焼き付けて……

「……ふんっ」

だがその笑みを刃夜は一つ息を吐いただけで斬り捨てた。
手にした「刀」を両手を突き出仕手、刀蔵へと封印する。
そして刃夜は再び柳洞寺へととって返す。

まだ最後の仕上げが残っているのだから……

33 聖剣

ランスロットとの決闘を終えて、セイバーが引き返そうとした時に見た、あまりに巫山戯た案内の紙。

その紙に苛立ちを覚えつつも、セイバーはその案内を疑うことなく進み……

切嗣のそばへ……

地獄の釜の底へと……足を踏み入れていた。

「これは……これが？ 聖杯……だということか？」

見上げるは闇黒の……呪詛が注がれた器。

目の前の呪詛に圧倒されてしまうが、それと同程度の凄まじいほどの魔力を前にすれば、答えなどとつくに出ている。

すなわち……世界全ての呪詛を集めたかのようなこの器が……

万能の願望機のなれの果てなのだ……

「……」

愕然とするセイバーの傍らで、切嗣はセイバーに掛ける言葉もなく、ただ力なく地面に腰を下ろして紫煙をくゆらせていた。

そのそばで……言峰綺礼が心臓を弾丸によって穿たれて、事切れている。

直ぐそばで自らが殺した死体があるというのに……切嗣にはあまりにも感情の起伏がなかった。

言峰綺礼との戦いは、まさに切嗣にとって死闘だった。

預託令呪による切嗣の起源弾への完全なる対策。

そして綺礼自身の圧倒的な戦闘能力。

セイバーの宝具の一つである全て遠き理想郷ヴァーによる、致命傷ですら

も瞬時に回復する治癒能力がなければ、間違いなくこの場で死んでいたのは切嗣だっただろう。

また戦闘中に綺礼が一瞬何かに驚くかのように隙を見せたのが大きな敗因となった。

だが切嗣にとって……自分に近しくもない、ただの敵が死に絶えようと、今更どうでもいいことだった。

この世界を……世界から地獄をなくすために動いていた。

いくつもの命を奪って、それよりも多数の命を救ってきた。

それでもこの世界から戦争は……地獄は消え去らなかつた。

だから奇蹟に頼った。

だが……今その奇蹟にすら否定されてしまい、切嗣の胸にはぽっかりと、大きな穴が生まれてしまっていた。

もしも……切嗣がたった一人であつた場合……

下手をすればこの場で命を捨てていたかも知れない。

だが……行動には責任が伴うのだ。

行動したからには……その責務を最後まで果たさなければならぬ。
い。

強制的にでも責任を取らせる存在が……

「お………どうやら役者は揃ってるみたいだな」

二人が黒く染まってしまった聖杯の前で絶望している中で、実にあっけらかんとした態度で……

鉄刃夜がその場に姿を表した。

その右手に……

大聖杯よりも更におぞましい呪詛を漂わせた……

超野太刀、狩竜を手にして。

あらあら、まあまあ、おやおやおや……何というか、予想通りの反応だなあ……

ギルガメッシュとの死闘を終えて、刃夜は直ぐに柳洞寺の地下深くにある、大聖杯の元へと飛んできて、変わり果てた聖杯の姿に絶望している二人組を見つけて、心の中で静かに黙祷していた。

まあ……二人とも本気で聖杯に願いを託そうとしていたわけだからな。しょうがないか

同じような願いを、刃夜も願ったことがあった。

過去に戻るならば？

あの子が生き返られるのなら？

だがそれは出来ないのだ。

出来てもしてはいけない。

そうわかったから。

いくつもの出会いと別れ。

いくつもの経験と後悔。

自らに関わっててくれた全ての人が、それを教えてくれたのだと

……刃夜は長い修行の中でわかった。
だがそれだけではなく何よりも……

……
自らの目的のために力を貸してくれたランスロットのためにも

……
刃夜は、今道を踏み誤ろうとしているセイバーを、助けなければいけないかった。

「つい先ほど、俺は黄金の鎧を纏ったアーチャーと戦い、勝利した」

「何？」

「イレギュラーなサーヴァントであるが、まあ残るサーヴァントは俺とセイバー……お前だけなんだがどうする？ 戦うか？ といつても……」

実に挑戦的な言葉をセイバーへと向けた刃夜だったが、そんな必要はないと言うように、唸りを上げている大聖杯の姿を見上げて……肩をすくめた。

その唸りは、すでに器が満ち足りていることを……聖杯自身が告げていたのだ。

「必要なさそうだがな」

「……これが」

「さて、セイバーどうする？ 俺は前にも言ったが聖杯に興味はない。別段お前と戦う必要性も感じてないため、もしも欲しいなら聖杯を譲るのもやぶさかではないが？」

その言葉に思わず驚き俯けていた顔を上げるが……直ぐにセイバーはその顔を曇らせる。

だがそれは無理からぬ事。

目の前の「物」。

これだけの魔力が充ち満ちた器であれば、聖杯であるということは何となく間違いない。

だが、凄まじい魔力よりもより激しく感じる憎悪と怨念。

これほどの「力」を有した物に願いを請うた場合……一体どのような願いが叶えられるのか？

想像に難くないと言っているだろう。

絶対に良くないことが起きると……誰もがわかるほどの憎念だったのだから。

これによく似た……否、刃夜はこれとは比較にならない存在のことをよく知っている。

そしてその力がどのような結果をもたらすのかも、よく知っていた。

後一押しか……

聖杯が憎悪に染まっていた。

セイバーが事実上聖杯を手にしていながら、自らの願いを叶えようとしするのはそれも要因の一つなのだろう。

だがそれ以上に……セイバーには以前とは違い、聖杯を使うことを躊躇っている嫌があった。

その様子を見れば、ランスロットがうまくやったのだと、刃夜は直ぐに判断して……礼の意味も込めて、セイバーへと言葉を掛けた。

「バーサーカー……ランスロットと戦ったはずだ」

「……」

「その際、あいつはなんと言った？」

「……それは」

「別段答えなくていい。だがセイバー……これだけは教えて欲しい」

一人の異質な存在……サーヴァントとして、刃夜は敵であるセイバーへと言葉を投げかける。

「ランスロットの言葉は……お前に何も変化をもたらさなかったのか？」

わかっていてあえて……刃夜は確認の意味と、そしてセイバーに再度ランスロットの言葉を認識させるために、そう問うた。

アーサー王
自分を憎んでいたこと

ランスロット自身
自分を憎んでいたこと

そして……

アーサー王
自分の元で……戦えたことが誇りであり

喜びだったのだと……

ランスロット
友はそう言い残して、消滅していった。

これで初めて、ランスロットは英霊達の集う場所へと心から行くことが出来ただろう。

生前の自らの行いで、狂うことでしか己を弔うことが出来なかった

……騎士が。

自らを助けてくれた騎士。

そして自らが利用した騎士。

ならば自らが利用したそのせめてもの恩返しとして……

刃夜はこの場でセイバーを正さなければならぬ。

それが、幾人もの人に出会い

幾人もの人と別れ

そして幾人もの人から様々な物を授かった自らの役目であると

……

刃夜は思った。

まあランスロットに借りを返さなきゃならないってのも大きな理由だが

狩竜の鞘の先端を左手で持ち、長大な超野太刀を肩に乗せたまま、刃夜は静かにセイバーへと歩み寄っていく。

「あいつが仮初めの今際の際で……何を言ったのかは俺にはわからない」

ただただ淡々と……刃夜は自らの想いと言葉を口にする。

「だが、俺が無理矢理狂気を剥がしたあいつは、ただの人だった」

「……人？」

「そうだ。どこまで行っても、例え英霊だろうと、人は最後まで人であることを止められない。それこそ……自らをどれほど嫌悪し、憎悪したとしても」

自らの記憶を思い出す。

自らが救えずに滅んでしまった村。

自らが救えずに……死してしまつたあの子。

それらに対する情が深いほどに……失つた時の絶望と、それらを壊した者に対する憎悪は果てしなく、恐ろしく深かった。

だから狂つた。

殺した。

だがそれでも……最後まで刃夜自らは刃夜自らでしかなかった。

ランスロットだつて同じなのだ。

どれだけ卓越した技術と力を有しても一人の人間なのだ。

それは当然……騎士王であるセイバー……

アーサーである……アルトリアも。

「俺もお前のことはほとんど知らない。王として国を治めていた位しかわからない。だが王として国を治めていたのなら、絶対に接したところのある人々……民がいたはずだ」

民。

その言葉を聞いて、セイバーの脳裏に映るのは、民の流血によって出来た血の川。

そしてその川原には砂利の変わりともいうように……幾百、幾千の民達の死体があつた。

死体の民達の顔はそのどれもが、怨嗟の表情を浮かべて事切れていた。

死の間際まで……何かを呪っていると、そう言っているかのようだった。

つくづく、私は王になるべきではなかったのか？

そう思った……そのとき、刃夜は言葉を放った。

「確かに国が滅んだことで、お前を恨んだ民はいただろう。だがセイバー……俺に教えてくれ」

こちらを見ると……刃夜はそんな想いを込めて、言葉を放つ。

「自らの国が滅んだことで、安らかな滅びを望んだ王」

その想いが伝わったのかはわからない。

だがそれでも……顔を歪ませたままではあつたが、それでもセイバーは顔を上げて、刃夜の眼を見た。

その瞳に……刃夜や限りなく真剣な想いを込めて見つめ返して

こういった。

「お前の民は……ただの一度もお前の事を、自らの王だと……認めてくれたことはなかったのか？」

!?

その言葉に導かれるように……セイバーの記憶の蓋が開かれる。

后との婚姻のとき。

ブリテンの王であるアーサーが后を迎えた時の、祝いの列の中で、喜んで飛び跳ねている子供がいた。

乳飲み子を抱えながら、笑顔に向けてくる女がいた。

酒を手に、赤らめた顔で祝辞を叫ぶ男がいた。

年老いて満足に体を動かすことが出来ないというのに、笑顔で手を振る老人夫婦がいた。

何百……何千と……

みんなが自らと、ギネヴィアの婚姻を、祝福してくれていた。

「国が滅んだのだ。その際守れたなかった王に対して民が憎悪を抱くのは……無理からぬ事だろう。だがそれでも、お前が民を不幸にするために国を治めていたはずではないはずだ」

そう……ただただ必死だったのだ。

周辺国の敵。

貧困による飢饉。

天からの災害。

その全てから何とか民を……国を守ろうとした。

だがどれだけ力を尽くしても、うまくいかなかった。

だから滅んだのだ。

セイバーの政治手腕が要因の一つでもあることは間違いない。

だが他にも滅んだ原因というのはいくらでもあるのだ。

決してセイバー……アーサー王だけが原因で滅んだのではない。

「お前は最後まで民のために戦った、国のために戦った。汚職などしようと思えば、王であるため簡単にできただろうに。そんなお前だけ

ら円卓の騎士という、最強とも言える騎士達が集った。民達が祝福をした」

清廉潔白で騎士として完璧だったアーサー王に憧れて来た騎士達は大勢いた。

そして誰もが、アーサー王の下で騎士としていられることを誇りに思っていたのだ。

だから……

「もう……王としての自分を許してやれよ。セイバー……アーサー王よ」

「私が……私を許す？」

「そうだ。うまくやれたかも知れない。うまくできなかつたかも知れない。だがすでに起こってしまったことをやり直せない。そして仮にやり直せたとしてもやり直しちゃいけないんだ。もしもやり直すと言うのなら、お前は民や騎士達が自らに向けてくれた信頼を……民達の笑顔を奪うことになるんだぞ？」

「!?」

やり直すと言うことは、その全否定に他ならない。

悪いことも。

良いことも。

その全てを根こそぎ……「価値のなかつた物だつた」と、自らと自らに関わってくれた人々を裏切ることになるのだ。

だから……それだけはしてはいけないのだ。

人は一人で生きているわけではない。

ならば、その全ての結果は、関わった全ての人が受け入れなければならぬのだ。

「これを聞いてなお、お前が聖杯にやり直しを……過去の改変を願う
というのなら……」

殺意を

悪意を

放出せず

刃夜はただセイバーへと眼を向けて……

淡々とこういった。

「俺はお前を軽蔑する」

止めるでもなく、諭すわけでもなく

ただただ軽蔑をする。

刃夜ならば力づくで止めることは簡単だろう。

だがそれではダメなのだ。

セイバー自身が、己の意志で選択をしなければ。

それではセイバーが救われない。

ランスロットが全身全霊を賭けて挑んだ相手が……死んでしまう。

だから刃夜は想いが届くと信じて……セイバーから決して眼を逸
らそうとはしなかった。

……許す……か

いつからだろう？

王であったのが自分でなければ良かったと思っただのは？

いつからだろう？

自分が自分を許せなくなったのは？

いつからだろう？

騎士と民が離れていってしまったのは？

いつからだろう？

自分が国を救えなかったと思ったのは？

ただただ必死だった。

何とか救おうとした。

だがそれでも救えなかった。

民が離れて行き、

騎士が離れていった。

やがて反乱が起きて、国が滅んだ。

豪華絢爛に繁栄する必要はない。

ただ安らかな国を造りたかった。

それだけの一心で駆け抜けたのだ。

確かに滅んだ。

確かに衰退した。

確かに……消えてしまった。

だが……それに至るまでの経緯が全て間違っていたわけではないのだ。

刃夜が言ったように、民の全てが自分とギネヴィアの婚姻を心から祝福してくれた事があった。

卓越した技量を持った騎士達が……自分の元で剣を振るい、国を守りたいと集ってくれた。

それに何より……最後のランスロットの言葉……

円卓の騎士として、貴方の元で戦えたのが……私にとって何よりの誇りであり、喜びでした

全く曇らぬ、やわらかな笑みで紡がれたその想い。

友の……臣下のその言葉を……

な^国な^救な^濟かつたことに……出来るのか？

出来ない……か……

今でも迷っている。

もしかしたら聖杯が呪詛に満ちているのは、何かの間違いなのか

知れない。

もしくは悪しき者に使わせないために、あえて憎悪が充ち満ちていると見せかけているのかも知れない。

そう考えることも出来る。

だが仮にそうだとしても……

もうセイバーには……

裏切^る事^を国を救う事は……出来ない……

そう思った。

こっちは大丈夫か……

セイバーから剣に握る手の力が抜けていくのを……刃夜は明確に察していた。

それが諦めによるものではなく……出来ないのだとそう認識したのだと。

セイバーの問題も片付けた。

ならば、最後の後始末は、正規の聖杯関係者でなければならぬ。

『いつまですねている?』

刃夜はぼそりと……風の力を使って切嗣にそう問うた。

その言葉に、やる気がなさそうに顔を上げて……切嗣は刃夜を見た。

『聖杯以外……世界の救済以外にもやるべきことがあるんだろうか? いつまで呆けていやがる?』

「聖杯……以外？」

『妻と舞夜はどうするんだ？　ここにくたばるまで座り込んでいるのか？　そのつもりならば倒してつれていくか……どうせ死ぬつもりなら二人も直ぐに後を追わせてやろうか？』

「!？」

その刃夜の言葉で……切嗣は残してきた者達を思い出す。

舞夜。

アイリスフィール。

そして……イリヤスフィールを。

『世界の救済が無理だとわかったなら……自分が責任を負った事柄はきちんと片付けろ。それが責任つてもものだろう？』

イリヤが……待っていてくれてるんだっけ……

霞みがかかり、何も考えることが出来なかった頭が……思考を始めた。

聖杯戦争が始まる前に、アインツベルンの城に置いてきた自らの愛娘を思い出す。

母親がもう帰ってこないと言われても……それでもなお気丈にも自分とアイリを送り出した、愛おしい娘を。

そう、自分は約束したのだ。

必ずイリヤを迎えに行くと。

なら、この場でくたばるわけにはいかないのだ。

世界の救済が出来なかった。

おそらく己はこれからも地獄の日々を歩むことになるのだろう。

世界を救うことが出来なかった己自身を呪う日々を。

だがそれがイリヤから逃げ出す理由にはならない。

自らが妻を持ち、娘を抱いた……その夫として……

父として

まだ、くたばるわけにはいかなかった。

僅かだが……それでも瞳に灯火のような炎を宿して……

切嗣が立ち上がった。

そして希望を託そうとしたなれの果て……地獄の大釜を見下ろす
ことが出来るくぼみの縁まで、足を運んだ。

その隣に……セイバーが並んだ。

「……」

「……」

最後に至っても、二人に会話はない。

だがそれでも二人の胸中に宿す想いは一緒だった。

静かに、切嗣は令呪の刻まれた右手を掲げる。

そして……セイバーへ最後に向ける言葉を

紡いだ。

「衛宮切嗣の名の許に、令呪を以てセイバーに命ず」

セイバーの魂に直接働きかけるその言葉^{呪文}。

その呪いの言葉を……セイバーは拒むことなく素直に受け止める。

纏っていた風が……聖剣の鞘が払われて、地獄の大釜に新たな光が
生まれる。

その光は地獄の大釜から発せられる呪いの光を隅々まで照らし、浄
化するかのよう……

地下空洞全体を光で埋め尽くす。

「宝具にて……」

最後の一言を呟く前に……今ままで積み上げてきた屍達の姿が脳裏をよぎった。

まるで今すぐこちらに来いと……

死した自分達と同じところまで誘っているかのようにだった。

世界を救うために殺したのではなかったのか？

世界を救う手だてを壊すことがお前の正義なのか？

裏切るというのか？

そう問うている様だった。

ああ……そうだ……

全てが空っぽになった気持ちだった。

悲しみもない。

怒りもない。

もう何もかもがなくなってしまったかのようにだった。

求め続けた奇蹟に裏切られて……

世界を救うことが出来ないとわかってしまった。

がらんどうの……ただの生ける屍になってしまった気分だった。

だが……それでも……

確かに自分の手には、残された者がいる。

会いに行かなければいけない娘がいる。

だから……切嗣は……

今まで世界を救うために……多数のために犠牲にしてきた少数の人々全ての憎念に対して……

こう呟いた。

裏切るとも……

裏切るとは少し意味が違うかも知れない。

それでも……自らが長年抱いていた夢を裏切る事には間違いがない。

だが……裏切るしかないのだ。

これだけの憎悪と力が解き放たれば、どのようなことが起きるのか容易に想像が出来る。

だから、裏切るのだ。

何せ衛宮切嗣は……

僕は……世界を救う……

正義の味方を目指した……優しい男なのだから。

最後まで貫くことが出来なかった……壊れてしまった、失ってしまつた

信念の言葉。

その響きは犠牲になつた……切嗣に殺された者からすれば実に陳腐で巫山戯た言葉だつた。

だがどれだけ憎念に否定されようと、切嗣はこの信念を……

その屍達を再び殺して……切嗣は最後の言葉を口にした

「聖杯を破壊しろ！」

令呪にて下された、絶対の命令。

だがその命令をセイバーは抵抗することなく心から、自らが行うべき事だと理解して、その剣を振り上げる。

輝ける命の奔流。

数多の生命が抱いた希望の剣。

「約束エされたス!!!」

その名を……

「勝利カリの剣バ!」

あふれ出る極光。

その光は先ほどよりも眩い光を放ち……大聖杯を破壊し……

セイバーを呪いから解き放っていた。

「やった……のか?」

光が収まり、先ほどまでの憎悪が薄れているのを感じて、切嗣は聖杯を無事に破壊できたことを確信した。

だがそれで全てが丸く収まったのかどうかかわからず、切嗣は極光によつて見ることが出来ない目を必死に懲らして、辺りの様子をうかがった。

特に変化がないように見受けられた。

だが……とてつもない凄まじいまでの何かを感じ取って……上を見上げて……

絶句した。

「何だ……アレは……？」

大聖杯があつた地獄の釜の中心部の真上。
そこには暗闇よりもより深き、より黒き

漆黒の穴があつた。

その穴が別のどこかに通じた何かであると……切嗣は本能的に察していた。

そしてその穴から……濁流のように黒き何かが溢れだし……

下にある地獄の大釜を満たしていく。

「馬鹿な……」

聖杯は確かに破壊した。

だが……その中に満たされていた何かは、それでは殺すことが出来なかつたのだと、切嗣は察したのだ。

確かに大聖杯を壊しても、それはあくまでも外側……文字通り器を壊したにすぎない

壊された事によつて器に満ちていた何かがあふれ出すのは……至極当然と言えるかも知れない。

そのあふれ出す何かが……到底人の手に余るものでなければ、ただ座視していれば良かった。

だがそんな生やさしいものでないことは……誰の目にも明らかだった。

「そんな馬鹿な!？」

あふれ出す黒泥。

大釜へと注がれていくだけで……その黒泥がどれほどの力を有しているのか、魔術師である切嗣にはある程度肌で感じ取ることが出来た。

だがその全てを感じることは出来なかった。

あまりにも巨大すぎて、全てを感じるなど不可能だと……切嗣はそう思った。

このままでは一体どのような災害が起こるのか……想像も出来ないほどに。

万能の器
奇蹟に裏切られ

世界の救済
奇蹟を裏切り

正義の味方
奇蹟を破壊した

だというのに、災害が……天災が起こることは防げないのかと……

切嗣が絶望しかけたそのとき……

「待ってたんだよ……この瞬間をなあ！」

憎悪が溢れだし……怨嗟の音が響くまさに地獄の一部であるこの

地底の底の底で……

切嗣は自らの横でそんな言葉を放った男の横顔を見て……自らの目を疑った。

そこには……この世全ての悪が凝り固まった化身のような……

断じてただの「人」ではない……

黒き何かを纏った魔人が

いたのだから。

いつの間にか持ち替えた右の手で手にした超野太刀を掲げて……魔人は嬉々として飛び上がり……

恐るべき事に黒泥が溜まりつつある地獄の釜の中心部の底に向かって突貫したのだ。

「まっ？」

止める間などあるわけもなく

止めることなど出来るわけもなく……

切嗣は黒泥へと飛び込んだ刃夜を茫然と見ることしかできなかつた。

刃夜が飛び込んで……僅かな時間が過ぎて……

切嗣は悪寒とも恐怖とも言える何かが体に走ったことを感じ取った。

その瞬間には何も考えることなく体が勝手に動いていた。

地獄の大釜を見下ろせる釜の縁から、少しでも大釜から離れるように……振り向いて全力で走った。

そして次の瞬間に……

!!!!

巨大な何かが破砕するかのような音と共に……地獄の大釜より突如として、巨大な氷の塊が出現していた。

しかしそれも一瞬で、出現した巨大な氷塊が再び一瞬にして消滅した。

消滅したのはその巨大な氷塊を覆い尽くすような巨大な炎が猛ったからだ。

地獄の大釜が一瞬にして灼熱の大地と化す程の高熱。

まるで地獄の炎が出現したかのようにだった。

一体……何が……

しばし大釜から離れて様子を見守っていた切嗣だったが……しばらく何も起きないことを確認し、再び大釜の縁に足を運んで大釜の底を見下ろした。

そこには……超野太刀を地面に突き刺して、仁王立ちしている、

鉄刃夜がそこにいた。

あ—————すつきりした

大聖杯から漏れ出した黒泥を全て狩竜が吸収し、更にすでに閉じられた穴の先すらも喰らい尽くし、その莫大な怨念と数十年ため込まれた魔力制御を刃夜は行った。

怨念は全て狩竜に吸い込まれて、さらに臓硯を苦しめることになる。

ちなみに臓硯は狩竜の中に魂を吸収されて、怨念の大海の中の一粒子として今も苦しんでいたりする。

また吸収した魔力については、刃夜が貯蓄できるだけの魔力を吸収した後は、大聖杯の基部に刻まれていた魔術式を破壊するために使用された。

具体的には……

魔術式を凍結

凍結後、術式と凍結した巨大氷塊を破砕

破砕した後、周囲全てを紅炎で完全消滅

となっている。

さて……後は方々の後片付けか

盛り上がった釜の縁で茫然としている切嗣の気配を感じ取りつつ、刃夜は荒れ狂っていた体内の調整を何とか終えて……切嗣のそばへと跳んだ。

「何を呆けてるんだ？」

「……貴様……本当に人間か？」

「一応ね。このやりとりはいささか飽きた。さて……衛宮切嗣、これからどうするんだ？」

「これから？」

この先の事を考えていなかった切嗣は……その問いに答えることが直ぐには出来なかった。

聖杯戦争は完全に終わった。

狂ってしまった聖杯は刃夜によって破壊され、中に溜まっていた魔

力や黒い何かもすでにこの世界からは消滅した。

だがそんな過程よりも……残ってしまった重大な事実がある。

世界を救うことが出来なかったという……事実が。

切嗣も、あの聖杯に願いを言えば、とんでもない自体になるとわかってはいる。

だがそれでも

この世界を救う手だてがもうないのだと……諦めるしかない事が、悲しかった。

けれど……先に言われた刃夜の言葉

世界の救済が無理だとわかったなら……自分が責任を負った事柄はきちんと片付ける。それが責任つてもものだろうか？

いかなければいけない。

娘の元へと。

「僕は……一度アインツベルンの城に行く」

「ほう？」

「なんとしても……イリヤだけは……」

縋る訳じゃない。

依存する気もない。

だがそれでも……娘との約束だけは守らなければ。

うん！ イリヤは我慢するよ。キリツグのこと、お母様と一緒に待ってるよ

もう母に会うことが出来ない……そう聞かされても笑顔で送り出してくれたイリヤ。

いくつもの約束を……誓いを破ってきた。

だから、この約束だけは守らなければいけない。

それこそ……世界を敵に回しても。

世界を救うと願った祈りの分まで。

「そうか。ならこれを渡しておくわ」

切嗣が一種の覚悟を決めている状況だったが、そんなこと刃夜にとって知ったことではない。

切嗣がどのような想いを抱いていようが関係がない。

ある意味で……刃夜にとってここからが本番なのだから。

「これは……？」

刃夜が投げ渡して来た物を思わず受け取ってしまう切嗣が、手にした物を見て疑問符を浮かべる。

手にしているのは「守」と刻まれた小さな鉄の板。

一部に穴が開いており、そこに紐が通されて提げられるようになっている。

「発信器」

「発信器だって？」

「俺限定のな」

「？」

言っている意味が理解できないのは当然だったが、次の台詞で切嗣は驚愕した。

「娘助けにいくんだろ？ なら助っ人は多い方が良いだろう？ 敵陣に乗り込んで攻め入る前にそれに少しかだけ魔力を通してくれ。アイツベルンは……ドイツだっけ？ 単純計算……二時間ほど待ってくれば加勢する」

……何を言ってるんだこいつは？

先ほどまでの畏怖や恐怖といった感情とはまた別の感情……

こいつ大丈夫か？

という、少々残念な感情が切嗣の中に生まれた。

言っている当人は大真面目であり……強迫観念にも似た何かに突き動かされている感じだった。

だが……刃夜はその強迫観念に逆らうことはしなかった。

何故かはわからない。

絶対に手助けをしなければいけないと……。

そう思ったのだから。

切嗣も刃夜が嘘でも酔狂でもなく本気で言っていることがわかったのだらう。

だが本気だとわかってても、それを受け入れる理由がない。

確かに聖杯戦争は終わったが敵同士だったのだ。

アイリと舞夜を使って切嗣をだましたのは事実だ。

故に信用できないと言われたら刃夜としても反論できなかっただろう。

また切嗣が単体でアインツベルンに単身で挑んでも、イリヤの救出は不可能ではない。

だが……時間がかかることは間違いなく、その間イリヤに何をされるのかはわからない。

二つに一つ。

……どうすべきだ？

悩むのはある意味で当然と言えた。

そしてその当然なことを、刃夜が気付かないはずもなく、切嗣の迷いを打ち払った。

「娘を迎えに行くのにお父さんだけでは子供がかわいそうだろう？」

「お母さんも一緒の方が良いんじゃないか？」

「!? それは……」

「つーか悪いけど……これは脅迫だぞ？」

「脅——!?!」

脅迫とオウム返しのように言葉を放とうとした切嗣は……口を止めるしかなかった。

何せ先ほどまで数メートルは離れていた刃夜がいつの間にか距離を詰めて……切嗣のど元に短刀を突き出しているからだ。

頸動脈が切れるように……僅かに腕を曲げた状態で。

ここに至って切嗣は理解した。

この申し出を断れば……目の前のこの男は今この場で自分を殺すのも辞さないのだと……

「どうするっ？」

「……」

その言葉に対して、切嗣は首を縦に振る選択肢しか残されていないかった。

「ただいまー！」

「！ お帰りなさいー！」

「お帰り……刃夜」

また刃夜も桜に寂しい思いをさせていたので、一度帰宅し桜と雁夜に全てが終わったことを伝えた。

聖杯を掴むことは出来なかった雁夜だったが、桜のために欲しかった、今後聖杯戦争が行われないことなど正直どうでも良いことだった。

というよりも……

「……聖杯戦争って終わったんだよな？」

「終わったというか終わらせたと……。大聖杯は木っ端微塵にしたし、中身は俺と邪神がおいしく戴きました」

「じゃ……邪神？ ……なら何で刃夜、お前がまだいるの？」

若干失礼な物言いに取れなくもないが、そう思ってしまうのも無理からぬ事だろう。

イレギュラーとはいえ、サーヴァントとしているはずの刃夜が、英霊を召喚するための大聖杯がなくなった今、存在していることの方がおかしいのだから。

「イレギュラーだからじゃない？ ……というか最初に言ったが俺はまだ死んでない。魔力供給とかも受けてないからそのせいじゃないか？」

「……そう言う物なのか？」

「というか、まだいくつもやらなきやいけないことあるから消えるに消えない」

「やること？」

「まあ当然厄介になるから、よろしく」

「それはまあ……問題ないけど」

雁夜としても、刃夜がいてくれた方が心強いので困ることはない。とりあえず桜と雁夜については刃夜としても何ら問題はなかった。

最後の夜が明けて……切嗣は直ぐに旅支度を始めた。

まだ新たな体に慣れていないアイリではあったが、しかしイリヤの救出は急を要すると判断し、切嗣は舞夜をアイリの補佐として同行させて直ぐにアインツベルンの城へと赴くことにした。

刃夜はそれを確認し、いつでも動けるように準備を進める。

そしてその準備を進める前に……とある家へと、一人で赴いた。

「……朝早い時間に突然の来訪、失礼します」

「……いえ、大丈夫です」

遠坂時臣が妻と長女……凜を避難させている隣町の家へと。

まだ少々早いのため、凜はまだ眠っている。

時臣の妻……葵は、少々驚いていたが、しかし雁夜と行動を共にしており、凜を救ってくれた刃夜のことを、少々警戒しつつも疑うことなく家の中へと招き入れた。

そのことに刃夜は心から感謝しつつ……リビングに招き入れられて、頭を下げた。

「……どうしたんですか？」

「……申し訳ない。約束を守ることが出来ませんでした」

「!? それは……つまり……」

「桜ちゃんは無事だが……時臣を救うことは、叶いませんでした」

刃夜から時臣の死を告げられて、葵は言葉を詰まらせた。

だが、声を荒げることも、崩れ落ちることもなかった。

しかしやはり動揺はしているらしく……ソファーに寄りかかって、

何とか体を支えている程度だった。

刃夜は支えることを手伝うこともなく、ただただ頭を下げ続けた。

……気丈な人だ

刃夜は何とか体勢を立て直してソファーに座り込んだ葵を気配で察して……素直に感心した。

自らの伴侶が死んだことを突きつけられてなお、取り乱すことをしなかったのだから。

「……頭を上げてください」

何とか絞り出すように刃夜に葵はそう言った。

しばしそのままだったが、このままでは話が進まないため刃夜としても仕方なく、頭を上げた。

そこには……何とか涙を出さないように、必死に時臣の妻として……魔術師の妻たらんとしている葵の姿がそこにあった。

「時臣さんと貴方は……敵同士だったのですよね？」

「はい」

「貴方が殺した訳でもなく……雁夜君が殺した訳でもないですよね？」

「はい」

葵の問いに、刃夜は真摯に何より嘘偽りなく答えた。

それだけが聞きたかったのか……葵はその後は静かに刃夜に礼だけを述べた。

しかし、それでは刃夜の気が済まなかったので、何かしら役に立つと言い刃夜は遠坂のセーフハウスを後にした。

少し整理する時間も必要だろうから。

そして刃夜は自らに課した責務を全うしようとする行動を開始する。

だが……何をやるにしても刃夜としても金が必要なわけで……

「申し訳ない雁夜。金くれ」

「……今度は何に使うんだ？」

「再度のリフォームとかその他諸々」

「リフォーム？ また？ 何で？」

「必要な武家屋敷がもう一件あるからな」

刃夜にリフォーム先の家を聞いて雁夜としては一瞬出し渋ったが、しかし刃夜がどうしても必要だと聞かないため、折れる形で雁夜は刃夜にお金を渡した。

そしていくつものリフォーム建材の材料を買いそろえ、夜になったため家に帰り夕食を三人で食べて、桜を寝かしつけると……発信器から反応があった。

「お、着いたのか。ちよつと賭けだったが」

「またぞろ今度は何をするんだ？」

刃夜と二人で静かに晩酌をしていた雁夜は、心底呆れながら刃夜へと視線を投じる。

そこには……酒を飲み僅かに赤らめて、上機嫌につまみと酒を味わっていた男の姿はなく……見ている雁夜の背筋が寒くなるほど鋭い戦意を漲らせた戦士がいた。

「すまない雁夜。ちよつと出掛けてくる。明日……まあどんなに遅くとも明後日には帰ってくるわ」

武装を出現させて準備を行いながら、刃夜が家を空けると言ってくる。

その言葉に雁夜は驚いた。

聖杯戦争が終わったため命の危険はないだろうが、それでも刃夜が何日も留守にするなど思いもしなかったからだ。

「そんなに？ どこに行くんだ？」

「ドイツ」

「はあ？」

何故日本の裏側といって良いほどの距離にあるドイツが突然出てくるのか？

そもそもドイツにどうやっていくのか？

ドイツに行くのに一日二日ではいけないわけがない。

まさかドイツ村なのか？

等々、雁夜には一瞬にしていくつもの疑問が渦巻いたが、刃夜は

さっさと準備を整えると……

「じゃ……行ってくる」

と、止める間もなく、本当にどこか近所にも出掛けてくるとでもいうように……消えた。

34 娘

……本当に来るのか？

それが、アインツベルンの森に向かいながら歩く切嗣の、正直な感想だった。

ドイツに到着し、アイリの体の調子を見ながら小休止し、現地で移動手段を入手。

それから騙されたつもりで切嗣は刃夜に渡された発信器……どう見てもただの鉄板のキーホルダー……に魔力を通したが、当然だが何の反応もない。

それから車を移動させて、アインツベルンの本拠地である城へとたどり着き、最終準備を整えていた。

半信半疑……というよりも正直うさんくさい以外の何物でもなかったが、アイリが薦めてくるのとなんか違うという思いのもと、刃夜の言うとおりに魔力を通した……だったが、無駄だったかも知れない。

それが切嗣の正直な感想だ。

「切嗣。こちらの準備は整いました」

「そうか」

フル武装した……ありつたけの重火器、銃器に弾薬、ナイフに手榴弾を搭載したバンタイプの車の中で準備を進めていた……舞夜が、準備を終えて切嗣へと声を掛ける。

声を掛けられた切嗣も、すでに武装の準備を終えている。

聖杯戦争よりも更に重装備の出で立ちだが、それも無理からぬ事だろう。

何せ戦闘に向かない一族とはいえ、それでも千年以上の歴史を誇っている魔術の大家……アインツベルンの本拠地へと、たった三人で乗り込もうとしているのだから。

しかも目当ての品物は……第五次聖杯戦争の聖杯だ。^{イリヤ}

相手からしたら死守すべき物であり、さらに言えば裏切り者である切嗣とアイリに、イリヤを渡す道理などどこにもない。

「舞夜、お前は基本的にアイリの護衛としてこの場に残っていてくれ」
「しかし……一人で敵陣に乗り込むなど」

「だが、アイリが満足に動けない状況では仕方がない」

本来の肉体……聖杯の器であるアイリであれば、アインツベルンの森では無双の力を発揮しただろう。

だが今のアイリは、肉体を移し替えた……ある意味生まれ変わった存在と言っている。

故に魂がまだ体になれておらず、魔術回路もなくなってしまったアイリは、戦力には程遠い。

聖杯戦争を終えてから切嗣の中に仕込んだ概念礼装……全て遠き理想郷をアイリに移植することで、多少なりとも回復等に役立つているが、それでもセイバーなき今、聖杯戦争時ほどの回復力は見込めなかった。

それでも切嗣はアイリを連れてきたかった。

もう二度と会うことが出来ないはずだった母と娘だったのだ。

この奇蹟がいつまで続くかわからない。

だから……不利になるとわかっていても、切嗣は舞夜を護衛にする形で連れてきたのだ。

「大丈夫よ……キリツグ」

「……アイリ」

深い雪に足を取られながら、しかしそれでも杖を突いて地面にしっかりと立ちながら、アイリは微笑んだ。

かなり辛いはずだというのに、必死になって笑顔を振りまいて。

「あの人が自分から言ったんでしよう？　ならきつとくるわよ」

「……だが」

「むちやくちやな人なんだから……きつとむちやくちやにするでしょうね。けど、き——」

きつと来る……そう言おうとしたアイリの言葉は問答無用で止められた。

三人がいる場所より百メートルほど離れた場所が……突如として爆発したのだから。

「!?」

突然の事だったが、切嗣と舞夜の行動は早かった。

アイリの元へ走って警護する舞夜。

切嗣は近くの太い幹の樹木を背にして……高速で雪をまき散らしながら進んでいく何かを見つめた。

やがていくらかの距離を行くと雪が飛び散るのも静まり……その何かが目に入ってくる。

そこには……

片膝立ちで……いくつもの刀を装備している刃夜の姿があった。

!? 本当に来ただって!? 一体……どうやって?

日本からドイツまで相当の距離……9,043km……がある。

だというのにこの不可思議な男は身一つで本当にアインツベルンの本拠地へ……切嗣に持たした発信器のそばへとやってきた。

アイリも舞夜も、片膝立ちの男が刃夜だとわかったのだろう。

三人は一度顔を見合わせて、警戒しつつ刃夜へと近寄っていく。

近寄っていても、刃夜は立ち上がるそぶりすら見せない。

そのことにいぶかしむ切嗣だったが……近づくと理由がわかった。

「はあはあ……うっふ……。ぐううおお」

口元に手を当てて、必死に吐き気を堪えている刃夜がいたのだから。

……今なら殺せるか?

おそらく無理だとわかっていた切嗣だが、そう思ってしまうほどに今の刃夜は隙だらけで……非常に弱々しく見えた。

「はあはあ……う、ぐうう……」

必死に吐き気を堪えながら……刃夜は黄色い液体の満たされた小瓶を取り出して、一気に中身を呷った。

すると……

「復活！」

と、小気味よく体を動かしながら、刃夜が立ち上がった。

その様子を……三人は茫然と見つめていた。

「あたなも、そんな動きするのね？」

「む、アイリスフィールか。まあな。呪いみたいなもんだな」

何の呪い？

と三人が同時に心の中で思ったがしかし、誰もそれを口にする事はなかった。

立ち上がって体の調子を確認し終えた刃夜が、背後のうっそうとした森……アインツベルンの城へと繋がる森を見やった。

「さて……大層な結界が張ってあるが、まあ問題なからう」

「……大貴族とも言えるアインツベルンの結界を前にしてすごいな」

半分皮肉も交えて、切嗣は刃夜へとそうこぼした。

だがそんな皮肉など問題ない。

というよりも……切嗣も刃夜のことをまだ甘く見ていたと言っ
ていいだろう。

何せこれからする刃夜の行動に……度肝を抜かれることになるのだから。

「さて、二人の娘を助け出すわけだが……アインツベルンは良くも悪くも魔術師？なるものの大家でしかない。いわば本当に悪の家つてわけじゃない。故に……問答無用で突貫するのは俺の本意ではない」

「？ ならどうするんだ？」

「こうするんだ」

切嗣の当然の疑問にただ一言そう答えて……刃夜は、風翔の力を用いた。

「魔術の大家！ アインツベルンへと告げる！」

森全体を震わす程の大声が……響き渡った。

それは森の木々に留まっていた鳥たちが一斉に飛び立つことで把握できた。

だが、そばで聞いている三人の鼓膜は破れることなく、ただただ刃夜が大声を上げているようにしか見えなかった。

だが少しでも魔力を感じ取れば理解できた。

刃夜が何かしらの力を利用しているのだと。

「俺の名は、第四次聖杯戦争に召喚された、第八騎目のイレギュラーサーヴァント、クラス名開拓者^{フロンティア}、鉄刃夜！」

朗々と、淡々と……刃夜はただただ作業をこなしていく様な簡単な感じに、言葉を並べた。

「大聖杯は俺が昨日、完全に破壊した！ 故にもう聖杯戦争を開催することは叶わない！」

数百年に及ぶ奇蹟を成就させるための儀式を破壊したと宣う男。

切嗣も直に刃夜の実力を見ていなければ鼻で嗤っていただろう。

だが切嗣は当然知っている。

この目の前で口上を述べている男が……どれだけ恐ろしい存在かと言うことを……。

「こちらの要求はただ一つ！ イリヤスフィール・フォン・アインツベルンの身柄の引き渡しだ！」

だがそれでも宣戦布告する理由が思い浮かばない切嗣としては……わざわざ敵の警戒度を上げる理由がわからず、内心で頭を抱えていた。

そんな切嗣の心情など知ったことかと……刃夜は言葉を続ける。

「一分待つ！ その間に何かしらの反応を示さない場合は要求を拒否したものとみなし、強硬手段をとる！ よく考えて欲しい！」

一通り好きにしゃべった刃夜は一つ、ふう……と吐息を吐いて、三人へと振り返った。

「さて、一分だが作戦を話す」

「作戦？ そんな物が？」

「おう。作戦名は「戦って戦って、戦い抜いたら最後にイリヤを奪い取っていたのは僕だった」……作戦だ」

「……………」

もはや開いた口がふさがらない……といつても誰も口を開けては

いなかったが……様子の三人。

「不満か？ 類似品の……」「逃げて逃げて逃げ抜いたのに、最後は結局捕まった」作戦よりはましだろう？」

「……………」

かわいそうな人を見る眼になってしまふのも……無理からぬ事だろう。

そんな三人の顔を見て……刃夜も少し気まずかったのか、顔を背ける。

「すまん……ちよつとテンションがおかしな事になってるらしい」

「……しかし警戒させて本当に大丈夫なのか？」

刃夜の阿呆な発言はスルーして、切嗣は刃夜へと問いただす。

切嗣としては何とかイリヤが奪還できればアインツベルンなどものはやどうでもよかった。

娘を本気で心配しているのは父、母共にだったので、アイリも少々不安そうな瞳を刃夜へと向ける。

その二人の視線には逆らえず……刃夜も一つ溜め息を吐くと、真面目な顔でこう述べた。

「安心しろ。お前らにも、そしてイリヤスフィールという子供も……誰一人として、お前らには傷一つ負わせん」

そうはつきりと述べると、刃夜は再度振り向いて……森を見据えて、

突如二人に分裂した。

といっても分身の術など便利な術は覚えていないので、ただただ高速で動いて分身しているように見えているだけだが……。

どうやら話している内に一分経過したらしい。

そして刀を上へと上げて……

叫んだ。

左&右「俺の刀が震えて唸る！」

左「子供を救えと！」

右「轟き叫ぶ！」

……高速で動く二人の刃夜は、まるで本当に二人でいるかのように……それぞれがそれぞれの動作をしている。

一人は刀を上げて、もう一人は右手を前に突き出して力強く握ったり等々。

そして、その二人がまるで踊りを踊るかのように互いの手を？ぎあい……それぞれが正面から手を？ぎあい、それぞれが刀を持った手を振り上げて、

叫んだ。

左「空破！」

右「崩穿！」

そして二人で握りしめたまま高く上げた刀に……雷光が纏われ、その刀を振り下ろした！

左&右「雷閃剣！」

雷光が空を裂くほどの長さに伸びて……アインツベルンの森を境界毎、一刀両断した。

その瞬間に雷光は収まり、そして刃夜も一人に戻った。

「な——!?!」

あまりに馬鹿げた攻撃だったが、攻撃その物も馬鹿げたていた。

何せアインツベルンの結界を斬り裂いたのだ。

魔術の大家アインルベルンの結界を。

確かに戦闘に不向きな一族ではあるが、それでも千年以上の歴史を持つ魔術の貴族だ。

生半可な結界ではないのは間違いないのだ。

だがそれを刃夜は問答無用で切り裂いた。

それによつて……敵の警戒度も跳ね上がったことは間違いない。

「安心しろ」

切嗣とアイリの不安を正確に把握した刃夜は振り下ろした刀……

雷月を鞘に収めて刀蔵へとしまいつつ、振り返つて力強く頷いた。

「イリヤスフィールの元には、俺がもつとも信頼する最強の存在を、すでに護衛につけた」

その言葉には、限らない力強さと、確かな信頼があった。

故に、不安に思いつつもその言葉を信じるしかなく、三人はただ黙つて刃夜の言葉を聞いた。

「俺たちはただただ向かい来る敵を殺さずに戦闘不能にしながら進んでいけばいい。切嗣は……自分でどうにかしろ。アイリスフィールと舞夜は俺が引き受けた。二人は固まつて行動しろ」

そう言いながら刃夜は悠々と、森の中へと入っていく。しかもその際に歩きやすいようにするためか、刃夜が通つた足下の雪が溶けて地面がむき出しになっている。

これなら杖を突いたアイリスフィールも歩きやすいだろう。

しかも切嗣のことは守らないと言いつつも、三人が並んで歩くことが出来る幅の道を造っているのです、三人とも守る気があるのが見え見えだった。

……本当に大丈夫なんだろうな？

ここまで来た上に、しかもここまで出鱈目なことをされては信用するしかないが、それでも万が一にもイリヤに何かあつたら絶対に許すことは出来ない。

故に切嗣は一人で先行しようかと動こうとしたがその瞬間に……

!!!

悪寒が背筋を通り抜けて、切嗣の動きを封じた。

歴戦の戦士であり、そして今の己にとつてもつとも大切な存在を助

けに行こうと……必死になっている切嗣を止めることが出来る者なく、当然だがこの場では一人しかない。

……

抵抗すれば下手をすれば意識を刈り取られかねないと判断し、仕方なく切嗣は刃夜の後ろについていくことにした。

不要だったかも知れないが、それでも殿のために最後尾へと回った。

当然、相当人数のホムンクルス達が迎撃に向かってきたのだが……それについては語るまでもないだろう。

殺して欲しくないというアイリの希望の元、刃夜は全てを軽くあしらって先へと進んでいった。

何だというのだ!! あの巫山戯た存在は!?

アインツベルンの最高権力ユーグスタクハイト……アハト翁は歯が砕けんばかりの力で歯ぎしりしてしまっていたが、そのことに本人が気付いていなかった。

それほどの怒りを覚えていたからだ。

それも当然といえた。

冬木に向かわせた配下達からの報告で、存在自体は把握していた。

そして冬木の聖杯を破壊したということも、信じがたい事だが納得していた。

だが、大聖杯を破壊されたというあり得ない話と……

突如として飛来した第八騎目のサーヴァントが、宣戦布告をしてきた挙げ句結界を破壊されたのだ。

怒り心頭になるのも無理からぬ事だろう。

しかも今も迎撃に向かわせたホムンクルス達が、全く歯が立たないという報告も上がってきていた。

この状況に至っては聖杯であるイリヤをつれて逃げるという選択肢以外にあり得ない。

大貴族であるアインツベルンが。

手駒に裏切られて事もあり、その中は憎悪で渦巻いていた。

だがその憎悪も……

『……』

連れ出そうと訪れたイリヤの寝台がある部屋へ足を踏み入れて……そのイリヤを守護するように寄り添い淡い光を放つ幻獣を見て、ほんの一瞬だけ怒りと憎悪が頭から抜け落ちた。

だが、それも一瞬ですぐにその幻獣を排除しようと考えたが……不可能だと直ぐに察した。

白く輝く白亜の体。

青き小さな稲妻を発する体毛。

蒼い螺旋の角を額に宿した……幻獣。

この場にいれば魔術師であれば……いや、ただの人であつてもその姿を見れば誰もが納得するだろう。

この獣は……幻想種の幻獣であると。

『……』

その幻獣は何もすることなく、ただただイリヤに寄り添っているだけだ。

だがひとたび悪意と害意を抱いて行動すれば、その雷でたちまち攻撃されるのは目に見えた。

故に、アハト翁はこう告げるしかなかった。

「イリヤスフィール。こちらに来なさい」

大きな声が聞こえた。

その声が聞こえたと同時に……大切な人が近くまで来ていることに、イリヤは気付いていた。

「キリツグと……お母様だ！」

まだ魔術も満足に扱えないがそれでもここはアインツベルンの本拠地。

魔術など使えなくてもイリヤは感じ取っていた。切嗣が約束を守ったのだと。

そして……もう会えないと言われていた母親に、再び会うことが出来るのだと。

その喜びに逆らうことなく、入り口へと走ろうとしたそのとき……

!!!!

轟音と共に、城が一瞬だけ揺れた。

その揺れに驚いて、イリヤは一瞬目を閉じてしまう。そして目を開けた次の瞬間に……

『……』

自らのそばに淡く、暖かな光を放つ幻獣がいた。

その幻獣が自らを見下ろしてくるその目を、イリヤは真っ正面から見返した。

なんて綺麗な子なのだろうか？

なんて純粋な暖かさなのだろうか？

なんて安心できる子なのだろうか？

初めて見て、そして初めてそばにいるその存在に、イリヤ自身も魅入られたように、見上げていた。

『……このままここで待っていますよ』

「あなたは……だれ？」

『私はキリン。ジンヤの要望に応じて、あなたを守りにきました』

「守る？」

何から守るといふのか？

それがイリヤにはわからなかった。

ここは自分が住んでいる場所だ。

両親がいなくなつてしまつたが、それでもメイドのホームンクルス達のことをイリヤは好いていた。

そして怖いけれど、それでもアハト翁も嫌いではなかった。

だから一体誰から守るといふのはわからなかったが、それでもアハト翁が迎えに来たことで何となくイリヤもわかつた……。

アハト翁は、自分から切嗣とアイリを奪うつもりなのだ……。

「イリヤスフィール。こちらに来なさい」

いつも以上に厳格にそう言われても……イリヤは動かなかった。

動きたくなかつた。

動いてしまえば……アハト翁のそばに行けば、もう会えなくなるとわかつたから。

「その幻獣が何かをする前にきなさい！」

『……あなたの父と母がもうすぐ、迎えに来ますよ』

そしてイリヤの不安を和らげるように優しく光を放ちながら、幻獣……キリンがイリヤを庇うように一歩前が出る。

だから……イリヤは初めてアハト翁の言葉に逆らつた。

「嫌だ」

「こつちに来なさい！ そいつが何をするかわからない！」

「こんなきれいな子が、ひどいことなんてするわけない！ この子がキリツグとお母様がここに……イリヤを迎えに来てくれるつていつてる！ だからイリヤはここにいて！」

例えどれほど厳格であろうとも……両親を求める幼子の思いを断ち切らせるのは難しかったのだろう。

しかもアハト翁がキリンと危険な存在だと言うのも、イリヤとしてはいやだつた。

だから今まで逆らつたことがなかつた存在に初めて逆らつた。

そのとき……

「邪魔すんぞ〜」

そんな呑気な声を上げながら、超野太刀を肩に乗せながら部屋の入り口から入ってきた男……鉄刃夜がそこにいた。

その姿には憤りも疲労も何もなく……ただただ散歩に来たとしても言いたげな様子だ。

そしてそのあまりにも余裕綽々な様子は……攻められている側から見たら腹立たしいことこの上なく、憎悪を抱くには十分すぎる。

数百年と生きるホムンクルスの憎悪は、一般人であれば卒倒するほどの圧力を伴っていたが……当然刃夜にとつては涼しい風にもならなかった。

「イリヤ！」

「!? お母様！ キリツグ！」

そしてこの場に来て、アハト翁も、刃夜もキリンも……そんなことなど心底どうでもいいと思う二人がいて、二人はその自らの気持ちに逆らうことなくキリンのそばにいるイリヤと走っていった。

そしてイリヤも、満面の笑みを浮かべて二人に向かって走っていく。

「!?」

当然その瞬間を狙って邪魔をしようとするアインツベルンの者達がいいたが、それは刃夜とキリンが殺意と圧力をもって強引に動きを封じた。

「イリヤ！ イリヤ！ ああ……また会えるなんて！」

「お母様！ 会えないって言ったのにまた会えて、嬉しい！」

「イリヤ……。無事で良かった」

「キリツグも！ きちんと約束を守ってくれたんだね！」

姿形が多少なりとも以前のアイリとは違うのだが、それでもイリヤにとつては魂がアイリである以上、そんなことなど関係ないのだから。

舞夜はそんな三人を微笑みながら眩しそうに見つめていた。

そしてその舞夜を……刃夜が横目で盗み見て、内心で溜め息を吐いていた。

……やること本当に多いな、俺
もう一つやるが増えたことを認識して、刃夜は肩をすくめてい
た。

そしてその仕草は、アインツベルン達を激昂させるのだが……その
次の瞬間には刃夜が殺意を再び放ち、動きを止めた。

「キリン。すまないが首飾りになって四人の護衛を頼む。空港行くま
でには俺も合流する」

『わかりました』

「俺は少々こいつらを懲らしめて四人に手を出させないようにしてお
く」

「あなたは……だれ？」

アイリと切嗣に抱きしめられながら、イリヤは見たことのない人物
であり、不思議な雰囲気と力を宿した存在である、刃夜のことを見つ
めて呟いていた。

本当にただの呟きであり、イリヤとしては問いかけたつもりはな
かった。

だが、刃夜にはその言葉はしっかりと聞こえており、イリヤに対し
て笑みを浮かべて、こういった。

「俺か？　俺は鉄刃夜だ」

35 その後

先に四人を日本へと返した刃夜は、アインツベルンを脅しに脅し……二度と四人には手出しをさせないように言い含めた。

だが、最高の意志決定権力を持ち、妄執と執念の塊であるアハト翁だけは、どうしても言い含めることが出来ず、刃夜はやむなくその数百年に及ぶ使命ごと……命を絶った。

見知らぬ老害よりも、見知った連中の安全だしな

殺害後、残りの処理を他の偉い連中に丸投げし、刃夜は切嗣達と合流した。

そして四人が帰ってくるそのわずか数日……さすがにドイツからとんぼ返りではアイリとイリヤの体が持たないため、一度途中の地点で休憩を挟んだ……の間に、刃夜は切嗣がセーフハウスとして用意したくたびれた武家屋敷を、ほぼ完全にリフォームし終えていた。

「ふう、良い仕事した」

「相変わらず、むちやくちやな奴」

そんな刃夜のむちやくちやぶりに、もはや何度目かわからない溜め息を雁夜がしていた。

リフォームがされたことでかなり警戒をした切嗣だったが、今更殺す理由もないということと、一日掛けて徹底的にリフォームされた家の点検をしたので信用することにした。

「手続きとかその辺はうまくそつちでやってくれ。その辺の事までは面倒見ない」

「ああ」

「それと、イリヤの体のことはここに連絡しろ」

そう言つて無造作にメモが貼り付けられた不思議な鉱石を切嗣へと投げ渡した。

切嗣はそれにいぶかしげに顔を歪めながら受け取り、その鉱石の驚くべき魔力の純度と……メモの内容を見て驚愕した。

「……アーチボルト家に頼めと言うのか？」

「不服か？ それでイリヤの体が問題なくなるんだから安いものだ」と

思うが？ わかっていると思うがアイリスフィールの体もケイネスに俺が用意させた物だぞ？」

「……」

自らが問答無用で殺そうとしたケイネス・エルメロイ・アーチボルト。

それに頼るのは少々考えるところがないわけではないではなかった。

だが確かに刃夜の言うとおりに、それでイリヤの体が好転するのならば迷う理由はない。

更にいえば……

「その鉱石を送りつけたらあつちも嫌な顔はするだろうが、それでもその鉱石で背後に俺がいることがわかって変なことはいさ」

鉱石が異常な物であることは切嗣もわかったので、その刃夜の言葉を信じることにした。

それから……刃夜の怒濤の日常が始まった。

刃夜が自らに課した命題は複数あった。

桜と雁夜の生活の援助

もつとも力を入れるのだが、それに関してはほとんど問題がなかった。

桜の心が少々不安視されていたが、それでも何とか問題ないことは普段の様子でわかった。

刃夜がいなくなる時が少々心配だが、それでもそれ以外は特に問題ないといって良かった。

だが別の問題がいくつも浮上して……刃夜としては嬉しいが面倒なことになる。

「……力が欲しい？」

「力が欲しいっていうか……刃夜おじいちゃんみたいに誰かを助けたって思って……。それが最低でも、自分の身を守るくらいになりたいの」

リフォームを数日で終わらせて、イリヤの体のことの面倒を見てあ

る程度面倒毎が片付いたと思ったとある日の昼下がりに。

桜ちゃんが突然そんなことを言い出して、俺……鉄刃夜は目を丸くしていた。

「しかしなんだって俺に？」

「だって……刃夜おじいちゃん強いし。刃夜おじいちゃんに教えて欲しい」

まあ確かに強いけど……

昼飯の焼きそばをもりもりと食べながら、俺は桜が真剣に物を言っているのがよくわかった。

誰かを守りたいということ。

その力が自衛であることも。

自らを守りたいのだと。

そう言っているのがわかった。

「さく——」

雁夜が何かを言おうと口を開くが、俺はそれを風翔の力を使うことで強引に封じた。

それが雁夜にもわかったのだろう。

何も言わせてもらえないことを理解して、口を閉じた。

「守る……それは本当に立派なことで、大事なことはある」
「……だったら」

「だが、その力を反転させない自信があるか？」

誰かを守る力。

守ると言うことは簡単な様で簡単なことではない。

桜ちゃんは十分に理解している。

誰かを守ると言うこと……それはつまり最低限二人の人間を助けることに他ならない。

守られた人と……守った人……

どんなに少なくとも二人はいるのだ。

救われた存在は。

だが人というのは己自身すらも生かすこと自体が難しい生命だ。

思考能力こそある物の……それは純粋な力の前では遠く及ばない場合がほとんどだ。

得物を持ち、ある程度の力を有していた俺ですら……純粋な力の前には無力だったように。

霞毒、蒼電、風翔、紫炎、紅炎、老山

それだけの力は、当然善の事に使えば問題ないが、悪に傾けば災害と変わりない。

俺も魔力を蓄えてやろうと思えば……小さな台風を起こすことも不可能ではない。

だが、出来ることだが、やってはいけないことをやらないという強い意思というのは必要であり……

強ければ強いほど、もろく壊れやすいこともあり得るのだ……

しかもこの子……桜ちゃんはある意味で非常に危ういのだ。

絶対的な悪の力でいたぶられ……

圧倒的力で自らを助けられた。

この二つのことを同時に……それも幼い時に短期間に経験しているのは非常に危うい。

力で憎き相手を屈服させる事を知っている。

大丈夫だとは思うが……どうしたものか……

教えることは簡単だが、最低でも自らの力を振るう恐怖を最低限でも教えてなければいけない。

だが俺はこの世界に後どれだけいるのか不安が残る。

今のところそう言った予兆はないが……それでも突如としていなくなることもあり得るのだ。

中途半端に教えるのがもつとも危ない。

うーん……どうするかあ……

教えた方が良いことも事実なのだ。

この世界には魔術が身近にある……というのは語弊があるが、それでも魔術師の家系に生まれている以上、これからも何かしらに巻き込まれるのは目に見えている。

とりあえず基礎を教えてみて考えるかあ……

「力を得て、それをどう使うかだ。教えるのは簡単だが、その力を自衛以外に使わないと約束できるか？」

いたぶられる恐怖と苦痛を知っているからある程度は安心できる。

その「知っている」ということが暗転しないかが怖いところではある。

だがそれでもこの幼き歳で何かを為したいと思えることは良いことだ。

俺自身がどれだけいれるのかはわからないが、それでもある程度は教えても構わないだろう。

「!? うんー」

俺の言葉に、俺が教えようとしていることを理解しているのだろう。

嬉しそうに……だがそれでも自らを律して、真剣に頷く姿を見て、

俺はある程度安心した。

故に俺は教えることにした。

してしまったのだ。

この選択が、俺の苦労を五倍化させることに、当然だがこのときの俺は気付いていなかった。

桜ちゃんに対して戦う術を……自衛の力を教えると約束した次の日に、俺は早速朝早くから訓練をすることになった。

とりあえず基礎体力を叩き込むためにランニングや体に負荷をかけすぎない程度のトレナーニングなんかを行うことから始めた。

そしてランニングとなると、当然人目に付く。

別段悪いことなど何一つとしてしていないので見られても構わないのだが……見られて困る存在がこの街には何人もいたのだ。

「ちよっと！　桜に何しているのよー！」

公園で筋トレの仕方と、体の動かし方を教えている時だ。

そんな声が聞こえてきたのわ。

そちらに目を向ければ……というか目を向けるまでもなく気配で誰だか分かりきっていたのだが……そこには遠坂凜と遠坂葵がいた。

見方によっては俺が桜ちゃんをいじめている……具体的にはちよっとした重りを持たせてすり足で基礎である下半身を鍛えており、俺はそれをそばで自作の木製の椅子に座って体勢に問題がないか監視している……ように見えなくもない。

その光景を仲が良かった……雁夜曰く……姉が見れば俺に対して声を荒げるのは無理からぬ事かも知れない。

「お姉ちゃん」

「桜。今は修行中だ。別のことに意識を取られるな」

「！　はいー！」

俺の厳しい言葉に桜ちゃんはきちんと頷いた。

これは最初に決めたことで、武術を……力を教えている間には一切情を持ち込まない事になっているのだ。

それを最初に説明し、きちんとその意味を理解しているため、桜ちゃんは俺の言葉に素直に従った。

その桜ちゃんに安心し、俺は目を話して二人の元へと歩いて近寄り、頭を下げた。

「これは遠坂凜ちゃんに、遠坂葵さん。散歩ですか？」

「え……ええ」

「ちよつと！　なんでこんな事してんのよ！　桜に何する気!？」

無鉄砲なのか、勇敢なのか……はたまたその両方か？

一応敵ではないとは言え大の大人の男に食ってかかって来ている上に、しかも驚いたことに気を自然と発している。

桜ちゃんも試しに気力と魔力で体を充ててみたが、魔力に対して異様な適性を示していた。

ぶつちやけ魔力の扱いに関しては、修行を積めば俺など足下にも及ばない器を有していたりする。

神童……天才つてのはどこにでもいるんだなあ……

そんな二人に内心で乾いた笑い声を上げていた俺だったが……葵さんが不安そうに桜の姿を見ていることに気付いて、直ぐに居ずまいを正した。

「いじめている訳ではありません。これは桜が望んだことです」

「桜が？」

「はい。彼女は本当にひどい目にあいました。だがそれでもあの子は優しさを失わなかった。自らを守るようになって、人も守りたいと。その力を俺に与えて欲しいと、そう願った。だから俺の家に伝わる武術を教えております」

葵の不安な思いを少しでも和らげられるようにと、俺は嘘偽りなく心から言葉を紡いだ。

その言葉に説得力を持たせる訳ではなかったが、今の桜ちゃんの姿は俺が裁縫した空手着……気力を込めて裁縫したから拳銃の弾くらいならはじき返す……を着て修行に励んでいた。

桜ちゃんには我が家流の空手を教えることにした。

武器を扱うことも考えた……体を鍛えてもどうしても男に比べれば非力になってしまうからだ……が、しかし得物が持てない時のことも考えて空手にした。

また腕力についても魔力の扱いである程度はどうかになる。

そのために空手を選択した。

が……

ある意味で教えやすい……特殊な道具を必要としない……ということとは

他にも教えることが出来るという意味でもあり……

「ならー！ 私にも教えてー！」

「……は？」

「今度何かあったら私が桜を守る！ お母様も！ だから！ 私にも教えてー！」

対抗心もあるのだろう。

だがそれ以上に優しさに満ちた言葉でもあった。

そしてその言葉は……俺にとっては拷問だった。

断ることも出来たが……葵さんに頭を下げられては俺としては断ることが出来なかった。

無駄に弟子が増えた

そして二度あることは三度あるとはよく言ったもので……

「あ、ようやく見つけた！」

俺が凜ちゃんのを教えを請う姿に途方に暮れていると、なんと公園の入り口から俺めがけて走ってくる青年がいた。

ちよつとなよなよしい男……ウエイバー・ベルベットだった。

「お前、ライダーに剣を渡しただろう!？」

「何だ藪から棒に……ってあの剣か？ あれがどうかしたのか？」

ウエイバーが言ってきた剣に心当たりがあつた俺は直ぐにその剣を思い出す。

勝負の敗北を認めておきながら逃げ帰ってしまった詫びに、ライダーに渡した直剣の事だろう。

ライダーと共に消えていたと思っていたのだが、どうやらまだあるようだった。

だがすでに剣自身がライダーを主と認めているので、俺の刀蔵にはしまうことは出来ないだろう。

「んで、それがどうかしたのか？」

「あれの鞘を造って欲しい。その……鞘はなくなっちゃったから」

「ああ」

なんと半端な消失の仕方をしたのだと……俺は自らが造った鞘に軽く恨み言を吐く。

だがこの出来事が過去になった今だからわかった事だが……これはおそらくライダーの嫌がらせなのだろう。

ライダーの置きみやげであるこの剣によって……

俺とウェイバーの「縁」が出来てしまったのだから。

「僕にも……剣を教えてくれないか？」

……おい嘘だろ!?

その言葉に俺は驚きを隠せなかった。

だが剣を見るとライダーの面影が浮かんできて……俺は半ば仕方なくウェイバーにも剣を教えることになってしまった。

そしてさすがに真剣を公園で振り回すわけにも行かず、道場が身近にあることを俺は覚えており……

「……それで僕の家に来たと？」

「ダメ？ 使用料払うからさ……雁夜が」

「マジでヒモな発言だな……我ながら……」

「……………」

衛宮家に、道場があるのを思い出して、俺は結界の強化もかねて道場を借りる事にした。

そしたら……

「真剣使える人がいるの!? おにーさん! 私にも教えて!」

「Oh Jesus」

非常に元気な藤村組のお嬢様に剣道を教えることになって……

「私にも教えて!」

「もう許して……」

そして雪の精霊の様な女の子にも……何故か何かを教えることになってしまったのだった。

「大変だな……刃夜も」

「やかましいわ!」

そんな俺の話を、俺に料理を教えられながら雁夜が苦笑していた。

こんな愉快で痛快で……断るのが非常に難しい状況で何人もの弟子の面倒になるとさすがに思わなかった。

だがそれでも一度やると決めたからには徹底して教え込んだ。

特に五人の教え子の内三人の女の子は才能の塊だったので俺としても相当力を入れて教えた。

その甲斐もあつてか、三人は俺がいなくなった後も修行を続けて相当強くなった。

ちなみに藤村組のご令嬢は完全な一般人だったので、普通に剣術及び剣道を教えたが……こいつも神童だった……相当の実力を有することになってしまった。

ぶつちやけ全国制覇も余裕だろう。

そして残りの一人は……まあ向いてなかったと言うことで、ただただ剣が振れるようになっただけだった。

だがそれでも、本人が納得し最後に自らの王が手にした剣を、大事そうに抱えて色んな国へと旅立った。

そんな生活を何年も……驚いたことに年単位でいることになったのだ……続けて、基礎と発展まで教えて、一度変装した状態での俺と殺し合いを体験させた。

変装しているが故に、誰も俺とは理解していなかったが。気と魔力を封じて、真剣で三人にそれぞれ襲いかかった。

男女、大人と子供という不利を埋める気力と魔力を用いたため、三人とも怪我をすることはなかったが、相当怖い思いをした……とかさせた。

そのときの反応を見て、俺は三人とも問題ないことをきちんと把握した。

36 子供と兵士

「……本当によろしいのですか？」

「逆に聞くが手伝わなくて良いのか？ 確かに実戦は慣れているんだろうけど、それでも戦場でしかも女だ。手伝った方が色々得だろう？」

「それは……」

「秘密の女子の会話を盗み聞いた罪滅ぼしだ。気にしなくて良い。更にいれば脅迫材料に使ったこともあるからそれを思い出してもらえれば、納得することは出来るだろう？」

「……ですが」

「いいから行ってこい。んで現地に着いたら発信器に魔力流して待機してろ。手伝いに行くから」

舞夜が成田空港で俺、切嗣、アイリ、イリヤに見送られる状況で、出発間際になってなお渋るものだから俺は何度目かわからない問答を繰り返していた。

「舞夜さん。気をつけて行ってきて。そして帰ってきてね。あの家は貴方の家でもあるんだから」

「……マダム」

アイリが本心でそう言っているのが、部外者である俺ですらもわかる。

それほどに本心から、アイリは舞夜の事を心から心配しており、帰ってきて欲しいと願っている様子だ。

そのアイリに、恐縮しながらも嬉しそうに舞夜は頭を下げていた。

「僕も行った方が……」

「お前の責任で一番重いのは妻子。確かに舞夜に対する責任もあるが、そっちは下手すると死ぬかもしれないだろう？ まあ俺がいる時点で死ぬわけないけど。ともかく一番重い責任を全うしろ。こっちは俺がフォローするから」

自らの子供を探しに行くために紛争地へと向かう舞夜に対して、切嗣が同行を買って出たが俺はそれを却下した。

幼い子供の元を離れるのは個人的にいやだったからだ。

後、責任を果たすことにした以上、これ以上殺す事を俺が許さなかった。

だが、先にも言ったとおり、俺にも責任があるため舞夜の戦闘のフォローは俺が行うことにしたのだ。

というか、気配で判断できる人間がいないと、顔も体格も血液型すらもわからない自らの子供を、どうやって探すというのか……

出産後直ぐに離れたのだ。

わかるわけがない。

だが俺としても不安はあった。

生きていれば気配でどうにか出来るが……しかし死んでいた場合はどうにも出来ない。

それでも責任を果たさなければいけないので、俺は舞夜のフォローを買って出たのだ。

また……

「マイヤ……元気で帰ってきてね！」

寂しそうにしながらも、それでも気丈に舞夜を送りだそうとしているイリヤがいる。

本当の姉の様に舞夜を慕うイリヤを悲しませたくないというのも……大きな理由だった。

「はい、イリヤ。無事に帰ってきますね」

無垢で純粋な笑顔を向けられて、舞夜も嬉しそうに微笑んだ。

そして舞夜は惜しまれつつ旅立った。

俺は先にイリヤを助けた時と同じように、電磁投射で海を越える。その方が安上がり且つ早いからだ。

メツチャキツインだけだな

アインツベルンのカチコミの際にも使用した、雷のキリンの力を用いて使用する技。

電磁投射道神風

自身を弾丸と見立てて超々距離を移動するための技だ。

だが……生身で電磁加速するので加速Gがやばい。

気力と魔力で強化しなければ内蔵破裂で即おだぶつである。
そして気力と魔力で強化しても気持ちが悪くなる。

到着後数分は、ほとんど無防備になる。

弟子達がいるから、数日に一度はこっちにも帰ってこないとなあ
……

強行手段を取るので体に負担はかかるが……致し方ないだろう。

だがこれはある意味で予行演習にもなって良かった。

桜ちゃんの。

どれほど長くいようと、俺はいつかこの世界から旅立つことになる。

幼すぎない年齢でわかればいいが……その辺は今もわからない。
故に、予行演習といえはいいのか、とりあえず慣れさせておくことも必要だった。

果たして……いつ消えることになるのやら

そうしてしばらく俺は紛争地帯と日本を往復することを余儀なくされる。

だが尽力したおかげか……何とか舞夜の子供の痕跡を発見し、そして直ぐに結果を知ることになった。

僅か半年だ。

僅か半年で見つけられたのは、見つける対象が途中で動くことがなかったからだ。

だが見つかったことを……再会したことを手放しで喜ぶことは出来なかった。

「……」

ベッドで横たわる……体の所々が欠損した姿を見れば、何も言えないだろう。

名前もつけることも出来ず、抱き上げることすらも出来なかった、自らの子供。

しかもベッドに横たわっているその人が、自らの子供であるという

ことを伝えたのは俺が感じ取った気配という……あまりにも現実的ではない、曖昧な確証でしかない。

俺自身は精神分身体で見ることが出来ているため、確実に舞夜の子供であるとわかっていているが……そのことを他人にわかれということの方が難しいだろう。

「……」

俺がいるとはいえ、それなりに苦労はした。

その結果が目の中の現実だ。

未だこの世界は紛争が続いているという……どうしようもないほど悲しい現実だ。

「……」

舞夜は何も言わずに、ただただ自らの子供であるという人を……静かに見つめていた。

正直言つて……もう長くない。

この紛争が続いた地域での治療レベルでしか治療がされておらず、そのレベルですらろくな処置が施されていない。

まさに使い捨てであると……そう言っている様だった。

間に合ったというべきなのか……間に合わなかったと言うべきなのか？

そう思ってしまうほどに……残酷な現実だった。

もしももっと早く行動していれば、会話をすることが出来たのでは？

早く行動していれば、もしかしたら出会えたかも知れない……。

もしももっと遅く行動していれば、「死」という現実で、何も考えなくて良かった。

すでに死んでいたら、ただただ冥福を祈るしかなかった。

言うならば……残酷な言い方をするのであれば、あまりにも半端な状況だった。

俺の力で生かすことが出来なくはないが……しかし精神分身体で見たこの人は、すでに心が死んでいた。

故に……治療を施しても心がそれについていかずに……長くはな

い。

間に合ったというべきなのか……間に合ってしまったと言うべきなのか……

俺も舞夜も……ただただ静かにその人を見つめていた。

「刃夜……。申し訳ありませんが、少し外してもらえますか」

「ああ……」

舞夜にそう言われ、俺は少々心配しつつ部屋から出て行った。

外に出て……荒れた大地に立つ、壊れかけの街の姿を見つめる。

至る所に弾痕と、爆薬によって吹き飛ばされた痕跡。

地面に座り……銃を抱きしめながら眠る子供達。

そして大人達はまともな家の中で何かをやっている。

……吐き気がするな

心底おぞましい光景だった。

この紛争を終わらせることは、俺には出来る。

だが直ぐに別の理由で紛争が起こるだろう。

そんな土地だった。

せめてまともな家を吹き飛ばすだけでもしてやりたかったが……

そんな無責任なことは出来なかった。

この紛争にどんな意味があるかはわからない。

何せここには今来たばかりだ。

理由などわかるわけもない。

大人達も賄賂で治療の家に入れてもらっただけで、友好的じゃない。

むしろ舞夜が女と言うことで露骨に下卑た顔を向けてくる奴もいた。

だがそんな奴らに対して舞夜は何も言わず……淡々と会話をしていた。

それで相手も舞夜がそれなりに出来る人間だと判断したのだろう。俺がいることも相まって、問題は起こらなかった。

しばらく何も考えず……ただただ周囲を警戒していたが、一時間ぐらいたって舞夜が家から出てきた。

「お待たせしました」

「……ああ」

何も聞かなかった。

何も聞けなかった。

聞けるわけがなかった。

ただ最後を見ることが出来た。

行方不明でならずですんだ。

それだけでも意味はあったのかも知れない。

なかったかも知れない。

舞夜にこのことで何かを聞くことが出来ず、舞夜も日本へと戻る道すがら何も言わなかったからだ。

もしかしたらアイリ辺りには報告をするかも知れない。

アイリにも言葉を交わさないかも知れないが、それでもこれ以上俺が踏み込むべきではないため、俺はただただ……帰り道の護衛に徹して、舞夜を無事に日本へと向かう飛行機に乗せる。

やりきれない気持ちを俺自身も抱えて……俺は電磁の力で日本へと帰国した。

37 出会い

それは何の必然もない、ただの日常の一コマ。

イリヤが一人で冒険をしていた。

そんなありふれた幼い子供の日常だ。

やんちゃというべきなのか、ちょうど良い感じの木の棒を持って、イリヤは近所を歩き回っていた。

アレって……？

そんなありふれた一日だった。

どこにでもある風景で……イリヤはとある二人を見つけた。

いじめられている女の子を助けようとしている、一人の男の子を。

イリヤは優しい子であったため、自らが抱いた感情に逆らわずに……自らよりも大きな体を持つ数歳年上のいじめっ子達へと走って近寄っていった。

「ごらー！・ 弱い者いじめしちやいけないんだから！」

そんな声が背後から聞こえてきて、いじめていた三人の男の子達は、一時いじめを中断して背後へと振り向いた。

そこにいたのは、雪の妖精のような美しい少女だったため、一瞬呆けてしまうがそれも束の間ですぐに不機嫌そうに顔をしかめた。

「何だお前？」

「あ、こいつ知ってる！ たまに川原とか走ってるやつだ！」

「そんなのいたな。他にも可愛い子いたよな」

イリヤに凜に桜。

三人とも幼い頃より一定水準を超えた美貌を持っているため、注目されていても不思議ではなかった。

また川原を走っている時も刃夜が裁縫した胴着を着用して走っているのだ。

間違いなく目立つだろう。

玉に刃夜が一緒に走っているのもあって、結構注目されたりしていた。

だがそんなことはイリヤにとってどうでも良いことだった。

三人でよってたかつて弱い者をいじめるのが我慢できず、こうして止めに入ったのだから。

「今すぐ三人でいじめるのを止めておうちに帰って。そしたらイリヤも許してあげる」

自らよりも小さな女の子が発言したこの言葉に、いじめっ子達は目をきよとんとさせたが、直ぐにおかしそうに笑った。

それはそうだ。

川原で走り込みをしているとはいえ、自分よりも小さな女の子を恐れる理由はどこにもないだろう。

だから三人は標的を変更し、イリヤへと襲いかかった。

そしてイリヤは……まず一発防御をするだけで相手の拙いパンチを右の手の平で受け止めた。

「先手を戴きました」

「? 何い——」

何を言っつてと言おうとした一番大きな体の男の子は、腹部へと突き刺さった正拳突きで言葉を文字通り封じられた。

体重を乗せた十分に威力のある正拳突きだ。

いくら未成熟とはいえ、相手も未成熟な子供であるために、その威力は十分だった。

刃夜から鉄家空手を教わる際に、三人の娘達が約束させられた事はいくつかあった。

喧嘩に使わないこと。

正当防衛等の場合でも、気力と魔力の使用は、一般人相手には厳禁とすること。

自らの生命に危機に関わると感じた場合は気力と魔力の使用を許可するが、その場合の相手への攻撃は基本的に禁止で、逃亡に徹すること。

ばれたら面倒なのでなるべくばれないようにすること。
等々が主な内容だった。

故に、イリヤは先手を相手に取らせて完全に自分に正義があると判断し……いじめっ子たちから助ける、相手が攻撃してきた……気力と

魔力を使用せず、イリヤは刃夜より教わった空手を使用した。

気力と魔力を使用しないとはいえ、刃夜の教育がそれなりにスパルタであり、また長年の経験から刃夜の指導力が生半可でなく、さらに三人とも結構な才能を有しているため、いじめっ子三人を撃退することなど、容易いことだった。

「バーカ！」

「お母さんに言いつけてやる！」

「痛いよう！ 覚えてやがれ！」

「知らないよ！ 先にいじめてたのはそっちでしょ！」

かすり傷一つ負わず、イリヤは三人のいじめっ子を難なく撃退し、舌を出して相手を見送った。

そして背後でぽかんとしている二人を見て、とびっきりの笑顔で言葉を掛けた。

「大丈夫だった？」

「あ、ありがとう……」

「……ありがとう」

そこにいたのは、自分よりも小さな女の子を守るように前に出ていた、赤茶色の頭髪を短めに切りそろえた、快活そうな男の子だった。

その後ろにはいるのは、肩よりも少し長めの黒髪に、前髪に隠れた瞳が怯えているように見える、少し気弱そうな女の子だ。

少年の後ろに隠れるようにして、胸に抱いた小さな手作りの人形を大事そうに抱きしめていた。

その様子から察するに兄妹なのだろう。

自らよりも体の大きな男の子三人相手に、兄は一步も引かずに妹を守っていたのだ。

その姿勢が……イリヤに非常に好感の持たせた。

「初めまして！ 私はイリヤだよ！ イリヤスファイル・F・A・エミヤ！ 長いからイリヤで良いよ！ あなたたちは？」

「俺は士郎。こっちは妹の遊美」

「はじめまして」

妹を守ろうとした兄の姿。

その姿が……何故かイリヤの胸に響いていた。
すぐくちぐはぐに思えたのだ。

自分だって弱いくせに、それでも一步も引かずにいじめっ子三人相
手に立ち向かっていた。

もちろんいじめっ子達だって殺す気がないことはわかりきってい
る。

それでも、この勇敢な男の子を

守ってあげたいと……

自然と思えていた。

「決めた！ シロウを私の弟にしてあげる！」

「弟？ だって……君は……」

そこから先は言いにくいのは、士郎は言葉をつぐんだ。

魂が体になじんだとはいえ、それでも元々の魂が健全とは言い難い
イリヤは、体の身体能力等は普通の人と変わらなくなったが、それ
も発育が平均値よりも大幅に下回っており、士郎よりも背が低か
つた。

アイリから引き渡された全て^ア遠き理想郷^ロもイリヤの新たな体に埋
め込まれたが、それでも完全に普通になるのは難しいようだった。

そのことに少しだけカチンと来たイリヤは、痛くなりすぎない程度
に士郎のお腹をグーで殴った。

「!？」

「レディーに対して、身体的特徴をけなしちゃダメなんだよ？ シロ
ウ？」

「……ご、ごめん」

「お兄ちゃん……大丈夫？」

お腹を抱えてうずくまっている兄を心配する遊美。

そんな二人の事を強く守ってあげたいと……イリヤはこれから二
人と暇があれば一緒に遊ぶ様になって、刃夜とも会う事になり、更に

刃夜の心労が増える結果となった。

「まあ別段良いんだけどさ。少しは俺の苦労も考えてくれ？ つーか何故俺はイリヤの言葉に余り逆らうことができないのだ？」

『さあ？ まあ何か感じるところがあるのではないか？』

「そんなの全く覚えがないんだがな？ 魔力の回復具合はどうだ封絶？」

『遅々として進まんよ。直接魔力をもらう以外ではほとんど回復しない』

首を傾げた刃夜を、封絶が慰めたりする、ある意味で貴重な光景が間桐の武家屋敷で行われたりした。

またイリヤが妹連れとはいえ何度も男の子を連れてくるのにやきもきした男が一人いたりした。

「キリツグ！ この子がシロウとユミ！ 私の弟と妹だよ！」

「そうか、君がイリヤが最近よく話をしている士郎君と遊美ちゃんか。初めまして。イリヤの父親の、切嗣です」

「は、初めまして。士郎です。イリヤちゃんにはいつも遊んでもらってます」

「は、初めまして、遊美、です」

「ごらシロウ！ 私のことはお姉ちゃんって呼んでっていつも言うてるでしょ!?!」

「で、でも」

外で仲良くしていた兄妹を初めてイリヤが自分の家に……衛宮家に連れてきた時のことだ。

家の敷地には行つて家に入り、靴を脱ごうとしていたら切嗣が出迎えたのだ。

あまりにもイリヤに親しげにする士郎に、切嗣は条件反射で懐に手を伸ばそうとして……

「こーら、何玄関で長話してるの？ シロウくん、ユミちゃん、いらっしやい。イリヤの母親のアイリです。いつもイリヤと遊んでくれてありがとうね。奥におやつ用意しているから手を洗つてうがいしてきなさい」

「は……はい!? ありがとうございます」

アイリの笑顔が眩しかったのか、土郎は思わず顔を真っ赤にして顔を俯けてしまった。

そんな様子がかわいらしかったのか、アイリは微笑みながら妹の遊美にも微笑みかけた。

「ユミちゃんも、上がって行って」

「は、はい。ありがとうございます」

「二人とも、こちらですよ」

靴を脱いだ二人を、やわらかな笑顔で洗面所へと舞夜が案内した。

イリヤは当然自らの家なので進んで洗面所へと走っていき……玄関に夫婦だけが残された。

「キリツグく? さつきは懐から何を取り出そうとしたのかしら?」

未だ玄関で突っ立って出迎えているかのようにして固まっている自らの夫に、アイリはそれはそれは満面の笑みで切嗣の背後に回って、その肩に両手を置いた。

まさにそれは逃がさないと言わんばかりの、捕食者の行動に何故か見えてしまった。

そんなアイリに背後を取られて、切嗣はだらだらと……心の中で大汗を流しながら……

一言こう呟いた。

「アイリ……僕はね……、イリヤの味方に……なりたいんだ」

振り向きつつ、アイリへと儂げに微笑んだ切嗣。

それはただただ自らの愛娘を心配する父親の苦笑だった。

……懐にナイフを忍び込ませていなければ、それはそれはいい父親の姿だっただろう。

「はい、そんなこといってもだーめ。舞夜さん、悪いけどちよつとお願いね」

「ああ!? い、イリヤ!? イリヤアアア!?」

一度家を出て、土蔵へと引きずられていく切嗣^父と、引きずっていく^母アイリ。

そんな姿を、ちょうど洗面所で手を洗い終えた三人と舞夜が見ており……イリヤは深々と溜め息を吐いていた。

「もうキリツグは……。私に対して甘すぎるって言うか」

「それだけあなたが心配だということですよ、イリヤ」

「けどマイヤ。私だって立派な女^{レディー}何だよ? そんなに心配されても困るって言うか」

「はいはい。さあ皆さん。居間でお菓子を食べながら、何かゲームでもして遊びましょう」

軽くイリヤをいなしつつ、舞夜は優しく微笑んでいた。

まだ堅さが残っていたが、それでも心からこの今の生活を楽しんでいる様子がわかる……。そんなやわらかな笑みだった。

その笑みに、強さと柔らかさを感じ取って……。遊美が、茫然と舞夜を憧れるように見つめていた。

「リン! シロウをいじめないの!」

「い、いじめてる訳じゃないわよ! ただ稽古をつけてあげただけって言うか」

「稽古にギリギリなっているところが、凜らしいと言うべきなのか? ただ凜……男とはいえ、まだお前らより稽古時間が短い士郎に対して加減をしなさい」

「ご、ごめんなさい。刃夜先生」

とある日の道場内で……。

桜、凜、イリヤ、士郎に遊美の五人の指導を行っている際の出来事だ。

「罰として、休憩時間のおやつ、凜は半分な」

「!? そ、そんな!」

「刃夜先生。さすがに半分なのはかわいそうかなって……」

「桜……そうは言うが……。まあ本気じゃなかったから良いか? な

ら士郎と遊美の分を少し大目にするか」

お手製の体に良くおいしいおやつ……刃夜の本気の菓子……を取り上げられそうになって半泣きになった凜を、妹の桜がフォローしていた。

仲の良い姉妹で、これからも互いを助け合って行くのがわかるそんな光景だ。

「違うよシロウ。その時腕をもつと勢いよく振るって……その上で動きは小さくするんだよ」

「む、難しいよ、イリヤ姉ちゃん」

「こんな感じ？ お姉ちゃん」

「そうそう！ ユミのが上手だよ！ ほらシロウも！ 私の弟だけど、ユミのお兄ちゃんだから、妹に負けないように頑張らないと！」

妹の遊美を褒めながら、イリヤは弟の士郎に対して激励を送る。

士郎としても唯一の男で、まだ弱いのが我慢できないのか、必死になつて拳を振るっている。

「イリヤー。兄が妹に負けちゃダメって事はないぞー。士郎も焦る必要はない。ゆっくりとやればいい」

「はい！ 刃夜先生」

休憩のお茶の準備をしながら、刃夜は五人でそれぞれ頑張つて稽古をしている子供達の様子を、それはそれはほほえましそうに見つめていた。

そうして衛宮家から借りた電気ポットでお湯を沸かしていると、ちょうど沸かし終えたタイミングで、道場の扉が開いて……雁夜に葵、衛宮夫婦に舞夜が入ってきた。

「大丈夫、雁夜君？」

「ありがたい、葵さん。でもこの体にも慣れたからそんなに心配しなくても大丈夫だよ」

一番最初に入ってきたのは杖を突いている雁夜と、そんな雁夜を後ろから支えながら入ってきた葵だ。

その様子はまるで姉弟の様だった。

雁夜も少々照れながらも、やわらかな笑みを補助してくれている葵へと向けていた。

「衛宮さん。いつも道場を貸してくださってありがとうございます。これ、私の手料理なのですが、良ければ今晚のおかずにもしてください」

後ろから入ってきた衛宮夫婦のアイリへと、葵は包みを差し出した。

葵から包みを受け取ったアイリは、それはそれは満面の笑みで受け取っていた。

今というママ友という関係なのだろう。

魔術師の家系ではあるが、ホムンクルスであり魔術よりも家族を大切にしているアイリと、魔術師の家系に嫁いできただけの葵は、魔術的な事で確執が起ることもなく、良好な関係を築いていた。

「お気遣いありがとうございます、葵さん。でも気にしないでください。私達だけだと道場があっても腐らせるだけですから。ね、キリツグ？」

「……そうだな」

しかしすでに敵である夫が死んだとはいえ、元敵が家に入ってくるのを、切嗣としては心中複雑だったりする。

「切嗣。私も見て良いのでしょうか？ 家で留守番をしていたほうが……」

「ダメー！ 舞夜さんもイリヤの姉として成果をちゃんと見てあげて！」

「そうだよマイヤ！ 私、マイヤにも見て欲しい！」

アイリとイリヤの親子攻撃に、舞夜はたじたじになり少々気後れしながらも、舞夜は渋々と恥ずかしそうにしながら、すでに準備されている座布団へ、他の保護者達と同じように座った。

「えっと……本当に私たちもいいんですか？」

「構いませんよ、こんな若造の男に鍛えられているお子さんを心配しない方がおかしい話ですし、それにお子さんもお父さんお母さんに日頃の特訓の成果を見て欲しいでしょう」

更にその舞夜よりも恐縮しているのが、二人の男女……土郎と遊美の父親と母親だった。

鉄家空手を教えることになった際に、刃夜が挨拶に行っているため顔見知りなのだが、それでも保護者達とはほとんど初対面だ。

恐縮するなというほうが難しいだろう。

そんな土郎と遊美の両親に、刃夜はリラックスのできるハーブティーをばっちりと準備しており、まず一服するのを進めた。

そして準備が整うと……顔を引き締めて、刃夜は「刃夜先生」となった。

「よし、それではこれより型の演舞及び、それぞれの組み合わせで一対一の試合を行う。一同、礼！」

「……よろしくお願いします！……」

今日はすでに一年に及ぶ修行をした五人のお披露目会だった。

五人がそれぞれ見せたい保護者に対して、真剣に学んできた修行の成果を見せる。

さらには刃夜と一対一で戦う姿も見て……それぞれの保護者達は、自らの子供達の成長ぶりに驚いていた。

因果と言うべきなのか……この五人の子供達はそれぞれが一般的ではない家系の子供達で、気力と魔力を使用することには、何ら問題がなかった。

だが大きな力であるために、それはもう刃夜が厳しくその辺りの指導をしており……ほとんど問題がなかった。

「よし、これにて本日の訓練を終える。一同、礼！」

「……ありがとうございます！……」

無事に稽古を終えると、全員が本当に嬉しそうに満面の笑みを浮かべて、そしてその親たちも成長ぶりが喜ばしくて笑みを浮かべて拍手をしていた。

礼が終わるとそれぞれが自分の家族の元へと、走っていく。

親との話が終わると、兄妹弟子であり、そして競争相手でもある相手と喜びあったり、楽しそうに話をしている。

それぞれが優しく、そして強く……育っていつているのがよくわか

る光景だった。

これならまあ……心配する必要性はなさそうだな……

そんな弟子達と家族の様子を見て、刃夜は内心で頷いていた。

すでに数年、この世界に居座り色んな生活を過ごすことになった我が身を振り返って……刃夜は内心で苦笑するしかなかった。

桜と雁夜の生活の援助。

桜は子供だが、二人に料理と家事の手ほどきをしていた。

その甲斐あつてか二人とも結構な腕前になっていた。

特に桜の料理の腕前は相当なものだ。

雁夜の体の治療もほぼ終えて、治療前とは比べられないほどに身体を回復させていた。

そして今のよう、五人の子供達の修行と育成。

それだけならまだ良かったのだが……切嗣とアイリ、舞夜、三人全員の家事が結構ダメな方であり、そちらのフォローも何故かすることになっていた。

まあ家事を教えたり、家事代行で道場使用料を得ていたようなものだが……

イリヤに対しても体の調子を見つつ、イリヤの我が侷に付き合い合わせられたりしてなかなか大変だったのだが……それ以上に大変だったのは親バカをいなすことの方が刃夜としては骨を折っていたりする。

アイリの体も問題なく、このまま緩やかに老いて寿命を迎えるだろう。

舞夜に対しては、もはや刃夜としてはどうしようもなかったため……衛宮一家に全てを任せた。

子供を探す手伝いをしたために、刃夜としてはこれ以上舞夜に何かをする義理はなかったためだ。

だが……それでも思うところはあるのか、切嗣やアイリと共に、家事関係の師匠となつて色んな事を教えていたりする。

葵に対しても可能な限りフォローをしていたが、不動産関係は刃夜

もそこまで詳しくないのでその辺は雁夜に丸投げした。

雁夜もそんな刃夜の無茶ぶりに溜め息を吐きながらも、葵と凜のためにフォローを行っていた。

そのおかげで葵と凜が何不自由なく生活できるだけの不動産収入を得ていた。

また凜は魔術の名家の当主としての責務も忘れず、刃夜の修行だけでなく必死になって努力を行っていた。

五人は仲良く刃夜に稽古をつけられながら、そして刃夜がいなくなった後も仲良く互いを助け合った。

仲良しの五人組になって、色んな事を経験していった。

イリヤは両親と舞夜に。

凜は母親と、たまに遊びに来る雁夜と桜に。

士郎と遊美は両親と友達で兄妹弟子の三人と一緒に。

桜は、雁夜と共に。

時々遊びに来る藤村組の面々と、お嬢様や他にも暖かな人たちに見守られて……。

三人はそれぞれがきちんと優しさと、自らの鍛錬によって培った強さを持って……成長していった。

38 意味

「それじゃ雁夜おじさん！ 行ってきますす！」

「気をつけてね、桜ちゃん。みんなによろしくね」

「はい！ 雁夜おじさんはきちんと休んでいてくださいね！」

「わかったよ」

時は経ち……日頃の鍛錬による強さ、そして生来の優し、が暖かい日々を二人は過ごしていた。

すでにあれから十年の月日が経った。

第四次聖杯戦争にして最後の聖杯戦争となったあの日から。

桜は刃夜がいなくなってから日々精力的に生活し、家事、料理、炊事洗濯、勉強、そして日頃の鍛錬を続けて、立派に元気な女の子として生活していた。

まだ幼さが残るが、それでも十分すぎる程に魅力的な容姿を備えていて、昔から告白が後を絶たなくて、本人としてはそれが贅沢な悩みだったりする。

そんな桜に日々一緒に生活して、雁夜も実に穏やかな時を過ごしていた。

最近では体を動かすことも厳しくなり、半日以上布団で過ごすことも多くなっているが、それでも桜の元気いっばいで幸せそうな笑顔を見るのが、何よりの活力だった。

そして今日は……地元の穂群原学園に入学して二日目だ。

制服に身を包んで、学園に行くのが楽しみで仕方がないらしく、元氣よく登校していった。

すでにイリヤや姉である凜、士郎と同一年の遊美が入学しているの、みんなと同じ学校に行くのが本当に楽しみなようだった。

その様子を眺めて、雁夜は桜が作ってくれた少し遅めの朝食を食べ、布団に戻ってノートパソコンを立ち上げて仕事を行った。

だが……

……もうほとんどできないか

キーボードを打つ指が何もしていないのに震えていた。

先ほどまで元気だったのは、起き抜けに見た桜の元気を分けてもらったからかもしれない……そんなことを考えてしまう程だった。

間桐家から不動産の助力を得ているとはいえ、それだけでは桜に示しがないと、雁夜は何とか二人の生活費を稼いでいたのだが、それも限界が来たようだ……何とか今書いている記事を仕上げ、静かにノートパソコンを閉じた。

そして布団に横になり、そばに飾られている桜の成長を写した幾枚かの写真を、寂しげに見つめた。

この十年に……本当に色んな事が起こったことを、走馬燈の様に思っていた。

刃夜と共に三人で過ごした日々。

刃夜がいなくなつて二人で……時に凜や葵が遊びに来て、四人で過ごした日々。

凜や葵だけじゃない。

時には聖杯を競い合った衛宮一家や、桜が年上の幼なじみとして慕う士郎や、同じ年の遊美と楽しく過ごした。

そんな暖かい生活を送つて……雁夜は今まで生きながらえてきた。日々成長していく桜の姿を……雁夜は本当に眩しそうに見つめて、見守つて来た。

だが、それもついに終わりが来てしまったのかも知れないと……雁夜は寂しそうに吐息を一つ吐いていた。

……この奇蹟の様な時間も、ついにおしまいか

万能の願望機聖杯を手にするのは、当然だが雁夜にはできなかった。

刃夜が破壊したからという事実もそうだが、もし仮に刃夜が破壊をしなくても、雁夜が最終的に勝ち抜いて聖杯を手にする事は叶わなかったことは、雁夜自身が十分すぎるほどに理解していた。

それに生き残つても……あのくそじじいが素直に桜ちゃんを解放したかも怪しいし、仮に解放しても、俺は桜ちゃんの成長をこうやって見ることはできなかつただろうな

また臓硯の問題などなくても、あの体のままでは数日すらも保たな

かつただろうと……今なら十分に理解できた。

日に日に……時間が経つ毎に、あの巫山戯た存在の事を雁夜も、桜も話にすることはなくなった。

だがそれでも雁夜は桜を育てた親代わりとしてわかっていた。

桜がもつとも尊敬し、慕っているのが誰であるのかを……

何一つ勝つことが出来ない存在だった。

力も。

優しさも。

何もかも。

巫山戯た存在に雁夜は、己自身が何一つ勝っているとは思ったことはなく、自らの命を救ってくれた事を感謝していた。

勝てないのも当然だと自分でも納得していた。

雁夜は何一つ……本気で努力したことはないのだから。

生家を飛び出して、ただ一人の力で生きてきたのだ。

努力は当然してきた。

だが、今の桜や凜の様に、何かに必死になって打ち込んできたことは、雁夜自身記憶がなかった。

だから余計に桜のことが眩しく見えてしまうのかと……雁夜は力なく笑っていた。

だけど……それでも良いんだ……

俺が何かを成せた訳でもない。

桜ちゃんを救ったのは自分ではなくあの巫山戯た存在であると、十分に理解している。

だがそれでも……これだけは自分は自信を持って言うことができた。

桜ちゃんをここまで育てたのは……自分だと……。

成長も心の育成も、桜ちゃんが色んな事を学び取り入れて、努力して……己の糧としていったのは理解している。

だが、それでも自分は、その一端を担ったのだという、ちっぽけだが確かな誇りがあった。

命を捨てて挑んだ戦争で聖杯を勝ち取ることもできず……
体を捨てて戦った妖怪に、傷一つおわすことも叶わなかった……

そして何より、誰より……あの巫山戯た存在には何一つ叶わない人生だったと……

そう振り返る。

だがそれで良かった。

それでもいいと思えた。

なぜなら……俺には、あの桜ちゃん的笑顔と幸せそうな姿を、間近で見ることができたのだから。

思い人が幸せになることを願って身を引いて、その婚姻を心から祝福した。

だがその祝福も虚しく、三人が引き裂かれてしまつて挑んだ戦いは、巫山戯た存在に助けられて何とか事なきを得た。

時臣がなくなつた後、葵と共に桜ちゃんや凜ちゃん的面倒を見て、不動産関係の事を教えたり手伝っている時に、下心がなかったと言えば嘘になる。

だけどそれ以上に……三人的笑顔が眩しすぎて、そんな下心など綺麗に吹き飛んでいた。

この笑顔を、自分が守るのに少しでも尽力できたのなら……

何より、桜ちゃんが本当に健やかに、優しく強く育ってくれたのなら……

こんな自分の命にも意味があったのだと……そう思った。

今までの日々のことを思い出す。

思い出していたからか……それとも視界がほとんどきかなくなつて来て、目覚めたばかりだというのに眠気を覚えたからか……

目に……あり得ない人物を写しだしていた。

巫山戯た存在はただただ静かに……自らを見下ろしていた。

そして次に、壁に飾られた桜ちゃんの成長の記憶の写真を……

まるで尊い物を見るかのように……

ゆっくりと……

優しいな笑みを浮かべて……見つめていた。

「はは……。本当に死ぬみたいだな、俺は。亡霊が見える……」

嘎れた声で、力なく紡がれた、独り言だった。

巫山戯た存在が何も言わなかったから、俺は……幻覚とわかっていても、言葉を止めることが出来なかった。

「見てくれ……桜ちゃんの幸せそうな笑みを」

「見て欲しい。桜ちゃんの優しい強さを」

「見てやって欲しい。桜ちゃんが立派に育った……その姿を」

今この場にはいない桜ちゃんがそこにいるかのように、紡いだ。いないのはわかっている。

けどそれでも俺には目を閉じれば浮かんでくる。

優しい笑顔を称えて、俺のことを雁夜おじさんと呼んでくれる、愛

しくて大切な、娘の姿を。

自分は父親じゃないのだから、おじさんのままでいいと……そんなちっぽけなプライドだったっけ……

桜ちゃんにとって父親というのは遠坂時臣に他ならない。

巫山戯た存在がいうように、知らなかったための養子だったのかも知れない。

けれどそれでも……そんなひどいことをした時臣と一緒にして欲しくなくて、そんなことを言ったのだと……

俺は、数年前の自分のことを、苦々しく思い出していた。

大きくなった桜ちゃんは、きつとそんな俺のちっぽけなプライドのことともわかつているかもしれない。

だけどそれでも……彼女は限りない親愛の感情を抱いて、俺のことを呼んでくれる。

「お前に教わった空手、今でもちゃんと続けているよ」

「そのときに教わった、力の使い方も……きちんと守っているよ……」

俺の体が虫に喰われたから、はつきり言ってしまつて子供から見れば化け物にしか見えなかった。

だから桜ちゃんが小学校には行っていじめにあつたことはわかつていた。

でもそれでも……桜ちゃんは決して暴力を振るわなかった。

相手が攻撃してきた、正当防衛で反撃したと……桜ちゃんは主張して、それが真実であることは直ぐにわかつた。

いじめっ子達が、軽い打撲程度ですんでいるのだから。

桜ちゃんが本気を出せば、いじめっ子が何人束になつてかかつてき

ても、軽くあしらえるはずなのに。

決して教わった力を暴力に振るうことはしなかった。

俺のせいでいじめられているのに、決して俺のことを嫌いにならなかった。

桜ちゃんがそれで少しでも楽になるなら、どれだけ嫌いになっても構わなかったのに。

だけど桜ちゃんは決して俺のことを気味悪がったり、嫌いになっただけじゃなかった。

今ではほとんどまともに動くこともできず、恥ずかしながら粗相もしてしまうこともあるのに、嫌な顔一つせずに世話をしてくれた。

刃夜に教わった力を使って……大の男の俺を運んでくれたり、世話を焼いてくれている

凜ちゃんがいたから。

イリヤちゃんがいたから。

士郎君に、遊美ちゃんがいたから。

だから乗り越えられたのかも知れない。

だけど、きちんと約束を守り、力を自衛のためと、誰かを助けるためにしか使わない桜ちゃんが……

俺には誇らしくて仕方がなかった。

「立派に育ったよ……」

「お前が助けた……桜ちゃんは……」

巫山戯た存在は、何も言わない。

それはそうだろう。

何せ俺が見ている幻覚なのだから。

最後に見る物が、この巫山戯た存在で、何一つ勝つことが出来な

かった存在だつて言うのが、ちよつと気に入らなかつたけど……

それでも、言わなきゃいけないことがあつたから……

これは、神様がくれた、時間なのかも知れない……

だから俺は素直に……口を開いていた。

「ありがとう、刃夜。お前のおかげで……俺は桜ちゃんの事を育ててあげられたよ」

巫山戯た存在が……刃夜が旅立つ時も礼を述べた。

だけど、今思えばあのときは儀礼的に礼を述べただけだった。

心から礼を言えていなかった。

だけど今なら言える。

こんな……宝物のような時間を与えてくれたのだから。

本当に……ありがとう……刃夜……

最後は掠れて……言葉になつていなかったかも知れない。

もうほとんど見ることも、聞くこともできなくなつていくのがわかつた。

穏やかに死ねたのだから、きっと幸せな最後なのだ……

自分にはもつたいたない最後だと、素直にそう思った。

自分が死ぬことで桜ちゃんがこの家で一人になつてしまうのが心配だつた。

だけどそんな心配も、余り問題にならないとわかつていたから。

安心できた。

凜ちゃんがいる。

葵さんがいる。

イリヤちゃんがいる。

士郎君に遊美ちゃんがいる。

だから彼女は決してひとりぼっちではないのだから。

最後まで成長を見届けられないのが残念だったけど、それでも幸せな日々だった。

そう思っつて、意識を手放そうとしたそのとき……

声が聞こえた。

「俺はな……」

幻聴かと思っつたが、幻聴ですらないと直ぐにわかつた。

もうすでに何も聞こえていなかった。

耳から入つてきた情報ではないと、何故かわかつた。

どうして聞こえているのか……その声を認識しているのかわからなかつた。

だけどそんなことなどどうでもよかつた。

驚く言葉を……

俺は、きいたのだから。

「この世界を越えてからも、長年生きて今でも修行をしている」

淡々と、まるで報告文を述べるかのように言葉が流れ込んでくる。

それと同時に、刃夜が今まで経験してきたことが、僅かでも流れ込んできて、相変わらずこの男は様々な世界でむちゃくちゃなことをしているのだと……わかつて……

素直に俺は呆れた。

まだ無茶苦茶なことをしながら修行していやがる……

経験を見ることができた。

だからわかった。

刃夜が慰めでも嘘でもなく……本当の事を言っているのだと。

「すでに千年以上生きているが……それでも恥ずかしながら、まだ俺は親になったことがなくてな」

刀を振るい何かと戦っている。

鍋を振るって調理をしている。

鎚を振るって刀を鍛えている。

どこに行ってもこの男はこれ以外の行動を知らないと言うかのよう……千数百年に及ぶ年月を、ただただ研鑽に費やしていた。

「子供を預かったり、一時期育てたことはあるが、それでもせいぜい一二年だ。それも俺だけじゃなく他の大勢の人の力も借りてな」

力を有しているからか、色んな世界で人を助けていることもしているようだった。

だが確かに刃夜の言うとおり、子供を育てている経験は、ないようだった。

「だが、お前はそれを……桜ちゃんを立派に育て上げた。お前が先に言った言葉に嘘がないことは直ぐにわかった。今も精神分身体で桜ちゃんを見ているが……綺麗な魂を持っている」

懐かしい響きだと……そう思った。

刃夜の巫山戯た行動も。

刃夜自身の声も。

「伊達に千年以上生きている訳じゃないから、それなりに腕とかに覚

えはあるんだが……これには俺も勝てんな」

「思い人の娘を一人で懸命に育てて」

「自らのプライドがあつたとはいえ……いやそんなプライドがあつたからこそ、子供達のためを思ってたただただお前は必死になって生きてきた……。桜ちゃんを育て上げた」

何も感じる事ができなくなった体に……顔の一部が熱くなって、僅かに力が戻ってきた。

まるで流れていく何かが、自らの活力を呼びだしましたかのように。

「さつきお前も言ってたが、俺は桜を助けたただけだ。師匠として稽古はつけたが、親代わりとして育てちゃいない」

その力を使って俺は何か……目を開けてはつきりと、自らが見下ろし、微笑んでいる存在を

刃夜の笑みをはつきりと目にした。

「完敗だ。間桐雁夜。お前は確かにこの俺を負かした。桜ちゃんを立派に育て上げた」

「見事だった」

!?

「ははっ」

流れ出る涙が僅かだが俺に活力を取り戻してくれた。

何とか口を動かして……俺ははつきりと、刃夜に問い返した。

「俺が勝ったのか？ お前に？」

「ああ。俺が認め、そして他の連中も同じ事を言うだろう。俺の敗北だと」

「お前は……素晴らしい男だった」

「ははっ!? そうか……俺が、刃夜に勝ったんだな……」

たった一つの勝利だった。

だけどこれ以上ない勝利だった。

何一つ誇ることもなく……

何一つ勝ち取った物などなかった……

だけどそれでも……こんな巫山戯た存在に勝つことが一つでもあった……

己の体よりも

己の命よりも

大事な存在を育てられた

ならばこれは、誰に憚ることなく高らかに誇れる

俺は刃夜に勝ったのだと

赤の他人が知ればきつと鼻で笑うだろう

だけどそれでも、俺は勝ったと胸を張って言う

刃夜に勝ったと

桜ちゃんを育てたと……

そのちっぽけだけど、俺にとって何より大切な事実を胸に抱いて

……

俺は今度こそ……

自らの意識^命を静かに手放した……

生涯を通じて何も得ることもできず

何かを成し遂げた訳でもなかった

だけどたった一つの勝ち取った意味を胸に秘めて

雁夜は眠るように静かに息を引き取った

39 死と生

うすうす感じていた。

おそらく長くないことはわかっていた。

日に日に減っていく食事の量。

体も満足に動かせなくなっていたことに、本人は余り気付いていなかったけど、それでもそばで見えていたからそれがよくわかっていった。

当然覚悟はしていた。

でも……こんなにも突然に……

普段通りだったのに……

突然になくなるなんて……ずるいよ……

雁夜おじさん

葬式を取り仕切ったのは、桜の母親である葵と、雁夜の娘である桜の二人だった。

そう多くの人が来たわけではない。

記事を書いているといってもどこかの組織に属していたわけではない、所謂フリーライターだ。

腕こそ良かったために、雁夜自身と桜の生活費は稼げていた。

だがすでに死に体と化していた体では、ろくな活動など行えるわけもなく、雁夜はほとんど外に出ることが出来なかった。

そして外に出なかったのは、醜くなってしまった自らの体のことで、桜がいじめられないようにという思いもあったからだ。

ただただ桜のためと一心の思いと、自らのプライドのために……雁夜は桜のために生き続けた。

そんな雁夜の養子として……桜は毅然と葬式に参列して、涙も流さずただただ気丈にあり続けた。

誰よりも悲しいはずだというのに。

だれよりも泣きたいはずだというのに。

必死になつて桜は涙を堪えて……雁夜の葬儀を全うした。

そんな妹を見て、妹分を見て、凜にイリヤ、士郎や遊美も泣くのを堪えて……雁夜の冥福を祈った。

誰もが安心したのは、雁夜が穏やかに……本当に安らかに眠っているのがわかったからだ。

穏やかに微笑を浮かべて眠っていたのだ。

だから……雁夜のことをただただ送る一心で……皆が協力した。

「桜……あんた大丈夫？」

だがそれでもどうしても心配で……凜は姉として、桜のことを案じた。

雁夜と親交があつたなかで、桜の次に親しいのは間違いなく凜と葵だ。

妹の桜がいるために、凜は頻繁にこの武家屋敷に泊まりに来ており、そのたびに雁夜には色々世話になっていた。

だからわかる。

桜がどれだけいま必死になつて耐えているのかが……。

「大丈夫ですよ姉さん。雁夜おじさんは本当に幸せそうに逝きました。なのに私が泣いてたら、きっと私を心配して心おきなくいけなくなっちゃうから」

全く間断もなく直ぐにそう答えてくるのが余計に心配だつてのに……

内心で凜は愚痴るが、それでも今叱ることは躊躇われた。

故に必死になつて凜は我慢して、それでも全部を我慢することは出来ず、桜の手を優しく……それでも力強く握った。

「いい？ 私はあんたのお姉ちゃんだから、いつでも頼んなさい。私に出来ることならどんなことだつてしたげるから。それはお母様

だつて一緒だし、イリヤに、士郎も遊美も……それは一緒だから」
「……はい。ありがとう、姉さん」

本当は泊まって桜のそばにいたかったが、それでも桜がそれを拒絶したため、皆がそれぞれの家に帰っていく。

そして雁夜と桜の家に残されたのは……当然だが、雁夜と桜だけだった。

雁夜が眠っているのは当然だが彼の寝室だ。

その優しい顔を、桜はそばで座って静かに見つめた。

優しい顔といつても……他人が見ればその顔はひどく醜い表情にしか見えないだろう

桜が……桜や凜、葵、イリヤ達が知っている、雁夜の体の醜さの理由。

それは魔術師としては荣誉とも言える聖杯戦争に参加した証しだった。

魔術などほとんど学んだこともない素人にも関わらず。

間桐臓硯の嫌がらせもあつたことも事実だが、それでも雁夜が聖杯戦争に参加するには必要な処置であつたことも事実だった。

刻印虫。

術者自らの肉体を食らつて魔力を生み出す、間桐臓硯の魔術。刻印虫に体の内側から体を喰われて……雁夜は今の醜い姿になつた。

それはひとえに桜を救うために。

大きくなつた今だからこそ、桜としてもわかることがあつた。

玉に葵……自らの母親である葵と共にいる時に、雁夜が嬉しそうにしている姿に。

葵が気付いているのか桜にもわからないし、雁夜にも確認を取つたわけではない。

けれどただの年上の女性という認識だけでないのは、桜はわかつていた。

「ただ何も言わなかった。
言えなかった。」

「桜ちゃん、今日も稽古？ 行ってらっしゃい。気をつけてね」
一人で稽古をするために朝早くに出掛けようとしても、必ず見送つてくれた。

「勉強がわからない？ うーん、どこまで力になれるかわからないけど、一緒にやってみようか？」

勉強に詰まっていることに気付いて、必死になって一緒に勉強をして……そして夜に一人で勉強して自らに教えてくれた。

「今日のお弁当はカラアゲを作ったよ。後は桜ちゃんの好きな卵焼きに、ハンバーグ。桜ちゃんには負けるけど、それでもそれなりにおいしいと思うから、残さず食べてね。もちろん嫌いなピーマンもね？」
学校行事で遠足や運動会など、催しがあった時には必ずお弁当を作ってくれた。

「今日から中学生だ！ 勉強も難しくなるし、ある意味で一番大変な時期だけど……その大変な時期を頑張って乗り切つてね！」

入学式で、カメラで写真を撮りながら、笑顔で応援してくれた。

「お誕生日おめでとう！ 桜ちゃん！」

笑顔で手作りのケーキと一緒に、色んなプレゼントともに……葵と凜と共に、お祝いをしてくれた。

全ての行動に……桜に対する愛情が溢れていた。

本当に……自らは桜のためにいるのだと、そう言っているかのようだった。

全ての愛情を注がれた。

他の誰でもない……桜自身に。

自らの命など……顧みることもなく。

ただただ自らのことを、想ってくれていたと……

誰よりも桜はわかっていた。

すでに十年経過した。

けれど今でも時折夢に見て思い出す。

あの地獄のような日々を。

虫によって……体を変えられていく嫌悪を。

だが自分はまだ良い方だったのかも知れない。

こうして……優しい顔で横たわって寝ている雁夜の顔を見て……

桜はふとそう思った。

自分に間桐臓硯が何をしようとしていたのかはわからない。

それについては雁夜はもとより、刃夜もわからないと言っていた。

いや、もしかしたら刃夜はわかっていたのかも知れない。

だがすでに臓硯はこの世にいないのだから、その知識は必要ないと

判断したのかも知れない。

体を変えようとしていたのは何となくわかった。

だが、幼子ということなのか？

それとも雁夜とは違う目的のためなのか？

桜に対する変革は……痛みを伴う物はそうなかった。

それを決定づけているのが、二人の体だ。

確かに桜の身体にも痕はある。

だが……ここまで醜く変化している箇所はどこにもない。

それはつまり……凄まじい激痛を伴う事だということだと、想像す

るのは難しくくない。

それでもなお……雁夜はその激痛に耐えて、聖杯戦争に参加した。

桜としても全てがわかっていたわけではない。

けれどそれでも雁夜が自らのために、こんな醜悪な体になってし

まったのは、考えるまでもないだろう。

そう……全ては桜のために。

ただただ桜を救いたい……幸せにしてあげたいという一心の願

で……

そんな雁夜の想いと願いの結果として……

桜は今この場にいた。

二人が暮らした大きな武家屋敷。

二人で暮らすには大きすぎる家だ。

だが……どこを見渡しても雁夜と過ごした記憶が刻まれている。

この家にも……

桜の記憶にも。

十年。

短くはないだろう。

だが決して長いわけでもない。

人によって寿命は様々だが、それでも平均的に七十年ほどは生きる。

1／7と考えれば、長いとは言えない。

だが……こうして死んでしまった雁夜からみれば長いと言えるかも知れない。

雁夜は37歳という若さでこの世を去った。

1／4以上もの時間を……この家で過ごしたのだ。

桜と一緒に。

だが……もうこの武家屋敷に

この家に。

雁夜との新たな記憶が綴られて、刻まれていくことはない。

もう雁夜は死んでしまったのだから。

死んでしまったという事実は当然だが、桜も認識していた。だが……ふとこの家に、もう二度と雁夜との記憶が作られることがないという、当たり前前の事に気がついて……

桜は涙を流した。

「——っ!？」

一度崩れてしまえば後はもう持たなかった。

雁夜が目の前で眠っているというのに……雁夜がすぐ近くにいるというのに……

桜は泣いた。

声を殺すこともなく、誰もいないが故に声を上げて号泣した。

自分を愛してくれた雁夜が……

自分が大好きな雁夜が死んでしまったのだと……

その事実が悲しくて。

「雁夜……おじさん!」

雁夜が心配しないようにと気丈にも振る舞っていた。

雁夜を心配させたくなかった。

だけど、それでも悲しいことに抗うことは出来ずに……桜はただただ泣き続けた。

しばらく泣き続けて……何とか感情の昂ぶりが収まって、桜は涙を拭って、再び雁夜の安らかな顔を見つめた。

雁夜おじさん

自らを助け、自らを育て……

そして自らを残して死んで逝ってしまった男。

ただただ悲しかった。

もういつそのまま自分も後を追ってしまおうか……
桜がそんな不吉な事を考えた時だった。

『ありがとう……桜ちゃん……』

ふと……そんな声が、聞こえた気がしたのだ。

雁夜の……優しい声が。

「……………え？」

はつきりと聞こえたその声。

だが当然だが雁夜はすでに冷たくなっており、すでに死んでいることとはわかりきっている。

だというのに何故声が聞こえたのか？

そう不思議に思った時に、ふつ……と、雁夜の体から何か淡い光が立ち上って……

天へと上っていく。

直感的に思った。

これが雁夜の大事な何かであると。

だから桜は思わずそれに手を伸ばそうとしたが……体が動かなかった。

さつきまできちんと動けていたというのに。

まるで金縛りにあったかのように、動けなくなったのだ。

『元気で暮らしてね。一人で寂しいかもしれないけど……許して欲しい……』

待って……！

『君と共に過ごした十年間は、本当に幸せだった……』

行かないで！

『きちんと優しさを持った君なら……きっと大丈夫……』

置いていかないで！

『それに……嬉しかった……』

……え？

何が嬉しいというのか？

突如として奇妙なことを言い出した雁夜の声に、桜は思わず止まった。

死んでしまったというのに、どうして嬉しいというのか？

その疑問を、雁夜は嬉しそうに……こう言った。

『俺のために泣いてくれて……嬉しかった……』

『桜ちゃん自身のために泣いてくれて……嬉しかった……』

……え？

雁夜が死んでしまって悲しかったのは事実だった。

もう大好きな雁夜と過ごせないのだと……。

なのに何故それが嬉しいのか？

『桜ちゃん……君は俺と違って強いから。色んな事我慢してたと思う

……』

そんなことはない……桜は叫びたかった。

『もつと我が佯言ってほしかったのに、言わせられなかった俺を許して欲しい……』

そんなわけがないと……伝えたかった。

強いし我慢強いのはわかってたけど……それが心配だった……

『だから、こうして泣いてくれて少しほっとしたよ……』

雁夜が笑っているのが見えるかのようだった。

『泣きたかったら泣いて良いんだよ。怒りたい時は怒って良いんだよ』

そして気付いた……雁夜が己のことを心配して、こうして語りかけてくれているのだと。

自分が……この言葉を、言わせてしまっているのだと。

『悲しんでもいい。でもどうか……生きて桜ちゃんの幸せを掴んで欲しい』

最後に……自分に教えてくれているのだと。

自分を……育ててくれているのだと……

『心から桜ちゃんの幸せを祈ってるよ……』

『けどだからって、無理に幸せになる必要性もない……』

『桜ちゃんが信じる気持ちと思いに従って、懸命に生きてね……』

そして声が声が聞こえなくなったと認識した瞬間に、桜は自らの体が動くことに気がついた。

だから……手を伸ばそうとして……

けどそれでは雁夜が心配すると思つて……

手のひらを握つて……拳を力強く天へと掲げて……

叫んだ……

「ありがとう！ 雁夜おじさん!!!」

死んでしまったのは悲しい。

もう声が聞けないのも悲しい。

もつと一緒にいたかつたと思う。

だけど、それでも……雁夜に対しての素直な気持ちはただただ感謝しかなかった。

最後にこうして……自らのことを鼓舞してくれた。

それでも……残つていては自分のためにならないと……

後ろ髪引かれつつも、こうして逝つてくれたこと……

だから桜は、最後にもう一度だけ泣いて……最後に二人で横になつて……

眠りについた。

次の日に顔を真っ赤にしていたが、それでも桜は昨日よりもしっかりと毅然とした態度と落ち着いた雰囲気で……雁夜の火葬を見届けて、骨上げを行った。

「……桜」

最後まで毅然としてたが、それでも目が真っ赤だったから、凜は心配になって再度桜に声を掛ける。

そんな優しい姉に……桜は本当に寂しそうに笑いながら……

「大丈夫……姉さん。私は雁夜おじさんの娘だもん。私がしつかりしないからね！」

それでも昨日とは違う、確かな強さと優しさで、凜に言葉を返していた。

その態度に無理がないことを悟って……凜は同じように寂しげに笑って、泣いた。

雁夜を大事に思っていたのは凜も同じだったから。

そして姉妹は二人して泣いた。

けどそれでも……きちんと自らの足で立って、再び歩き出した。

確かな強さと優しさを持ち合わせて……。

本当に、お前を尊敬するよ……間桐雁夜

その姉妹の姿を……喪服を着て葬列に参加していた男は素直にそう思った。

そしてその強い姉妹の元に、他の子達も集まって、泣いて笑って、励

まし合っていた。

きつと五人は堅い何かで結ばれた仲なのだろう。

一人ではないこと。

一人で立つことも出来るが、それでも他者の力も借りられて、他者に力を貸すことも出来る子達だ。

こんな子達を育てたのだと……それぞれの親に静かに頭を下げて……

刃夜は雁夜を見送ってこの世界から再び消え去った。

葬儀が終わって一人になった桜だったが、それでも寂しくはなかった。

凜にイリヤ、士郎と遊美が寂しくないようにと、遊びに來たり泊まりに來たりしたからだ。

桜はそんなみんなに感謝しつつ、これまで通りの生活を心がけた。

気力と魔力の扱いと、鉄家空手の修行。

料理の修行。

無理をしていないと言えば嘘になった。

だがそれでも気丈に振る舞い、お淑やかながらも元気に生活を送った。

それが魅力的に見えるのは無理からぬ事で……

「おい桜」

「あ……間桐先輩」

葬儀が済んで数日後、桜は間桐慎二に呼び出された。

一時期……本当に一時期戸籍上だけ兄となった存在。

最後の聖杯戦争時には、慎二の父である鶴野が国外に旅行に行かせていたため交流したことはほとんどない。

その後は雁夜に引き取られたため、事実上は親戚程度の間柄でしかない。

「おじさんが亡くなったけど……大丈夫か？」

だがそれでも慎二は女の子に優しいのは有名で、それは親戚である桜も例外ではなく……むしろ他の女の子達よりも優しく接していた。

成績も優秀で容姿も並以上のために結構人気だったのだが……桜にとつては親戚以外の感情はなかった。

「ありがとうございます、間桐先輩。けど大丈夫です、みんながいますから」

「そうか。困ったら僕を頼ってもいいからな」

「はい！」

寂しくても気丈に笑顔を見せる桜の顔を見て、慎二は顔を赤くしながら桜を見送った。

その様子を……影でこっそりと見つめる影がいた。

「桜を呼びだしたってきいたから少し心配だったけど、問題ないみたいね」

「おい遠坂。いくら妹の事が心配だからって、さすがにのぞきはまずくないか？」

「だったらどうして士郎もいるのかしら？」

「お兄ちゃん、それに遠坂先輩も。声が聞こえちゃいますよ」

「サクラが心配なのはわかるけど……さすがに過保護すぎない？ リン」

姉である凜と桜の仲よし幼なじみの三人だった。

イリヤは本来年齢的には士郎と凜よりも年上なのだが……日本の生活に慣れるのと、体の問題があつて学年が一年遅れており、士郎と凜の同級生だった。

そしてそんな四人がいることに……桜が気付かないはずもなく

「姉さん？ イリヤ先輩に、士郎先輩、それに遊美ちゃん？」

ぬつと……隠形しながら四人の背後に回った桜が地の底から出てくるかのように低い感じの声を出して、四人がビクツと体を震わせた。

そして背後を振り向けば……それはそれは満面の笑みを浮かべた桜がいた。

笑っているが、決して笑ってないことは……誰もが直ぐに感じ取れた。

「何してるんですか？ 先輩達に遊美ちゃん？」

「え、えっとね桜？ 誤解しないで欲しいんだけど」

「何をですか？ 遠坂先輩？」

姉としてひるむわけにはいかないからか、恐怖に足がすくんでいたが、それでも凜は気丈に返そうとした。

だがそれでも笑顔の桜が怖くて……

「さ、桜が心配だったから様子を見に行こうって士郎がね？」

「あ、汚いぞ遠坂！ そう言い出したのは他でもないお前だろう！」

「私は止めただけけどね、サクラ。まあ心配だったのもあるけど……面白そうだったからつい、ね？」

「イリヤ先輩。それ言ったら桜ちゃんが怒りますよ？ 桜ちゃん、ごめん。心配だから見に来たの。間桐先輩いい人って有名だけど……でも親戚の人だからどうなるか心配で」

「はあ……もう、みんなして心配して」

野次馬根性があったのは間違いなかったが、それでも自らの事を心配してくれたのは直ぐにわかったので、桜も怒るに怒れず苦笑するしかなかった。

寂しくないと言えば嘘になる。

「けどそれでも寂しいと思える暇なんてないのが……わかってしまった。」

「こんなにも自分の周りには、自分の事を心配してくれる人がいるのだと……」

「こらー！ もう放課後なんだから部活がない子はさっさと帰りなさいー！」

「あ、藤村姉さん」

「こらー！ 学校では藤村先生って呼びなさい！ 士郎君？」

「は、はい」

「桜ちゃんもまだ辛いかも知れないけど余り無理しないでね？ いつでもお姉さんを頼って良いんだよ？」

「ありがとうございます、藤村先生」

「それはそれとして桜ちゃん？ 空手がすごいつてきたことあるけど、弓道とか興味ない？ 新人確保したくてさ。美綴ちゃんが部長なんだけど」

何故か弓道と聞いて惹かれたが、それでも自分にはやることがあるために、桜は大河の誘いを断って、五人で下校した。

その際当然……色恋沙汰の話に発展するのは無理からぬ事で……

「で？ 桜は慎二のことどう思ってるの？」

「どうって……？ 何のこと姉さん？」

「呆れた。あんたまさか気付いてないの？ 心配してたのは事実だろうけど、アレは絶対にあんたに好意を抱いているわよ？」

妹のある種の鈍さに姉である凜は溜め息を吐いて肩をすくめた。

美人姉妹……といってももある程度親しい人間でなければ凜と桜が実の姉妹なのを知らないが……として結構有名であり、凜も多数の男性から告白された事があるため、慎二が桜を呼びだした理由は直ぐに看破していた。

「そうなのか？ 慎二がモテるのは知ってるけど、誰かを好いたって話は聞いたことないぞ？」

そんな慎二と親しい士郎は、慎二の優しさとモテ具合をよく把握していたが、それでも慎二が誰かに好意を抱いたことをきいたことはなかったの、首を傾げる。

「唐変木は黙ってなさい！」

「そうだよお兄ちゃん。色恋沙汰の話なんて、お兄ちゃんほとんどわからないでしょ」

「遊美……さすがにちよつと傷ついたぞ、俺」

「ふーん。確かにシンジは優しいってきくし、顔も悪くないみたいだけど、サクラとしてはどうなの？」

「どうって言われても……」

桜は顎に指を当てて考えるが……考えるまでもなかった。

間桐慎二が真つ当に成長しており、容姿もそれなりにかっこよく、性格が優しくスポーツも万能だと知っている。

クラスの子が早速慎二の事を話をしていたのも知っていた。けど……桜にとってはそんなことなどどうでもよかった。

日が暮れ始めた穂群原学園へと通じる長い坂道を下りながら……桜はみんなよりも数歩前に出て……

茜色に染まる坂道で、太陽を背にしながら……満面の笑みを浮かべて、こういった。

「私は今も昔も一人の人しか見てないから、誰にアプローチされても断るよ」

その言葉を聞いて……四人はそういえばそうだったと言わんばかりに……

それはそれは深い溜め息を吐いたのだった。

「そういえばそうだったわね。慎二も気の毒なことね」

「良いんじゃない別に？ それよりもサクラ？ 今週の稽古はどうする？ 無理なら休んでも良いと思うけど？」

「ううん。みんなまで今まで頑張ってきたんだから、続けるつもりですよ、イリヤ先輩」

「それは良かった。今度こそ勝ってみせるからね！」

「一番弟子として、早々勝ちを譲ってあげませんよ？」

「あ、言ったね桜ちゃん。私もお兄ちゃんも今頑張ってるからうかうかしてたら抜いちやうよ？」

「そうだな、俺も一本くらいは桜から取ってみせるよ」

「それに……いつか倒さないといけない人もいるしね？」

イリヤの挑戦的な言葉に、全員が同じ人物を思い浮かべて、好戦的に笑みを浮かべていた。

とくに五人の中でもっとも静かに……だが苛烈な情熱と意志を持っているのは、一番弟子の桜だった。

「ま、それはまたにして……桜、どうする？ 買い物して帰る？ 付き合うわよ？」

「ありがとう、姉さん」

五人は実に楽しそうに……だが兄妹弟子として互いを気遣って、これからも稽古に励んでいく事だろう。

その後、彼女が……彼女たちがどう生きたのかはわからない。

魔術が絡む以上、普通よりもより険しい道が待っているのは間違いない。
なかつた。

だがそれでも、彼女らは歩みを止めないだろう。

確かな力と

確かな優しさと

確かな心を備えているのだから。

40 ?

ただただ消えるはずだった

消えるとは語弊があるかも知れない

英霊の座へと戻るだけだったのだ

だがそれはそれに抗った

抗ったというよりも、その存在にしては珍しく未練を残したのだ

もつとみたいと

もつとその存在を知りたいと

化かした道のその先を……見たいのだと

ただただそんな興味だけが残って、その存在自身が不思議に思った
ほどだ

友でもないただの道化に……こんな感情を抱くなど

自分の思考に思わず鼻で笑った……

その瞬間に

「……何？」

それは……教会の椅子に座っていた。

皮肉なように……神の像を見上げていた。

己に何が起こったのかわからず、ただ茫然としていて……直ぐに違和感に気付いた。

体が……あるだと？

先ほどまで霊体として存在していただけの、ある意味で曖昧な存在ではなく、確かな肉と体があった。

何故こんな事になったのかしばし呆気にとられていると……教会へと足を運んでくる存在がいた。

「どうした？ ギルガメツシュ。お前がここにいるというのも珍しいな。しかも神の像を見上げて。お前にしては珍しく、神に懺悔したいことでもあるのか？」

その声ができる方を向いて……その存在、ギルガメツシュは驚きに少し目を見開いた。

容姿が少々異なるが間違いない。

この神父服を纏った存在は、確かに自分が契約を結んだ男。

言峰綺礼なのだ……

「どうした？ そんなに驚くことでも……ギルガメツシュ、一体どうした？」

問いかけてきた言峰綺礼は、自分の様子に違和感を覚えて警戒を露わにした。

その様子を見て、我は笑った。

姿形は多生変われど、それでもこの男は我が望んだ通りに成長しているのだと。

だがそれでも衰えても、衰えきってないことがわかって。

「くくくく。どういうことだかよくわからんが……この場にいるのは天意か？」

立ち上がり、再び見上げる神の像を皮肉げに我は睨んだ。

何を考えているのかわからぬ。

何が起こっているのかもわからぬ。

だが、どうしてかこの場にいるのであれば、それは何かの意味があると言ふこと。

だが……下らぬ試練を課したというのであれば

業腹だが……受けてやろうではないか！

誰に対して課したのかわからぬその試練を

我は自らの意思で持つて……受けることを決めた。

F a t e / Z e r o

桜花を護る、超野太刀を持つ開拓者

終

44 後書き

はい、半ば駆け足感が否めませんが……それでも何とか個人的には納得できる出来で

第四次聖杯

桜花を護る、超野太刀を持つ開拓者
を書き上げることが出来ました！

長かった……

こいつを思いついたというか……書くことになったのは……

また大学時代まで遡るよw

あれ？ でも俺が大学院もどき（就職できなかつたから研究生という立場を得て一年大学で教授の小間使い）してた時だっけか？
そうになると23年度からだからもう7年ですか

いやあずつと書きたいシーンだけは頭の中で練ってたけど、ここまで時間がかかるとは思いませんでした

まあ五次聖杯書くのにえらい時間かかりましたからね

ですがこれでようやく学生時代の思いは書くことが出来た
本当にありがとうございます！

2022 8/24 追記

文字数稼ぎで運営に怒られてしまった

700時ほど足りないので近況というか、適当な話題でお茶を濁します
この作品はご存じの通り桜をどうにかするというのが目的の下描かれ

た作品でしたね

いつものTTとHMに色んなネタを提供してもらったのでそのネタをなんとか形にしたいがために駆け足で書いた作品でした

まあこれを書き終えてもまだネタは大量に残っているのですが

最近はコロナの影響で飲み会も泊まりがけの宅飲みも出来ない状況のため淋しい限りですね

この作品を書いているときはよもや世界がこんな状況になるとは予想だにしなかったですね

おかげで刀屋も三人でいけない始末

何でもそうですが、モチベーションを維持するためには新たな供給がないと厳しいわけで

まあ一人でふらふら銀座周りをうろうろしてお店の人にはだいぶお世話になっておりますが

先日もある店で自分もつとも大切にしている刀で相談をさせてもらって色々と教えてもらったばかりです

その一番の自慢の刀が、この作品にて刃夜が最後に振るっていた刀ですね

まあ最初の一振り目と特徴を合体させた刀を持たせたので、厳密には違うのですが

派手な刀が好きなので皆焼という特徴的な刀を持たせたわけですね

皆焼とは簡単に言えば通常よりも焼き目を多くしてより硬度が増した刀といえば良いのでしょうか？

皆焼の形状にもよるのですが
私が持っているのはまさに刃文が峰にもあつて刃文が二つあるような刀です

そうなると刃側の刃文、鎬あたりの刃文がない箇所、峰の刃文と、三層のような形になります

すると日本刀の特徴的である、折れず曲がらず良く切れるとは少し方向性が変わってきます

何せ峰側が柔らかいのが通常だというのにその柔らかい箇所をな

くしてまで刀の硬度を上げた訳です

そうなると扱いが難しくなる事になります

皆焼はサイトによって色々と考えが書かれています。硬度を増したことで扱いが難しくなった分、より切れ味が鋭くなったという意見もありました

刃夜が打った刀も、そうであるといいなあ

無駄な話を失礼しました